

目座遺跡、八丁田圃遺跡、塗屋城跡、
大古Ⅱ遺跡、稻成Ⅰ遺跡、安宅本城跡、
田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡

— 近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書 —

2015年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

紀伊半島西部に位置する和歌山県は温暖な気候に恵まれ、黒潮がもたらす太平洋の水産資源、豊富な水源を持つ紀伊山地の林産資源など、豊かな自然環境から古来より多くの恩恵を受けてきました。また、このような自然の恵みが創り出した、趣に富み且つ雄大な景観は、観光資源としても魅力の多いところとなっています。

自然環境のみならず、古代における行幸の記録が残された「牟婁の湯」といわれる白浜温泉一帯は今なお訪れる人も多く、平安時代後期以降多くの参詣者が歩いた熊野三山への参詣道は現在、ユネスコにより世界遺産に登録され、このほど10周年を迎えました。長い歴史において人々が創造してきたものが、これほど永く人々を魅了して止まないのは、これらが自然との調和において紡ぎ出されてきたものであり、和歌山県の文化財における特筆すべき一面であるといえます。

今回、和歌山県文化財センターでは、近畿自動車道紀勢線の建設に伴い、田辺市、上富田町、白浜町内において9箇所の遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査では、八丁田圃遺跡と稲成Ⅰ遺跡において、県内では発見例の少ない石帯巡方が出土したほか、大古Ⅱ遺跡で出土した絵画土器は、小破片ではありますが建物と屋根飾りを描いた可能性も指摘されるなど、注目すべき成果がありました。

ここに調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行します。

最後になりましたが、現地調査と整理業務の実施にあたりご協力いただいた、和歌山県教育委員会、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所をはじめ、地元地区の方々ならびに関係各位に対し深く感謝の意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成27年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 工 楽 善 通

例 言

1. 本書は、田辺市の目座遺跡、八丁田圃遺跡、稲成Ⅰ遺跡、西牟婁郡上富田町の塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡、西牟婁郡白浜町の田ノ口遺跡、大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡の発掘調査報告書である。
2. 上記の調査は近畿自動車道紀勢線事業に伴い、平成21年度から同24年度にわたって実施したもので、第1次及び第2次の出土遺物等整理業務を平成25年度から同26年度にかけて実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び出土遺物等整理業務の組織は以下の通りである。

[発掘調査]

専務理事 白藤正和（平成21・22年度）、小堀基二（平成23・24年度）

事務局長 田中洋次（平成21～24年度）、渋谷高秀（平成24年度）

管理課長 富加見泰彦（平成23年度）、渋谷高秀（平成24年度）

埋蔵文化財課長 村田 弘（平成21～24年度）

発掘調査担当

平成21年度 八丁田圃遺跡 土井孝之

平成22年度 目座遺跡、八丁田圃遺跡 寺西朗平
塗屋城跡 井石好裕

平成23年度 目座遺跡、八丁田圃遺跡、稲成Ⅰ遺跡 寺西朗平
大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡 川崎雅史

平成24年度 田ノ口遺跡 寺西朗平
大古Ⅱ遺跡 川崎雅史 森原 聖
岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡 佐伯和也 山野晃司

[出土遺物等整理業務]

専務理事 里森 修（平成25・26年度）

事務局長（管理課長） 勝浦久和（平成25年度）、嶋田文紀（平成26年度）

埋蔵文化財課長 井石好裕（平成25・26年度）

出土遺物整理担当 寺西朗平

5. 本書は各発掘調査担当者と協議の上、寺西が執筆・編集した。
7. 本書で用いた現地写真は各発掘調査担当者が撮影した。また、遺物写真は寺西が撮影した。
8. 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査及び出土遺物等整理業務に際し、下記の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所 田辺市教育委員会 白浜町教育委員会 上富田町教育委員会

白石博則（和歌山城郭調査研究会 代表） 深澤芳樹（独立行政法人 奈良文化財研究所）

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物整理作業は、当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。また、図上に表示した方角は座標北による北方向を示している。今回報告した遺跡の所在地（和歌山県南部）においては、磁北は座標北に対し $6^{\circ}34' \sim 6^{\circ}48'$ 西偏する。これについては、各空測図化図の成果に記載している。
3. 基準高の表示は、T.P.（Tokyo Peil：東京湾標準潮位）を基準とした数値による。
4. 土色は、『新版標準土色帖』小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）2005年度版を基準とした。
5. 発掘調査コードは以下のとおりである。出土遺物及び調査記録等の資料はこれを用いて管理している。（調査年度－市町村コード・遺跡番号）
9－35・064 八丁田圃遺跡（2009年度 第1次調査）
10－35・063 目座遺跡（2010年度 第1次調査）
10－35・064 八丁田圃遺跡（2010年度 第2次調査）
10－39・035 塗屋城跡（2010年度調査）
11－35・063 目座遺跡（2011年度 第2次調査）
11－35・064 八丁田圃遺跡（2011年度調査 第3次調査）
11－35・160 稲成Ⅰ遺跡（2011年度調査）
11－40・003 大古Ⅱ遺跡（2011年度調査）
11－40・008 安宅本城跡（2011年度調査）
12－35・003 大古Ⅱ遺跡（2012年度調査）
12－36・061 田ノ口遺跡（2012年度調査）
12－39・044 岩崎大泓遺跡（2012年度調査）
12－39・063 岩崎大泓Ⅱ遺跡（2012年度調査）
6. 遺構番号は、各遺跡毎に1番から始まる通し番号を付した。但し、調査区が複数ある場合において、各調査区が離れた場所にある等といった場合には便宜上調査区毎に1番からの通し番号を付している。煩雑とならない場合に限り、調査区名を先頭に付して遺構1002（調査区1遺構002）等と表記している。また、必要に応じて遺構の種類（性格）を付して通し番号を与えた。
例：掘立柱建物1、溝状遺構2
7. 遺構及び遺物実測図の縮尺は特に統一していないが、各々に明示している。
8. 遺物番号は、本文、実測図及び写真図版において一致する。
9. 挿図、写真は煩雑さを避けるため、各遺跡の成果毎に1番から始まる通し番号を付した。

目次

第Ⅰ章 環境 -----	1	第5項 まとめ -----	69
第1節 地理的環境 -----	1	第5節 安宅本城跡 -----	76
第2節 歴史的環境 -----	2	第1項 調査に至る経緯 -----	76
第Ⅱ章 調査に至る経緯 -----	4	第2項 位置と環境 -----	76
第Ⅲ章 調査の方法 -----	4	第3項 調査の方法 -----	78
第1節 地区割りの方法 -----	4	第4項 調査成果 -----	79
第2節 遺構名・遺構番号 -----	5	第5項 まとめ -----	79
第3節 遺物の取り上げ -----	5	第6節 田ノ口遺跡 -----	82
第4節 調査区の設定 -----	5	第1項 調査に至る経緯 -----	82
第5節 実測図作成 -----	5	第2項 位置と環境 -----	83
第6節 写真撮影 -----	6	第3項 調査の方法 -----	84
第7節 出土遺物等整理作業 -----	6	第4項 調査成果 -----	87
第Ⅳ章 各遺跡の調査成果 -----	7	第5項 まとめ -----	99
第1節 目座遺跡・八丁田圃遺跡 -----	7	第7節 岩崎大泓遺跡 岩崎大泓Ⅱ遺跡	112
第1項 調査に至る経緯 -----	7	第1項 調査に至る経緯 -----	112
第2項 位置と環境 -----	8	第2項 位置と環境 -----	112
第3項 調査の方法 -----	10	第3項 岩崎大泓遺跡 -----	112
第4項 調査成果 -----	12	第4項 岩崎大泓Ⅱ遺跡 -----	118
第5項 まとめ -----	22	第5項 まとめ -----	123
第2節 塗屋城跡 -----	30		
第1項 調査に至る経緯 -----	30		
第2項 位置と環境 -----	30		
第3項 調査の方法 -----	32		
第4項 調査成果 -----	32		
第5項 まとめ -----	33		
第3節 大古Ⅱ遺跡 -----	35		
第1項 調査に至る経緯 -----	35		
第2項 位置と環境 -----	36		
第3項 調査の方法 -----	37		
第4項 調査成果 -----	38		
第5項 まとめ -----	48		
第4節 稲成Ⅰ遺跡 -----	64		
第1項 調査に至る経緯 -----	64		
第2項 位置と環境 -----	64		
第3項 調査の方法 -----	65		
第4項 調査成果 -----	66		

挿図目次

- 図 1 各遺跡の位置
- 図 2 和歌山県南部の地質
- 図 3 地区割及び区画名

目座遺跡・八丁田圃遺跡

- 図 1 目座遺跡、八丁田圃遺跡及びその周辺の遺跡
- 図 2 地区割 中区画及び小区画
- 図 3 各年度における調査区及び基本層序に示す土層の位置
- 図 4 基本層序
- 図 5 調査区及び地区割（小区画）
- 図 6 調査区北東壁土層図
- 図 7 第 1 次調査 遺構配置図及び各遺構図
- 図 8 第 2 次調査 調査区及び地区割（小区画）
- 図 9 調査区 2-1 遺構配置図
- 図 10 調査区 2-1 遺構 2001 土層図
- 図 11 調査区 2-1 遺構 2002 平面及び土層・断面見通し図
- 図 12 調査区 2-2 遺構配置図
- 図 13 調査区 2-3 遺構配置図
- 図 14 調査区 2-2 遺構 2258 実測図
- 図 15 調査区 2-2 遺構 2289 実測図
- 図 16 調査区 2-2 遺構 2254 実測図
- 図 17 調査区 2-2 遺構 2191 実測図
- 図 18 第 3 次調査 調査区及び地区割（小区画）
- 図 19 調査区 3-1 遺構配置図
- 図 20 調査区 3-2、3-3、3-7-1、3-7-2 遺構配置図
- 図 21 調査区 3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-5-2、3-6、3-7-1、3-7-2 遺構配置図
- 図 22 調査区 3-1 北壁土層図
- 図 23 調査区 3-1 遺構 3002 土層図
- 図 24 調査区 3-1 遺構 3008 土層図
- 図 25 調査区 3-1 遺構 3007、3008 土層図
- 図 26 調査区 3-1 遺構 3079 実測図
- 図 27 調査区 3-1 遺構 3080 実測図
- 図 28 第 4 層上面 断面図
- 図 29 遺物実測図
- 図 30 遺物実測図
- 図 31 遺物実測図

塗屋城跡

- 図 1 塗屋城跡及び周辺の遺跡

- 図 2 調査位置図
- 図 3 地区割 中区画及び小区画
- 図 4 地形測量図（表土除去後）
- 図 5 堀切セクションベルト土層図
- 図 6 トレンチ土層図
- 図 7 出土遺物実測図

大古Ⅱ遺跡

- 図 1 大古Ⅱ遺跡及び周辺の遺跡
- 図 2 地区割 中区画
- 図 3 地区割 小区画
- 図 4 調査区位置図
- 図 5 各調査区土層堆積状況
- 図 6 調査区 1 遺構配置図
- 図 7 調査区 2 遺構配置図
- 図 8 調査区 4 第 1 遺構面遺構配置図
- 図 9 調査区 4 第 2 遺構面遺構配置図
- 図 10 調査区 4 第 1 遺構面 掘立柱建物 1
- 図 11 調査区 4 検出遺構土層図
- 図 12 調査区 4 検出遺構土層図
- 図 13 調査区 5 遺構配置図
- 図 14 調査区 5 井戸 1
- 図 15 調査区 3 第 1・2 遺構面 遺構配置図
- 図 16 調査区 3 第 3 遺構面 遺構配置図
- 図 17 調査区 6 第 1 遺構面 遺構配置図
- 図 18 調査区 6 第 2 遺構面 遺構配置図
- 図 19 調査区 7 第 1 遺構面 遺構配置図
- 図 20 調査区 7 第 2 遺構面 遺構配置図
- 図 21 調査区 7 第 3 遺構面 遺構配置図
- 図 22 遺構 3002 土層図
- 図 23 遺構 3006 土層図
- 図 24 遺構 3002・3003 土層図
- 図 25 遺構 7004
- 図 26 遺構 7005
- 図 27 遺構 7002
- 図 28 遺構 7002 土層図
- 図 29 遺構 7002
- 図 30 遺構 7002 土層図
- 図 31 調査区 8 遺構配置図
- 図 32 出土遺物実測図
- 図 33 出土遺物実測図
- 図 34 出土遺物実測図
- 図 35 出土遺物実測図
- 図 36 出土遺物実測図
- 図 37 出土遺物実測図

- 図 38 出土遺物実測図
- 図 39 出土遺物実測図
- 図 40 出土遺物実測図
- 図 41 平成 22～24 年度調査各調査区
遺構配置図

稲成 I 遺跡

- 図 1 地区割 大区画
- 図 2 地区割 中区画
- 図 3 調査区及び小区画
- 図 4 調査位置及び地区割（中区画）
- 図 5 調査区 1・2・3 遺構配置図
- 図 6 調査区 2 セクション 1 南壁土層
- 図 7 調査区 2 調査区東壁 断割南壁土層
- 図 8 竪穴建物 1 平面遺構実測図
- 図 9 竪穴建物 1 カマド実測図
- 図 10 竪穴建物 2 実測図
- 図 11 遺構 2 実測図
- 図 12 遺構 7 実測図
- 図 13 調査区 3 検出遺構 土層図
- 図 14 調査区検出遺構及び
掘立柱建物 1 平面・土層図
- 図 15 調査区 1 調査区壁面土層図
- 図 16 出土遺物実測図

安宅本城跡

- 図 1 安宅本城跡及び周辺の遺跡
- 図 2 調査区位置図
- 図 3 調査区及び地区割
- 図 4 調査区 1・2 第 1 遺構面検出遺構図
- 図 5 調査区 1・2 第 2 遺構面検出遺構図
- 図 6 出土遺物実測図

田ノ口遺跡

- 図 1 田ノ口遺跡及び周辺の遺跡
- 図 2 調査区位置図
- 図 3 地区割 中区画
- 図 4 調査区及び地区割 中区画及び小区画
- 図 5 調査区 1 セクション 1 南壁土層図
- 図 6 調査区 2 セクション 1 北壁土層図
- 図 7 調査区 3 セクション 1 東壁土層図
- 図 8 遺構 101 土層図
- 図 9 調査区 1・2 遺構配置図
- 図 10 遺構 109 遺物出土状況図及び土層図
- 図 11 遺構 108 実測図
- 図 12 遺構 112 実測図
- 図 13 遺構 113 実測図

- 図 14 遺構 118 実測図
- 図 15 遺構 123 実測図
- 図 16 遺構 111・114 土層図
- 図 17 調査区 1 西壁土層図
- 図 18 調査区 1～2 横断図及び旧地形復元図
- 図 19 調査区 2 遺構 228 実測図
- 図 20 調査区 2 遺構 234 実測図
- 図 21 調査区 3 遺構配置図（第 4 層上面）
- 図 22 調査区 3-1 調査区北壁土層図
- 図 23 調査区 3-2 セクション 5 南壁土層図
- 図 24 調査区 3 セクション 1 土層図
- 図 25 遺構 302 実測図
- 図 26 遺構 348 実測図
- 図 27 遺構 366 実測図
- 図 28 遺構 381 実測図
- 図 29 遺構 352 実測図
- 図 30 遺構 327 実測図
- 図 31 遺構 301 実測図
- 図 32 遺構 109 出土土器等の種類別構成
- 図 33 土師器皿の口径と器高
- 図 34 土師器碗の口径と器高
- 図 35 出土遺物実測図
- 図 36 出土遺物実測図
- 図 37 出土遺物実測図
- 図 38 出土遺物実測図

岩崎大泓遺跡 岩崎大泓 II 遺跡

- 図 1 調査区及び周辺の地形
- 図 2 調査区及び小区画
- 図 3 地区割 中区画
- 図 4 岩崎大泓遺跡 遺構配置図
- 図 5 岩崎大泓 II 遺跡 第 1 遺構面 遺構配置図
- 図 6 岩崎大泓 II 遺跡 第 2 遺構面 遺構配置図
- 図 7 岩崎大泓 II 遺跡 調査区 1
中央セクションベルト土層図
- 図 8 岩崎大泓 II 遺跡 掘立柱建物 1
- 図 9 岩崎大泓 II 遺跡 掘立柱建物 1 柱穴土層図
- 図 10 岩崎大泓 II 遺跡 柵列 1
- 図 11 岩崎大泓 II 遺跡 調査区 1
中央セクションベルト土層図
- 図 12 出土遺物実測図
- 図 13 出土遺物実測図
- 図 14 出土遺物実測図

第I章 環境

第1節 地理的環境

和歌山県は紀伊半島の西部に位置する。紀伊半島の大部分は紀伊山地が占めており、このため県域沿岸部では紀伊山地の山塊が海岸付近まで迫る地域も多い。また高野山や護摩壇山等標高1000m前後の山々、県域の76%を占める森林及び太平洋を北流する黒潮は、温暖で多雨な気候をもたらしている。このような地形と気候から、日高川、富田川、日置川等、県南部を流れる河川は総じて急流となって太平洋に注ぎ込んでいる。そのためこれらの河川の堆積平野は大部分が河口域に広がっており、住民の生活圏も河川下流域及び沿岸地域が中心となっている。太平洋に面した海岸は典型的なリアス式海岸が随所にみられ、景観的にも美しく多くの地域が国立或いは県立公園として指定を受けている。

地質的に紀伊半島南部の大部分を占めるのは四万十累帯である。四万十累帯は北から日高川帯、音無川帯、牟婁帯に区分され、田辺市、上富田町、白浜町には音無川層群から成る音無川帯、牟婁層群から成る牟婁帯が分布する。

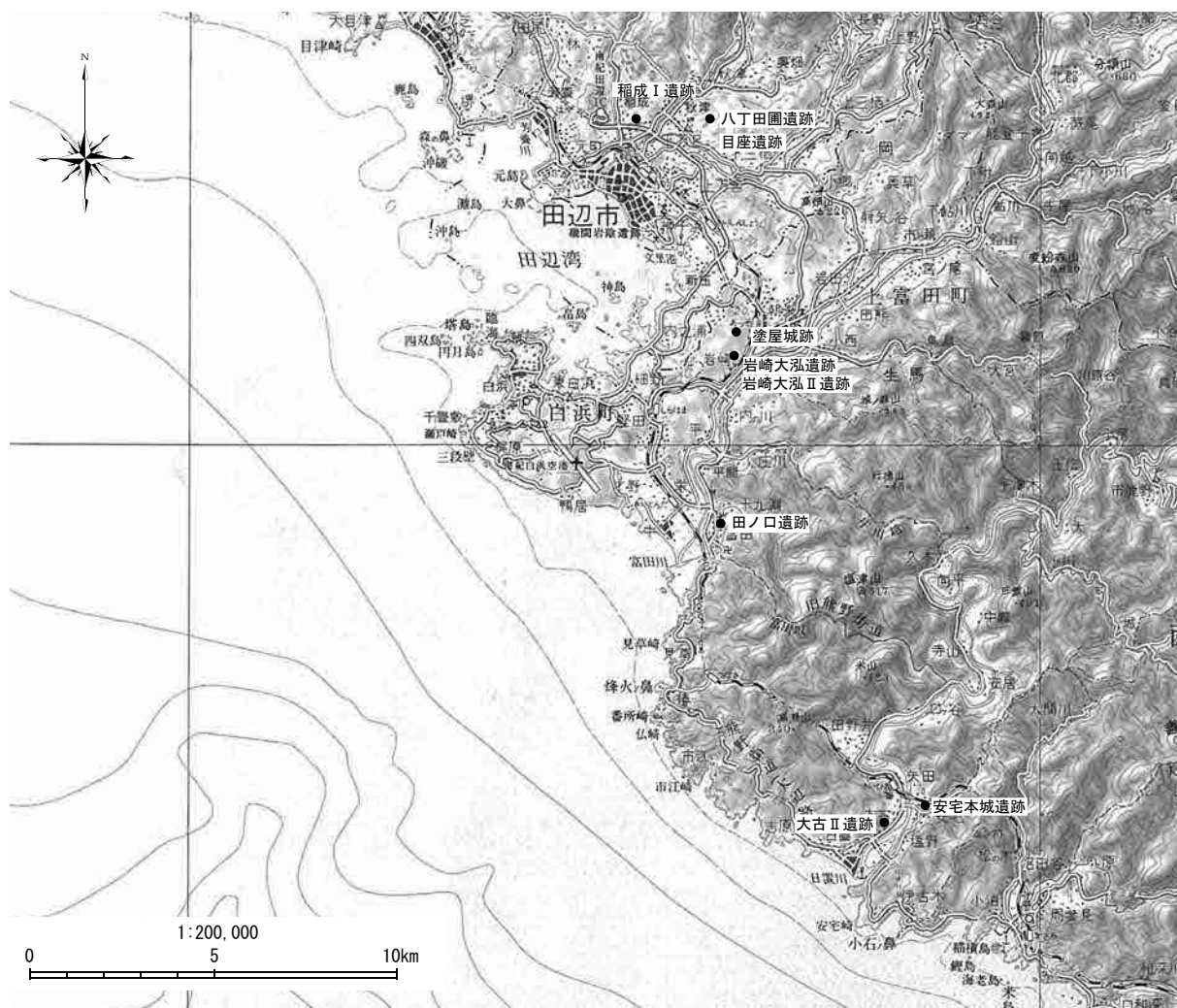


図1 各遺跡の位置（国土地理院発行（平成24年）20万分の1地勢図に一部加筆）

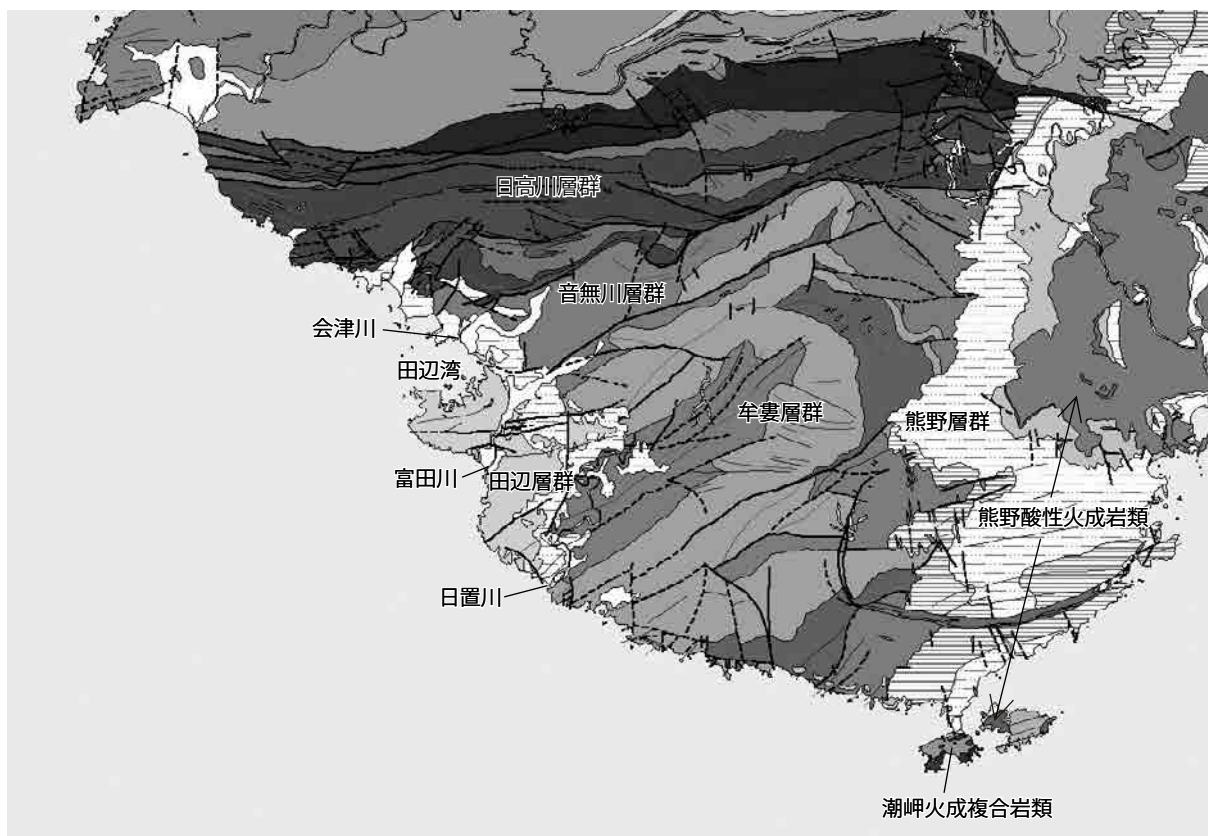


図2 和歌山県南部の地質（産業技術総合研究所地質調査総合センター（編）(2004) 20万分の1数値地質図幅集「北陸，中部及び近畿」に加筆） 縮尺任意

また、田辺市北部から白浜町日置付近までは沿岸部を中心に第三紀前期から中期中新世の田辺層群があり、第三紀漸新世から前期中新世の牟婁層群に不整合で重なる。田辺層群の東及び南側を占める牟婁層群は合川累層、下露累層、打越累層、三尾川累層、安川累層、和深累層等から成り串本町近辺まで分布する。紀伊半島南部の串本町潮岬付近から三重県熊野市あたりまでは南北に長く熊野層群が分布し、これに大島の大半を占める潮岬火成複合岩体及び串本町から那智勝浦町あたりまで分布する熊野酸性火成岩類が貫いている。潮岬火成複合岩体、熊野酸性火成岩類のほかは海底における堆積による堆積岩がほとんどであり、紀伊半島南部では南へ向かうほど地質的には新しくなる傾向にあるといえる (*1)。

第2節 歴史的環境

各遺跡周辺における歴史的環境は、各調査成果の項目で述べることとし、ここでは主に紀南地方を中心とした大まかな状況のみを述べる。

紀南地方 (*2) はその面積の大半を山地が占め、平地が少ないこともあって会津川や富田川、日高川等の河川下流域に広がる堆積平野に多くの遺跡が所在する。

旧石器時代の遺跡は、和歌山県内では紀の川流域、日高川流域のほか、有田川町の野田地区遺跡、藤並地区遺跡、土生池遺跡等がありナイフ形石器等が出土しているが、紀南地方における最も古い時代の遺物としては、白浜町十九淵遺跡出土の有舌尖頭器が挙げられる。サヌカイト製で、旧石器時代から縄文時代草創期の石器であると考えられ、太地町梶取崎遺跡でも同様の有舌尖頭器が採集されている。これらの遺物の出土は、既にこの頃紀南地方において人々が生活していた事を示すといえる。

縄文時代の遺跡は、田辺市に所在する高山寺貝塚が高山寺式土器の標識遺跡としてよく知られる。高山寺式土器は早期後半或いは末の土器として近畿地方及び北陸地方の一部にまでその分布がみられるが、日高川町和佐遺跡（B地点）で粕畑式、上ノ山式、入海Ⅰ式、入海式土器と非常によく似た土器が出土していることから、早期後半には既に東海地方と交流があったことを窺わせる。さらに同遺跡では北白川下層Ⅰ～Ⅲ式土器の出土も確認されており、前期には他地域との交流も活発化することが明らかとなっている。縄文時代中期の遺跡として白浜町瀬戸遺跡、平遺跡、大瀬遺跡、串本町大水崎遺跡等があり、遺跡数は後期から晩期にかけて増加する。

弥生時代の遺跡は現在の田辺市域をはじめ多くの地域で確認されている。特に平成22・24年度に発掘調査が実施された立野遺跡では、前期の流路から木製品が多量に出土し水田稲作開始期の貴重な資料となった。また紀南地方は銅鐸の出土が多いことでよく知られる。銅鐸は和歌山県内で総数40点以上（*3）の出土があり、全国的に見ても突出した出土点数であるが、紀北地方の紀の川流域及び有田川流域での出土総数11点に比べ御坊市以南では合計25点となり、紀中（*4）から紀南にかけ集中して分布することがわかる。

また弥生時代後期までに全国的に出現する高地性集落は後期後半に減少するが、日高川以南の地域では後期後半以降まで存続することが指摘されている。

県内における古墳の分布は紀北の平野部に集中し、総数800基を超える県内最大の古墳群である岩橋千塚古墳群のほか、船戸山古墳群、百合山古墳群等、紀の川流域に広く分布する。また有田川や日高川河口域にも古墳の分布はみられるものの、南へ向かうほど減少する傾向が明らかで、田辺市域や白浜町域では4～5世紀に造営されるものがあるものの数は少ない。同時期のこの地域における特徴的な遺跡として、田辺湾岸地域に分布する岩陰遺跡がある。これらは埋葬施設として海蝕洞穴内に竪穴式石室や箱式石棺墓、土坑墓を設けたもので、立戸岩陰遺跡、磯間岩陰遺跡等がそれである。

律令制下においては、現在の田辺市、上富田町、白浜町にあたる地域は牟婁郡に属していたと考えられ、牟婁郡の郷名として『和名抄』や平城宮出土木簡に牟婁、岡田、来栖、三前、神戸等の名がみえる。牟婁郡はほぼ現在の田辺市域と想定されており、ここには郡内唯一の古代寺院である三栖廃寺跡が所在することから、牟婁郡内でも中心的な地域であったとされる。

三栖廃寺跡は、左会津川北岸の台地上に所在する白鳳期創建の寺院跡で、現在も基壇跡や塔心礎が残る。寺域の広がりや基壇、塔心礎の位置等から法隆寺式の伽藍配置が想定されており、発掘調査の結果平安時代末期から鎌倉時代頃に廃絶したことが明らかとなっている。

記録に残る最初の熊野参詣は平安時代の延喜7（907）年に宇多法皇によって行われたものであるが、それを契機とし以後皇族や貴族達によって盛んに熊野参詣が行われるようになったとされる。田辺市域では出立王子から万呂王子、三栖王子を経由して上富田町域の八上王子、稲葉根王子に至るルートが知られているが、会津川近辺は秋津王子があったと伝えられる。稲葉根王子から富田川沿いに滝尻王子を経て山深い道を熊野本宮大社へと向かう道筋は中辺路と呼ばれ、さながら山岳信仰の修行を思い起こさせるが、ここは平安時代から中世末頃に至るまでは多く利用されたといわれ、熊野参詣を繰り返した院政期の上皇達もほとんどがこのルートを辿ったとされる。また、富田川を渡り南へと向かう道筋は大辺路と呼ばれるが、この陸路は地理的に難所が多く、ときには海路を併用しながら熊野へと向かったものと想定される。

第Ⅱ章 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線の建設にあたり、田辺市、上富田町及び白浜町において、建設予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当したことから、和歌山県教育委員会と国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の協議により、分布・試掘・確認調査を実施することとなった。

和歌山県教育委員会による確認調査は平成21年6月1日から平成24年6月27日までに第1次から第7次まで実施され、その結果、田辺市内では目座遺跡、八丁田圃遺跡及び稲成Ⅰ遺跡、上富田町内では塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡、白浜町内においては大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡で埋蔵文化財の展開が認められ、本調査を実施する運びとなった。このうち岩崎大泓Ⅱ遺跡は、第7次試掘・確認調査において弥生時代から中世の埋蔵文化財包蔵地であると確認され、且つ岩崎大泓遺跡とは自然流路または谷状地形により分断された別の遺跡であると判断されたため、新たに埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。

各遺跡が所在する行政区画は田辺市（目座遺跡、八丁田圃遺跡、稲成Ⅰ遺跡）、西牟婁郡上富田町（塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡）西牟婁郡白浜町白浜地区（田ノ口遺跡）、西牟婁郡白浜町日置川地区（大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡）である。

第Ⅲ章 調査の方法

調査は原則的に、当文化財センターが定めた『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）及び『公益財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2011.4）を基準として進めた。

第1節 地区割の方法

実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系または世界測地系（測地成果 2011））により、遺跡の所在する各行政区画を網羅する範囲の北東隅を原点と定めた大区画または調査地を含む 1km 四方の中区画を設定した。

地区割は、まず原点から X 軸に沿って西方向へ、Y 軸に沿って南方向へそれぞれ 1km ごとに区分し、第 1 図に示すように 1km 四方の範囲を 1 単位とした大区画を設定した。この大区画には北東隅を基点として X 軸方向へローマ数字を、Y 軸方向へアラビア数字 1 を付しており、ローマ数字とアラビア数字を併記し大区画名としている。

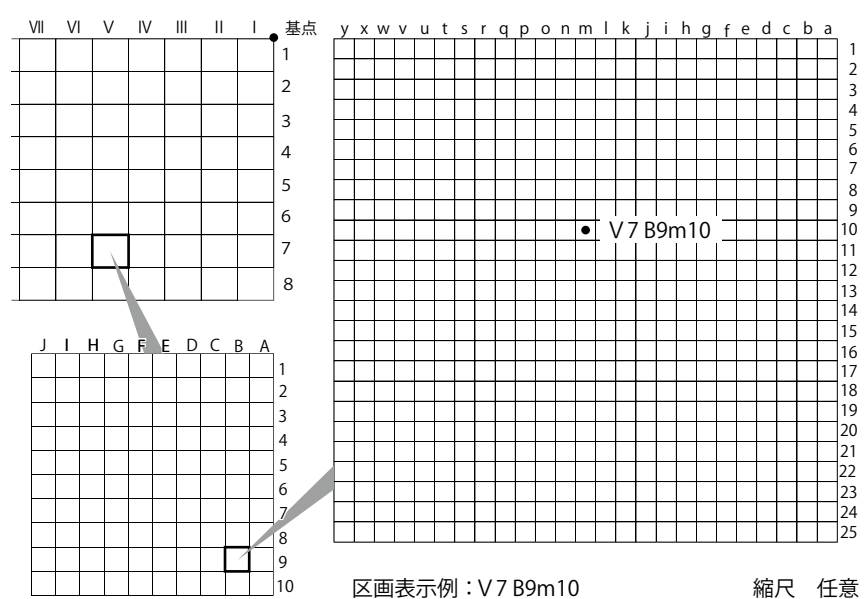


図 3 地区割及び区画名

さらにこの大区画内に、同様の方法で北東隅から X 軸方向及び Y 軸方向に沿って 100m ごとに区分し、それらの北東隅を基点として X 軸方向に A～J のアルファベット（大文字）を、Y 軸方向には 1～10 のアラビア数字を付して、区画名を「A6」等とする 100m 四方の範囲を 1 単位とした中区画を設定した。

中区画内にはさらに 4m 四方の範囲を 1 単位とする小区画を設定した。これに北東隅を基点として X 軸方向にアルファベット（小文字）a～y を、Y 軸方向にアラビア数字 1～25 を付した。これらの設定による区画名は「V 7 B9 m10」或いは中・小区画のみを表記し「B9 m10」等と呼称している。

地区割による実測図の配置や遺物の出土位置は大区画 - 中区画 - 小区画または中区画 - 小区画を組み合わせた表記によっている。

原則として、実測図作成には小区画を基準として作図し、遺物取上には一部の出土遺物を除いて小区画を最小単位とした出土位置を記録している。



写真 1 遺構（土層）実測作業風景（稲成 I 遺跡）



写真 2 航空測量・写真撮影作業風景
(八丁田圃遺跡第 2 次)

第 2 節 遺構名・遺構番号

遺構番号は各調査において個別に付しており、本報告でもそれを踏襲しているが、掘立柱建物等複数の遺構からなるひとまとまりの遺構に対し新たに遺構名付与したことがある。この場合、遺構名はその種類ごとにアラビア数字を末尾に付して「掘立柱建物 1」等と表記している。

第 3 節 遺物の取上

出土遺物は小区画ごとに取り上げ、ポリ袋またはコンテナの取り上げ単位ごとに付した 1 番からの通し番号を登録番号とし、また必要に応じて出土状況写真の撮影や出土位置を計測して出土状況図の作成を行った。取り上げた全ての遺物は遺物登録台帳を作成し管理している。

第 4 節 調査区の設定

各遺跡の調査成果については、第 1 次調査・第 2 次調査といった調査回数ごとに報告する。調査区名の表記には基本的に調査時の名称に付された番号を踏襲しているが、数次にわたって調査が実施された遺跡については、調査回数と調査時の区名により、調査区名を「調査区 1-1」、「調査区 2-1」等と表記している。また調査時に「番号+区」と記録があるものについても「調査区+番号」として統一的に表記した。

第 5 節 実測図作成

記録として、実測図の作成と写真撮影を行った。実測図は縮尺 100 分の 1 及び 50 分の 1 の遺構平面図を航空測量により作成したが、作業進行上、調査担当者と調査補助員により縮尺 100 分の 1 で遺構配置図を、更に遺構については必要に応じて縮尺 10 分の 1 または 20 分の 1 で個

別に実測図を作成した。

第6節 写真撮影

写真は4×5判、6×7判、35mmのカラー及びモノクロフィルムを用いて撮影した。また、補助的に有効画素数700～1400万画素相当のデジタルカメラを使用し、撮影画像をJPEG形式で保存している。

撮影した写真の内容については写真台帳を作成し、撮影日、調査区、撮影対象、方向、使用フィルムを基本的な情報として記録し把握している。またデジタルカメラにより撮影したデータについては上記と同じ内容のほか、撮影機材の機能によりExif (Exchangeable image file format) データが各画像ファイルに記録されている。

第7節 出土遺物等整理作業

出土遺物の整理作業は、整理補助員及び整理作業員を直接雇用して、出土遺物の洗浄、注記、登録、接合、復原、実測、トレースの各作業を実施した。また調査においては微細な遺物を確認する目的で、一部の遺構の埋土、炭化物を多量に含む堆積土等を採集しており、これらについて洗浄作業を行った。

注記は骨片、金属製品以外の全ての遺物について実施した。

発掘調査において撮影した写真は、フィルムの種類ごとに分けアルバムに収納した。各アルバムには調査年度、遺跡名、地区名、撮影対象の名称、撮影方向等を記入して撮影日順に収納し、管理のため写真台帳を作成している。

報告書に掲載した遺構実測図は、Adobe社のアプリケーション「Photoshop」、「Illustrator」を使用してトレース図を作成し、ファイルをデジタルデータ（拡張子".ai"のファイル形式）として保存している。なお、これらのアプリケーションのバージョンはいずれもCS4以降を使用した。



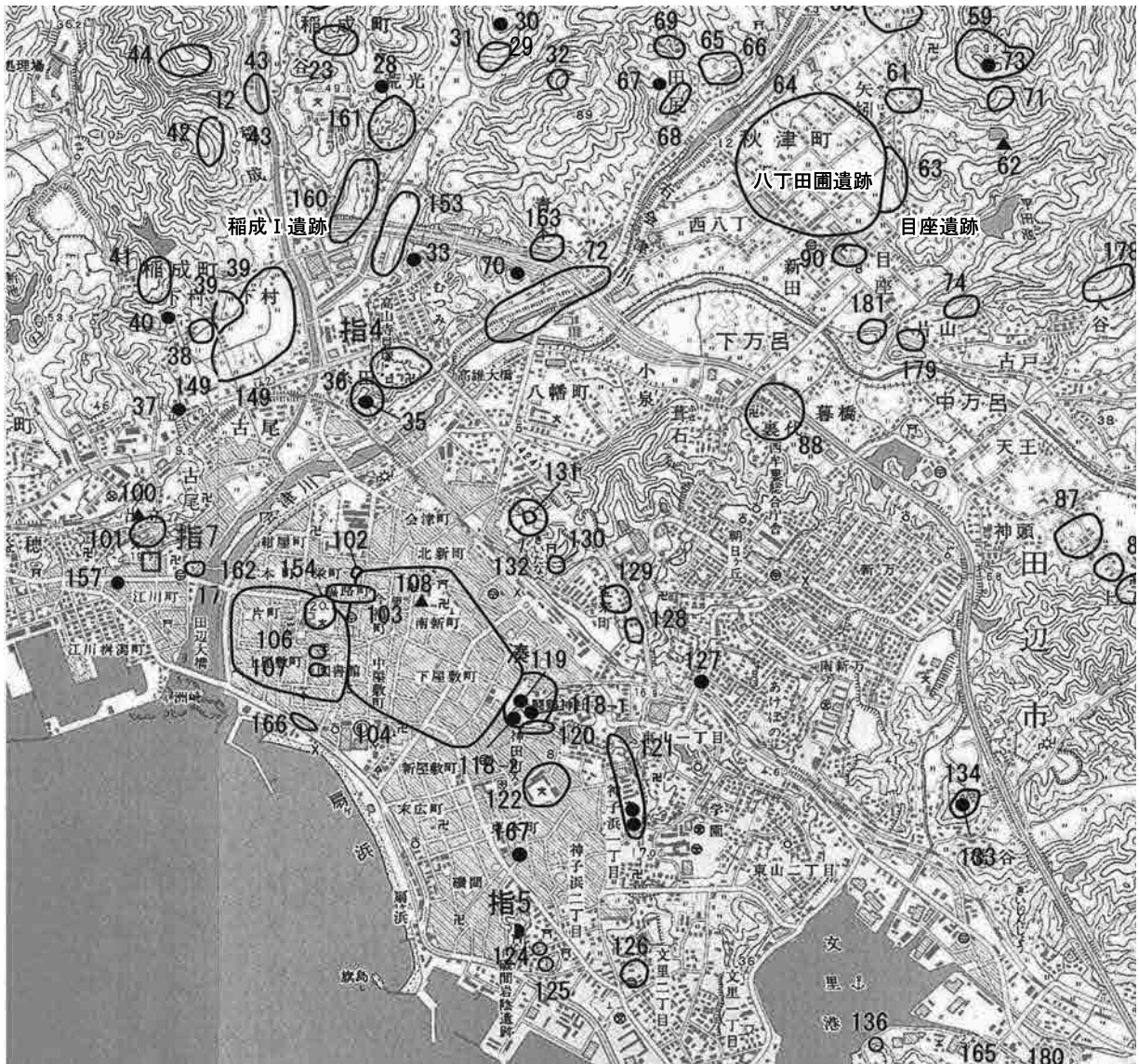
写真3 応急遺物整理作業風景



写真4 出土遺物等整理作業風景



写真5 台帳作成等、データ入力作業風景



28. 稻成山古墳 29. 丸橋丘岩陰遺跡 30. 丸橋丘火葬墓 31. 丸橋丘遺跡 33. 東江原火葬墓 35. 糸田古墳 36. 糸田遺跡 39. 北沖代遺跡
 43. 天王原遺跡 58. 矢矧遺跡 59. 岩倉山遺跡 61. 上新田遺跡 62. 岩倉山銅鐸出土地 63. 目座遺跡 64. 八丁田圃遺跡 65. 塔の尾遺跡
 67. 峯の庄火葬墓 70. 青木古墳 72. 綾代遺跡 73. 矢矧岩陰遺跡 74. 古戸谷遺跡 87. 法丁II遺跡 90. 目座II遺跡 127. 礫山古墳
 130. 宝乘院岩陰遺跡 132. 山崎遺跡 136. 烏が谷岩陰遺跡 149. 下村遺跡 153. 稻成遺跡 160. 稻成I遺跡 161. 稻成II遺跡
 178. 万呂大谷遺跡 指4. 高山寺貝塚

図1 目座遺跡、八丁田圃遺跡及びその周辺の遺跡（縮尺任意）

第IV章 各遺跡の調査成果

第1節 目座遺跡・八丁田圃遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う自動車道建設工事予定地が、田辺市秋津町の八丁田圃遺跡及び目座遺跡として埋蔵文化財包蔵地とされている範囲にかかることとなり、平成21年度に県文化遺産課により試掘・確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、財団法人和歌山県文化財センターが平成21～23年度にかけ

て第1～3次の本調査を実施した。本調査は平成21年度に第1次調査として八丁田圃遺跡、平成22年度に第2次調査として八丁田圃遺跡及び目座遺跡、平成23年度に第3次調査として八丁田圃遺跡及び目座遺跡について行った。

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

田辺市は県南部に位置し、東に紀伊山地、西に太平洋を望む中山間地域にあたる。平成17年に旧田辺市、龍神村、中辺路町、大塔村、本宮町が合併して現在の田辺市となり、市総面積は和歌山県全域の22%を占め県内第1位である。市域の大半は森林となっており、日高川水系、富田川水系、日置川水系、熊野川水系、会津川水系を有する。

県南部の海岸線は複雑に入り組んだリアス式海岸が多くみられ、芳養湾及び田辺湾(*5)沿岸には比較的発達した海岸砂丘がみられる。また紀伊山地果無山脈を源とする左会津川はその下流域で右会津川と合流して会津川となり田辺湾に注いでいるが、この田辺湾沿岸及び会津川下流域に広がる平野部には市街地が広がっており、近隣地域を含めた経済・産業の中心地となっている。また、水田経営のほか、丘陵地においては梅を代表とした果樹の栽培が盛んである。

田辺市一帯は第三紀の音無川層群が分布する音無川帯及び牟婁層群が分布する牟婁帯が占めている。田辺湾沿岸の左・右会津川下流域は第四紀沖積層であり、これを中心として半円状に東方向へ第三紀中新世の堆積とみられる田辺層群、牟婁層群が分布する。田辺層群は牟婁層群に不整合で重なっており、上部の椿累層及び鉛山累層、下部の日置累層から成り白浜町日置付近まで分布する。田辺層群は比較的軟質の岩盤となっていることが多く海岸部では波浪等の浸食を受けやすいことが知られる。

(2) 歴史的環境

田辺市域は和歌山市、御坊市に次いで遺跡数が多く、縄文時代から古代にかけて芳養川流域や左・右会津川が合流する秋津平野及び田辺湾沿岸部に多く所在する。

縄文時代の遺跡は会津川北岸の丘陵上に早期の高山寺貝塚(指4)があり、鹹水性の貝類に伴って押型文土器(高山寺式土器、早期)が出土している。当遺跡は昭和13年に発掘調査が実施されており、昭和45年に国史跡に指定されている。また発掘調査による出土遺物ではないが、目座Ⅱ遺跡(90)からは船元Ⅰ～Ⅳ式、里木Ⅱ式に属する縄文時代中期の土器が出土している。

鬼橋岩岩陰Ⅱ遺跡は海岸付近の浸食作用により形成された岩陰に営まれた遺跡であり、縄文時代後期初頭にあたる土器のほか、石斧や石錘等の石器が出土しており、湾内での漁業活動を窺わせる。また、鳥が谷岩陰遺跡(136)も同様の岩陰に営まれた遺跡であり、これらの岩陰遺跡は居住場所としての使用というより食料獲得等のための一時的滞在によって営まれたものと考えられている。また下芳養遺跡では発掘調査により前期末から中期後半の土器や石斧、石錘等の石器が出土している。但馬遺跡は右会津川上流、中期前半から後期末の土器が確認されている。

弥生時代は、旧田辺市域の範囲において遺跡数が急激に増加する時期であり、特に会津川流域や芳養川流域、田辺湾沿岸部に多数の遺跡が存在する。左・右会津川に挟まれた平野に所在する八丁田圃遺跡(64)では縄文時代晩期や弥生時代前期、中期の土器が出土しており、拠点的な集落遺跡であると考えられている。また弥生時代中期には会津川流域に矢矧遺跡(58)、万呂大谷遺跡(178)が出現し、会津川の支流である稲成川流域には丸橋丘遺跡(31)等がある。また海岸線

に近い場所に立地する遺跡として神田遺跡(122)、田辺城下町遺跡、今福町遺跡(103)、新庄遺跡が確認されており、これらは出土遺物や他地域の調査例から、墓地である事がわかっている。

後期には綾代遺跡(72)のように低地に立地する遺跡があるものの、富山遺跡(42)、小野遺跡、田中遺跡、中の段遺跡、高地山遺跡、矢田ヶ谷遺跡等、やや標高の高い丘陵上に所在する高地性集落の存在が目立つ。小野遺跡は昭和50年に発掘調査が行われており(*6)、眺望のきく山頂や山腹をテラス状に整形した遺構が確認されている。

また田辺市から御坊市にかけての地域は、全国的にみて銅鐸の出土が多いところであり、田辺市域では7点が発見されているが、いずれも平野部ではなく、平野部縁辺の丘陵斜面や、山間部においての発見である。

古墳時代の遺跡としては、田辺湾沿岸に古目良岩陰遺跡、磯間岩陰遺跡(指5)等の岩陰遺跡がある。田辺層群の砂岩層に形成された海蝕洞穴を利用したものであるが、埋葬施設の存在から古墳時代中期から後期にかけて墓地として利用されたものとみられている。磯間岩陰遺跡は発掘調査により8基の石室が確認されており、被葬者とみられる人骨も残存していた。出土遺物は土師器、須恵器、製塩土器、鉄鏃や釣針といった鉄製品のほか、鹿角製の鳴鏑や鏃等がある。後期には田辺湾沿岸の平野部において牛の鼻古墳、後口谷古墳、葉糸古墳(133)、神田古墳群(120)、浜田古墳群(120)など古墳が築かれる。葉糸古墳は横穴式石室内に箱式石棺を設けて埋葬施設とし、副葬品として須恵器のほか鉄刀、刀子、鉄鏃、馬具(金銅製飾金具)、金環が出土しており6世紀後半の築造とみられる。後口谷古墳は2基からなる古墳群であるが、1基は周溝を伴うことが確認されており、その形状から円墳とみられる。残存している横穴式石室からは須恵器、鉄鏃、鉄釘のほか土師器のミニチュア炊飯具が出土しており、6世紀末から7世紀前半の築造と考えられる。

古代の遺跡としては、8世紀頃の創建と考えられる三栖廃寺跡があり国史跡となっている。史跡指定地内に塔心礎も現存しており、数次の発掘調査から法隆寺式の伽藍配置が想定されている。出土遺物として白鳳時代及び奈良時代の軒丸瓦のほか、石造相輪の残片がある。

古代の瓦窯や須恵器窯跡としては中の段窯跡、奥江原窯跡(23)、小屋川瓦窯跡(32)等が知られている。また高尾山の中腹には高尾山経塚があり、一直線に並ぶ1～3号の3基の経塚からは、釣り環鈕を持つ青銅製経筒や和鏡、合子等が埋納品として出土している。この近くでは蓮華文軒丸瓦、鬼瓦等も出土しており、平安時代末期から鎌倉時代初期にかかる高尾山廃寺の存在が知られる。さらに田辺湾周辺の平野及びその周辺の丘陵上には火葬墓が分布する。丸橋丘火葬墓(30)は標高40mの丘陵上に須恵器の蔵骨器を埋納し、和同開珎、神功開宝等を副葬する。またその南東500m程に位置する標高50mの台地上には須恵器の蔵骨器を埋納した峯の庄火葬墓があり、いずれも奈良時代のものとみられる。

(3) 既往の調査

八丁田圃遺跡と目座遺跡は右会津川の南にあたる沖積平野に所在し、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺物が確認されている。現在の地表面には条里型の地割りが顕著に残り、1町四方ごとに「一の坪」等、条里に関連するとみられる名称も伝えられる。

本調査までには2度の発掘調査が実施されている。まず昭和53年に現在の会津保育所が所在する場所において行われ、遺構は確認されていないが耕作土直下に黄褐色粘土層が存在すること

から、この付近における大規模な削平作業の可能性が指摘されている。(*6)

次に昭和 56 年、現在の西八丁会館が所在する場所において行われた発掘調査では、大溝や土坑等の遺構が検出され、弥生時代前期から中期（第Ⅰから第Ⅳ様式）にかけての甕、壺等土器のほか石鏃や石斧、石包丁等が出土している。このほか表面調査も実施されており、サヌカイト製の石器をはじめ土師器や須恵器、青磁片が採集されている。

第 3 項 調査の方法

(1) 地区割りの方法

実測図作成や遺物取上の際に用いる地区割りは、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）により中区画、小区画を設定した（図 2）。なお、中区画は 100m 四方の区画内を 1 単位とするが、第 1～3 次の調査範囲は Y 座標軸 Y=56000 を境界として 2 つの大区画にわたるため、これらの中区画を包含する X=-240000、Y=-50000 を原点とした 1km 区画の大区画を設定している。これにより、近畿自動車道紀勢線事業に伴い実施された目座遺跡の 1～2 次、八丁田圃遺跡の 1～3 次調査についてその全ての範囲を網羅することになり、第 1 次調査が、Ⅶ 10-A7、第 2 次調査及び第 3 次調査がⅦ 10-A7、Ⅵ 10-J7、Ⅵ 10-J8 の区画内に位置する（図 2）。

各中区画は平面直角座標系の X 軸方向及び Y 軸方向に 25 等分して区画される 4m 四方の小区画 (625 区画) に分け、X 軸方向に a から y までのアルファベット、Y 軸方向に 1 から 25 までの数字を付して区画名を「a7」等と呼称する。小区画の設定状況は各次調査における

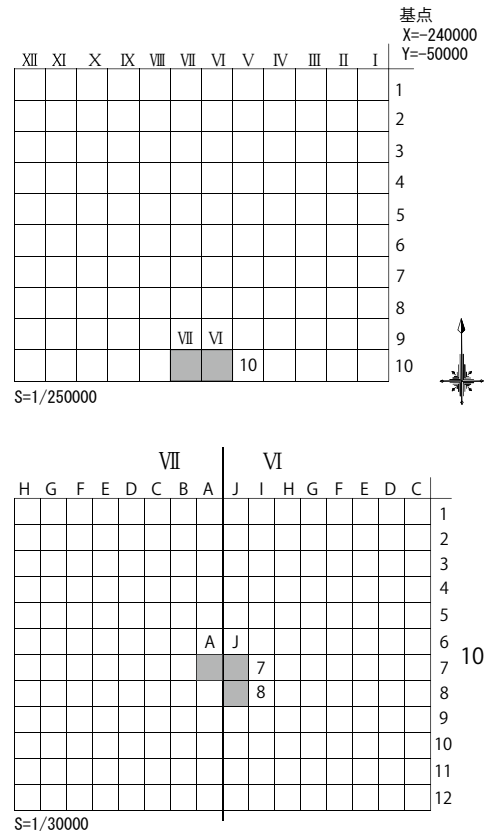


図 2 地区割 中区画及び小区画

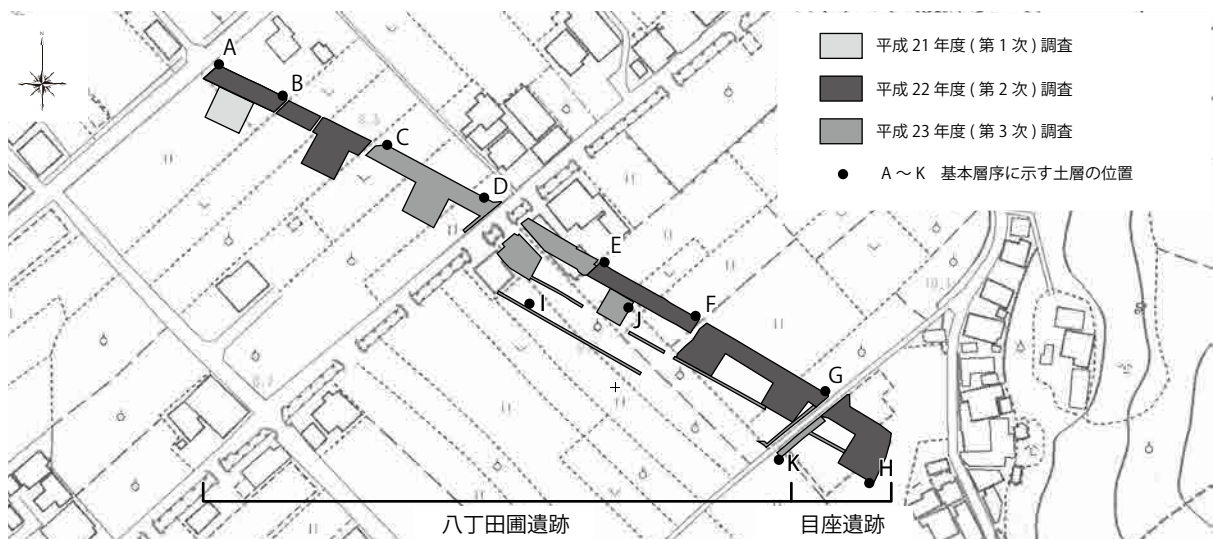


図 3 各年度における調査区及び基本層序に示す土層の位置（縮尺任意）

(2) 調査区の設定

本報告書では、第1次から第3次調査までの調査回数ごとに成果を報告する。

第1次調査は調査範囲が高速道路の橋脚部分にあたる範囲が対象となった。現状は水田であり、調査予定範囲の周辺に測量用の基準点を設け、橋脚部分の位置を特定する座標を逆トラバース測量により算出して設定した。

第2次調査では、橋脚部分及び側道の建設予定範囲が対象となった。調査区は調査区1から3までの3区画に分け（図8）、掘削及び調査は各調査区について同時に行った。

第3次調査は、橋脚部分、側道の建設予定範囲、現行道路の拡張部分及び水路部分を調査区1から7までの7区画に分けた。道路拡張部分と水路部分については進捗管理上、枝番を付して細分を表記した（図18）。各年度毎の調査位置は図3に示すとおりである。

以上の通り設定した調査区を、その調査回数と調査区名により「調査区2-1」、「調査区3-7-1」等と呼称する。

(3) 基本層序

第1～3次調査における基本層序は図4の通りである。各土層の位置は図3上にアルファベットA～Kにより表示している。

土色は各調査区において若干違いが見られる場合もあるが、代表的な土色名を表記している。次に、各土層について説明する。

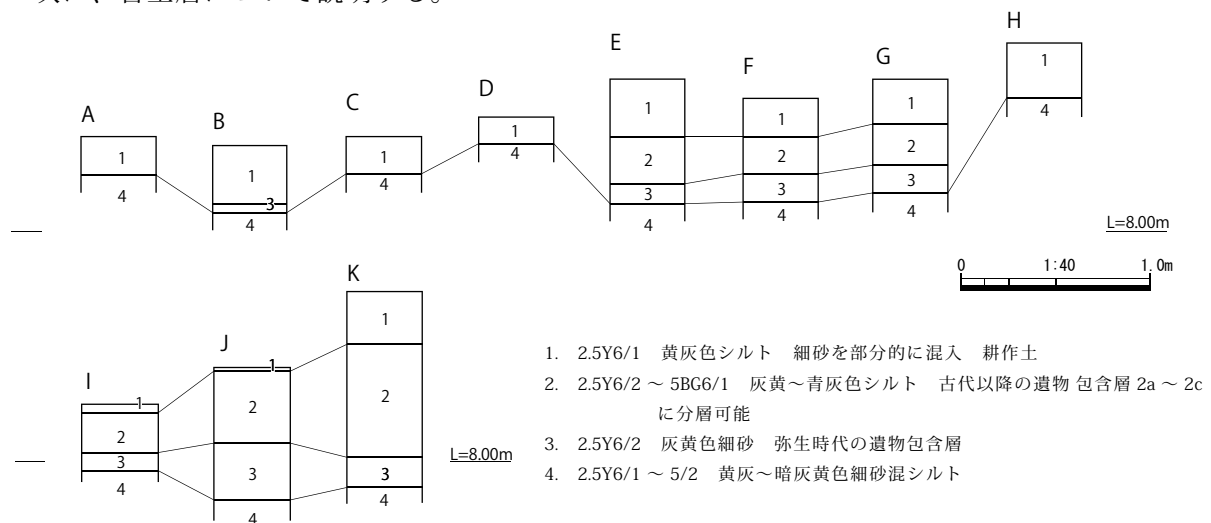


図4 基本層序

第1層は、現代の水田耕作土である。畑地の畝または現況で水田上に更に盛り土等がなされている場合であっても、第1層とした。

第2層は、比較的均質なシルトから成る層で、礫等の混入も少ない。調査箇所によってはa～c層に分層が可能であり、包含する遺物から、これらは堆積時期に若干の差異があるものと判断された。出土遺物の大部分は摩滅が著しい。

第3層は、弥生時代の遺物包含層である。第3a、3b層に細分が可能であり、このうち第3a層は弥生時代前期の遺物を含み、第3次調査において調査区3-2及び3-3で検出された溝状遺構308の埋土3a～e（図24・25）と同一である。第4層は本調査で確認した範囲において無遺物層であり、上面が弥生時代前期～中期の遺構検出面である。第4a～f層に細分が可能であるが、

このうち最上層にあたる第4a層が削平を受け、第4b層以下複数の層が露出している箇所ではその上面を遺構検出面としたため、第4a層以外の層を検出した箇所でも遺構検出面を包括的に第4層上面と表記している。

以上が基本層序であるが、各調査区においては随時下層確認用のトレンチを設定して、遺構検出面下の土層を確認した。その結果、第1次調査の範囲を除き、第4層以下にはシルト層が堆積し、更にそのシルト層の下層は概ね川原石からなる礫層となっているようである。

第4項 調査成果

(1) 第1次調査

第1次調査の調査区及び地区割りは図5に示す通りである。

地表面は厚さ60cm程度の盛り土がなされていたが、標高8.50m付近で現代の水田耕作土表面を確認した。ただし床土は明確でない。第4層上面において弥生時代前期とみられる遺構面を確認し(図6)、遺構検出を行った(図7)。

また調査の最終段階に、調査区北東壁付近において堆積層の断割を行い、遺構検出面との関係を確認した結果、図6に示す3a～3g層にも僅かな遺物が含まれることが判明し、さらに遺構状の落ち込みも認められたが、第2次調査において近隣地点を検討した結果、これらは自然堆積と判断された。

1) 遺構と遺物

遺構 1001 (図7、図版1) 短軸0.51m以上、長軸0.73m、深さ0.08mの土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片2点が出土した。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1002 (図7、図版2) 短軸1.65m、長軸1.90m、深さ0.05～0.10mの土坑で、平面形は

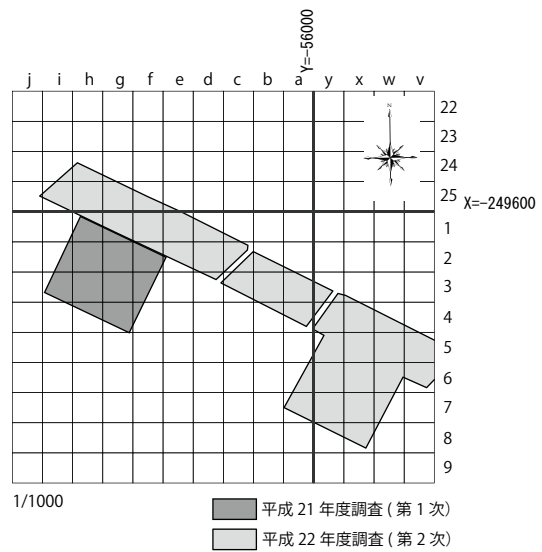
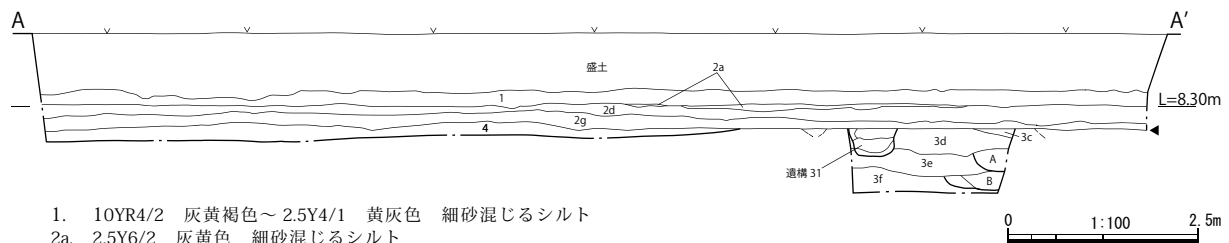


図5 調査区及び地区割(小区画)



1. 10YR4/2 灰黄褐色～2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じるシルト
- 2a. 2.5Y6/2 灰黄色 細砂混じるシルト
- 2d. 2.5Y5/2 暗灰黄色～5/3 黄褐色細砂混じるシルト
- 2g. 2.5Y5/1 黄灰色～5/2 暗灰黄色 細砂混じるシルト
4. 2.5Y6/1 黄灰色から5/2 暗灰黄色 細砂混じるシルト
- 3c. 2.5Y5/1～4/1 黄灰色 粗砂混じる細砂
- 3d. 2.5Y5/1～5/2 暗灰色 細砂
- 3f. 2.5Y5/2 暗灰黄色 微砂、細砂混じるシルト
- 3g. 2.5Y6/1 黄灰色～6/2 灰黄色 粘質シルト 上半は微砂混じる

図6 調査区北東壁土層図

不定形である。弥生土器の小破片が多数出土した。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1003 (図7、図版1・2) 短軸 0.52m、長軸 0.53m、深さ 0.09m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の破片が出土した。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1004 (図7、図版1・2) 短軸 0.90m、長軸 0.95m、深さ 0.16m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の破片が出土した。

遺構 1005 (図7、図版2) 短軸 0.39m、長軸 0.60m、深さ 0.08m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片が出土した。埋土は 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構1006 (図7、図版1・2) 短軸0.40m、長軸0.53m、深さ0.10mの土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片とともに弥生時代中期前葉と思われる甕底部1点が出土した。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

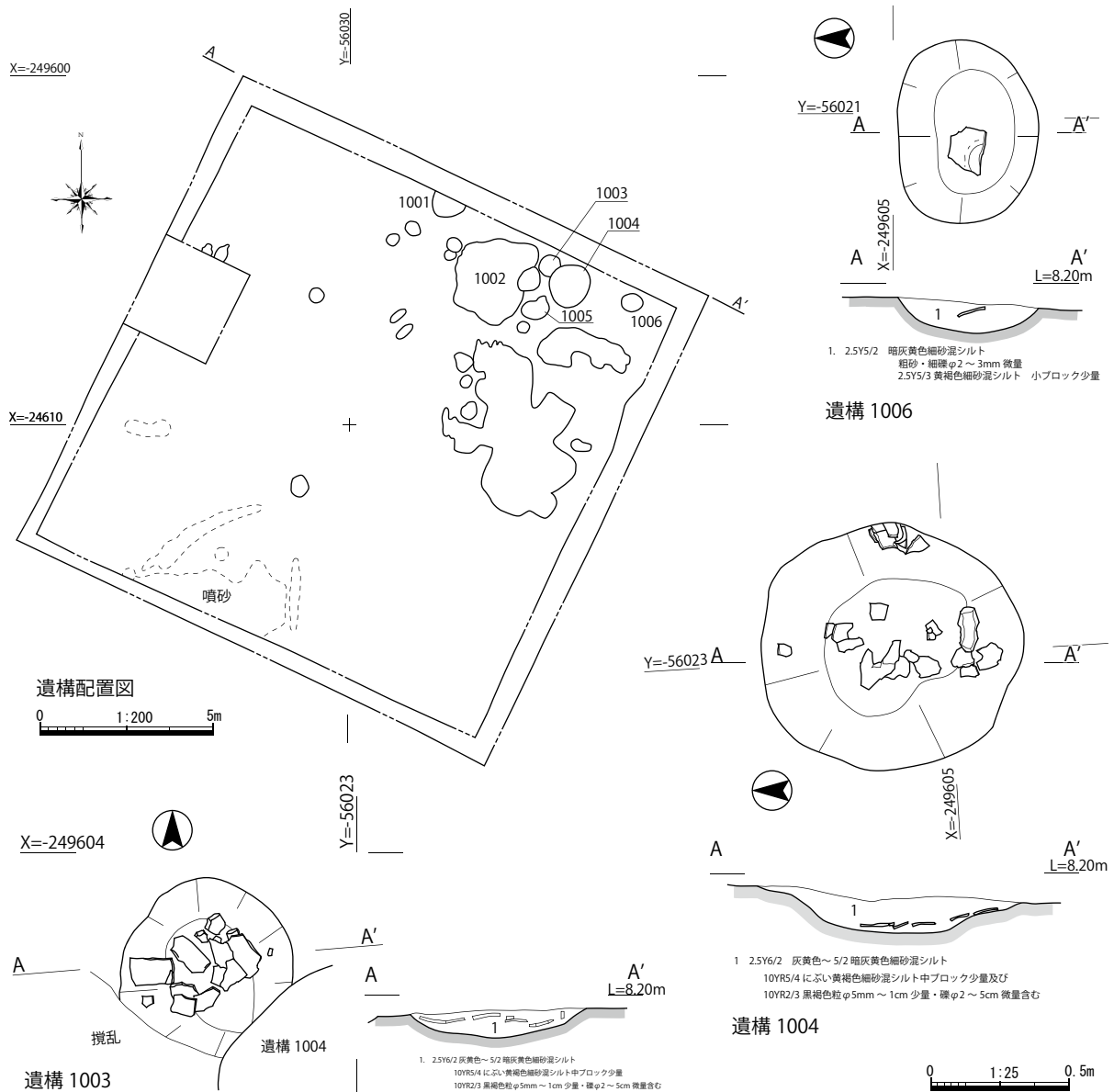


図7 第1次調査 遺構配置図及び各遺構図

このほか、柱穴と考えられるピット9基を検出している。

2) 小結

第1次調査では遺構検出面上に土坑等を確認した。また部分的にサブトレンチを設け確認したところでは、更に下層において遺物包含層（図6の第3c～3g層）及び遺構とみられる落ち込み（図6のA・B）を確認し、弥生時代前期後半に帰属するとみられる土器片も出土したが、第2次調査において、当該地点に近接した範囲を調査した結果、これら（図6の第3c～3g層・A・B）は、遺構2001（自然流路）による自然堆積と判断された。遺構2001は当該地点付近で緩やかなカーブを描いて、侵食と堆積を繰り返していたと推測される。

(2) 第2次調査

1) 調査区の設定

第2次調査の調査区及び地区割は図8に示す通りである。

図3及び図4のAに示すとおり調査区2-1では耕作土直下に第4層があり、この第4層上面で遺構検出を行った。第4層上面はほぼ水平で、下層が露出しているとみられる箇所もあったことから、齊一的に削平されたものと判断された。なお、Bの位置に第3層の堆積が僅かに存在するが、この部分は埋没した自然流路の直上にあたり、自然流路の埋没後、窪んだ地形となっていたところへ堆積した第3層が部分的に削平されず残存していたものと考えられる。

図3及び図4のE、F、Gでは、水田耕作土である第1層直下に第2層及び第3層の堆積がみられる。第2層はほぼ水平に堆積し、前述のとおりa～cに分層が可能である。このうち、上位の第2a層及び第2b層は平安時代後期から近世頃までの遺物を含み、この時期の水田耕作土及び床土と考えられる。また下位の第2c層はほぼ均質で、平安時代末から中世初頭までの遺物を含む。Hは調査区2-3東南端にあたる地点である。調査区2-3は第2次調査の調査地東端に位置し、ここでは平野部から丘陵裾部へ向かい緩やかに上る地形を確認した。また遺構検出面は第4層上面としているが、調査区2-3の東半では下層の細礫が露出している。

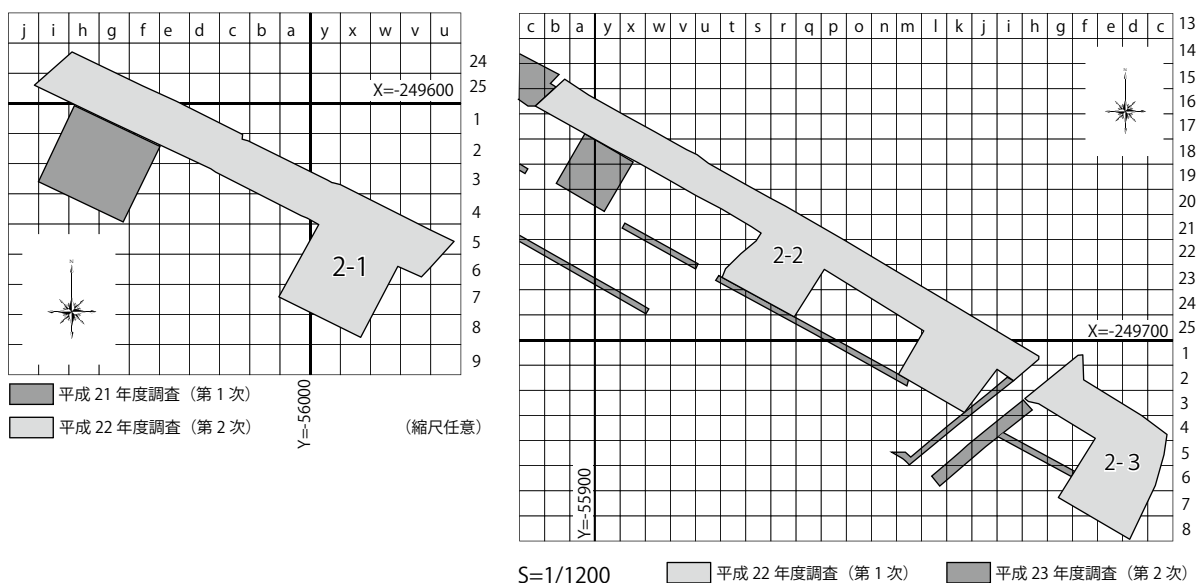


図8 第2次調査 調査区及び地区割（小区画）

2) 遺構と遺物

調査区 2-1

遺構 2001 (図 9、図版 4) 南北に延びる自然流路である。底部のレベルと調査区周囲の標高から、北から南への水流が推定される。埋土最下層は炭化物を多量に含むもので、弥生土器片が出土した。幅は 8m 以上とみられるが、調査区北壁土層ではこの流路が東西方向に位置や幅を変えていた痕跡が窺え、遺構上端は東岸で明瞭に検出されたものの、西岸では極めて不明瞭であった。またこの流路の東岸と西岸では土質が異なっており、東側は細礫を僅かに含むシルト質土であるが、西側はシルトに細砂を含み、調査区の西側ほど細砂の混入が顕著となる傾向が窺えた。これは流路東岸では浸食が、西岸では堆積が進行していたことを示すものと考えられ、さらに東側へ緩やかな曲線を描いていたことが推定される。またその流量の変化により、西岸に形成された砂州状地形において堆積と流失と繰り返された結果、ここでは第 1 次調査の調査区北東壁面土層 (図 6) に示すような複雑な堆積状況を呈することになったと判断された。埋土中の土器片は摩滅したものが多く、弥生時代前期後半の土器 (図 30-1) が西岸に堆積した細砂中から出土しており、流路の時期はこれと大差ないものと考えられる。

遺構 2002 (図 9・11) 長さ 5.0m、幅 1.0m、深さ 0.2~0.3m の溝状遺構で、遺構 2001 に流れ込む。遺構 2001 にはほぼ直角に合流しており、人為的に掘削された可能性が高い。また遺構 2001 との合流点付近には遺構内から 3 個の自然石が出土しており、ここに堰等が設けられていた可能性がある。弥生土器の甕底部 (図 30-4) が出土しており、遺構 2001 に流れ込む状況から、これと同時期であると考えられる。

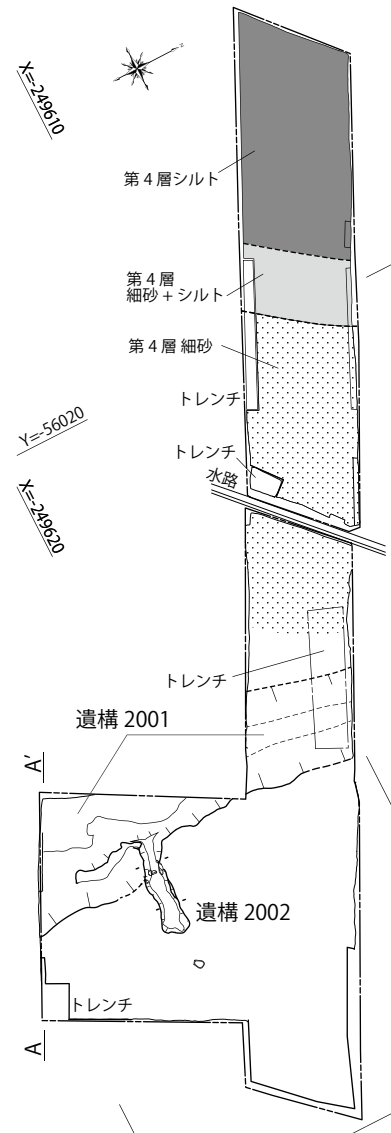
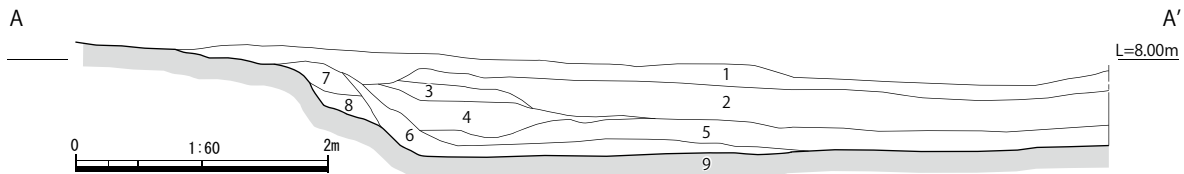


図 9 調査区 2-1 遺構配置図
S=1/400

調査区 2-2

調査区 2-2 では径 0.2~0.4m 程度の浅いピットを多数検出したが、これらは断面に明瞭な掘形を示す



- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y7/1 灰白色シルト 粗砂を少量含む。径5mm程度の細礫をわずかに含む。 | 6. 5BG6/1 青灰色シルト 細砂を僅かに含む。 |
| 2. 2.5Y7/1 灰白色シルト 粗砂を僅かに含む。細砂を少量含む。 | 7. 10YR6/1 褐灰色粗砂 細砂及び炭化物を少量含む。弥生土器片を含む。 |
| 3. 2.5Y7/2 灰黄色シルト 粗砂を僅かに含む。細砂を少量含む。 | 8. 5BG7/1 明青灰色シルト 部分的に粗砂を含む箇所が見られる。 |
| 4. 10G7/1 明緑灰色シルト 炭化物を少量含む。 | 9. 5BG7/1 明青灰色シルト 極めて均質である。基本層序の第4層 |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色細砂 粗砂を少量含む。 | |

図10 調査区 2-1 遺構 2001 土層図

ものが少ない。これらの埋土はほぼ全てが第3a層の暗青灰色土である。

遺構2191 (図12・17、図版5) 径0.4m程度の、円形に炭化物が集中する遺構である。炭化物が集中する範囲の周囲は土色が灰白色に変化している。

遺構2254 (図12・16、図版4) 長径1.6m、短径1.4m、深さ0.18m程度の浅い土坑である。土坑内には弥生土器が据え置かれた状況で出土した。弥生時代前期後半の竈とみられるが、土器は摩滅が著しく、脆く多数の破片となっていたため、復元・図化し得なかった。本来有ったと考えられる、遺構検出面より上の部分は欠損しており、出土状況から埋葬であるとは考えにくい。

遺構2258 (図12、図版5) 径0.7~0.8m、深さ0.08m程度のやや隅丸方形をした浅い土坑である。埋土は均質であり、弥生土器片が出土している。

遺構2289 (図12、図版5) 長径0.7m、短径0.5mを検出したが、一部調査区外に及ぶため全容は不明である。深さは0.18m程度で、埋土は遺構2258と同様である。

包含層の出土遺物 (図29・30・31)

調査区2-1の表土層からは近世陶磁器の摩滅した小片のほか、古墳時代以降の遺物も出土している。ただし今回の調査において同時期の遺構は確認されていない。

調査区2-2の包含層(第2層)からは弥生時代及び平安時代後期の遺物(図30・5~25)が出土している。18は石帯であるが摩滅が著しく、4分の3以上を欠損している。残存部分には垂孔が一部確認でき、潜り孔といった特徴が窺える。潜り孔は位置からみて3箇所或いは4箇所に、平行(*)に設けられたものと考えられる。石材はやや黄色がかった白色であるが、種類の判別は困難である。穿孔方法に潜り孔の技法を用いていることから、平安時代後期以降のものとして推定される。

調査区 2-3

調査区2-3では調査区西半に第2層の堆積があり、東半では現代の耕作土直下が第4層となる。第4層より下層は礫を主体とする層の堆積が有って、調査区東端付近ではそれが第4層上面まで及んでいたため、第4層上面及びこの礫層上面で遺構検出を行った。出土遺物は、弥生土器の小片等が僅かに出土した。

遺構2335 (図13、図版6) 長さ5.0m、幅0.5mの畦畔状の遺構である。第3層上面において第4層の露出が南北方向の帯状に認められるもので、水田遺構の畦畔である可能性を検討したが、周囲との比高差は数cmと僅かで、また輪郭も非常に不明瞭であること等から、その可能性は低いものと考えられる。

遺構2336 (図13、図版6) 南北に長さ18.0mにわたり検出された溝状遺構で、幅は北側で1.4m、南側で3.0mを測る。遺物は弥生土器片等が出土しており、同時期の遺構である可能性が高いが、いずれ

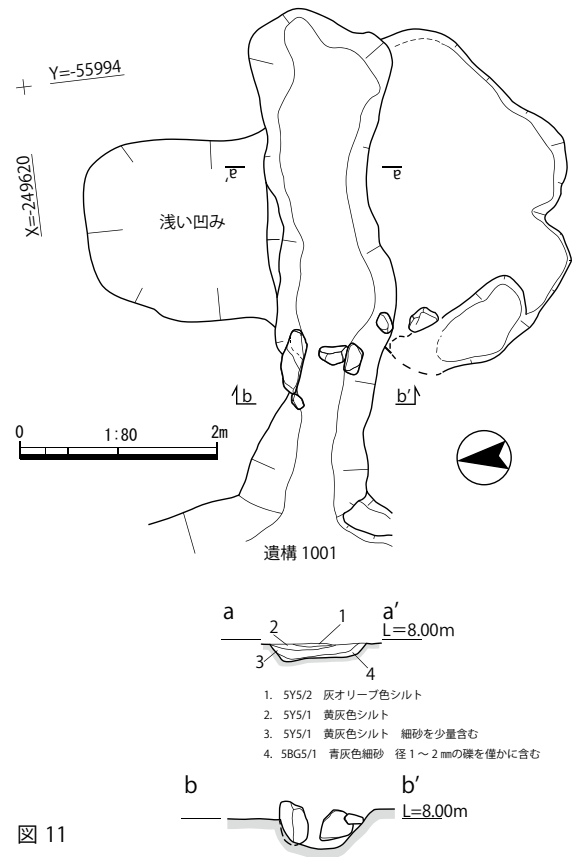


図 11
調査区 2-1 遺構 2002 平面及び土層・断面見通し図

S=1/80

も摩滅の著しい小片であり、時期の特定は難しい。

3) 小結

第2次調査では、調査区2-1から2-3にわたる東西約250mの範囲において、その旧地形を把握することができた。調査区1-1は現況で削平されているが本来は微高地であったと推定され、そこから東へ徐々に標高が下って調査区2では低地となる。さらに調査区3では調査地東側の丘陵へ向かい緩やかに上る傾斜となる一連の地形を復元することができる。

調査区2-2では第4層の上面において広く堆積する第3a層が確認された。第3a層の厚さは場所によって不均一であるが、第4層上面の地形に沿ってより標高の低い箇所へ集中し、南北方向に延びる数条の流路状の痕跡を残していることから、この低地に一時的な第3a層の流入があったと考えられる。

またこの第3a層の堆積はその上面及び下面において一部攪拌された状況が窺え、調査区2-2を含む一帯は絶えず水が流れ込む低湿地となっていたことが推定される。

(3) 第3次調査

1) 調査区の設定

調査区のうち、調査区3-1、3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-7-4は八丁田圃遺跡、調査区3-5-2、3-6は目座遺跡にあたる。調査対象地は橋脚及び側道、水路の建設予定地となった場所であり、各調査区の地区割り（小区画）は図18に示すとおりである。

調査区3-1と、3-2の西半部分は第4層まで大きく削平を受けており、弥生時代の遺構は残存していなかった。このことから、少なくとも調査区3-1から現有の道路と水路の範囲を含み調査区3-2まで及ぶ東西70mあまりにわたり削平を受けているものと考えられる。調査区3-3の第4層上面は東南方向へ緩やかに下る傾斜となっており、溝等の遺構が検出されている。

調査区4、3-7-1、3-5-1、3-5-2、3-6、3-7-1、3-7-2、3-7-3、3-7-4にあたる一帯は弥生時代以降も低湿地であったと考えられ、当該各調査区で検出された第2層はこれらの調査区を含む東西80m以上の広い範囲にわたって堆積する。

調査区3-6では、第4層が東へと緩やかに上ることを確認しており、当該調査区付近が低湿地の東端にあたるようである。

2) 遺構と遺物

調査区3-1

現状では水田または畑地であり、調査区内のほぼ全面において、現代の耕作土である第1層の直下に第4層が検出された。この第4層上面では更に下層の第4b層等（図22）が露出しており、調査区の全体にわたって齊一的に削平を受けていることが明らかである。

遺構3001（図版7） 調査区の東端に検出された遺構で、土坑の一部であると考えられる。南北2.7m前後、東西3.0m前後にわたり、不定形な平面形状を呈するが、底面は比較的平坦である。ここから弥生土器の壺底部が出土している。

調査区3-2

調査区3-2の西半部分は削平を受けており、この範囲に遺構は検出されなかった。しかし、東端で第2層及び第3層を確認しており、第2層上面では畦畔状の遺構を検出した（図20）。この畦畔が検出された位置にはかつて里道が存在したとのことで、その里道はこの畦畔状遺構を踏襲したものであると判断される。この畦畔状遺構を形成する第2層を除去後に第4層を検出したが、調査区西半に検出した第

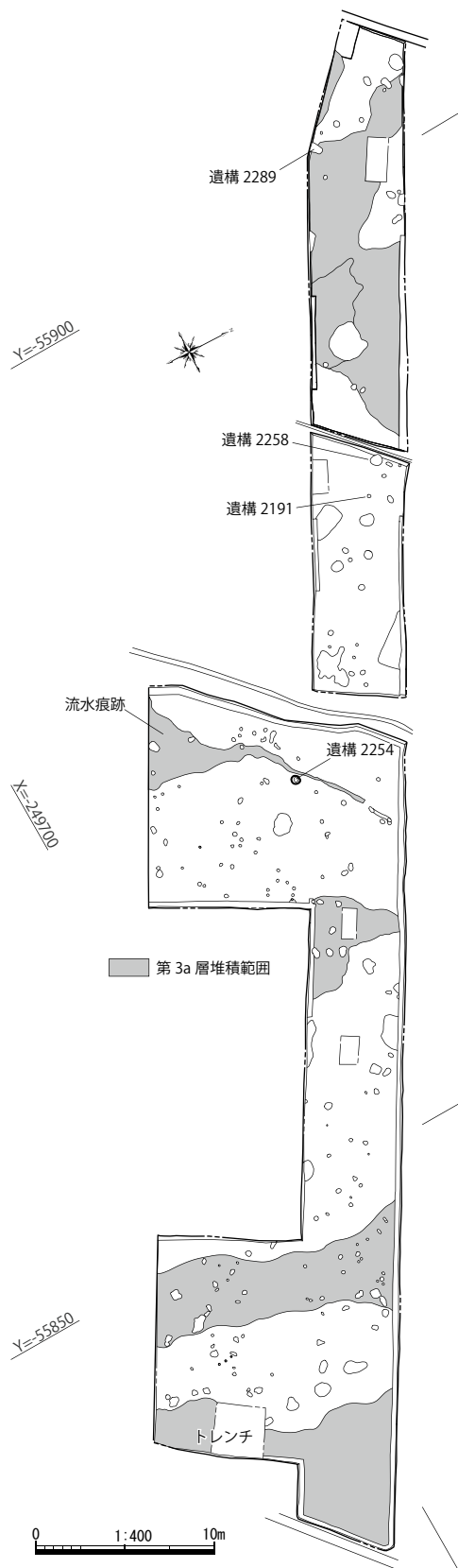


図 12 調査区 2-2 遺構配置図 S=1/400

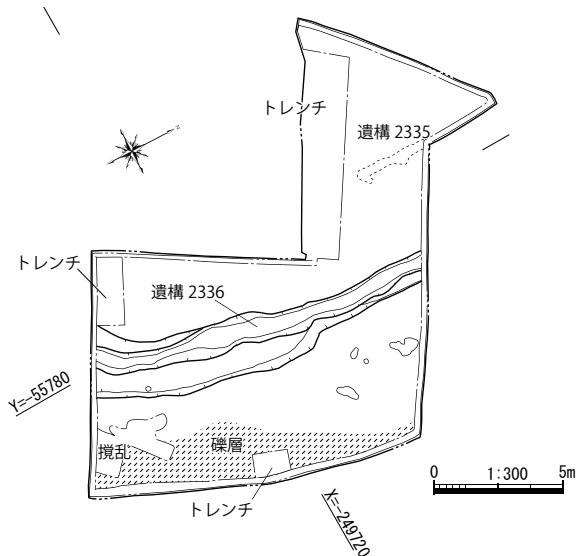


図 13 調査区 2-3 遺構配置図 S=1/300

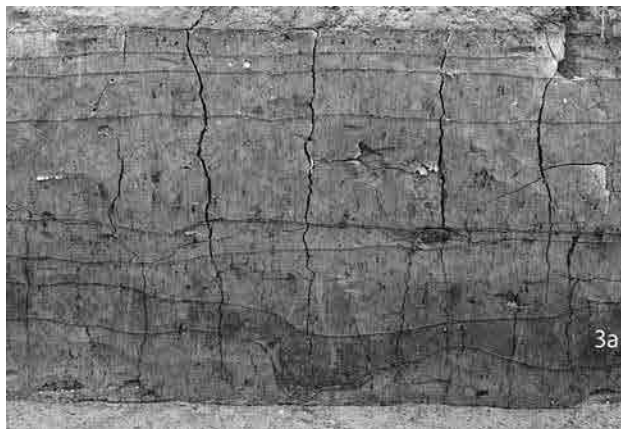


写真 2 第 3a 層の堆積 (調査区 2-2 南壁、北から)



写真 3 調査区 2-3 北壁土層 (礫層部分、南から)

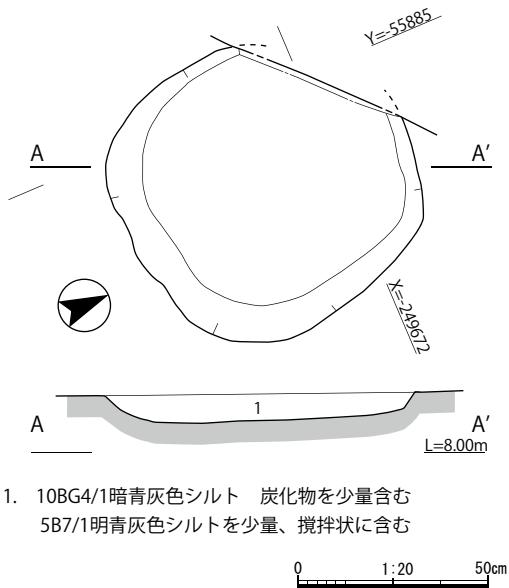


図14 調査区2-2 遺構2258実測図

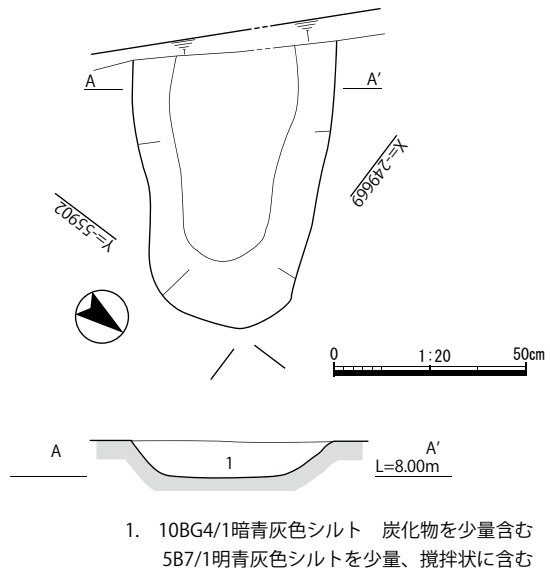


図15 調査区2-2 遺構2289実測図

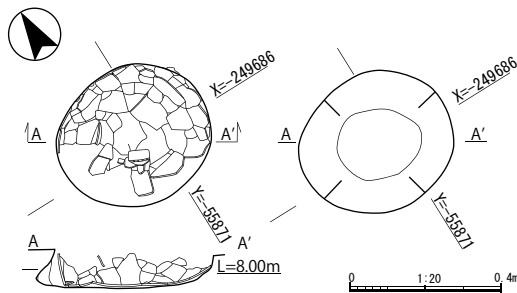


図16 調査区2-2 遺構2254実測図

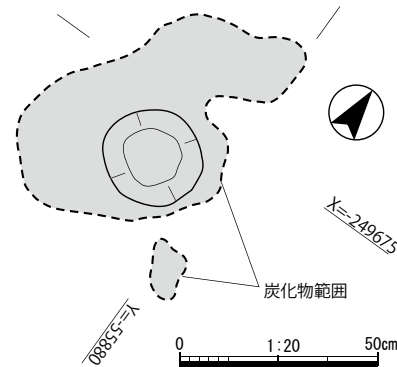


図17 調査区2-2 遺構2191実測図

4b層上面に連続するものではなく第4b層の上層にあたる第4a層であると判断され、弥生時代の遺構面が残存しているのはこの第2層に覆われた範囲のみであるとみられた。

遺構3008 長さ11.3mにわたって検出された溝状遺構で、幅1.6m、深さ0.43mである。幅、深さとも検出した範囲ではほぼ均一で、底部のレベルから北東から南西方向へと水の流れがあったものと推定される。図18に示す土層の第3a層は遺構3009の埋土及び調査区3-4以西において広範囲に堆積するものである。土層からは、第3a層が遺構3008の西側から遺構内に流入し、遺構309とした位置から東側へ溢れ出ている様子が窺える。遺物は突帯文系とみられる弥生土器（39）が出土しており、遺構の帰属時期は弥生時代前期であると判断される。

遺構3009 南北、東西とも3.3m以上の不定形をなす浅い土坑であるが、第3a層が遺構308から流出した箇所が土坑状を呈して検出されたものであると判断された。

調査区3-3

調査区3-3では第4層上面において遺構3007、3008等を検出した。

遺構3007 遺構3008は溝状の凹みを残して埋没しており、それへ流れ込んだシルトの堆積範囲を遺構3007とした（写真3）。なお、埋土は第2層の最下層である第2c層に酷似する。

遺構3008 調査区3-2において検出された溝状遺構と同一遺構であると判断されるものである。

当該調査区では長さ12.6mが検出されており、調査区3-2と合わせ長さ30m程度となる。遺物は敲き石（図31-51）が出土している。

調査区3-4

現代の水田耕作土の除去後、畦畔状遺構を検出している（図15）。また、第2層以下には調査区全体に第3a層の堆積がみられ、遺構検出面である第4層上面では20基近くのピット及び土坑3基が検出されたが、埋土はいずれも第3a層であり、遺物を伴わないことから樹根の痕跡等である可能性もある。同様の遺構は第2次調査における調査区2-2でも検出している。調査区中央には第3a層を埋土とする流水痕跡が検出された。

畦畔状遺構2（図21） 第2層上面に検出された遺構で、調査区の北西から南東へ長さ約8.8mが検出している。幅0.50m程度である。当該遺構の北側では第2b層、南側では第2a層を確認しているが、このことは畦畔の北側と南側では水田床土の高さに違いがあることを示す。

遺構3063（図21） 第4層上面に検出された遺構で、埋土は第3a層であり、第2次調査の調査区2-2等に検出されている流水痕跡にあたるとみられる。遺物は第3a層中から弥生土器の小片が出土しているが、摩滅が著しく、器種等は不明である。

調査区3-5

調査区3-5は3-5-1及び3-5-2に分かれ、いずれも道路の拡張部分にあたる。（図21）

調査区3-5-1は道路の西側に沿う調査区で、第2層から管玉（52）が出土した。第4層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されていない。調査区全体に第3a層の堆積を検出しているが、土色は調査区3-4での検出時と同様ではなく、やや明るい色調を呈する。

畦畔状遺構3（図21） 調査区3-5-2では第2層上面に畦畔状遺構3を検出した（写真1,2）。長さは17.2mを測り、幅はほ0.50mではぼ一定である。また調査区南側ではこれに伴うとみられる杭列も検出

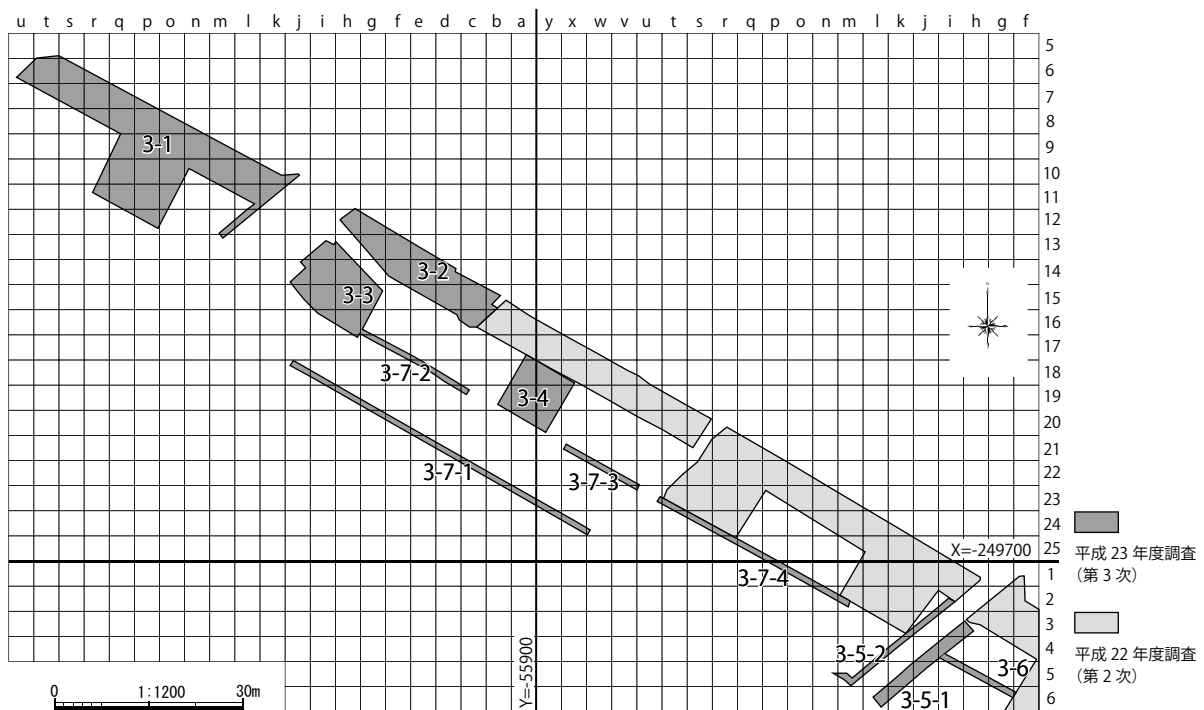


図 18 第 3 次調査 調査区及び地区割（小区画）

された。また当該遺構を形成する第2層から遺物の出土はないが、これに伴うとみられる水田耕作土からは近世陶磁器等が出土しており、近世頃まで畦畔として存続した可能性が高い。断面からは、水田の床土が東側においてやや高く、西側が低くなる状況が窺える。

遺構3086 (図21) 長径1.6m、短径0.7m、深さ0.25mの楕円形をなす土坑である。埋土は2層に分かれるが、両層の境界に板状木片の痕跡を検出した。木片は樹皮に近い部分であり、スギまたはヒノキと判断された。埋土はいずれも遺構への流れ込みと判断され、本来土坑を覆うように板状の木片が被せられていたものと推定される。

調査区3-6

第4層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されていない。第3a層の堆積はここでも確認されたが、調査区の西半分を覆う程度にとどまる。また、第4層上面は東側へ向かってゆるやかに上り、当該調査区近辺は低湿地の東端にあたるものと考えられる。

調査区3-7

水路の設置予定地となっている部分で、調査区3-7-1、3-7-2、3-7-3、3-7-4の各調査区に分かれる。ピット状の遺構が複数検出されたが、調査区3-4同様、樹根の痕跡である可能性の高いものである。当該調査区においては第3a層の広がりを検出している。

(5) 小結

第3次調査における成果は畦畔状遺構の検出、溝状遺構3002及び3008の検出、第3a層の範囲と堆積状況の確認等が挙げられる。

畦畔状遺構の検出は、その両側における水田床土面に比高差が認められた。八丁田圃遺跡が所在する平野一帯は北から南へかけて、また、北東側の山裾から平野中央部へ向けて標高が下るが、畦畔状遺構の方向はこれに対応し水田への水回りを考慮して整備されたことによるといえる。

溝状遺構3002及び3008は、それぞれの帰属時期に差が認められるものの、いずれも北東から南西方向に延びており、これは第4層上面の等高線に沿うもので、当時の地形に沿った方向に掘削されたものと考えられる。調査区3-1及び3-2における削平の状況からみれば、旧地形ではこの付近が最も高所であったことが推定され、現在この位置にある水路が主に灌漑用であることからすれば、遺構3002及び3008も同様の機能を想定することができる。さらに現有の水路は一带にみられる条里型地割の傾向と付合し、このときに整備されたものと推定される。

第3a層は、調査区3-2、3-6、3-7にかけての広い範囲で堆積が確認されたが、調査区3-2における遺構3009の検出により、この部分から低地に向かって流出したものであることが判明した。遺構3008からの出土遺物は多くないが、その帰属時期は弥生時代前期であると推定され、第2次調査において第3a

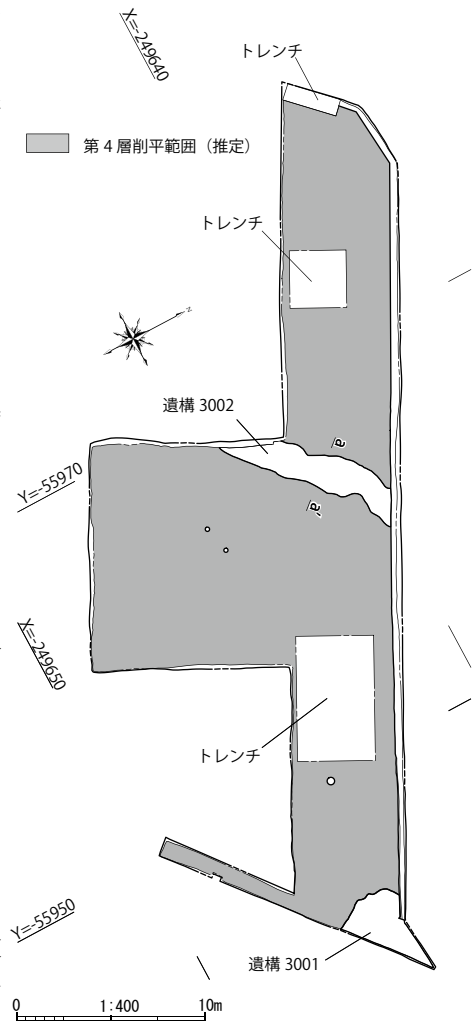


図19 調査区3-1 遺構配置図

層から出土した遺物が弥生時代前期とみられることも、このことを裏付ける。第3a層の堆積は八丁田圃遺跡における弥生時代前期及び中期の2時期を分けるメルクマールとなる可能性が高い。

第5項 まとめ

今回の調査では、平野部において東西方向に長くトレンチを設定した結果、弥生時代前期から中期における遺構の立地状況について、一定の手掛かりを得られた。

図28は、第1～3次調査において作成した調査区壁面土層を東西方向に繋げたもので、弥生時代前期から中期の遺構検出面である第4層上面の断面図である。比高差を明確にするため、水平方向の縮尺(S=1/2000)と垂直方向の縮尺(S=1/400)は同一としていない。

この図では、今回の調査において確認された、アルファベットのAで範囲を示した微高地と、Bで範囲を示した

谷状の低地が存在することが分かる。またCは自然流路及び溝等、遺構がまとまって存在する範囲を示している。

微高地は4箇所あるが、西側のA及び流路を挟んで東側の3つのAが連なる部分の2つのまとまりが認められる。図では、西側をA1、東側のまとまりをA2～A4としている。これらの部分を微高地としたのは、その周辺の地形がAの方向に高まる傾向を示していたことと、検出面上での観察では、

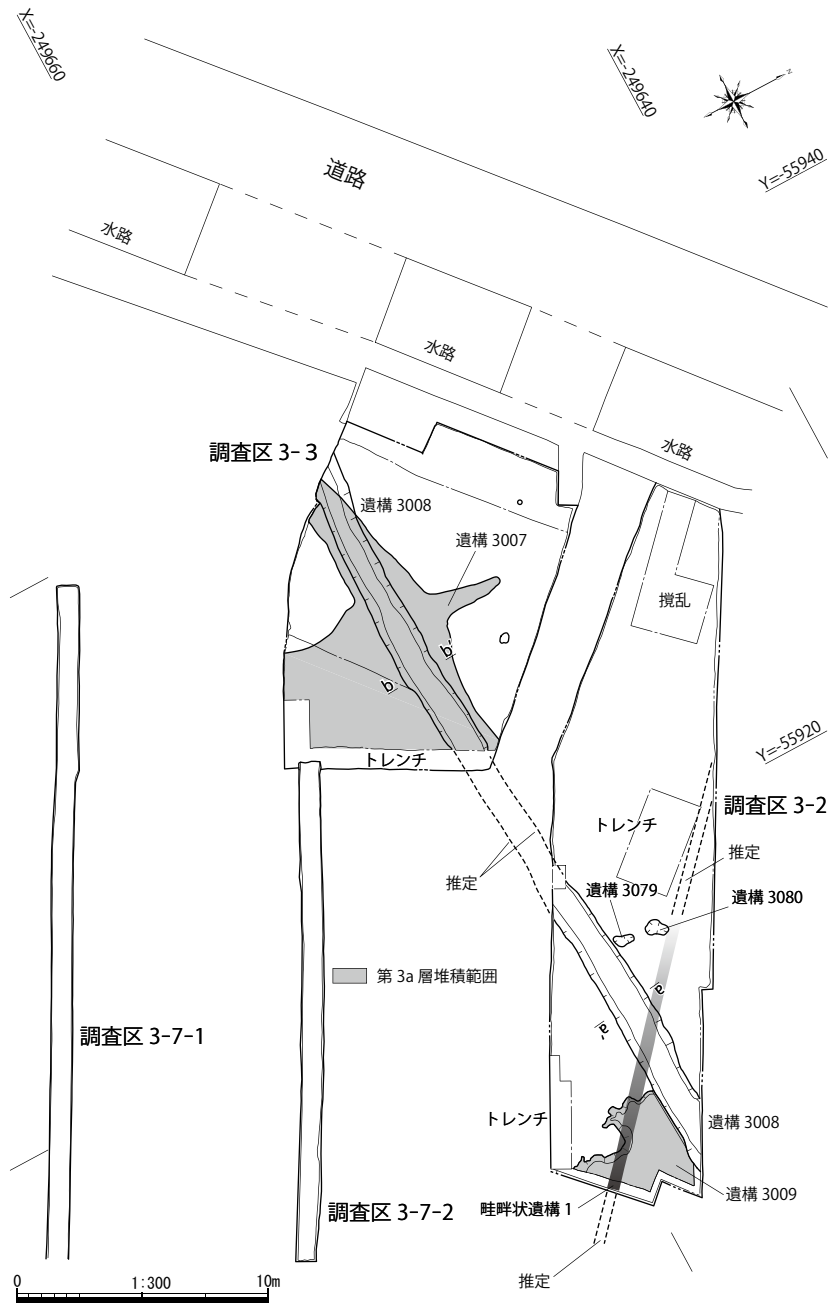


図20 調査区3-2、3-3、3-7-1、3-7-2 遺構配置図



写真3 調査区3-2 遺構検出状況 (南西から)

第4a層より下位の第4b層等の露出が認められたことによる。さらに、これらの微高地は遺構の存在しない空白地となっている。

Bとして範囲を示した谷状の低地は、第3a層が堆積する範囲に相当する。第3a層は炭化物を含む暗青灰色シルトであり、遺構3009の位置において、遺構3008上端から溢れ出すように東側へ流出し、より標高の低い位置へと堆積する様子が窺える。またこの層は弥生時代前期の遺物を含む。

遺構はCの範囲において顕著に認められるが、前述したとおりAには存在せず、第4層の下位または第5層以下の層が表出している。またBにおいてはわずかに遺構が存在する。

遺物の分布は、Cとその周辺において集中する傾向があり、Bにおいてもわずかながらみられる。ただし、Bの範囲内で出土する土器のほとんどは摩滅が激しく、土器以外では石器が少量出土している。またAのうち、第1次調査を実施した範囲では遺物の出土をみているものの、そのすぐ北側にあたる地点(第2次調査地点)では遺物がほとんど出土していない等、近接した地点においても、遺物の出土量が大きく異なる場合がある。

これらのことは、当該調査地の旧地形と後世の土地利用に深く関わるものと考えられる。弥生時代前期から中期にかけて、当該調査地一帯は会津川の堆積作用により形成された周囲との標高差の比較的小さい微高地が点在する、起伏に富んだ地形であったと推定される。また、Aのような遺構の空白地は、遺構が集中するCに隣接して存在し遺構や遺物は確認されないが、これに隣接するCに遺構が検出され遺物の分布密度が高まることから、もとはC同様に遺構が集中していた可能性が高い。今回調査を実施した範囲内からは、会津川が現在と比べ大きくその流れを変えた形跡は確認されておらず、その周辺の微高地に遺構が展開していることが把握された。河岸段丘上に存在する微高地の後背湿地において適地を選び水田を営んでいた可能性も指摘できる。また、遺構面の削平を裏付けるものとして、溝3002の検出状況が挙げられる。溝3002は深さ0.2m程度の浅い溝として検出されたが、土層はその粒度から3層に分層可能で、上

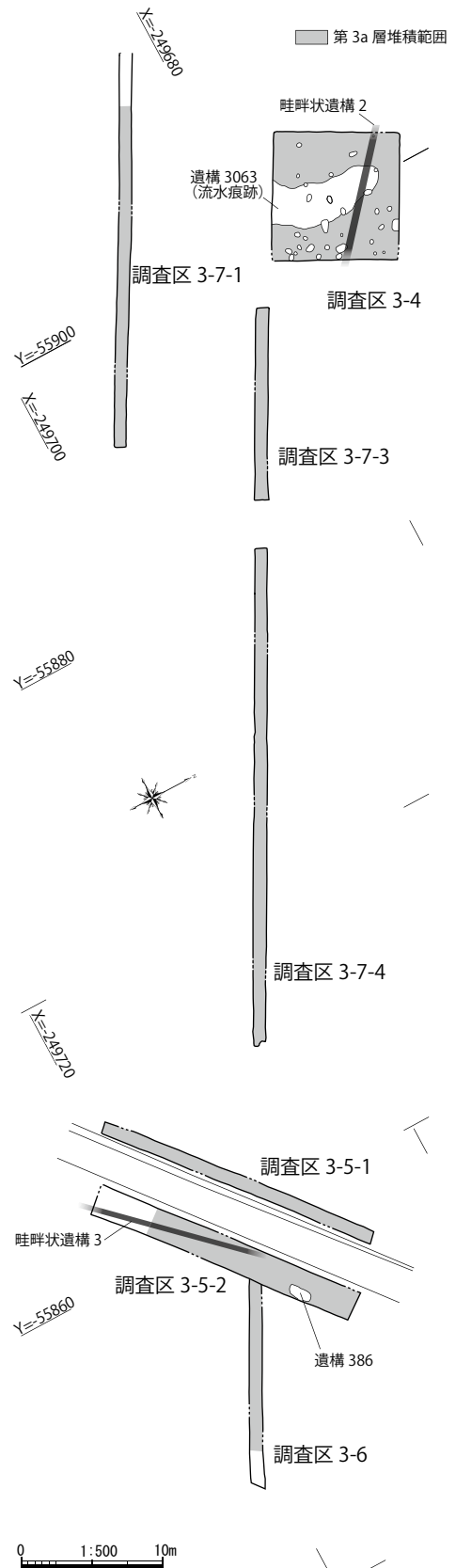


図21 調査区3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-5-2、3-6、3-7-1、3-7-2 遺構配置図

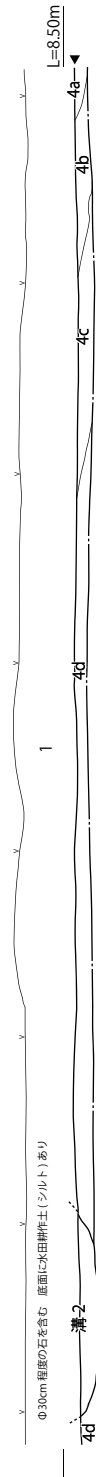


図22 調査区3-1 北壁土層図 (S=1/80)

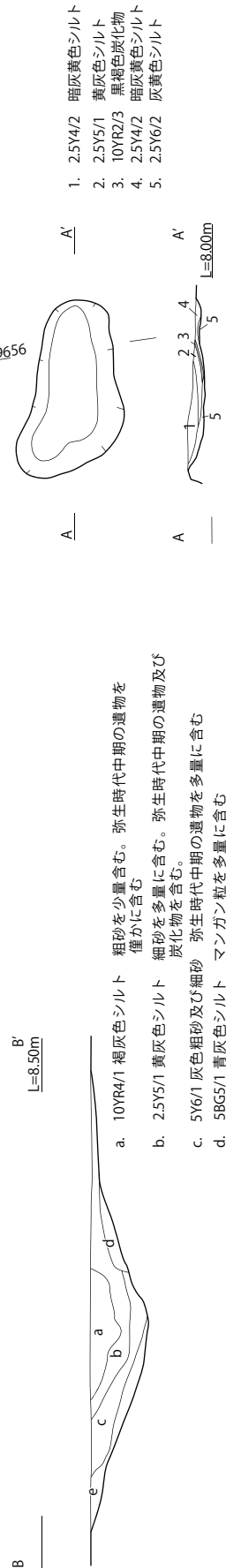


図26 調査区3-1 遺構3079 実測図 (S=1/30)

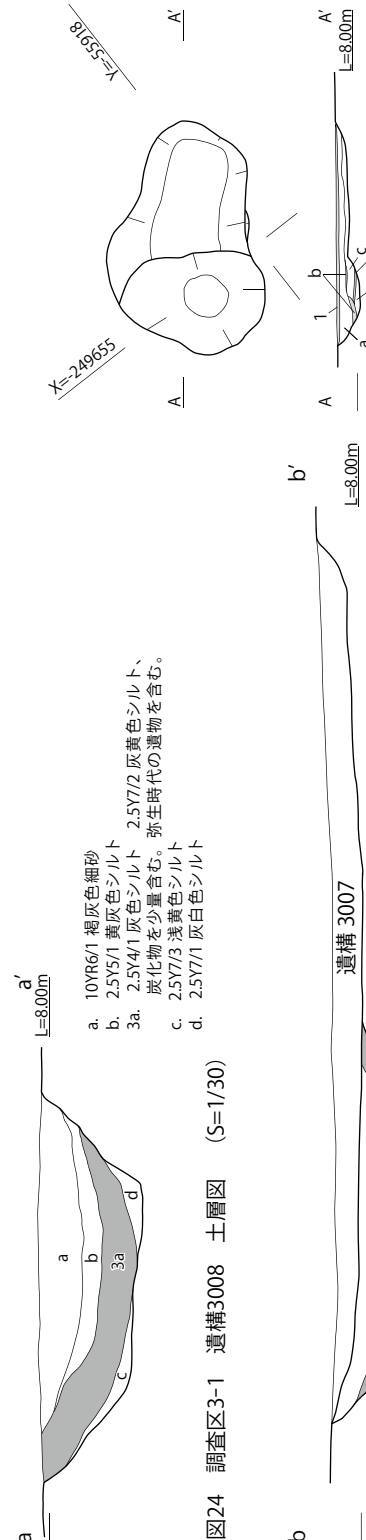


図24 調査区3-1 遺構3008 土層図 (S=1/30)

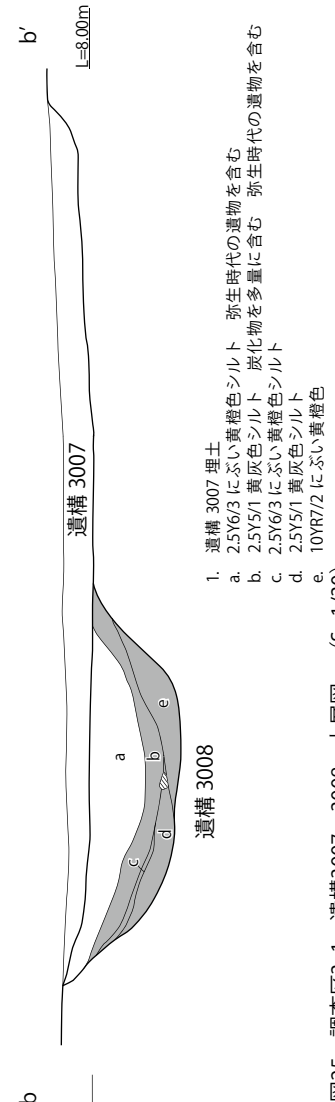


図25 調査区3-1 遺構3007、3008 土層図 (S=1/30)

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物を僅かに含む
- a. 2.5Y5/1 灰黄色シルト
- b. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物
- c. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物を僅かに含む
- d. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- e. 2.5Y6/2 灰黄色シルト

図27 調査区3-1 遺構3080 実測図 (S=1/30)



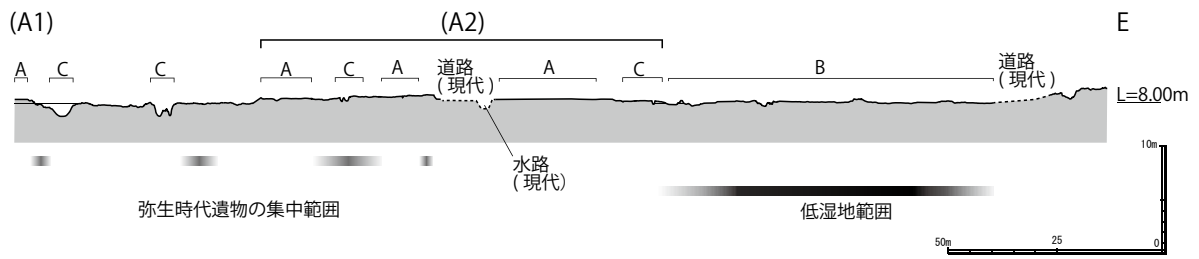


図 28 第 4 層上面 断面図

層から細砂、粗砂、小礫に分けられる。各層の主体をなす砂粒の粒度が大きく異なることは、この溝が本来最下層に礫を堆積させる程度の水量と流速を保っていたことを意味していると考えられ、溝 3002 はその上部の大半が削平されており、本来の遺構上端は残存していないものとみてよい。

更に A の部分が削平された時期であるが、第 3 層直上に堆積する第 2 層は平安時代後期から鎌倉時代前期及び近世の遺物を含んでいる。B で確認した第 2a・2b 層は水田耕作土と考えられ、層位的に把握することは可能であるが、水田耕作に伴い攪拌されている可能性がある。それに対し第 2c 層は床土であり、堆積時の状態を保っているとみられる。第 2c 層の出土遺物は平安時代後期から鎌倉時代前期を下限とすることから、この時期に大規模な削平が行われたとみることができ、現在当該地域一帯に確認される地割りはこの時期に整備されたものと考えられる。

さらにこの地割りの方向であるが、旧地形において北東から南西方向にかけ尾根状に標高の高い部分が続くことから、この部分に沿う方向を一定の基準とした可能性が高い。現有水路はいつの時期からこの位置に設けられているのか不明であるが、現在の道路の東側にあり、より標高の低い水田が存在する東側への水回りを考慮したものであろう。



写真 4 第 3a 層遺物出土状況 (調査区 2-2)

また、区画された個々の水田については、平安時代後期以降の地割整備時において、調査区 3-4 第 1 遺構面にみられたように、整備前の地形状況に応じて 1 区画ごとに段差を設け、各水田への取水を容易にしていた可能性が高い。

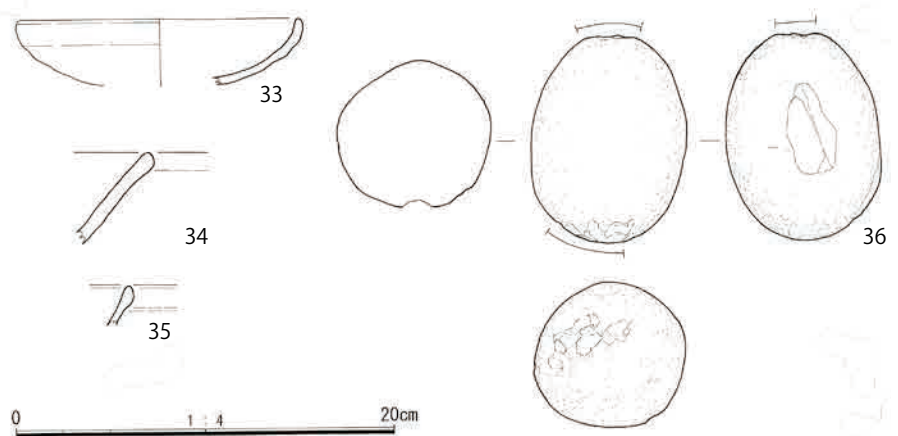


図 29 遺物実測図

目座遺跡・八丁田圃遺跡

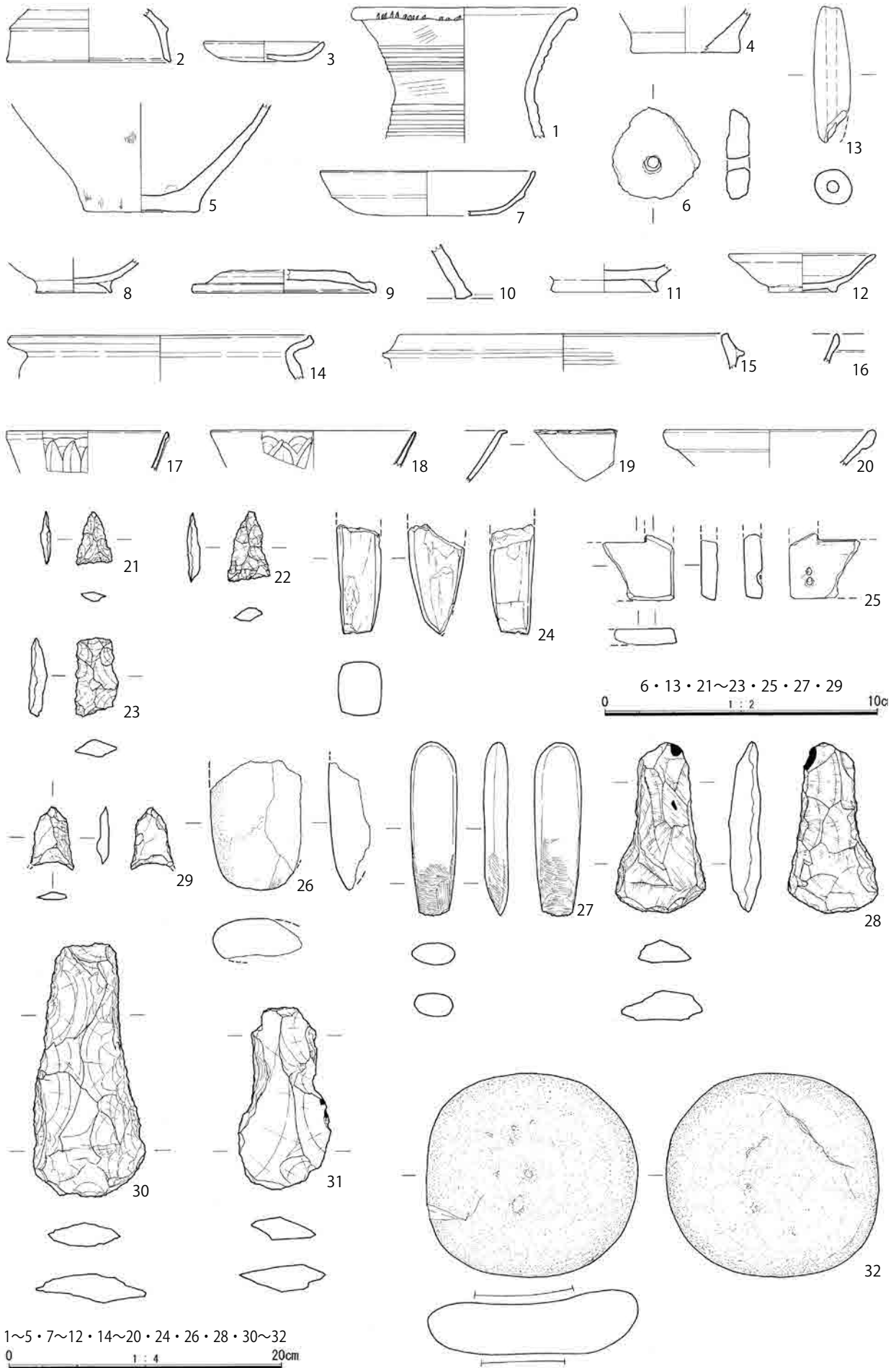


図 30 遺物実測図

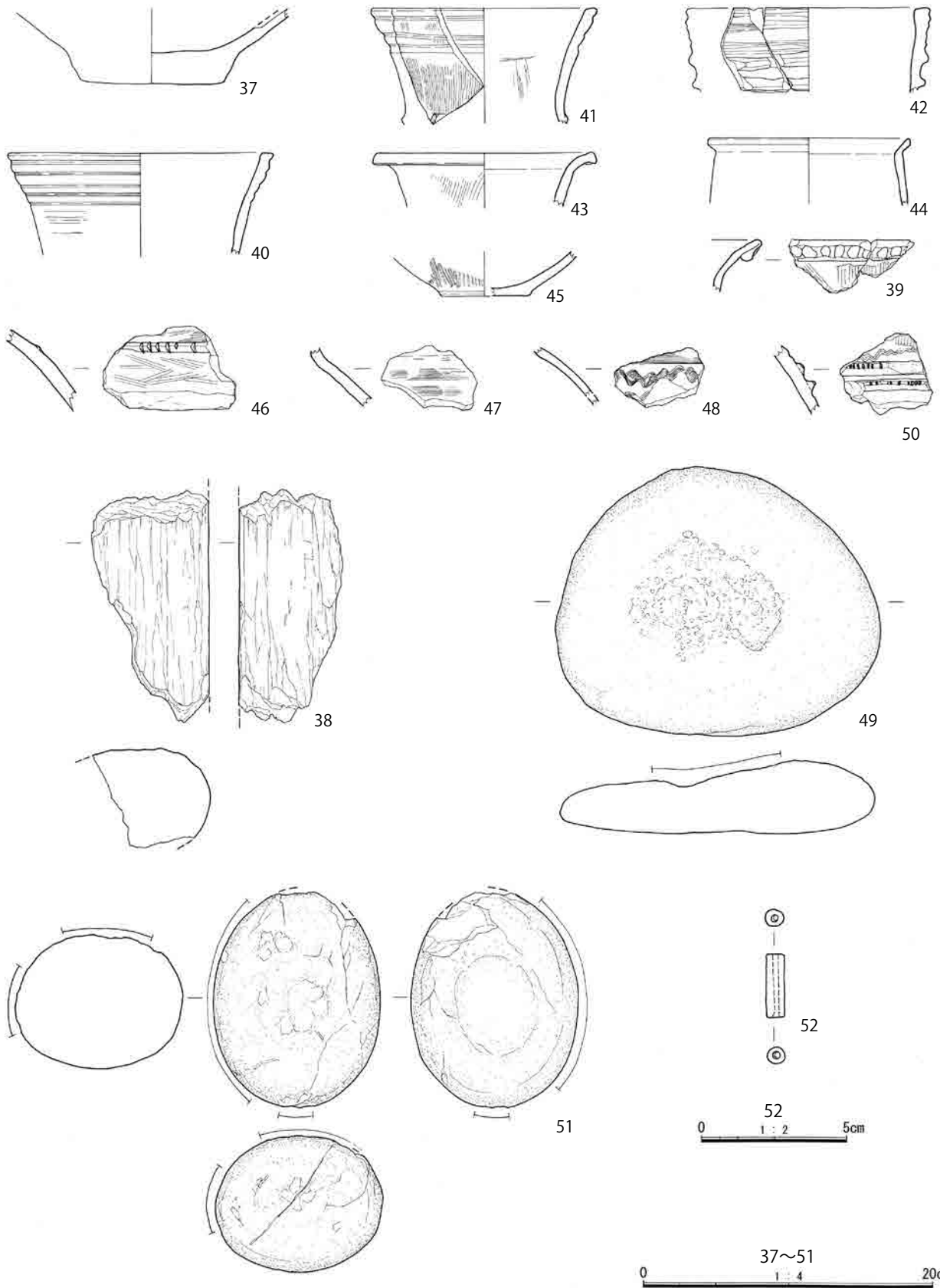


図 31 遺物実測図

目録遺跡・八丁田圃遺跡

土器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
1	図30 図版52	弥生土器 広口壺	2-1 A7	2001 2層	(16.1)	残9.7		口縁15% 頸部40%	内) ぶい黄2.5Y6/4 淡黄橙10YR8/4 外) 浅黄2.5Y7/4 断) 灰白2.5Y8/2	外面ハケ調整後、削り出した突帯にヘラ描きの沈線を巡らす。第1様式2~3? 在地系か。
2	図30 図版52	須恵器 蓋	2-1 A7c2	1e層	(12.0)	残3.9		10%	内・断) 灰N5/ 外) 灰白N7/	天井部と口縁部の境は稜が目立ち、口縁端部は段をなす。やや小型。
3	図30 図版52	瓦器 小皿	2-1 A7c2	1e層	(8.7)	1.5		20%	内) 灰N6/ 外) 灰N5/ 断) 灰白N8/	焼成良好。口縁部から底部までヨコナデを施し、口縁端部を丸くつくる。底部外面はユビオサエ。
4	図30 図版52	弥生土器 壺? 甕?	2-1 J7q8	2002 3層		残3.2	(8.0)	底部25%	内) 淡赤橙2.5YR7/4 外) ぶい赤橙10R6/4 断) 灰白5Y8/1	全体的に摩滅が著しく、調整は不明である。
5	図30 図版52	弥生土器 甕	2-2 I8r2	2b層		残8.0	8.5	底部75%	内) 明褐灰7.5YR7/1 灰褐7.5YR6/2 橙7.5YR7/6 外) 褐灰7.5YR6/1 赤橙10R6/6 灰白10YR8/2 断) 浅黄橙7.5YR8/6	内外面とも摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、外面にハケ調整、内面は底部付近にオサエが認められる。
6	図30 図版52	弥生土器 紡錘車	2-2 I8r20	2c層	長さ3.4	幅3.2	厚0.8	不明	全体) 灰褐7.5YR6/2	土器片を再利用。不定形であるが、縁辺及び表面は摩滅が著しい。
7	図30 図版52	土師器 皿	2-2	2層	(15.8)	残3.3		口縁15% 以上	内・外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰N4/	胎土は精良で非常に薄いつくりである。全体的に摩滅が著しく、調整は不明である。
8	図30 図版52	土師器 椀	2-2 I8k1	2b層		残2.5	5.6	高台100%	内) 灰白10YR8/2 外) ぶい黄橙10YR7/3 断) 黄灰2.5Y6/1を灰白10YR8/2 ぶい黄橙10YR7/3 でサンド	底部付近のみ残存。高台は貼付で断面三角形に近く、やや「ハ」の字に開く。時期は10~11世紀頃か。
9	図30 図版52	須恵器 蓋	2-2 I8	2b層	(13.4)	残1.7		口縁25%	内) 青灰5B6G/1 外) 灰N6/ 断) 灰N5/	ツマミは欠損。口縁端部はやや内傾する。
10	図30 図版52	須恵器 器台	2-2 I8e4	2b層	(15.0)	残4.0		脚縁10%以 上	内) 灰白N7/ 外) 灰白N7/ ~ 灰N6/ 断) 灰N6/	回転ナデによる調整。端部はやや肥厚する。焼成時降灰による自然釉の付着あり。
11	図30 図版52	山茶碗 椀	2-2 I6i19	2層		残2.05	7.5	高台90%	全体) 灰白N8/	やや「ハ」の字に高台を貼付。高台内面に残る糸切り痕跡は後のナデ調整により不明瞭。やや粗いつくり。
12	図30 図版52	白磁 皿	2-2 I7e22	2a2b層	(5.4)	2.8	(5.0)	高台20% 以下 口縁25%	釉色) 灰10Y6/ 素地・断面) 灰白N8/	高台は削り出しによる。内面のみ化粧土を掛け施釉。見込み周縁に沈線状の段を有す。
13	図30 図版52	弥生土器 壺	2区 J7e15	3008 2層		残4.4		5%以下	内) 灰7.5Y6/1 外) 灰N4/ 断) 灰白7.5Y8/1	壺肩部付近か。貼り付けた突帯に刻み目を施す。ハケ調整が部分的に認められる。
14	図30 図版52	土師器 甕	2-2 I7m23	2a層	(22.0)	残3.2		口縁20%	内) 明黄褐2.5Y7/6 外) 橙7.5YR6/6 断) 明黄褐2.5Y6/6	頸部下位をやや肥厚させ、口縁は端部を上方へつまみ上げる。内外面とも摩滅著しく調整不明。
15	図30 図版52	土師器 土釜	2-2	2c層	(24.0)	残2.7		10%以下	内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 明赤褐5YR5/6	頸は短く、煤付着する。口縁端部は内側に内傾する平坦面をつくる。内面はハケ調整を施す。
16	図30 図版52	白磁 碗?	2-2 I8k1	2b層		残2.2		10%以下	釉色) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白N8/	口縁を玉縁状につくる。体部の形状不明。胎土精良で化粧土を掛けて施釉する。時期は11~12世紀頃?
17	図30 図版52	青磁 碗	2-2 I8h2	2b層	(12.0)	残3.0		10%以下	釉色) 明緑灰10GY7/1	口縁は直口し、片切り彫の蓮弁文に厚く施釉する。龍泉窯系・13~14世紀頃?
18	図30 図版52	青磁 碗	2-2 I7k25	2a層	(15.0)	残2.7		10%以下	内・外) オリーブ灰10Y6/2 断) 灰白N7/	口縁は直口し、体部はへと直線的に延びる。蓮弁文は片切りによる。龍泉窯系。
19	図30 図版52	白磁 碗	2-2	2b層	(15.2)	残3.8		12%	釉色) 灰白10Y9/1 断) 灰白N8/	口縁端部を水平につくり、外反する。外面はヘラケズリ後施釉か。太宰府編年碗V-4a? 時期は12世紀か。
20	図30 図版52	白磁 碗	2-2	2b層	(12.4)	残2.7		口縁20%以 上	釉色) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白N8/	口縁を外側に肥厚させ玉縁状につくる。化粧土を掛け施釉。太宰府編年碗IV類? 時期は11~12世紀以降か。
33	図29 図版52	瓦器 皿	2-3 I8c2	2b層	(14.8)	残3.5		15%以下	内) 灰N6/ ~5/ 外) 灰N4/ 断) 灰N6/	内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。
34	図29 図版52	東播系須 恵器鉢	2-3	2b包含層		残4.9		10%以下	全体) 灰白N7/ 口縁端部) 灰N6/	口縁端部は僅かに肥厚し、焼成時降灰によるとみられる自然釉の付着あり。外面に回転ナデ調整を施す。
35	図29 図版52	白磁 碗?	2-3 I8d3	2b		残2.1		10%以下	釉色) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白N8/	口縁端部をやや肥厚させ玉縁状につくる。内面のみ化粧土を施し施釉。胎土精良で気泡僅かに認められる。
37	図31 図版52	弥生土器 甕? 壺?	3-1 J7I10	3001 2層		残5.3	(9.8)	底部60%	内) 橙7.5YR6/8 剥離部分) 褐灰10YR6/1 外) 淡黄2.5Y8/3 断) 黄灰2.5Y6/1	内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。
39	図31 図版52	弥生土器 甕	3-1 J7b15	3008 2層		残3.7		10%以下	内) 灰白2.5Y8/1 外) 灰褐7.5YR4/2 断) 黒褐2.5Y3/1	突帯文土器。外面にハケ調整が認められる。口縁は折り返して肥厚させ、刻み目様に指で押さえる。
40	図31 図版52	弥生土器 直口壺	3-1 J7q8	3002 3層	(18.2)	残7.2		5%以下	内・外) ぶい橙7.5YR7/4 断) 橙5YR7/6	口縁端部はナデ調整を施す。口縁に5条の凹線を巡らせ、頸部は不明瞭であるが櫛描き文が認められる。
41	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7r9	3002 2層	(15.4)	残8.0		5%以下	内・断) 灰白2.5Y8/1 外) 灰N4/	口縁端部はナデ調整により、水平につくる。口縁に3条の凹線を巡らせ、頸部に突帯を貼付。
42	図31 図版52	弥生土器 細頸壺	3-1 J7q8	3002 1層	(16.8)	残6.0		口縁15%	内) 灰白2.5Y8/2 黄橙10YR7/8 外) 灰5Y5/1 断) 灰白2.5Y8/2	口縁端部はナデ調整により水平につくる。口縁に3条の凹線を巡らせ、2条の突帯を貼付。内面をナデ調整。
43	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7p8	3002 3層	(14.9)	残3.8		口縁25%	内・断) 灰白10YR8/2 外) ぶい黄橙10YR7/3~6/3	摩滅著しい。口縁端部を肥厚させ、外反させる。外面はハケ調整、内面はナデ調整を施す。
44	図31 図版52	弥生土器 甕	3-1 J7q9	3002 3層	(13.6)	残4.6		5%以下	内) ぶい橙5YR7/4 外) 黄灰2.5Y5/1 断) 灰白2.5Y8/1	口縁端部を僅かに肥厚させ、頸部の屈曲は明瞭である。不明瞭であるが、外面にタタキが認められる。
45	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7p8	3002 3層		残3.1	(6.0)	底部30%	内) 灰白10YR8/2 外) 暗灰N3/ 断) 灰白5Y7/1	摩滅著しく調整不明瞭である。外面は底部付近までミガキ、底部外面はナデ調整を施す。
46	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7p8	3002 1層		残5.7		5%以下	内) 灰黄褐10YR4/2 外) 黒5Y2/1~黒褐10YR3/1 断) 黒5Y2/1	外面はヘラミガキを施し、貼り付けた突帯に刻み目を施す。内面は板状工具によるナデ調整か。
47	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7q9	3002 3層		残4.2		10%以下	内) 灰白10YR8/1 外) 灰白10YR8/2 断) 灰白N8/ ~ 7/	壺頸部付近か。内外面とも摩滅著しいが、外面に櫛描き直線文、内面にハケ調整が認められる。
48	図31 図版52	弥生土器 壺	3-1 J7q9	3002 3層		残4.0		5%以下	内) 灰白2.5Y7/1 外) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰白2.5Y7/1 浅黄橙10YR8/3	壺頸部付近か。外面に櫛描き文及び波状文を施す。内面は板状工具によるオサエの痕跡が認められる。
50	図31 図版52	弥生土器 壺	3-2 J7e15	3002 2層		残4.4		5%以下	内) 灰7.5Y6/1 外) 灰N4/0 断) 灰白7.5Y8/1	

石器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	器種	調査区 地区	遺構 層位	最大 長 cm		最大 厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
13	図30 図版53	石製品 石鏃	2-2 18i4	2a層	5.0	1.3	1.4	80%	凝灰岩?	70%	
21	図30 図版53	打製石器 石鏃	2-2 17u19	3層上面	2.0	1.3	0.4	0.6	サヌカイト	100%	
22	図30 図版53	打製石器 石鏃	2-2 16u18	3層上面	2.0	1.5	0.5	1.4	サヌカイト	100%	
23	図30 図版53	打製石器 石鏃	2-2	3a層上面	2.9	1.6	0.7	3.1	サヌカイト	不明	
24	図30 図版53	磨製石器 柱状片刃 石斧	2-2 17m23	2a層	8.15	3.15	4.0	173.8	緑色片岩	35%	刃部のみで部分的に剥離欠損あり。断面は隅丸の長方形をなす。側面に挟りが入るものと推定される。
25	図30 図版53	石帯 巡方	2-2 18e4	2a層	2.4	2.6	0.65	5.4	不明	20%	やや黄色がかった白色の石材。潜り穴による穿孔を4箇所(推定)に設ける。垂孔の一部が残存する。
26	図30 図版53	礫石器 大型蛤刃 石斧	2-2	2c層 (3a層上 面)	9.6	6.7	3.1	277.5	砂岩	不明	刃部のみで大部分を欠損している。刃部先端のラインは平面形で弧を描き基部両側面に向かう。
27	図30 図版53	磨製石器 石斧	2-2	3層上面	6.4	1.7	0.9	15.9	頁岩	100%	円礫の一部を刃部に加工。両刃であるが、片方からの面取りが著しい。
28	図30 図版53	打製石器 石鏃	2-2	3層上面	12.4	6.6	2.3	179.7	頁岩	100%	
29	図30 図版53	打製石器 石鏃	2-2 17t20	3層	2.3	1.6	0.4	0.7	サヌカイト	100%	
30	図30 図版53	打製石器 石斧(石 鏃)	2-2 17t21	3層	18.7	8.2	2.1	354.5	頁岩	100%	先端に使用時とみられる、刃部には摩滅及び刃部先端のラインに直交する線状の擦痕あり。基部両側面を階段状に剥離。
31	図30 図版53	打製石器 石斧	2-2 17t24	3層	13.3	6.8	2.0	213.5	頁岩	100%	
32	図30 図版53	礫石器 敲石	2-2	3a層	10.7	12.0	2.9	774.5	砂岩	100%	扁平な自然石を利用。片面が凹面状をなすが、両面に敲打痕及び擦痕が認められる。
36	図29 図版53	礫石器 磨石・敲 石	2-3	2b~3層	11.1	8.1	7.7	931.0	砂岩	100%	4箇所敲打痕が認められる。
38	図31 図版53	祭祀具 石棒	3-1	3001 2層	16.1	8.0	7.8	1167	緑色片岩	不明	大部分を欠損しているため、形状は不詳である。石材の片理に沿い断面楕円形で柱状をなす。
49	図31 図版53	礫石器 凹石	3-1 J7p8	3002 3層	22.5	18.6	5.1	2730	砂岩	100%	
51	図31 図版53	礫石器 敲石	3-3 J7j15	3008 1層	14.85	11.6	9.3	2075	花崗岩	80%	風化し、脆い。4箇所に敲打痕が認められる。
52	図31 図版53	管玉	3-5-2 17	2a層	2.2	0.65	0.6	1.6	碧玉?	100%	両端から穿孔しており、孔内に段差が認められる。

第2節 塗屋城跡

第1項 調査に至る経緯

(1) 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設により、その建設予定地が塗屋城跡として文化財包蔵地に指定されている範囲にかかることとなった。これにより、県文化遺産課ではこれにかかる平野部及び丘陵部について平成21年度に分布調査を実施した。この第2次調査によりそれまで知られていた曲輪と堀切の存在が改めて確認され、さらに豎堀の可能性があると考えられる地形も2箇所認められたため、丘陵部について記録保存措置をとることとなった。また、丘陵北側に存在する平野部についても試掘調査が実施されたが、その結果、埋蔵文化財の存在する可能性はきわめて低いと判断された。

以上の経緯により、財団法人和歌山県文化財センターは国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、発掘調査業務を実施した。

掘削作業に先立ち、調査範囲内において伐木・伐竹作業を行った。伐木・集積作業は、重機の進入できない急斜面については人力で実施した。

掘削作業は、調査範囲内の大部分が急傾斜地であったことにより、重機の進入できない範囲については表土から人力掘削を行った。掘削土は重機により移動して用地内に仮置きした。また、調査終了後は斜面から流出する濁水への対策として、調査地北側の丘陵裾平坦部に沈砂池を設けた。この発掘調査と並行し応急整理として遺物の洗浄及び登録を行った。

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

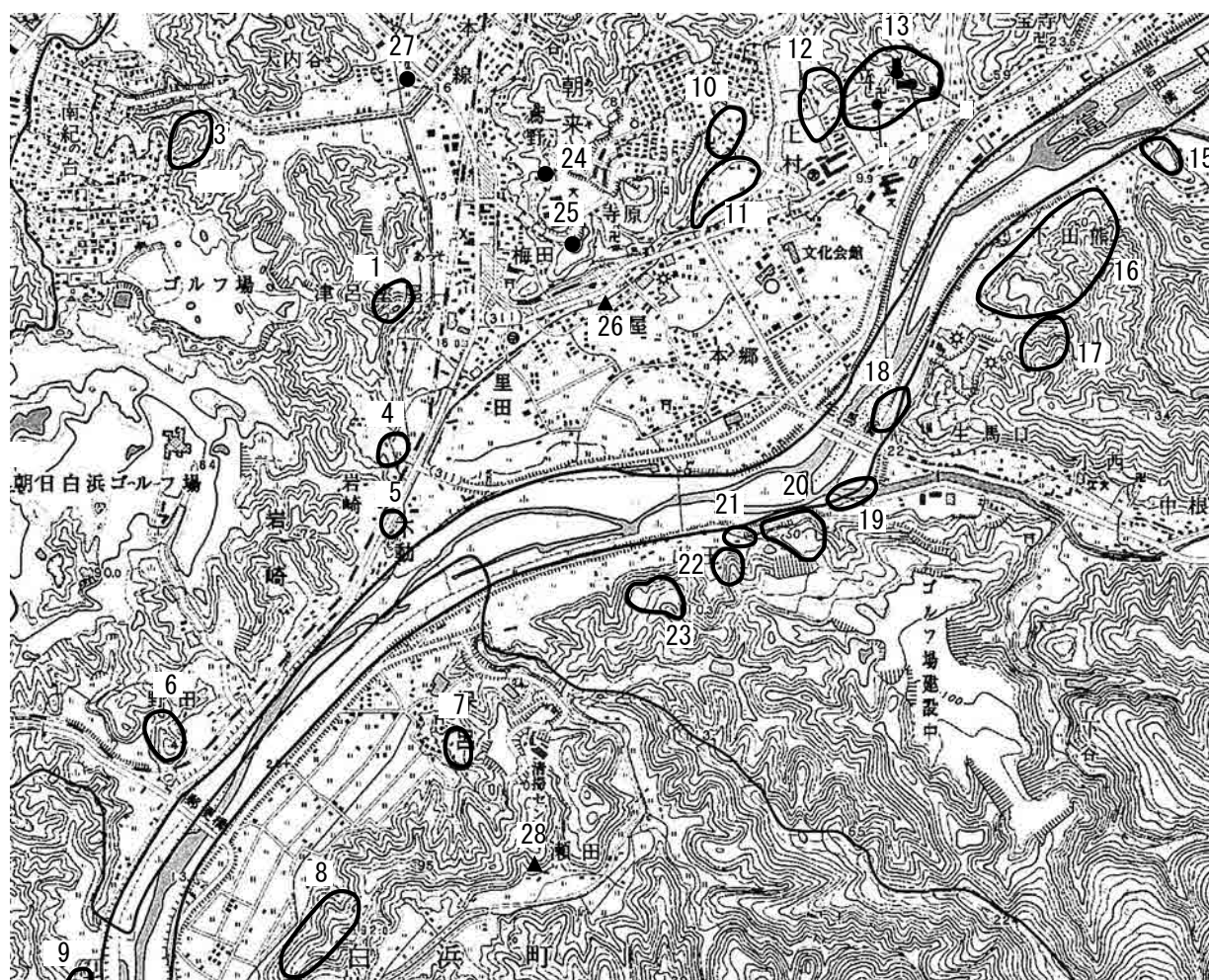
上富田町は西牟婁郡の西部に位置し、北は田辺市、南は白浜町と境を接する。町内を北東から南西へと流れる富田川は奈良県十津川村、果無山脈に源を発する延長46kmの二級河川である。紀伊水道に流れ込む富田川は中流域の上富田町付近においてその兩岸に沖積平野と河岸段丘を形成しているが、塗屋城跡はその北岸の平野部北西端に位置する、丘陵から半島状に張り出す標高約51mを最高所とする尾根先端付近に所在し、川沿いに東方向へと広がる平野を一望することができる。田辺市の会津川下流域の平野へは約5kmほどの距離にあるが途中丘陵地を隔ており、現在は主要な交通路として国道42号のほかJR西日本紀勢本線が山間を縫って南北に延びる。なお、本遺跡はJR西日本朝来駅の南西約200mに位置する。

(2) 歴史的環境

上富田町内には、縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在する。

縄文時代の遺跡としては早期とみられる石斧や後期の土器、石器が出土した平見遺跡(19)、後期、晩期の土器、石器が出土した市ノ瀬遺跡があり、両者はともに富田川とその支流との合流地点に立地する点が共通している。

弥生時代の遺跡は20数箇所が確認されており、富田川及びその支流である岡川流域に多くが所在する。塗屋城の西約1.5kmの丘陵地には朝来銅鐸出土地がある。



1. 塗屋城跡 2. 大谷尾崎遺跡 3. 大内谷陣跡 4. 岩崎大泓遺跡 5. 不動山狼煙跡 6. 野田城跡 7. 保呂遺跡 8. 鴻巣城跡 9. 平遺跡
 10. 塔ノ谷遺跡 11. 上村遺跡 12. 立平遺跡 13. 岩田古墳群 14. 三宝寺山狼煙跡 15. 釣堀山城跡 16. 田熊遺跡 17. 田野丘遺跡
 18. 生馬口遺跡 19. 平見遺跡 20. 山王遺跡 21. 日吉神社境内遺跡 22. 山王古墳群 23. 塚山遺跡 24. 朝来古墳 25. 朝来経塚
 26. 馬川古銭出土地 27. むか塚遺跡 28. 瀬田遺跡

図1 塗屋城跡及び周辺の遺跡 S=1/25,000

古墳時代には、朝来古墳（24）、岩田古墳群（13）、山王古墳群（22）等が築造される。山王古墳群は2基の円墳からなり、どちらも墳丘は削平されて現存しないが、周溝から径12m（1号墳）及び径7.3m（2号墳）の規模が推定されている。1号墳は主体部が現存しないが、墳丘裾に追葬とみられる組合式石棺が直葬されている。2号墳は組合式石棺を主体部としており、副葬品については詳らかではないが、発掘調査時に鉄斧等が出土しており4世紀末の築造と考えられる。岩田古墳群は2基の前方後円墳と1基の円墳、1基の横穴からなる。

平安時代より熊野への参詣道とされた熊野古道（中辺路）は、田辺市の万呂王子から三栖王子、八上王子を経て富田川沿いの稲葉根王子、鮎川王子へ至るルートが想定されており、塗屋城跡は熊野古道からやや南西にそれた位置にあることになる。

第3項 調査の方法

(1) 地区割りの方法

調査位置は図2に示すとおりである。実測図作成や遺物取上の際に用いた地区割りは、平面直角座標系第VI系（世界測地系）により大区画、中区画及び小区画を設定（図3）した。遺物の取り上げ等に用いるはラベルに、中・小区画名を記した。

大区画の原点は中区画の原点は $X=255000m$ 、 $Y=54000m$ であり、平成24年度に調査を実施した岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡と同一である。これにより、塗屋城跡、岩崎大泓遺跡及び岩崎大泓Ⅱ遺跡はともに大区画「A1」内に所在することになり、各々の位置関係は容易に把握できる。

また今回の調査範囲を含む丘陵全体は、中区画B6、C5、C6の範囲内に位置する（図3）。

(2) 基本層序

丘陵斜面の堆積状況を把握するため、斜面に直行するトレンチを数か所設定して確認した。層序は、第1層表土層である腐植土、第2層浅黄色～淡黄色のシルト層、第3層は岩盤片を多量に含む層で、第4層は岩盤である。第2、3層は部分的に堆積する層のため、掘削を行ったのは、基本的には表土層のみである。

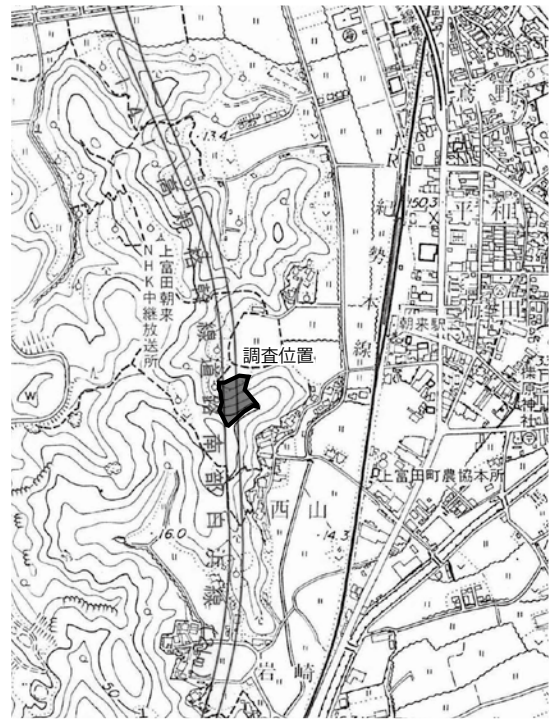


図2 調査位置図 S=1/12000

第4項 調査成果

(1) 遺構

調査区内の分布調査で確認されたのは、堀切及び竪堀の可能性のある地形である。

堀切は調査地の南東部にあたる。曲輪が存在する調査地南西の丘陵地から伸びる尾根に直行する形で、尾根を切断する様に北西～南東方向に掘削されている。幅は上端部で4.8～5.2m、下部で1.6～2.8m、深さは最大2.4mである。(A-A')底面は南東から北西に向かって下降しており、標高差は5.0m前後である。底部の形態は、現状ではほぼ平坦となっている（図5）。

竪堀は、分布調査で尾根線の北側においてその可能性が指摘された範囲にトレンチB-B'（図4,6）を設定して確認を行った。その結果、人為的な掘削が行われた可能性は

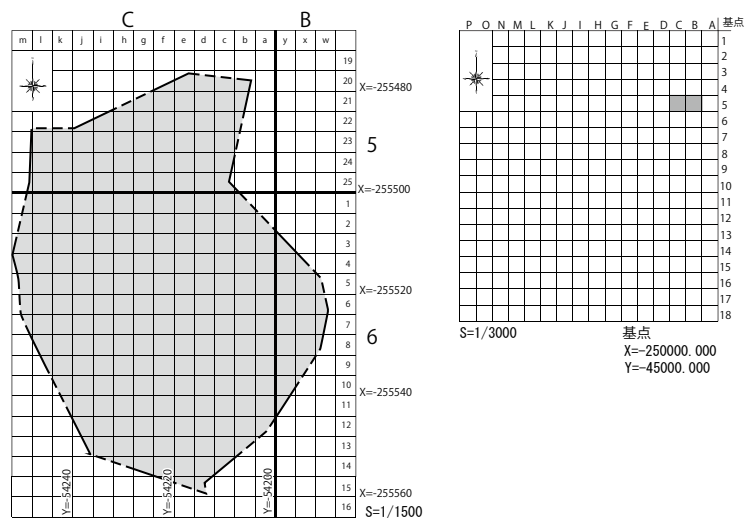


図3 地区割 中区画及び小区画

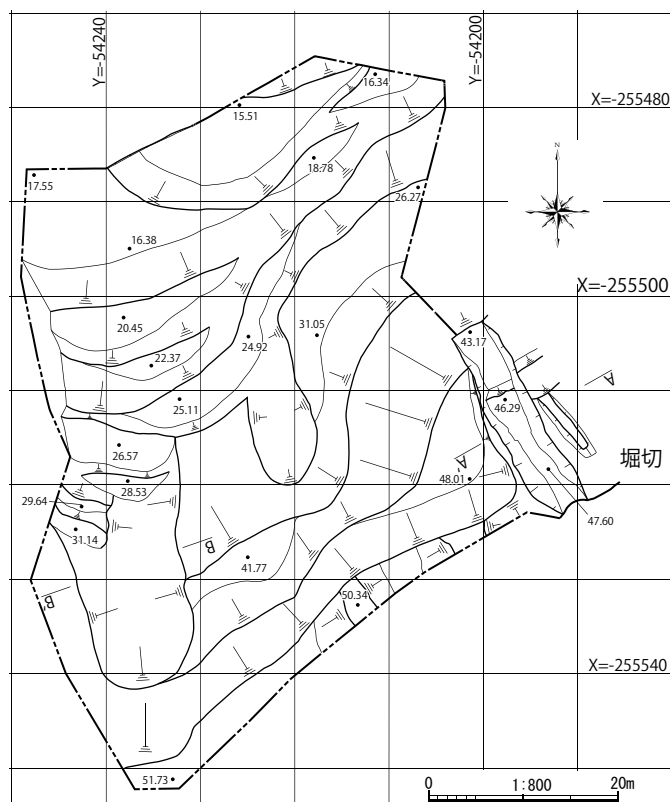


図4 地形測量図（表土除去後）

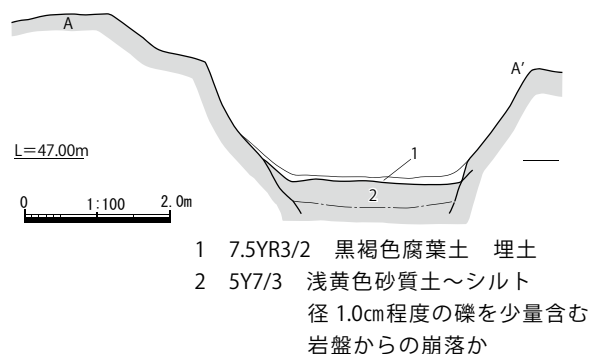


図5 堀切セクションベルト土層図

1 7.5YR3/2 黒褐色腐葉土 埋土
 2 5Y7/3 浅黄色砂質土～シルト
 径 1.0cm程度の礫を少量含む
 岩盤からの崩落か

図5 堀切セクションベルト土層図

もあり、深さは最大 2.4m である。調査前の地表面観察で確認されていたように、底面は南東から北西に向かって下降しており、標高差は 5.0m 前後ある。背後に続く尾根を切断するもので、断面形状はいわゆる箱堀の特徴を持つ。

丘陵裾部の平坦地においても遺構は検出されず、遺物も出土していないが、当該平坦地は北、西、南を丘陵に囲まれた谷奥部となることから、こういった平坦地も地形的条件として築城時の選地に影響した可能性も考慮する必要があると考えられる。

上富田町域に存在する中世の城館跡は、当地を根拠地とした山本氏によるもののほか、天正 13 年（1585）当地を攻めた羽柴秀吉によるものが知られている。

山本氏は鎌倉時代に護良親王の倒幕に関わって現れ、紀南の南朝方勢力の中核に位置づけられる。室町時代の寛正元年（1460）には幕府の奉行衆をつとめ、紀伊国八庄司の一つとして熊野衆を代表する有力な国衆となり、富田川流域をはじめ、田辺・日高郡の一部を領有した。

低く、自然地形と判断された。

調査範囲の北側平坦部は表土層直下が粘土層であり、遺構・遺物共に確認されなかった。

(2) 出土遺物

今回の調査で遺物が出土したのは、西側斜面の丘陵裾分のみである。出土遺物は表土層からであり、量的にも極めて少ない。また、城郭に関連するとみられる時期の遺物は出土していない。

表土層から出土した遺物は古墳時代初頭と考えられる土師器（図 7-2・3、図版 53）と近世の磁器（図 7-1、図版 53）がある。高坏（3）は、表面が磨滅した中空の脚柱部である。近世の遺物は、皿・碗等がある。碗（図 7-1、図版 53）は、見込部分に 5 箇所針目跡があり、畳付は釉を掻き落としている。見込みには「寿」の文字が描かれ、高台には二重の圈線を巡らす。また外面にはには笹文が描かれる。時期は近世とみられるが、他に明治期の碗・皿なども出土している。

第 5 項 まとめ

調査の結果、堀切は曲輪が存在する丘陵頂部から延びる尾根に直行する形で掘削されており、幅は、上端部で 4.8～5.2m

塗屋城跡

『風土記新御饌二付御尋之品書上帳』によれば、塗屋城は天正13（1585）年、羽柴秀吉による紀州攻めの際に、その最前線として築かれたものとされるが、現在のところ、築城がその南征軍（寄せ手）によるものであるということについては決着をみておらず、山本氏やその他の勢力による築城の可能性も否定できない。

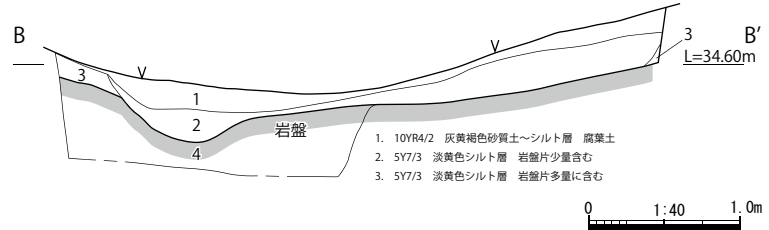


図6 トレンチ土層図

また、その構造から検討してみると（図8）、城郭としての規模は極めて小さいものであるといえ、虎口を含め、いわゆる織豊系城郭の特徴が認められない。また、同様な単郭で小規模の山城は、木之本城等、和歌山県内では少なからず見られるものであり、これによって在地勢力の手によるものでないとはいえない。ただ、箱堀の堀切は特筆すべき点といえ、在地以外の勢力が関与した疑いが残る。（*8）

塗屋城が秀吉の南征軍により築かれたものであるとすれば、このとき朝来大内谷に陣を設けた南征軍は、富田川沿いに龍松山城を目指したと推定されるが、このときの本陣は田辺湾岸の神子浜に置かれたことから、富田川流域を睥む位置にあって、且つ田辺湾にも近い塗屋城は、その兵站を確保する。

兵站、或いは富田川を北から見下ろす丘陵縁辺部を、連携的な防御ラインとした場合の1点にあたること等といった面からも評価すべきであろう。

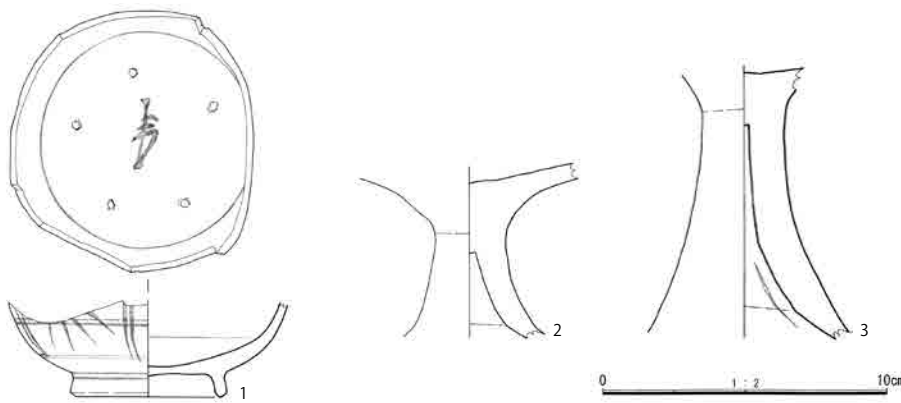
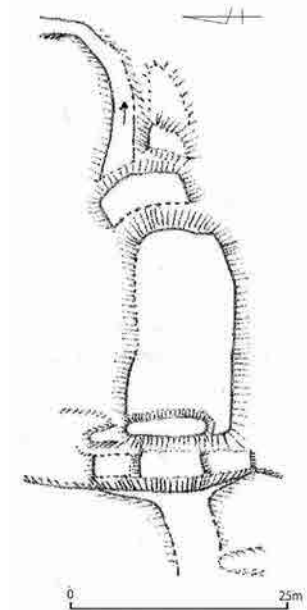


図7 出土遺物実測図



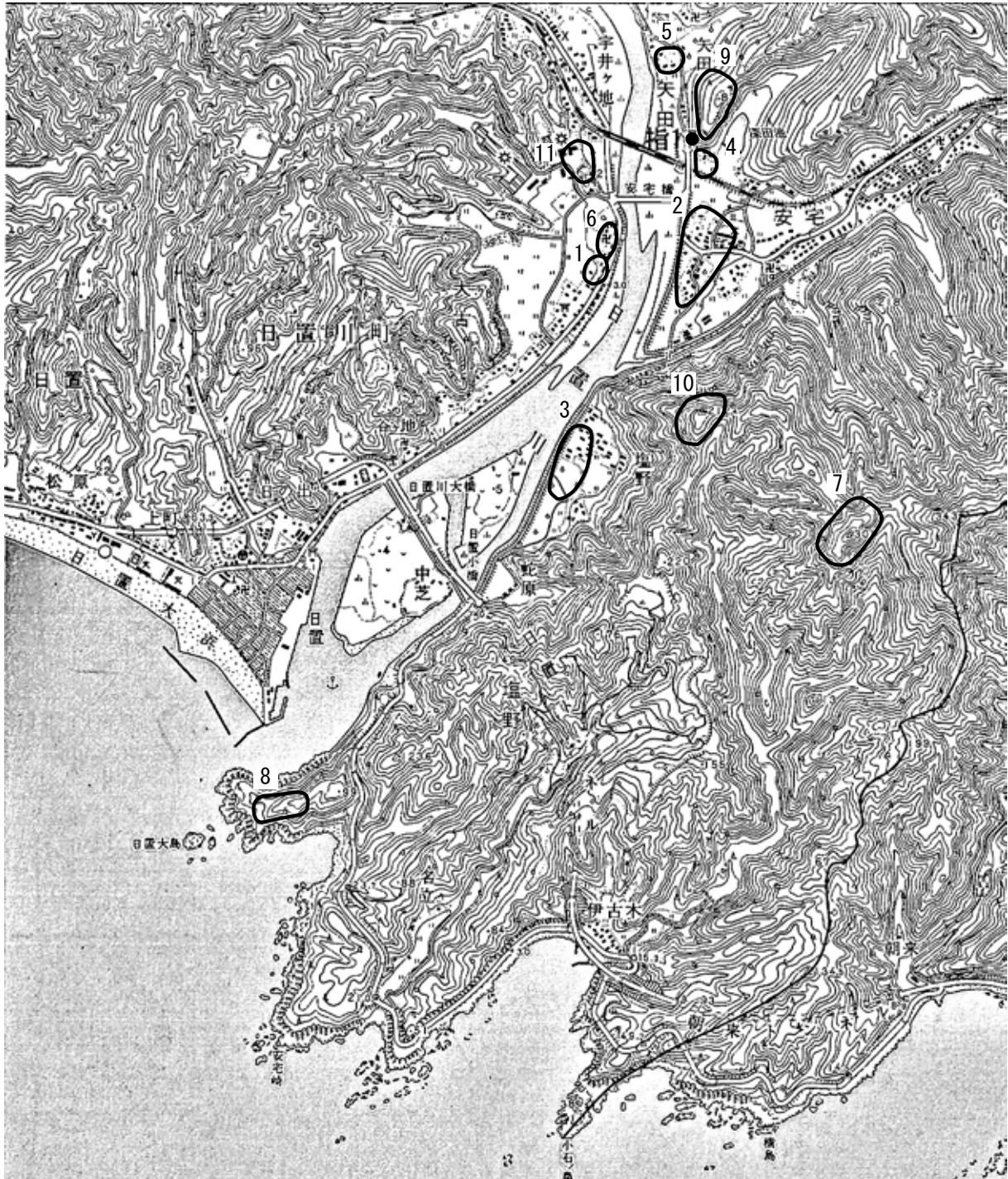
縄張図：白石博則氏

（和歌山城郭調査研究会代表）

第3節 大古II遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の建設工事により、大古II遺跡、安宅本城跡としてそれぞれ埋蔵文化財包蔵地となっている2箇所の範囲に自動車道が建設されることとなった。このため県文化遺産課が平成21年度から22年度にかけて試掘確認調査を実施した。



1. 大古II遺跡 2. 安宅本城跡 3. 塩野遺跡 4. 安宅遺跡 5. 矢田遺跡 6. 大古I遺跡 7. 古武之関跡(古武之森城跡) 8. 大向出城跡
9. 八幡山城跡 10. 勝山城跡 11. 大野城跡

図1 大古II遺跡及び周辺の遺跡(縮尺任意)

大古Ⅱ遺跡

試掘確認調査は、大古Ⅱ遺跡では開発予定範囲内の10箇所にトレンチを設定し調査を行ったところ、そのうちの8箇所において弥生時代の遺物が出土し、遺構面2面が確認された。その結果を受け、橋脚の設置が予定されている4箇所（調査区1、2、3、4）について本調査が実施されるはこびとなった。

安宅本城跡では開発予定範囲内に5箇所のトレンチを設定して試掘確認調査を実施しており、このうち1箇所で旧河道が、他の2箇所で溝状遺構や土坑が検出された。そのため当該地点が遺跡の縁辺部にあたると判断され、橋脚の設置が予定されている2箇所（調査区1、2）について本調査が実施された。

大古Ⅱ遺跡では平成23年度に、当初橋脚部分にあたる4箇所について本調査を実施したが、その際各調査区は橋脚工事と調整しつつ実施しており、調査区3にあたる範囲は橋脚工事の作業ヤードとして使用することとなったため、当該調査区の調査は次年度に持ち越した。また調査区5は平成24年度の調査において、調査開始後に新たに調査対象として追加となった調査区である。

第2節 位置と環境

(1) 地理的環境

大古Ⅱ遺跡は日置川下流域、河口付近の右岸に位置する。当該地域一帯は紀伊山地の西側縁辺にあたり、急峻な山間を蛇行する河川はその河口付近においてわずかに堆積平野を形成する傾向にあるが、日置川河口域周辺はそういった堆積平野の一つで、比較的安定した平地が広がることから、縄文時代から弥生時代、古代、中世にかけての遺跡が集中するところとなっている。

(2) 歴史的環境

大古Ⅱ遺跡周辺における縄文時代の遺跡としては大古Ⅰ遺跡（6）があり、ここでは縄文時代前期末の大歳山式土器、中期初頭の鷹島式土器、後期の元住吉山式土器が出土している。

日置川左岸の安宅遺跡（4）では1975年に発掘調査が実施されており、弥生時代とみられる溝が検出された。またその北約100mに所在する八幡山城跡（9）では弥生時代後期の土器が出土しており、高地性集落の存在が推定される。さらにその北100mに位置する矢田遺跡（5）では石包丁が採集されており、弥生時代の生活圏が河口域一帯に広がっていた様子が窺える。

古墳時代の遺跡は、古墳時代前期とみられる集落跡が安宅遺跡で検出されているが、現在までのところ古墳は確認されていない。

古代において、この日置川下流域は、律令制下の牟婁郡に属したものと推定される。八幡山城跡では2004年の調査において永楽通宝等とともに富本銭が出土しており、古代から中世における貨幣の取り扱いや流通を探る資料として貴重な発見である。日置川右岸の大古集落北側に位置する長寿寺はその創建年代が不明であるが、その境内地からは暦応5(1342)年の刻書がある備前焼大甕が出土しており、紀年銘を持つ備前焼としては最古のものである。長寿寺に伝わる平安時代中期（10世紀後半）の作とみられる本尊の薬師如来像、脇侍の日光、月光菩薩は必ずしも創建年代を示すものとは言えないが、少なくともその頃には当地域に寺院が造営され、一帯の中核地域的な様相を呈していたことも推定される。

鎌倉時代前期の天福元(1233)年には、当該遺跡を含む範囲における安宅荘の成立が文書により明らかとなっているが、中世には安宅氏が安宅荘とその周辺一帯に大きな影響力を持つように

なる。安宅氏は安宅本城を本拠としてその水軍力を駆使した所謂水軍領主であり、戦国時代においては更に日置川を上流へとさかのぼった地域に本拠を構える小山氏とともに、鎌倉時代、南北朝時代から室町時代における武家勢力として活躍する。安宅本城跡は所謂「詰め之城」である八幡山城とひとまとまりの、麓の居館にあたる。これらの城郭を中心として、安宅氏とその家臣団は安宅荘に比定される範囲を含む地域を中心に9箇所の城郭を築いていたことが確認されており、限られた範囲において多数の支城が築かれている点は特徴的なものである。これらは当該地域一帯において相互の連携を持った城郭群といえ、そこには紀伊水道、瀬戸内海方面からの海上交易における玄関口として機能した日置川河口付近の水運が大きく影響していたと推定される。

安宅本城の所在地を中心とした安宅荘は少なくとも鎌倉時代頃には成立しているが、中世の史料『慶長検地高目録』によると、安宅荘は岡田郷に属していたことがわかる。

第3項 調査の方法

(1) 地区割の方法

実測図作成や遺物取上の際に用いた地区割は、平面直角座標系第VI系（世界測地系（測地成果 2011））による中区画、小区画を設定した（図2・3）。なお、中区画の原点はX=-268,000m、Y=-49,000mで、大古II遺跡及び安宅本城跡を網羅するよう設定した。

各調査区は、第1次調査・第2次調査とも大区画L6・L7・M6・M7の範囲内に位置する（図2）。

(2) 調査区の設定

調査区名は平成23年度分が調査区1・2・4・5、平成24年度分が調査区3・6・7・8となる（図

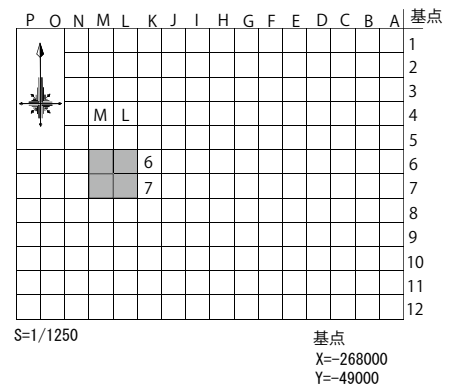


図2 地区割 中区画

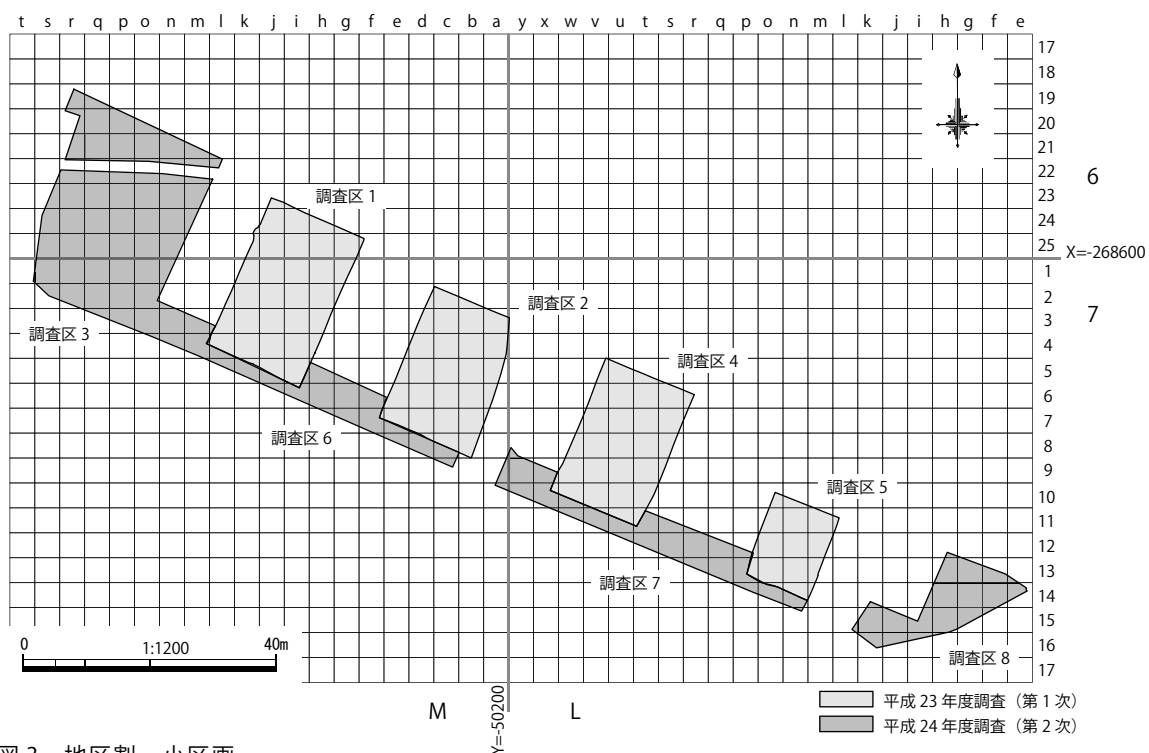


図3 地区割 小区画

3)。

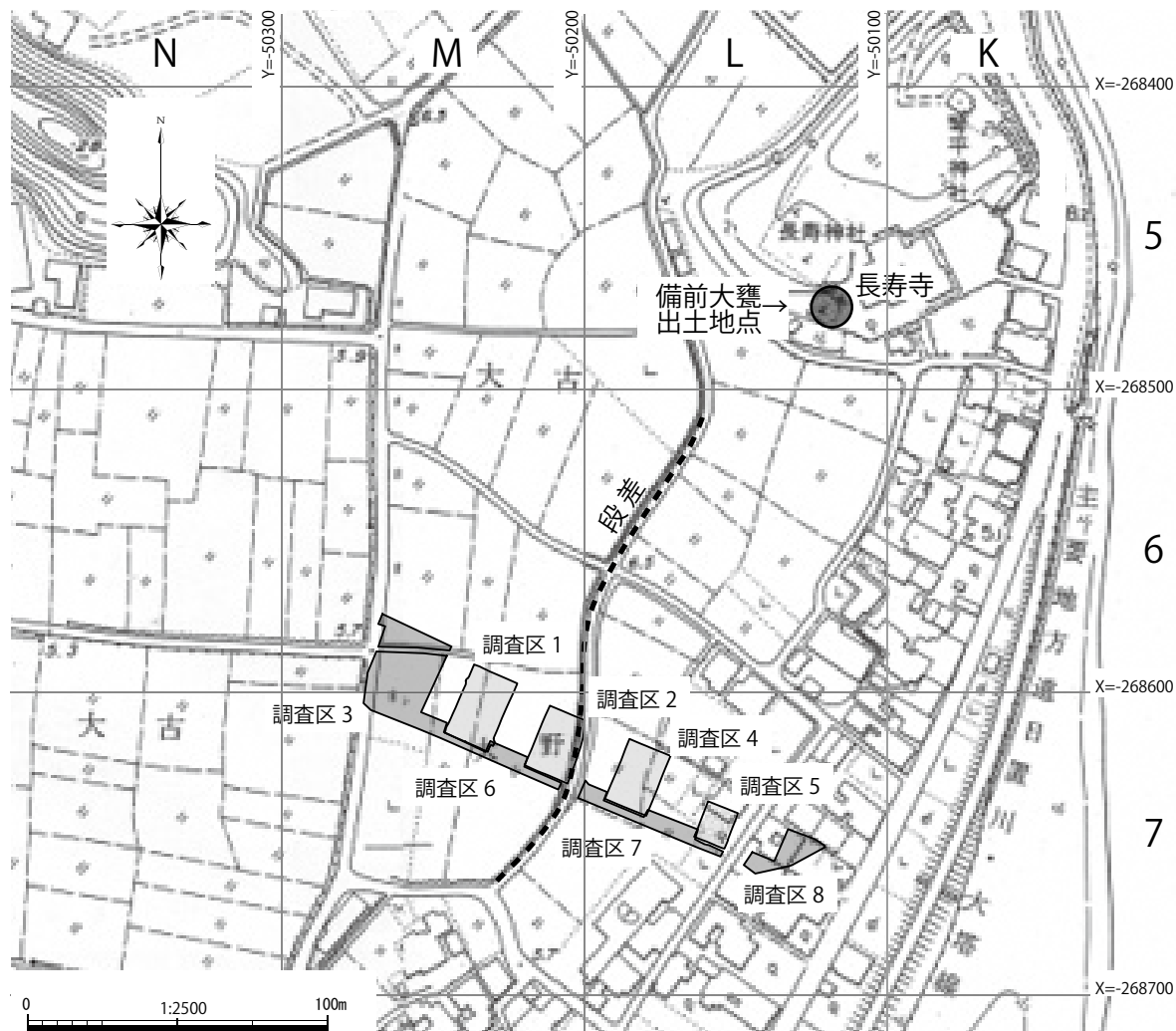


図4 調査区位置図

第4項 調査成果

(1) 第1次調査

調査地は南北に細長く広がる微高地上にあり、調査区4を最高所として傾斜は概ね東西に向かって緩やかに下る。また調査区5付近ではさらに日置川方向へと下る傾斜が続く。

1) 基本層序

第1層が現在の耕作土及び床土、第2層が近世を含む耕作土及び床土である。第3層が弥生時代の包含層で、第3-1層と第3-2層に分層が可能であるが、時期的に大きな差はないものと判断された。第4層は地山である。遺構検出は第3層上面と第4層上面で行い、調査区4では更に第3-2層上面でも遺構検出を行った(図5)。

2) 調査区1

古代・中世の遺構

第1遺構面(第3層上面)で検出した遺構はいずれも出土した土器が細片で帰属時期の決定は難しいものの、層位や遺構面の標高から判断すると、調査区4の第1遺構面において検出された遺構と同時期である可能性が高く、古代の遺構であると考えられる。

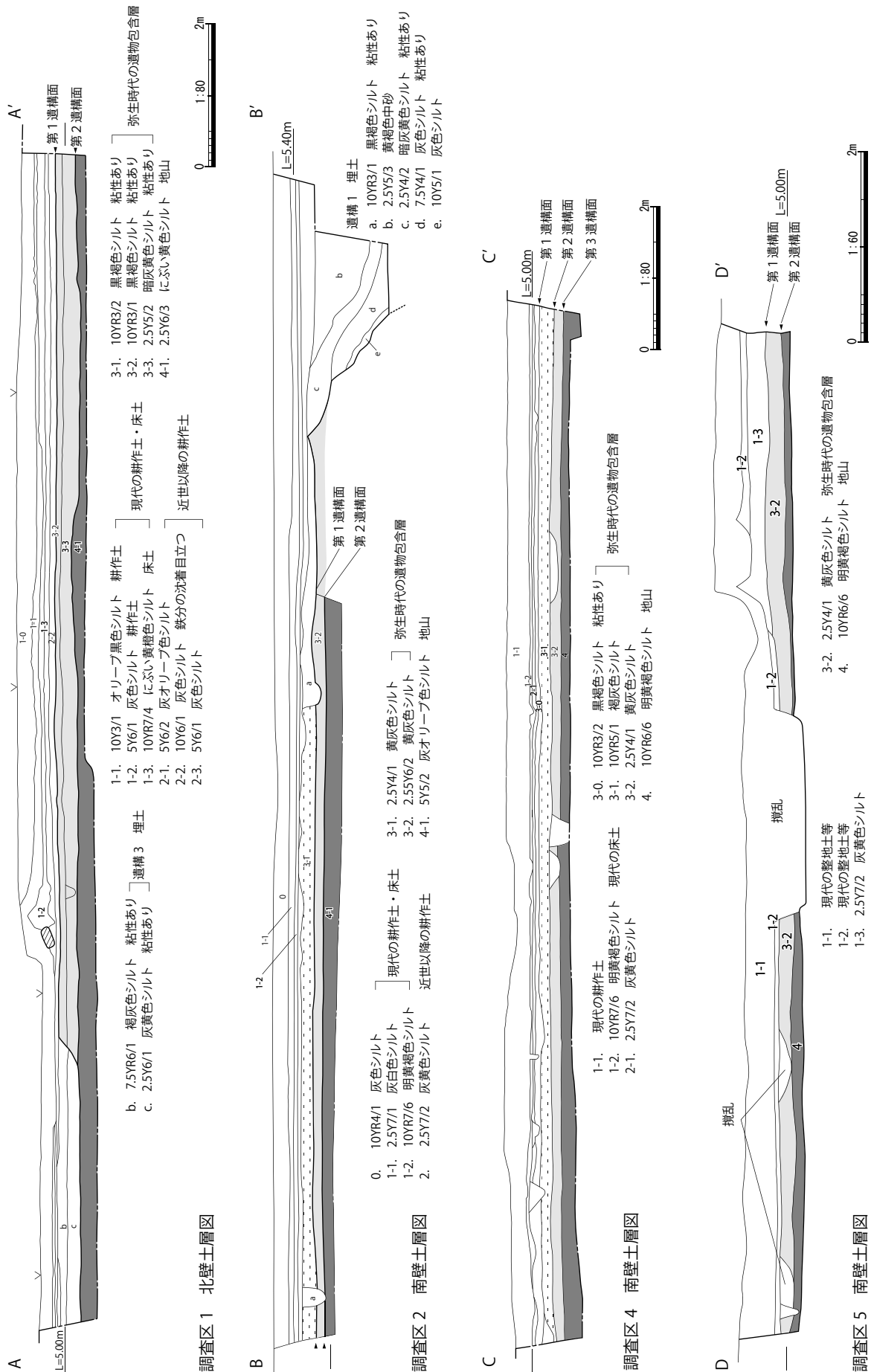


図 5 各調査区土層堆積状況

大古II遺跡

遺構 1001 東西に延びる溝状遺構である。幅 0.6 ～ 1.9m、深さ 0.05 ～ 0.25m で、遺物は土器の細片が出土する程度である。

遺構 1002 浅い溝状遺構で、柵状遺構 2 に沿って東西に延びる。幅 15 ～ 20cm、深さ 5cm で、長さ 8m を測る。遺物は出土しておらず時期は明らかではないが、柵状遺構 2 との位置関係から、柵状遺構に伴う遺構であると考えられる。

柵状遺構 1 東西に並ぶ 6 基のピットから成る。各ピットは直径 20 ～ 28cm、深さ 10cm 程度で、間隔は 1.5 ～ 2.6m と開きがあるが、ほぼ一直線に並び長さは 11m までを確認しているが、調査区 2 において検出された柵状遺構 1 と位置関係や方向において同一性が認められることから、一連のものであると考えられる。時期については遺構 1 の埋土上に検出されていることから、遺構 1 より新しい時期に属すると判断される。

柵状遺構 2 東西に並ぶ 7 基のピットから成る。各ピットの規模は柵状遺構 1 とほぼ同じで、長さは 11.5m を測る。柵状遺構 1 及び 2 は 9.5m の間隔を空けて平行に設けられている。

弥生時代の遺構

第 2 遺構面（第 4 層上面）で検出された遺構は埋土に少量の弥生土器片を包含するのみであるが、第 3 層は弥生時代の遺物を含む包含層であり、当該遺構面で検出された遺構は弥生時代以降に属すると考えられる。

遺構 1018 平面形が円形を呈する土坑で、直径 1.0m、深さ 0.3m を測る。

遺構 1019 平面形が楕円形を呈する土坑で、長径 1.3m、短径 1.0m、深さ 5cm である。

畦畔状遺構 1 幅 0.3m ～ 0.7m で、L 字状に検出された。長さは東西 11.0m、南北 6.8 m であり、最もよく残存する箇所では高さは 0.1m 程度である。

3) 調査区 2

近世の遺構

第 1 遺構面では近世とみられる溝状遺構のほか、調査区 1 から連続するとみられる柵状遺構を検出した。

遺構 2001 調査区の東壁に沿って幅 4m 以上、長さ 21m を測るが、調査区内に検出されたのは全体のうちの一部分であると考えられ、幅は更に広がるものと推定される。埋土は砂質土で崩落の恐れがあったため、掘り下げは上端から 1.5m までとしたが、出土遺物には近世陶磁器があり、近世以降に大部分が埋没したものと考えられる。

柵状遺構 1 調査区 1 において検出した柵状遺構 1 に連続するものと考えられ、ほぼ一列に並ぶ 5 基のピットを検出した。これらのピットは直径 0.1 ～ 0.28m、間隔は 1.2 ～ 2.1m で、調査区 1 で検出したものを含めれば、延長 37m 以上となる。

弥生時代の遺構

第 2 遺構面では弥生時代に帰属するとみられる柱穴、土坑を検出した。柱穴は調査区中央付近から東側に集中する傾向があったものの、掘立柱建物のプランを示すものはない。

4) 調査区 4

古代の遺構

第 1 遺構面では、古代の掘立柱建物 1 棟分の柱穴を検出した。

掘立柱建物 1 3 間 × 2 間で柱穴は 10 箇所を検出。更に建物内には補助的に設けたとみられる

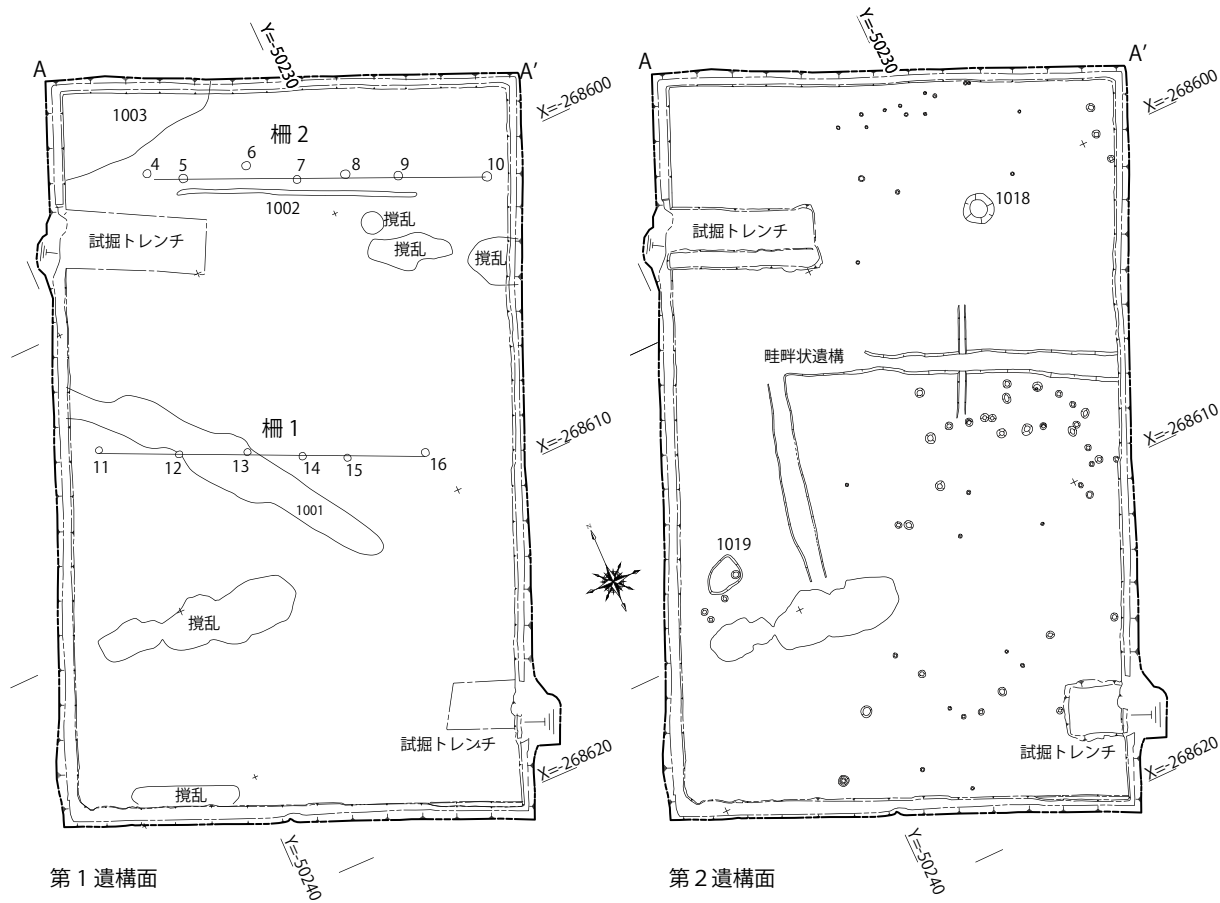


図6 調査区1 遺構配置図

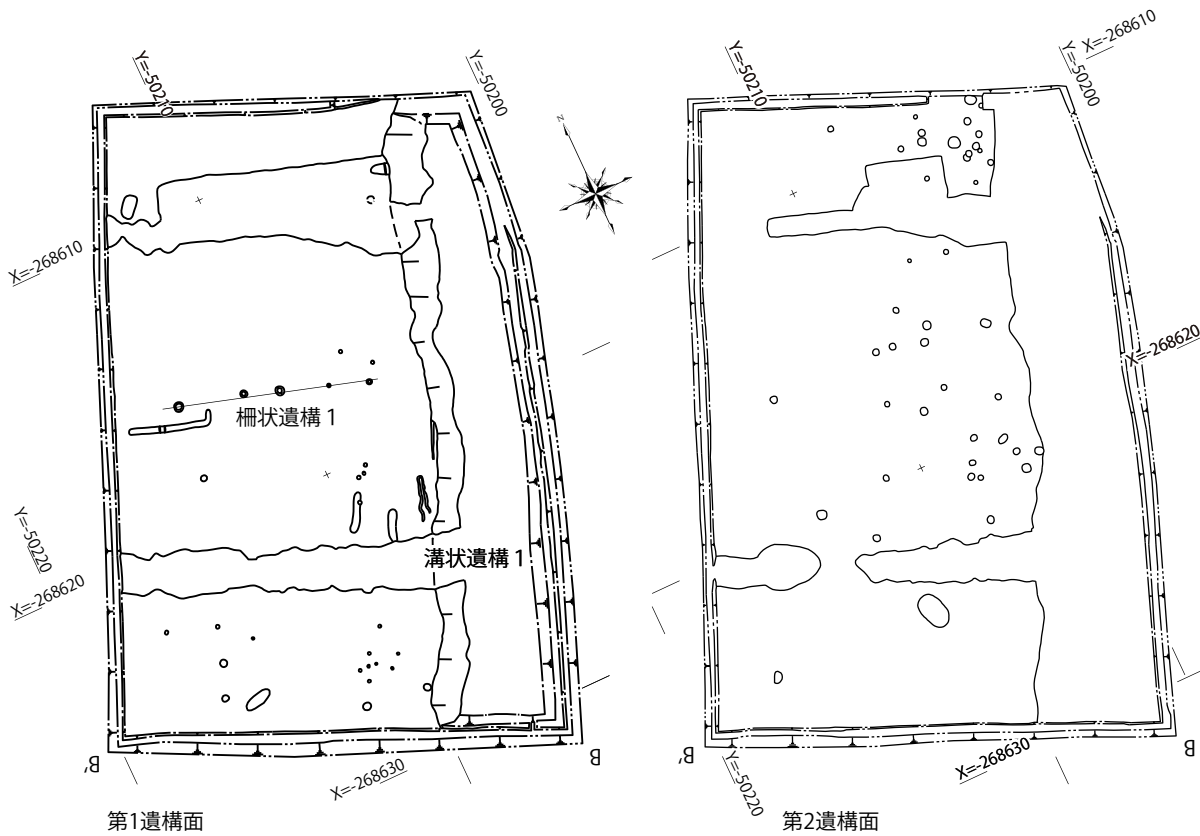
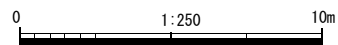
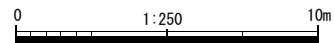


図7 調査区2 遺構配置図



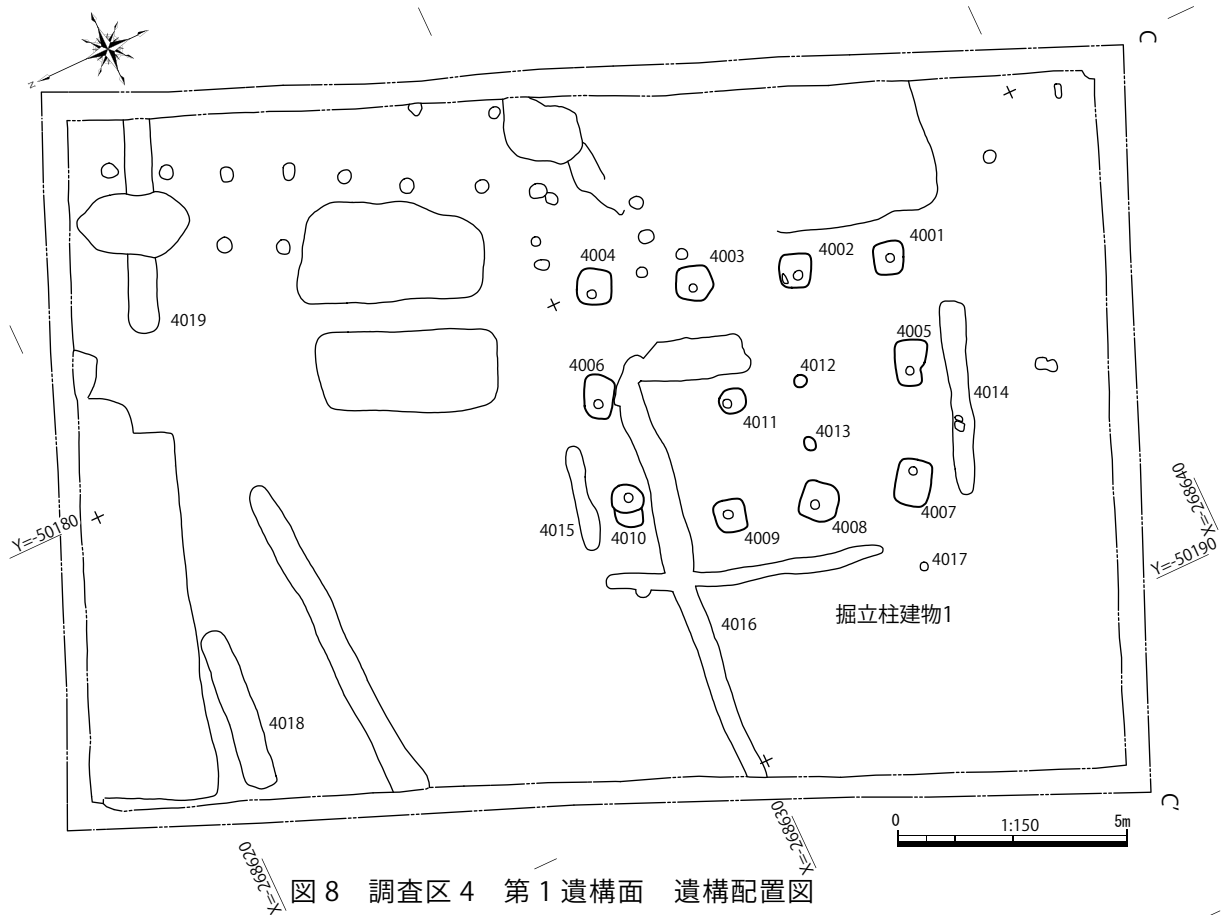


図8 調査区4 第1遺構面 遺構配置図

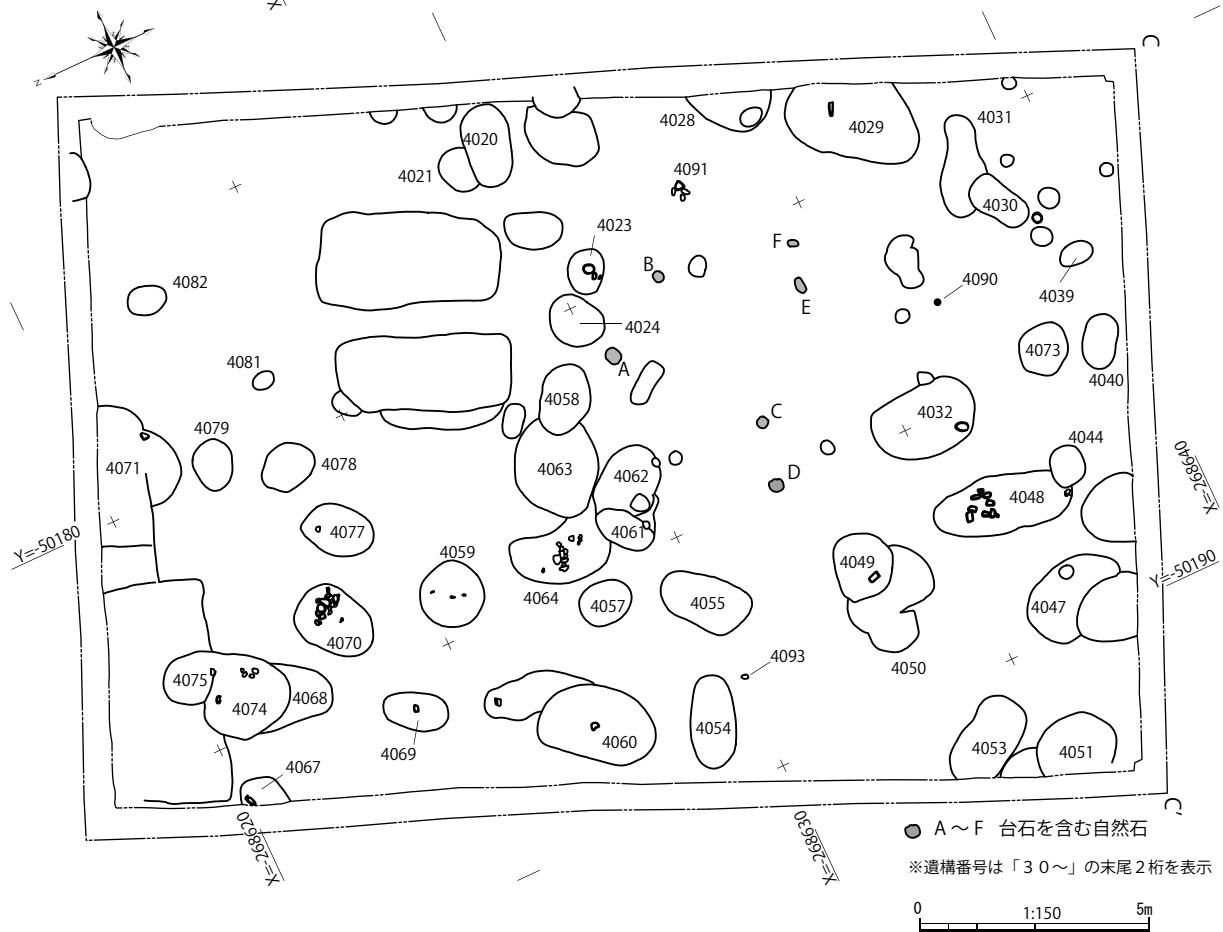


図9 調査区4 第2遺構面 遺構配置図

柱穴を1箇所確認している。また柱穴底部において、検出時とは異なる位置に柱当りを確認できる等、同じ位置において建て替えを行った形跡がみられる。更に建物の北側（遺構14）、南側（遺構4015）及び東側（遺構4016）に幅30～50cmの浅い溝を検出しており、当該建物に伴う遺構と考えられる。柱穴間は概ね2.0mであるが、北東隅にあたる柱穴がやや西側に食い違いを見せており、出入口の存在等が想定できる。掘形は隅丸の正方形または長方形に近い平面形で1辺60～90cmを測り、柱痕の直径は20cm程度である。柱穴からの出土遺物は弥生土器の小片や石器のみであるが、形状や規模等からみて時期は古代に帰属するものと考えられる。

弥生時代の遺構

第2遺構面では、弥生時代のものとみられる多数の土坑及び集石遺構を検出した。

遺構4020（図11） 長径1.6m、短径0.9m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4022（図11） 長径0.8m、短径0.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4026（図11） 径が少なくとも0.9m以上と考えられる土坑である。遺物は弥生土器の甕(7・9)が出土している。

遺構4029（図11） 長径2.7m、短径1.5m、深さ0.68mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4030（図11） 長径1.2m、短径0.6m、深さ0.12mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4031（図11） 長径2.0m、短径0.8m、深さ0.14mの楕円形を呈する土坑である。遺物は敲石(139)が出土している。

遺構4032（図11） 長径2.1m、短径1.4m、深さ0.54mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石鏃(139)が出土している。

遺構4047（図11） 長径2.0m、短径1.4m、深さ0.42mの楕円形を呈する土坑である。遺物はスクレイパーとみられる石器(47)が出土している。

遺構4048（図11） 長径、短径、深さ 程度の楕円形を呈する土坑である。

遺構4049（図11） 長径1.4m、短径1.1m、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器(6)、スクレイパーとみられる石器(125)が出土している。

遺構4050（図11） 長径1.9m、短径1.2m以上、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕(8・12)、スクレイパーとみられる石器(124)が出土している。

遺構4053（図11） 長径1.8m、短径1.0m、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4058（図11） 長径1.4m、短径1.0m、深さ0.46m程度の楕円形を呈する土坑である。遺物は土製の紡錘車(11)が出土している。

遺構4059（図12） 径1.3m、深さ0.2～0.34m程度の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕(15・22)、壺(14・16)が出土している。

遺構4060（図11） 長径2.3m、短径1.4m、深さ0.46mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕(23)及び壺(18)、石器(120・121・137・141)が出土している。

遺構4062（図11） 長径1.4m以上、短径1.0m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。遺物は軽石製品(142)が出土している。

遺構4063（図11） 長径2.0m、短径1.6m、深さ0.51mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石鏃(118)及びセスクレイパーとみられる石器(131)が出土している。

遺構4070（図12） 長径1.7m、短径1.2m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石

大古Ⅱ遺跡

器（133）が出土している。

遺構 4073（図 12） 集石遺構である。径 100cm、深さ 20cm の不定形な掘り込みに、径約 10cm の礫、長さ約 30cm の台石（143）を含む合わせて十数個の礫・石器が集中して出土した。礫は遺構検出面よりも高位において検出されており、掘り込み内に礫を積み上げた状況であったことが推定される。

遺構 4074（図 12） 長径 1.8m、短径 1.7m、深さ 0.48m の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の壺（24）、石器（130・140）が出土している。

遺構 4077（図 12） 長径 1.4m、短径 1.0m、深さ 0.36m の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の壺（19）、石器（123・126）が出土している。

遺構 4090（図 12） 長径 1.8m、短径 1.7m、深さ 10cm の楕円形を呈する土坑内に台石等が重ねて納められた集石遺構である。

遺構 4091（図 12） 台石を含む集石遺構である。浅い掘り込みを伴うとみられるが明瞭には検出されなかった。遺物は弥生土器の壺（28）が出土している。

遺構 4093（図 12） 集石遺構である。長径約 10～60cm の大小の礫及び台石等の石器合わせて十数個が、直径約 70cm、深さ 10cm 程度の楕円形に近い平面形を呈する掘り込み内で出土しており、礫はやはり遺構検出面よりも高位において検出されており、掘り込み内に礫を積み上げた状況であったことが推定される。

5) 調査区 5

井戸 1 室町時代頃に埋没したとみられる井戸である。比較的大きな礫を、小口面にあたる部分を内側にして積み上げている。遺物は青磁（29）、瓦質の羽釜（32）等が出土している。

(2) 第 2 次調査

1) 基本層序

基本層序は第 1 次調査と同一である。第 1 層が現在の耕作土及び床土、第 2 層が近世を含む耕作土及び床土である。第 3 層が弥生時代の包含層で、第 3-1 層と第 3-2 層に分層が可能であるが、時期的に大きな差はないものと判断された。第 4 層は地山である。

2) 調査区 3

調査区 3 では遺構面を 3 面確認した。第 3-1 層上面を第 1 遺構面、第 3-2 層上面を第 2 遺構面、第 4 層上面を第 3 遺構面としている。

第 1 遺構面検出遺構

遺構 3001 幅約 2.1～3.9m、深さ約 1.0m を測る溝で、断面は V 字状となっている。遺物は須恵器の小片が出土していることから、古代に帰属すると考えられる。

遺構 3003 幅約 3.0m、深さ約 1.0m を測る溝である。延長約 10.4m を検出しており、断面は V 字状となる。遺構 3001 とともに、西側に存在する丘陵からの流水があったものと推定される。

柵状遺構 1 調査区の北端で検出した、7 基のピットからなるものである。延長約 4.5m にわたり検出したが、さらに北側に延長する可能性が高い。

第 2 遺構面検出遺構

第 2 遺構面では溝等の遺構を検出したが、埋土に含まれる遺物がきわめて少量であるため、

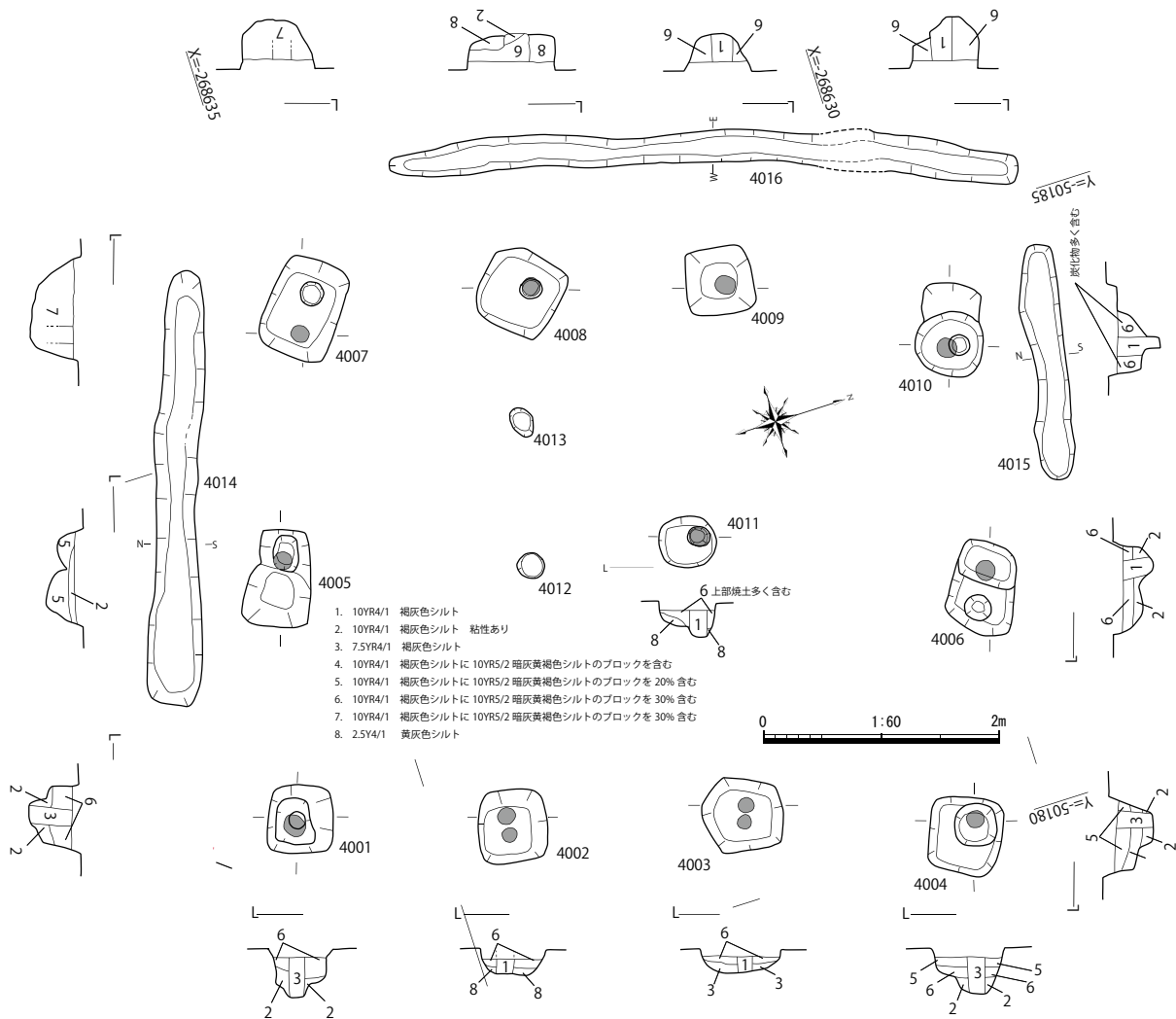


図10 調査区4 第1遺構面 掘立柱建物1 S=1/60

帰属する時期は詳らかでないが、第1遺構面に検出した遺構の時期からすれば、弥生時代とみることができる。溝の流水は概ね北から南方向となるようである。

遺構 3002 幅 2.0 ～ 3.8m、深さ 1.0m の溝である。約 29.2m にわたり検出しており、断面は V 字状を呈する。底面のレベルから、遺構内には北から南への流水があったものと考えられる。

遺構 3006 幅 0.9 ～ 1.8m、深さ 0.7 ～ 0.8m の溝である。約 28.8m にわたり検出しており、断面は U 字状を呈する。

遺構 3051 幅 1.1 ～ 1.5m、深さ 0.45m の溝である。約 13.0m にわたり検出しており、断面は U 字状を呈する。調査区外の南北に延長するものと考えられる。

第3遺構面

溝及び多数のピット、数基の土坑を検出した。

3) 調査区6

調査区6では2面の遺構検出面において溝等の遺構を検出したが、調査区全体にわたり遺構は希薄である。第1遺構面では階段状遺構1を検出した。南北5.5m、東西3.3mにわたり、東から西方向へむけて0.2mずつ階段状に下がる3段の段差がある。これを覆う埋土の上層から須恵器片が出土した。第2遺構面からは多数のピットを検出下が、規模、形態は様々であり、性

大古II遺跡

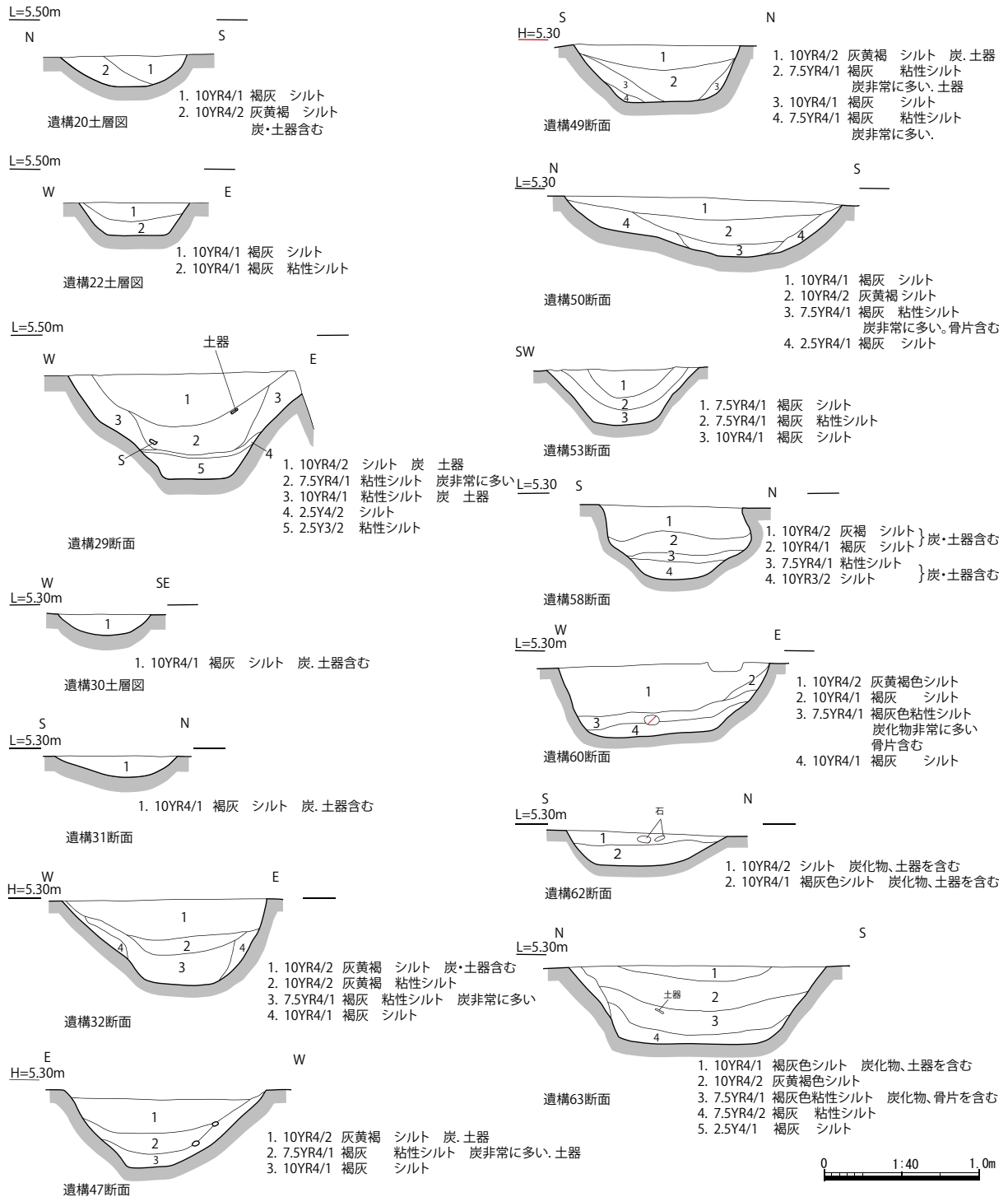


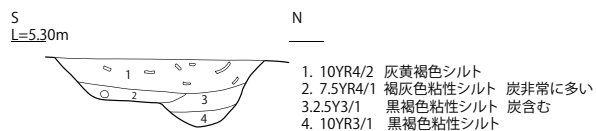
図 11 調査区 4 検出遺構土層図

格等は詳らかでない。遺構からは少量であるが、弥生土器片が出土した。

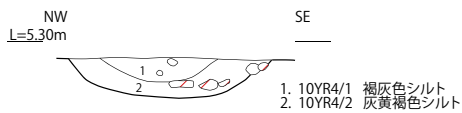
4) 調査区 7

第 1 遺構面

遺構 7002 幅 0.6m の溝である。延長 4.6m にわたり検出した。深さは 0.3m で、断面は底面からは緩やかに立ち上がる逆三角形となっている。土師器皿が出土しており、時期は古代に属すると考えられる。



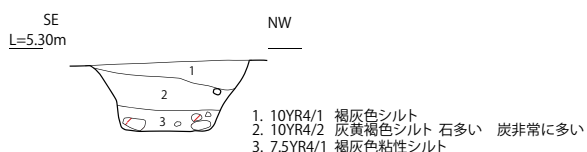
遺構59 土層図



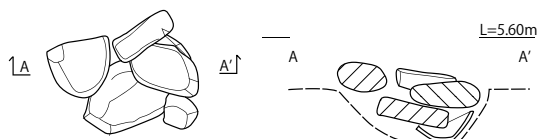
遺構70 土層図



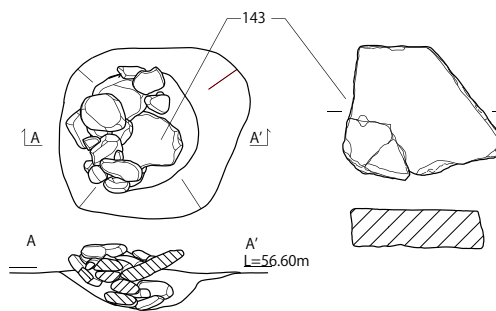
遺構74 土層図



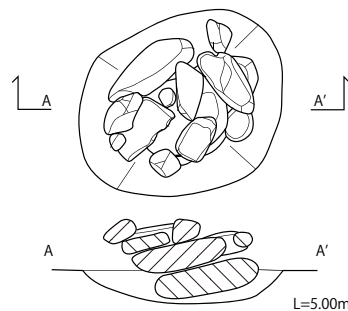
遺構77土層図



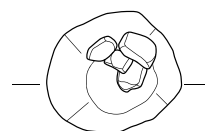
遺構91 平面及び断面見通し図



遺構73 平面及び断面見通し図



遺構90 平面及び断面見通し図



遺構96 平面図 0 1:40 1.0m

図12 調査区4 検出遺構土層図

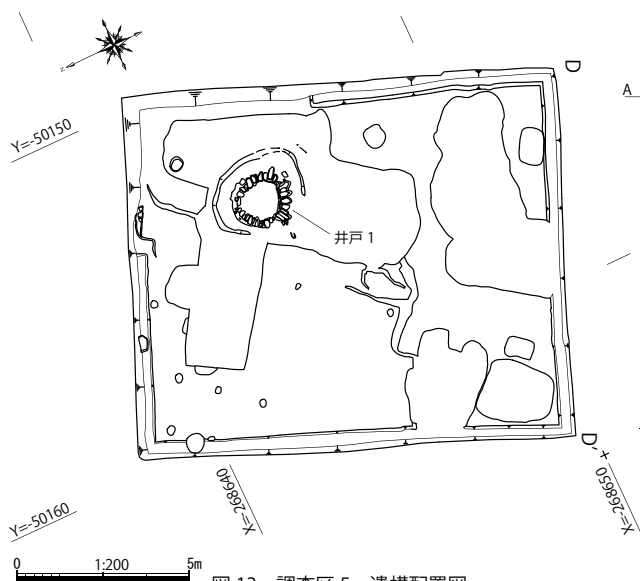


図13 調査区5 遺構配置図

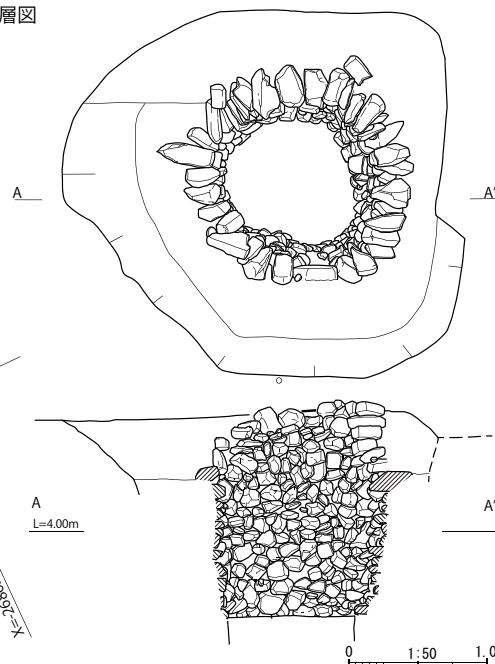


図14 調査区5 井戸1 平面及び断面見通し図

大古Ⅱ遺跡

柱列 1 径 0.3m のピットが 3 基、北東から南西方向へ 1 列に並ぶ。溝 7002 と方向を同じくしており、関連性が窺える。また、ピットの一つ（遺構 7025）からは、柱の沈み込み防止等、礎盤の用途を果たしていたとみられる石が出土している。

遺構 7019 幅 0.8m の溝である。南北 5.1m にわたり検出しており、深さは 0.2m である。埋土からは少量の弥生土器片が出土している。

第 2 遺構面

遺構 7104 1.0m × 1.8m の土坑で、楕円形に近い平面形をなす。深さは 0.56m で多量の土器片及び炭化した種子等が出土した。土器片は弥生時代中期に属するもので、種子は詳細な分析を経ていないが、一部は大豆と考えられるものがある。廃棄のための土坑であるとみられる。

遺構 7105 1.15m × 1.0m の土坑で、円形に近い平面形をなす。深さは 0.3m で多量の土器片及び炭化した種子等が出土した。土器片は遺構 7104 と同時期であり、弥生時代中期に属するものである。廃棄のための土坑であるとみられる。

遺構 7059 幅 0.15m の溝状の遺構である。深さは 0.1m で、南北 4.2m にわたり検出したが、少量の弥生土器片が出土したのみである。

遺構 7060 幅 1.2m の溝で、南北 2.1m を検出した。

遺構 7102 東西 5m、南北 3m を測る竪穴状の遺構である。北側は調査区外となり、全容は不詳である。遺物は、弥生土器が少量出土している。

第 3 遺構面

土坑 1 基及び複数のピットを検出した。遺物は、弥生土器が少量出土したのみである。

5) 調査区 8

調査区 8 は、大古Ⅱ遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲の東端に位置する。近世の石垣のほかに検出された遺構はなく、2 箇所において下層確認のためのトレンチを設定したところ、トレンチ 1 では地表から約 2.8m 下に河原石の堆積を確認した。またトレンチ 2 では砂質土及びシルトの堆積があり、第 4 層の堆積はみられなかった。

第 5 項 まとめ

今回の調査では、古代と弥生時代の遺構が確認された。

弥生時代の遺構としては土坑、集石遺構がほとんどで、石器の出土が多い。遺構は土坑が多く、長径が 1m 以上ある比較的大きなものが多数を占める。これらはその中で火を焚いた等の痕跡はみられないが、埋土中に炭化物、骨片の混入がみられる。出土遺物は石鏃が比較的少量であるものの、刃器が多いことや、台石や敲き石の出土及び遺構 73・90・93 等にみられるような台石等の集積状況からは、ここで調理或いは皮革の獲得等に関わる獣類等の解体といった作業が行われたことが推定される。遺構 4073・4090・4091 等の集石遺構が存在する部分には土坑の分布が希薄で、集石遺構と土坑には位置関係において一定の相関関係があるものと判断される。また埋土に炭化物や骨片が含まれることから、上記のような作業に伴いその残滓を廃棄した可能性が高い。

石器の石材はサヌカイトが少量含まれるものの、日置川流域とその近辺に産出する石を多く用いているものとみられ、大部分は頁岩またはより変成の進んだ粘板岩である。また、太型蛤刃石

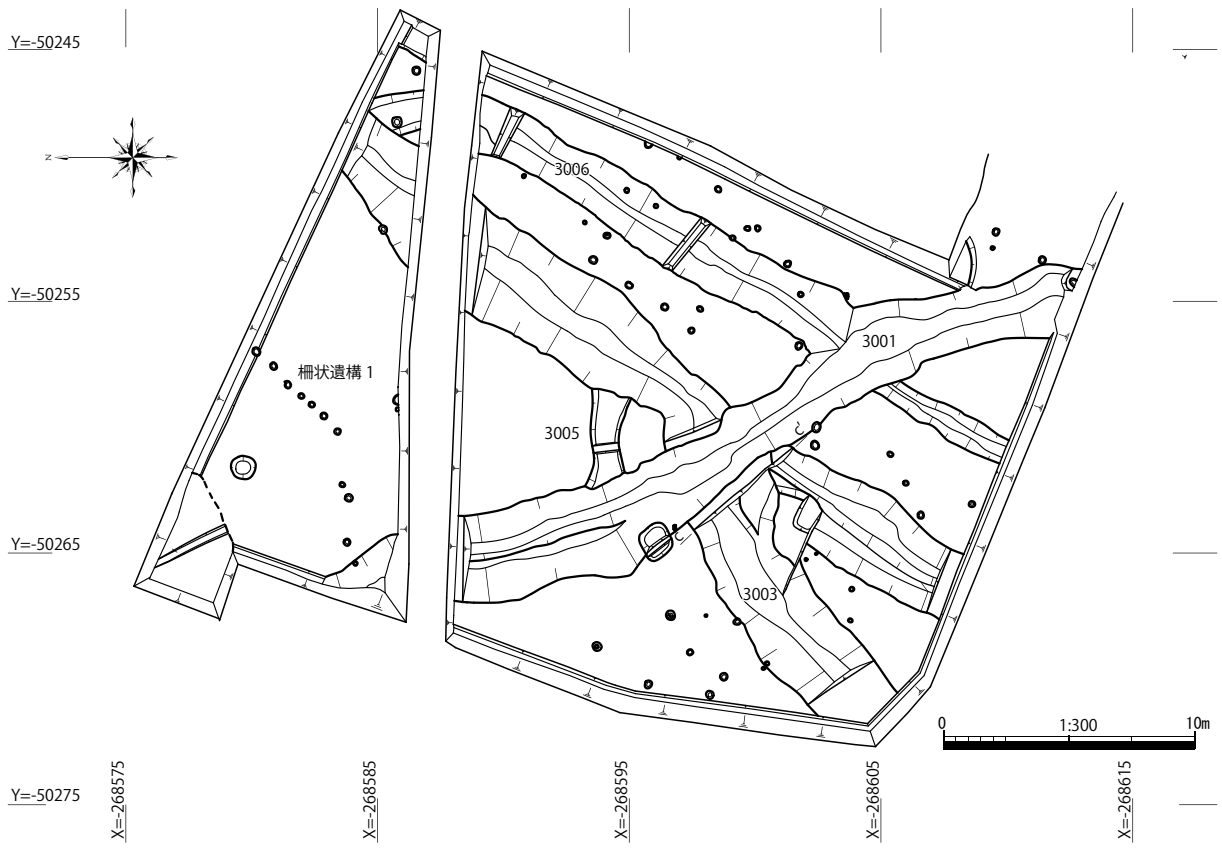


図 15 調査区 3 第 1・2 遺構面 遺構配置図



図 16 調査区 3 第 3 遺構面 遺構配置図

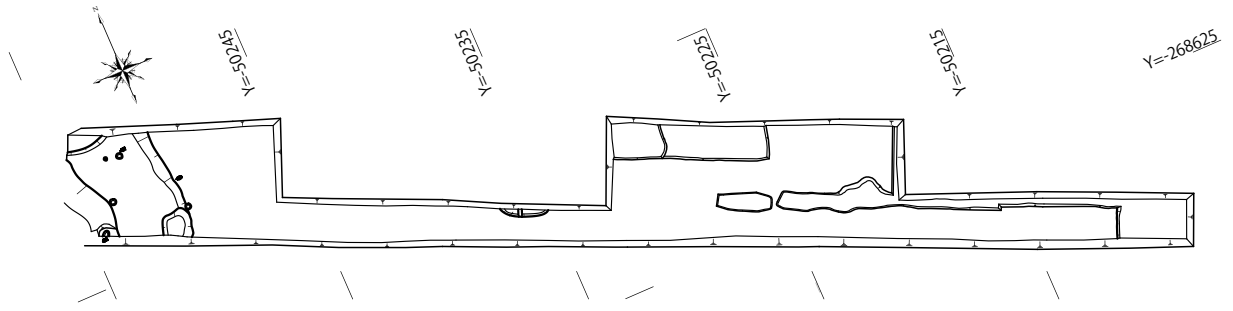


図 17 調査区 6 第 1 遺構面 遺構配置図

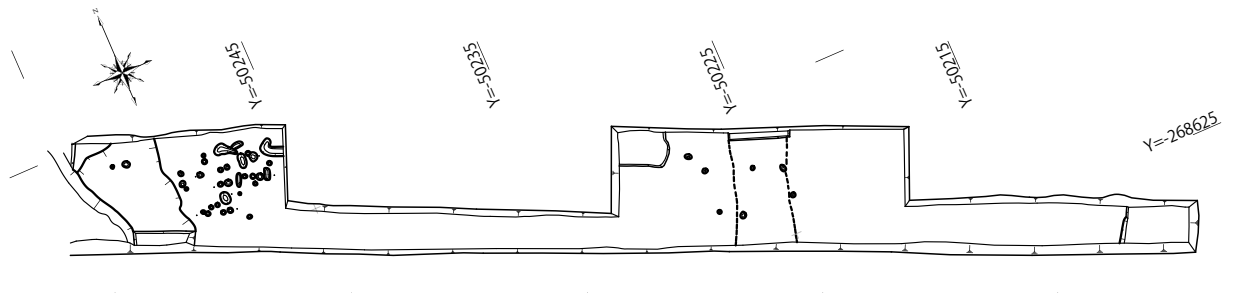


図 18 調査区 6 第 2 遺構面 遺構配置図

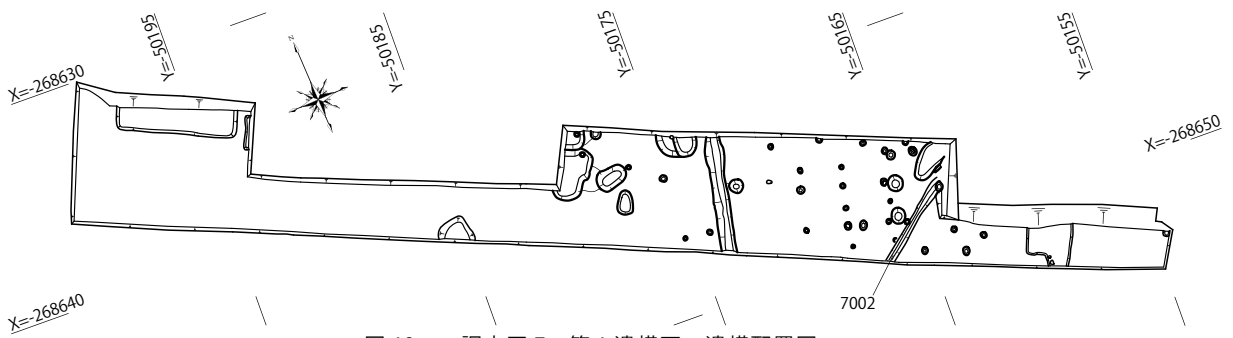


図 19 調査区 7 第 1 遺構面 遺構配置図

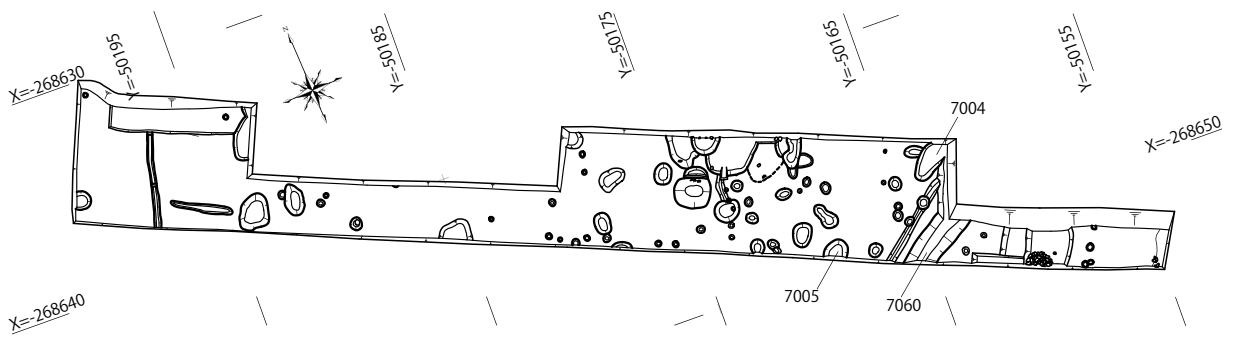


図 20 調査区 7 第 2 遺構面 遺構配置図

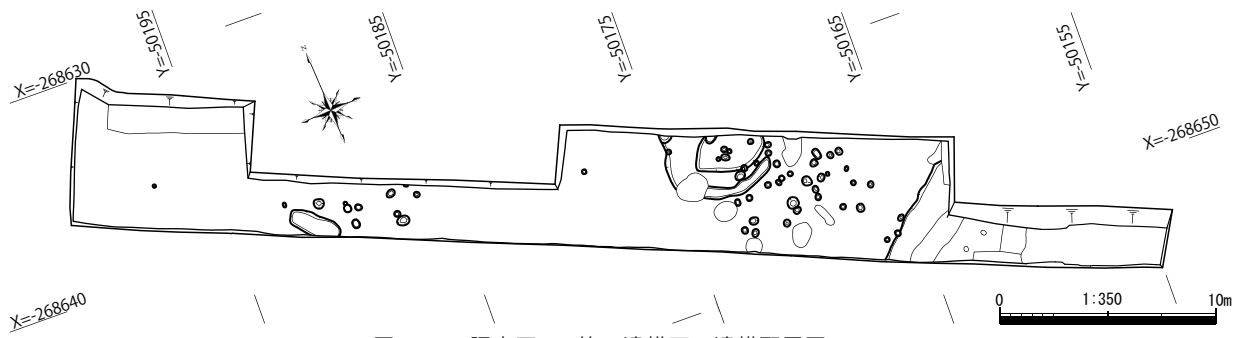


図 21 調査区 7 第 3 遺構面 遺構配置図

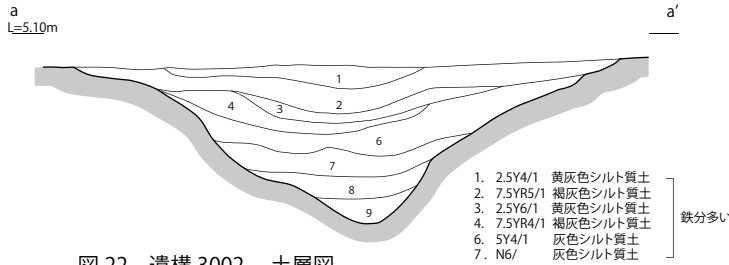


図22 遺構3002 土層図

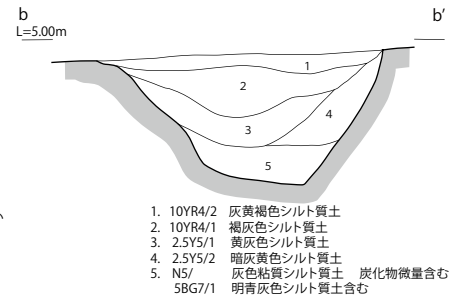


図23 遺構3006 土層図

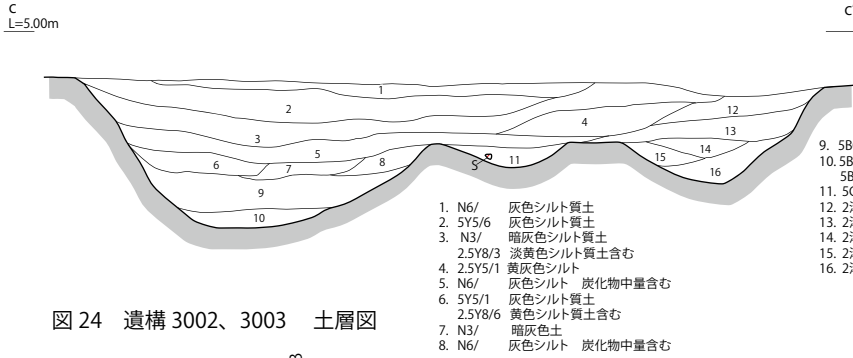


図24 遺構3002、3003 土層図

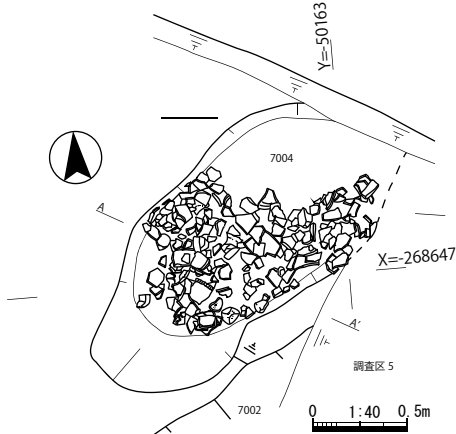


図25 遺構7004 平面図

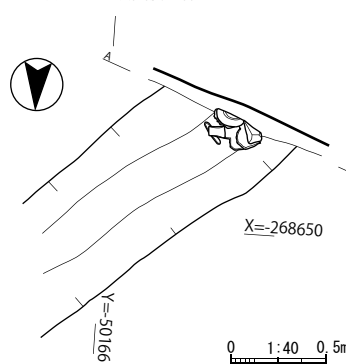


図27 遺構7002 平面図

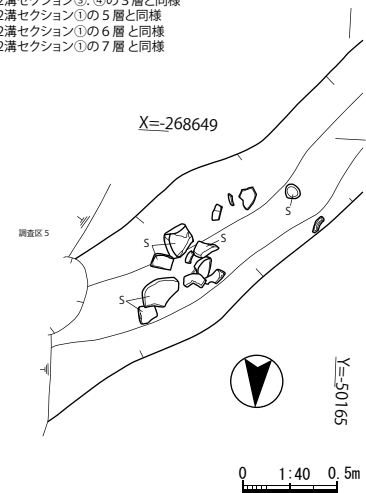


図29 遺構7002 平面図

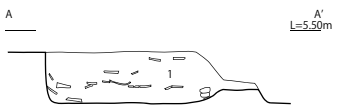


図26 遺構7004 土層図

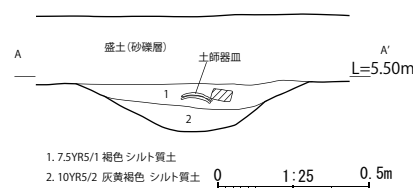


図28 遺構7002 土層図

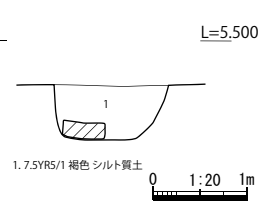


図30 遺構7025 土層図

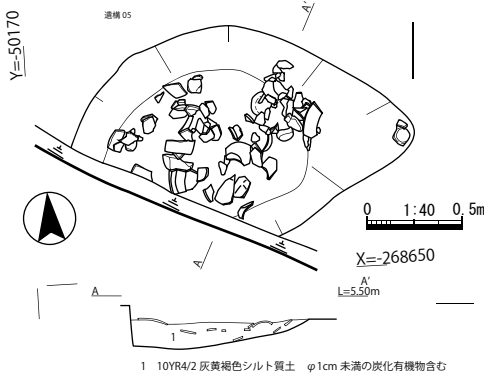


図26 遺構7005

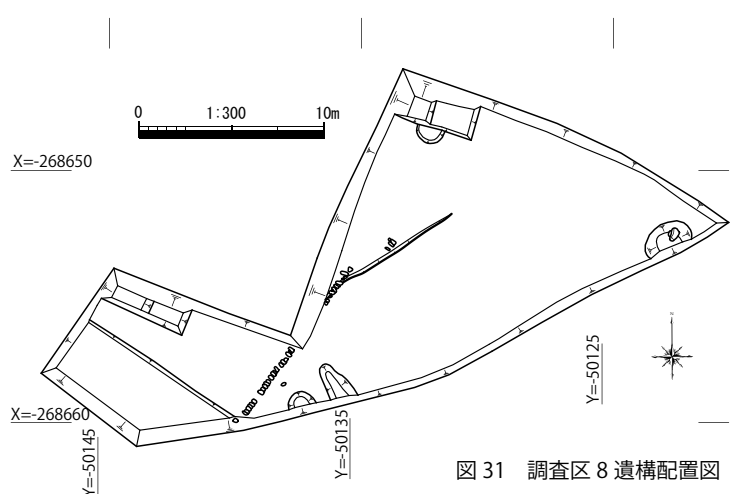


図31 調査区8遺構配置図

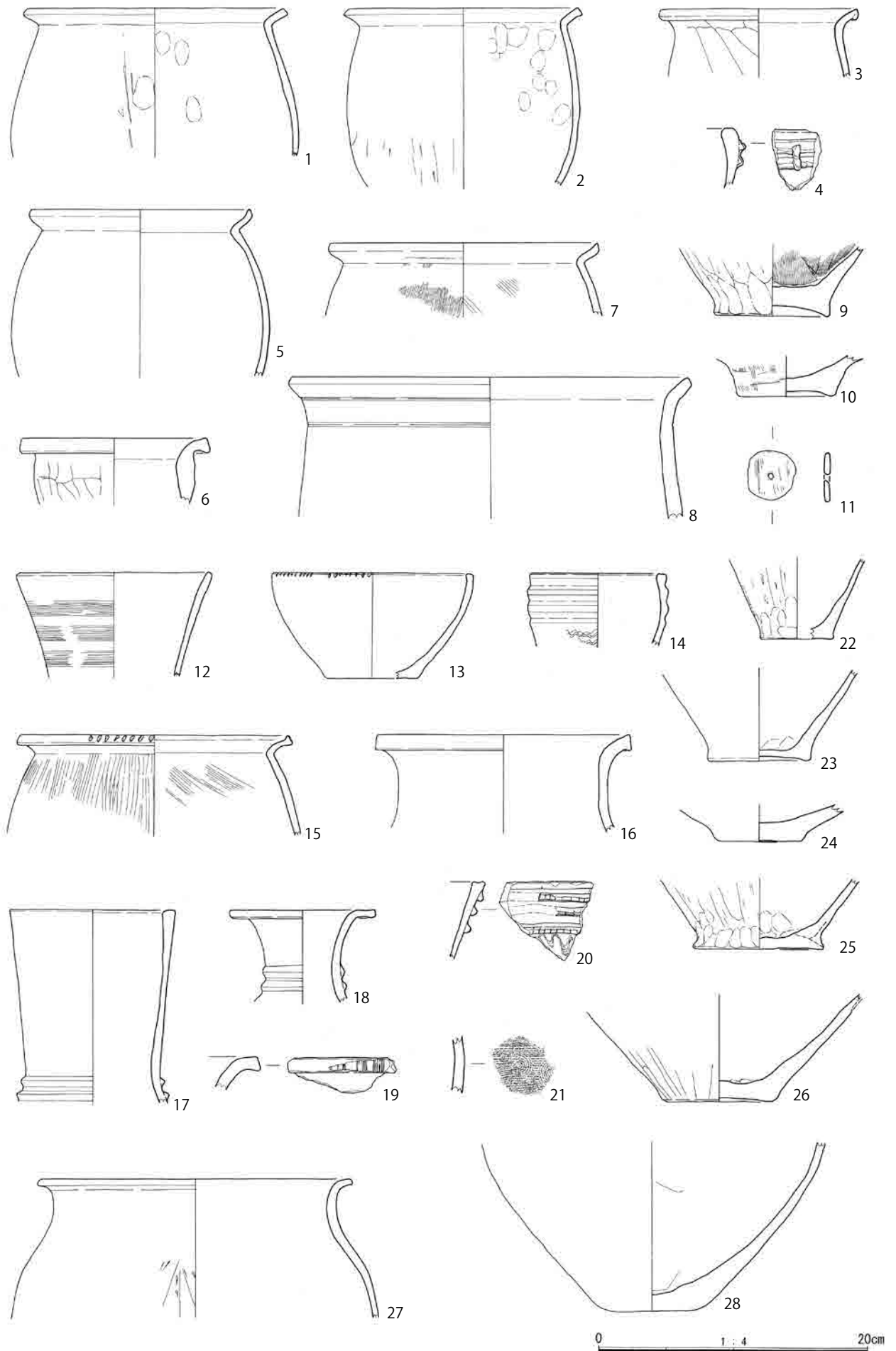


图 32 遺物実測図

斧 160（遺構 4075 出土）及び 134 の石材は粗粒玄武岩であるとみられ、同様の岩石は潮岬の海浜で小さな転礫を拾うことが可能であり、その近辺では枕状溶岩のなかに岩脈もみられる。163 も玄武岩製であるとみられることから、石斧は概ね火成岩をその石材とする傾向があるといえ、紀伊半島南部に分布する熊野酸性火成岩類の使用を考慮する必要があるだろう。以上のことは、本遺跡では石器石材を遠隔地に求めるのではなく、近辺に求める傾向を示すものといえる。

土器は沈線で区画された中に縄文を施すものや、頸部上位口縁部付近に貝殻による条痕を施すもの (51) 等があり、尾張地方或いは伊勢湾西岸地方との交流を窺わせるものがある。

絵画土器は 2 点 (71・72) 出土しており、いずれも壺の肩部付近の破片である可能性が高い。71 は建物の屋根の一部と屋根飾り、柱や梯子を描いたとの解釈が可能であるが、絵画の全体像は不明であり、屋根と見られる部分が 72 に描かれる鋸歯文と同様の筆致であることや、梯子とみられる 2 本の線のうち、1 本は棟を突き抜けて描かれる等、建物とするには不自然な点も残る。屋根飾りは唐古・鍵遺跡出土例に酷似するが、大棟の端部に描かれることが多く、軒に付くとみられる本例に類似するものは、池上・曾根遺跡出土例等があるが多くはない。

第 2 次調査においては、調査区ごとに遺構の集中する範囲及びそうでない範囲を明確に把握することができた。第 1 次、第 2 次調査の最終遺構面の遺構配置を図 41 に示す。このうち弥生時代の遺構について検討すると、限られた調査範囲からの推定となるが、遺構、概ね北北西から南南東の方向へとその疎密を把握することができる。この方向は現在の等高線に直交するものであり、また日置川に向かって検出面の標高は下がる。調査区 4 は最も標高の高い位置にあり、調査区 7 近辺も微高地となっていることから、本遺跡では日置川北岸の微高地上に遺構が集中する傾向を指摘することができる。調査区 3 では溝が多く検出されたが、これらは採水可能な、やや標高の高い丘陵裾から、集落或いは水田への水のまわりを考慮した水路である可能性を指摘することができる。

調査区 4 で検出した掘立柱建物の時期は古代に帰属すると考えられるもので、この地域において一定の勢力が存在した可能性を指摘することができるが、当該時期の掘立柱建物の検出例や、調査区 2 における緑釉陶器の出土からは、これに官的な性格を帯びるといふ見方が可能となる。

今回出土した緑釉陶器は摩滅が著しいため調整は詳らかでないが、高台が円盤状の平高台であ

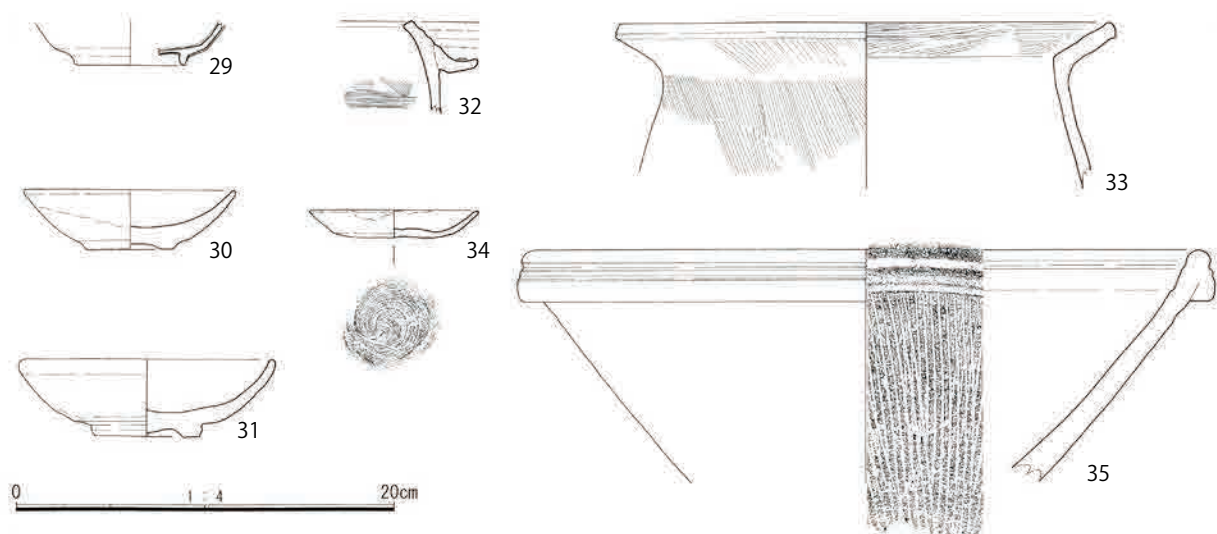


図 33 遺物実測図

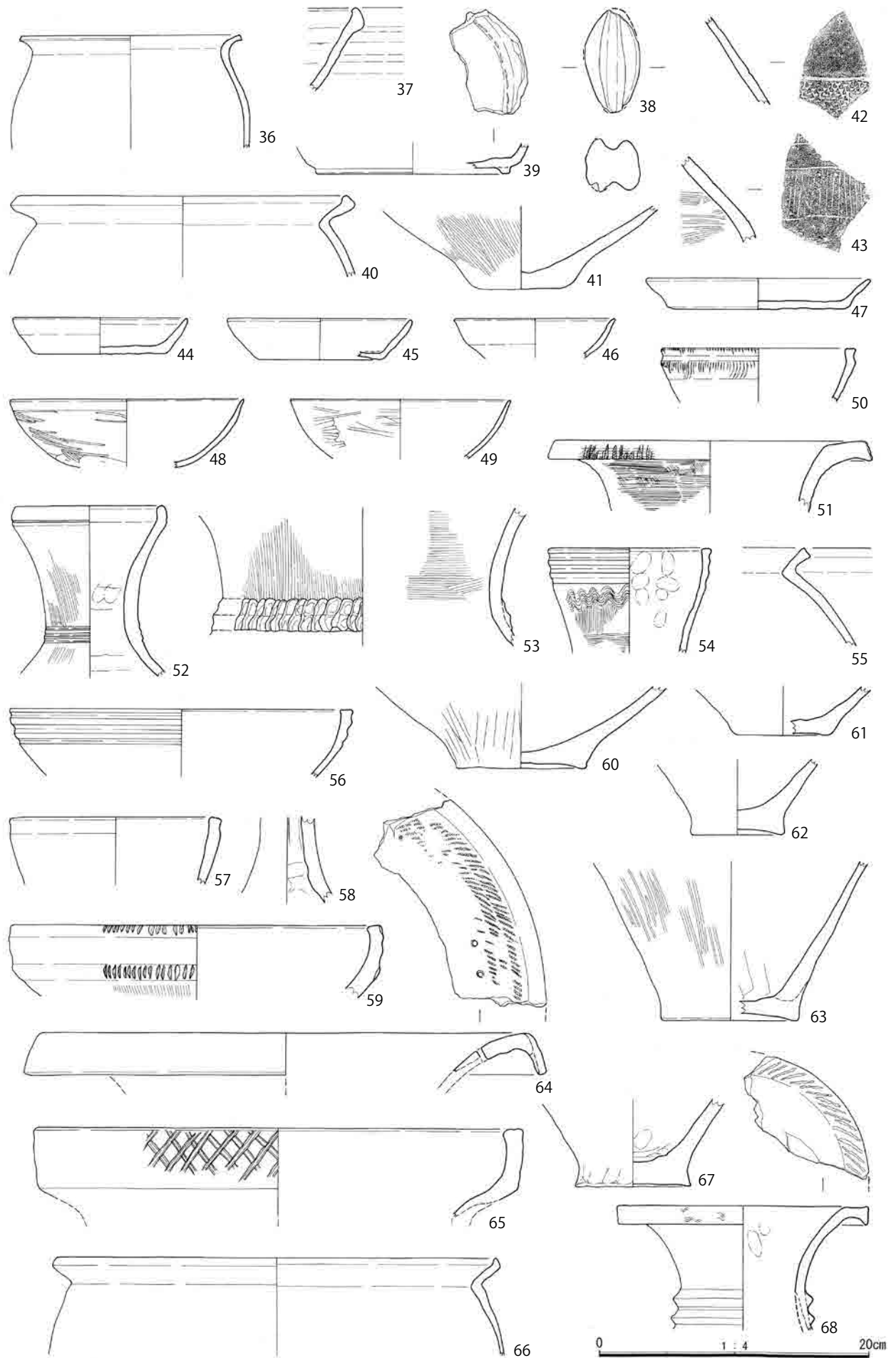


图 34 遺物実測図

り、底面中央が僅かに凹む形状をなすこと、軟質に焼成され、釉は剥落は激しいが透明に近い淡い色調 (*9) で、これが高台底面にも残存すること。器種は、底部径と体部の立ち上がり角度から、椀とみられる等の特徴から、9世紀から10世紀初頭頃の時期に帰属すると考えられ、山城産である可能性が高い。

日置川の恵みが当地一帯における遺跡の集中をもたらしたことは前述したとおりであるが、律令体制における官衙的な施設の選地も、同様の地理的条件による必然であったといえ、このことは、後にこの地域を含めた一帯が安宅荘として安宅氏の活躍をみたことからもうなずける。リアス式海岸が多く、海岸線の地形的条件が限られる紀南地方にあっては、比較的水流の穏やかな河岸に港の機能が求められたと考えられ、また紀伊半島沿岸を巡り伊勢湾に至るまでの交通路である海上路の中継点にあたる好条件の地といえよう。

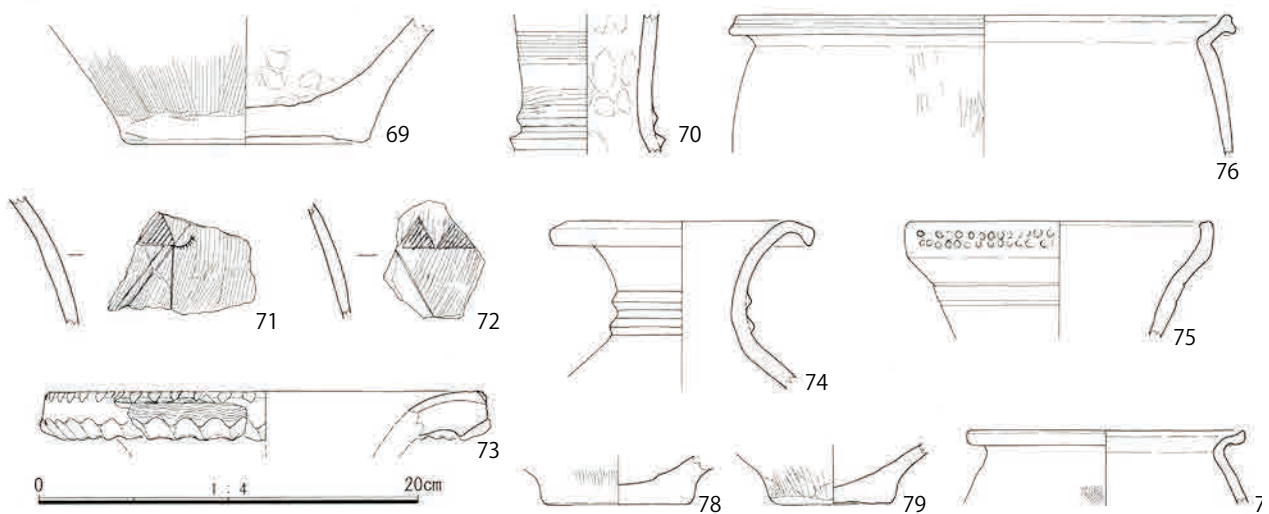


図 35 遺物実測図

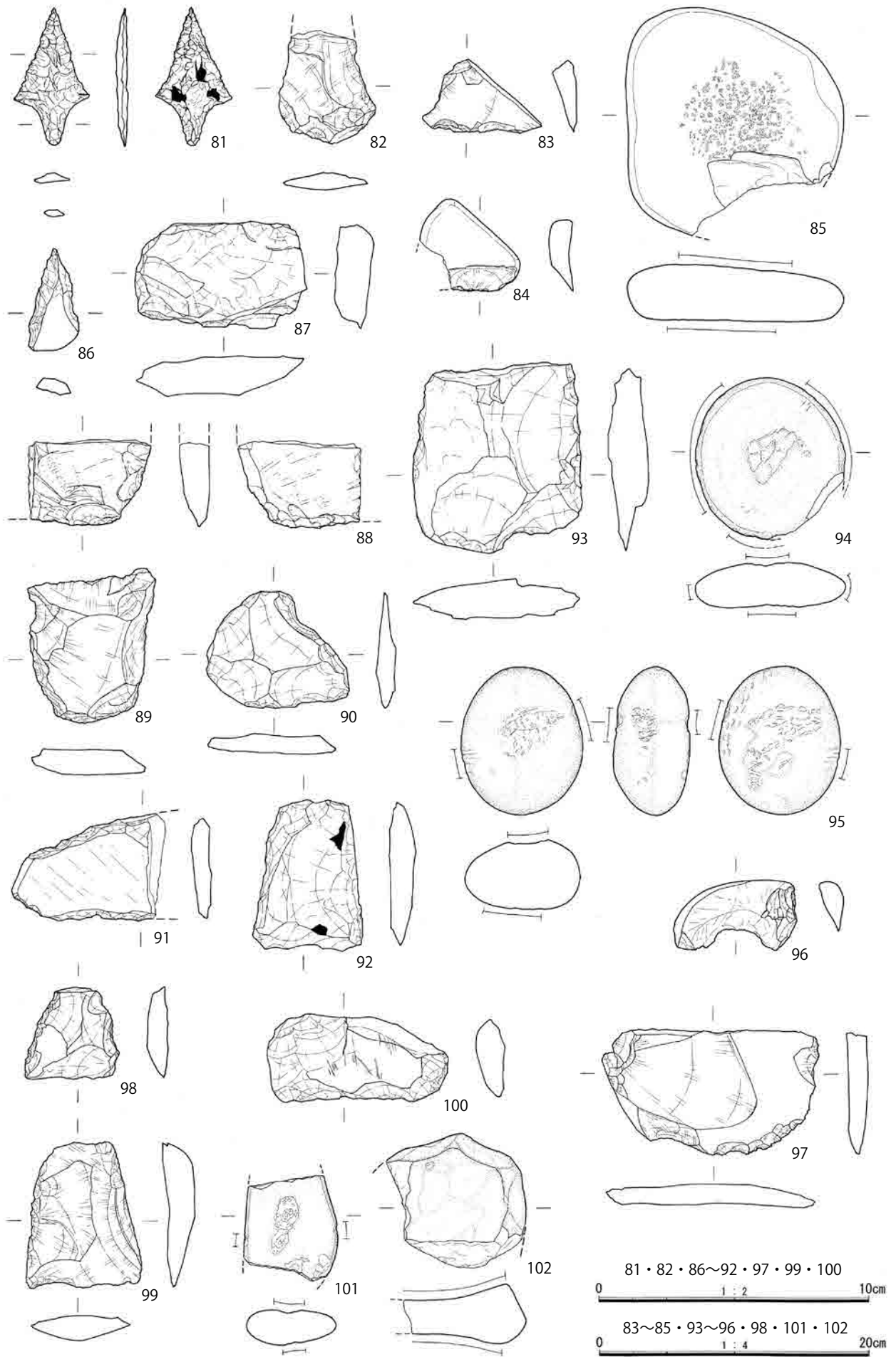


图 36 遺物実測図

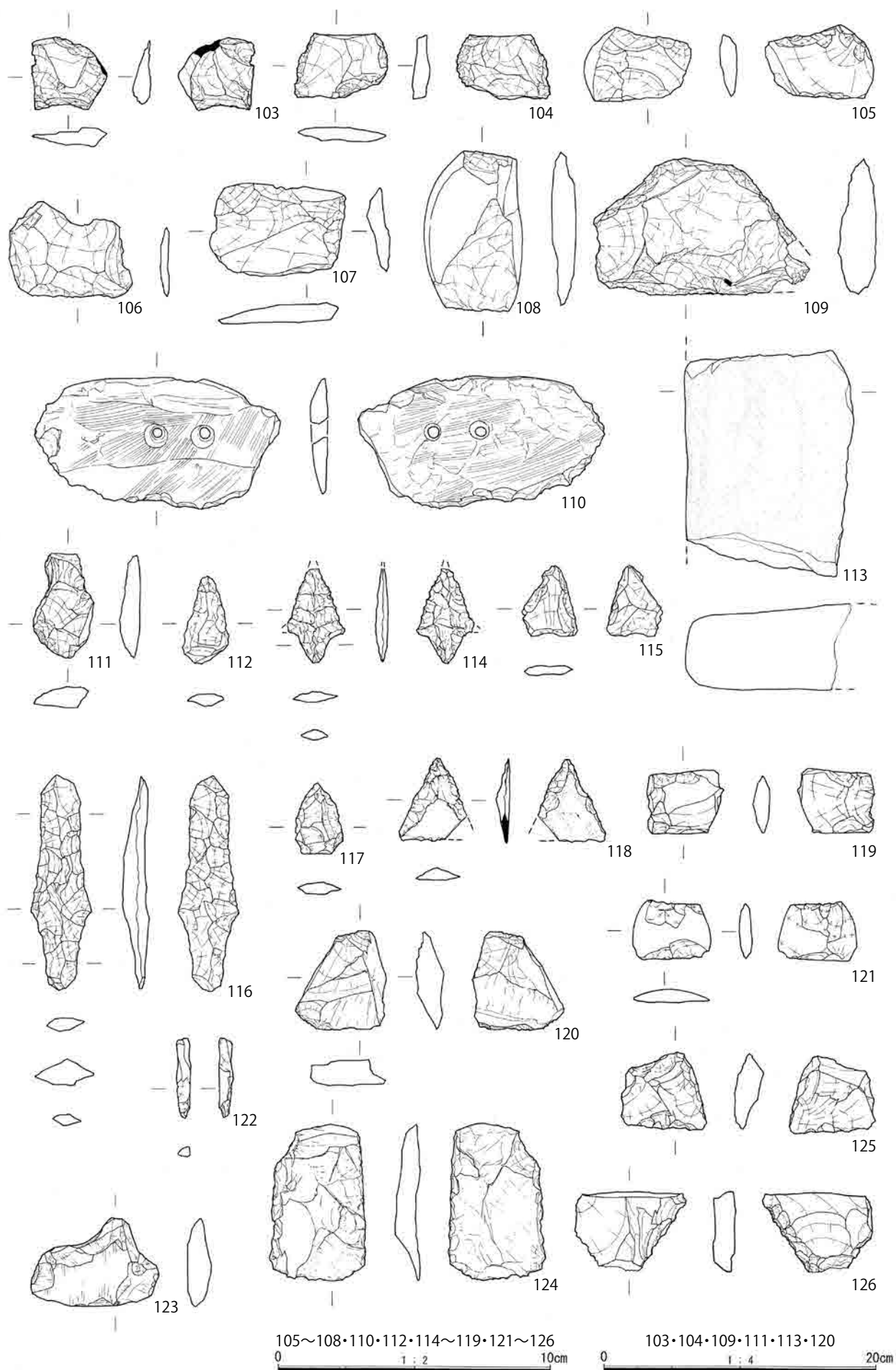


图 37 遺物実測図

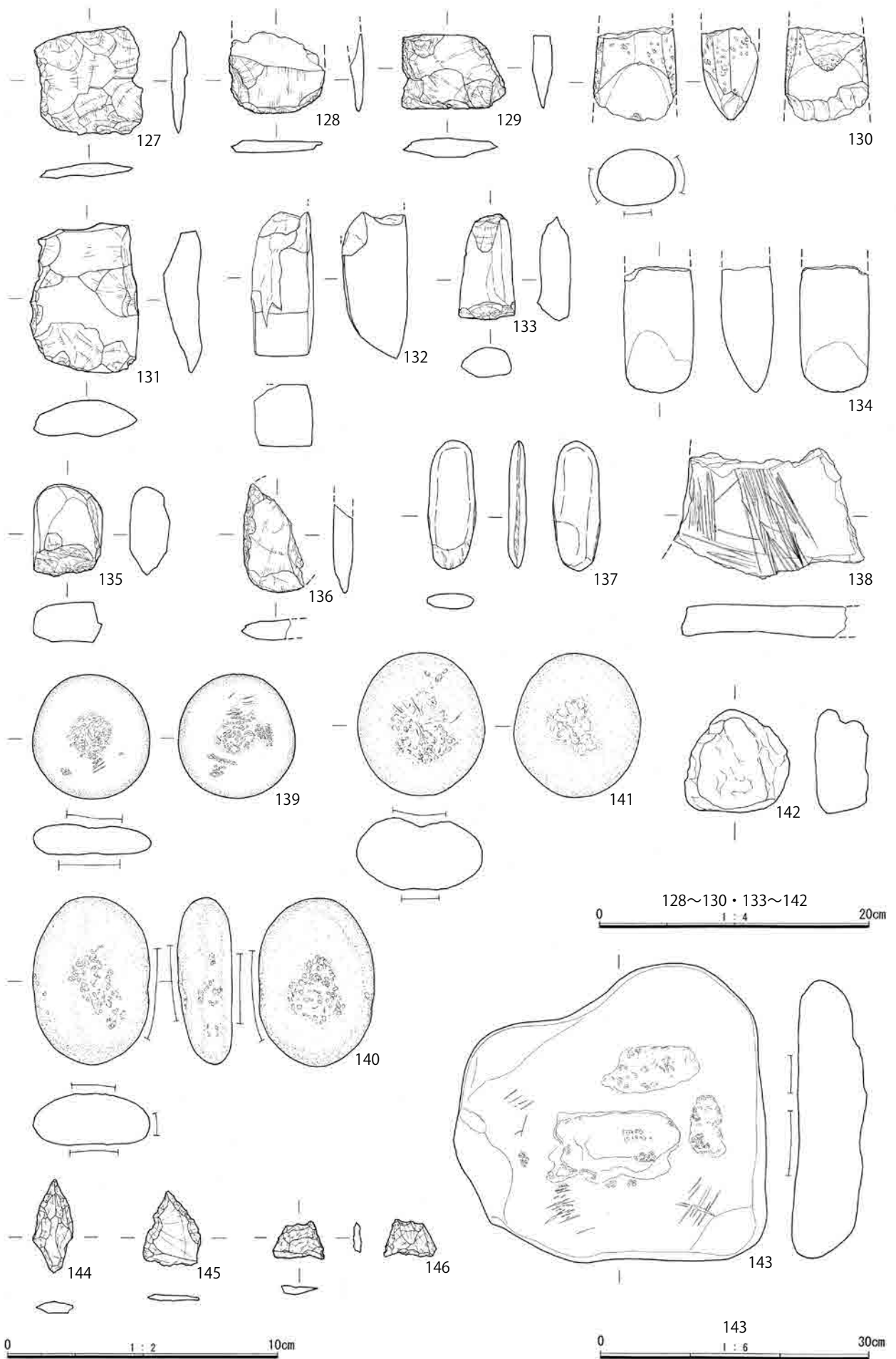


图 38 遺物実測図

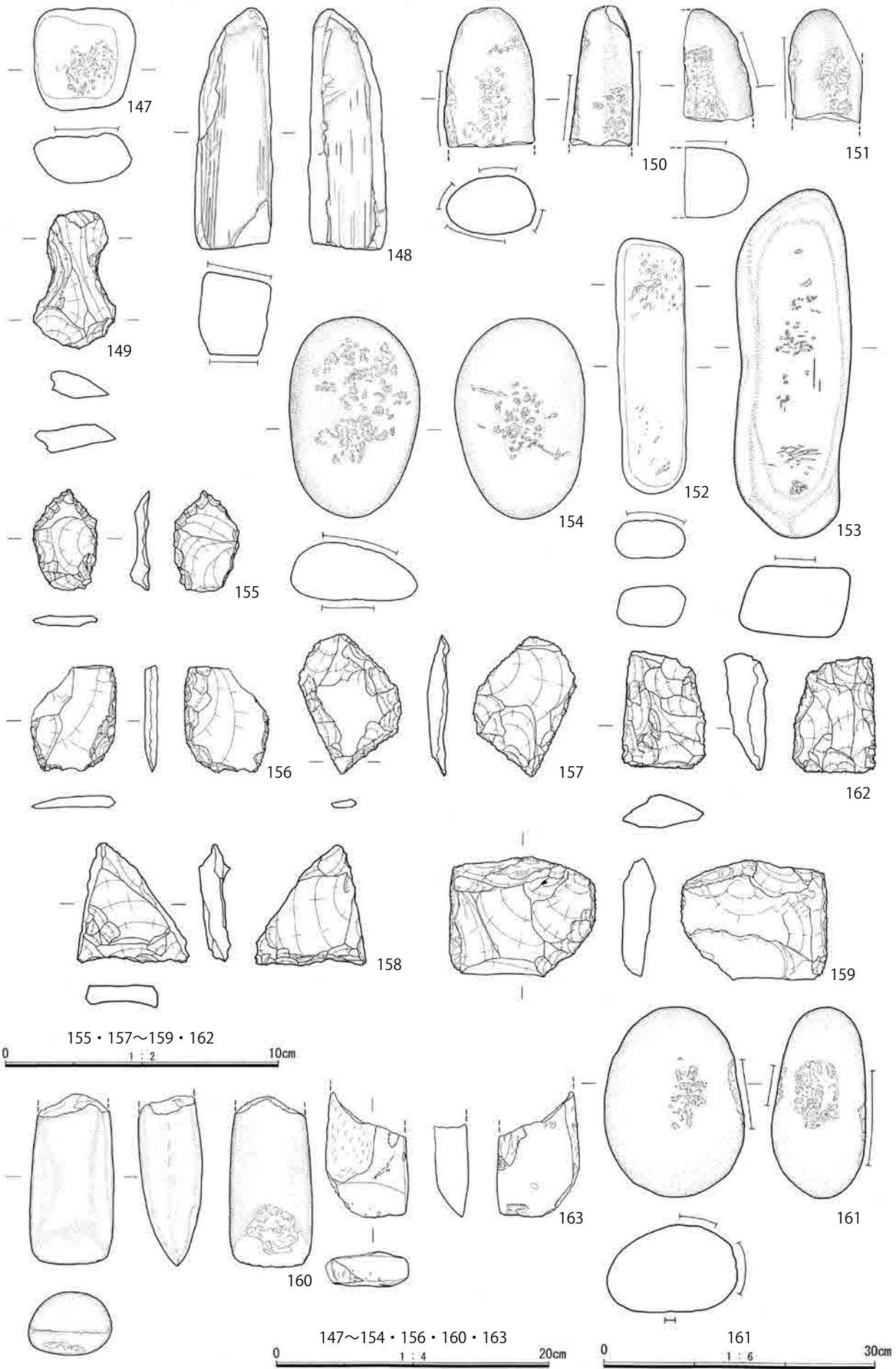


图 39 遺物実測図

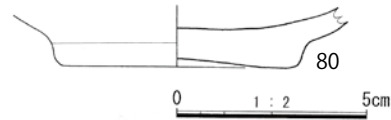


図40 遺物実測図

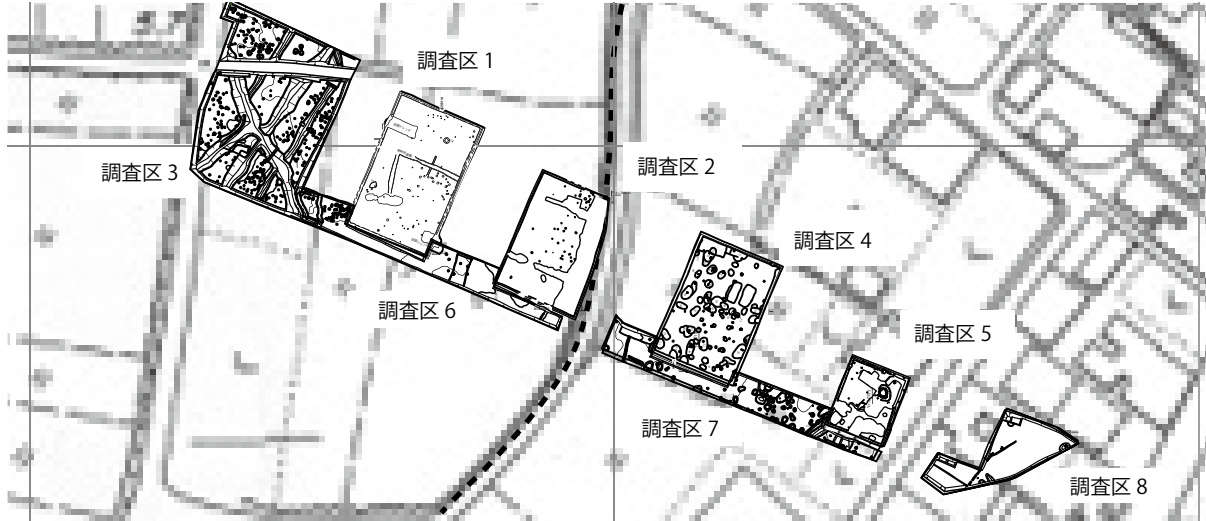


図41 平成22～24年度調査各調査区 遺構配置図

土器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
1	図20	弥生土器 壺	4 L7s6	3層	(19.0)	残11.0		20%	内) にふい橙7.5YR7/4 外) 灰黄褐10YR6/2 断) 黒 N2/	頸部はやや強く屈曲し、端部は外径する平坦面をなす。胴部はヘラケズリ 後ナデ調整、内面ナデ調整、反転復元。
2	図20	弥生土器 壺	4 L7s6	3層	(17.0)	残13.2		口縁15%	内) にふい橙7.5YR7/4 外) 浅黄橙7.5YR8/3 断) 灰白7.5YR8/2	頸部はやや強く屈曲し、端部はヨコナデにより僅かに肥厚し、外径する平坦 面をなす。頸部以下胴部上位をナデ調整、下位はヘラケズリを施す。反転
3	図20	弥生土器 壺	4 L7w9	3層	(14.6)	残5.2		口縁25%	内) 暗灰N3/ 外) 褐灰5YR5/1～6/1 断) にふい橙7.5YR6/4	頸部はやや肥厚し、口縁部は外側に僅かに折り返してヨコナデを施す。外 面へラ状工具によるナデ調整。内面はナデ調整。反転復元。
4	図20	弥生土器 壺	4	3層		残4.5		不明	内) 浅黄橙7.5YR8/3 外) 断) 浅黄橙7.5YR8/6	口縁部はヨコナデにより水平の平坦面をなす。貼付突帯上に帯状の粘土を 貼付する。胎土は1～3mmの白色砂粒及び雲母片を含む。
5	図20	弥生土器 壺	4	23(アゼ)	(16.3)	残12.5		20%	内) 黄灰 2.5Y6/1 外) 浅黄橙7.5YR8/4 にふい橙7.5YR6/4	頸部は強く屈曲し、口縁部はヨコナデ調整し上方につまみ上げる。内外 面は摩滅著しく、調整不明瞭。反転復元。
6	図20	弥生土器 台付き 鉢?	4	49	(13.8)	残5.0		16%	内) にふい橙7.5YR6/4 外) にふい橙7.5YR6/3-5/3 断) 灰5Y5/1-4/1	口縁部は肥厚させ僅かに外傾する平坦面をなす。外面は板状工具による ナデ調整、内面は剥離著しく調整不明。反転復元。
7	図20	土器 壺	4	26	(10.0)	残5.5		15%	内) 橙5YR7/6 外) 橙5YR6/6 断) にふい橙7.5YR7/4	頸部は強く屈曲し口縁部は上方につまみ上げる。外面はハケ状工具に よるナデ調整か。反転復元。
8	図20	弥生土器 壺	4	50	(29.5)	残10.5		10%	内) 橙5YR6/8 外) 明赤褐5YR5/6 断) 灰N5/	口縁は緩やかに屈曲し、頸部に2条の凹線文を施す。反転復元。
9	図20	弥生土器 壺	4	26 底		残5.2	8.6	底部100%	内) 明褐灰7.5YR7/2 外) 明褐灰7.5YR7/2 褐灰7.5YR5/1	底部のみ。外面はケズリ及びナデ調整。内面は9本/cmのハケ調整のほか、 ユビオサエ痕跡あり。反転復元。
10	図20	弥生土器 壺	4	57付近		残3.0	7.0	底部100%	内) 外) にふい橙7.5YR7/4 断) 橙7.5YR6/6	内外面摩滅著しく、調整不明瞭。外面はハケ調整による。一部反転復元。
11	図20	土製品 紡錘車	4	58	3.5	0.5	3.7	70%	内) にふい赤褐5YR5/4 外) 橙5YR6/6 断) 灰N6/	土器片を再利用した紡錘車か。一部欠損あり。
12	図20	弥生土器 直口壺	4	50(アゼ)	(14.0)	残7.8		口縁20%以下	内) 浅黄橙10YR8/3 外) にふい黄橙10YR7/4 断) 灰白10YR8/2	内外面とも摩滅著しく、調整不明瞭。外面は10本一単位とする直線文を3条 施す。一部反転復元。
13	図20	弥生土器 鉢	4	51	(14.6)	7.9	(6.9)	20%	内) 外) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰N6/ 断) 灰N6/	内外面とも摩滅著しく、調整不明。口縁部に刻み目を施す。
14	図20	弥生土器 細頸壺	4	59	(10.0)	残5.5		口縁30%	内) 外) にふい橙7.5YR7/4～6/4 断) 灰N6/	口縁部はヨコナデ調整し水平の平坦面をなす。口縁は凹線文3条。その 下位に波状文を施す。反転復元。
15	図20	弥生土器 壺	4	59	(19.8)	残7.5		口縁30%	内) 外) にふい橙7.5YR7/4 断) 不明	頸部を強く屈曲させる。口縁は端部を肥厚させて上方につまみ上げ、一部 に刻み目を施す。頸部以下胴部は粗いケ目あり。反転復元。
16	図20	弥生土器 壺	4	59	(18.8)	残7.2		25%	内) 外) 橙5YR6/8 断) 灰7.5Y6/1	内外面とも摩滅著しく調整不明。反転復元。
17	図20	弥生土器 直口壺	4	64	(12.3)	残14.4		口縁25% 頸部75%	内) 断) 浅黄橙10YR8/3 外) にふい橙7.5YR7/3	口縁部はヨコナデ調整し僅かに内傾する平坦面をなす。内外面摩滅著 しく調整不明瞭。外面は縦方向のナデ調整。反転復元。
18	図20	弥生土器 広口細頸 壺	4	60	(10.8)	残6.8		口縁50%	内) 断) 黄橙7.5YR8/6 外) 橙5YR7/6 黄橙7.5YR8/6	小型の広口壺。摩滅著しく、調整不明瞭。口縁は端部をやや肥厚させ水平 に開いて受部状をなす。頸部は2条の突帯を貼付。一部反転復元。
19	図20	弥生土器 壺	4	77		残2.5		不明	内) 外) 断) 浅黄橙7.5YR8/3	口縁部のみ。端部に5～6本を1単位とする縦方向の刺突文を施す。
20	図20	弥生土器 直口壺	4	62	(18.2)	残5.9		10%	内) 灰白10YR8/2 浅黄橙10YR8/3 外) 灰白10YR8/2 にふい橙7.5YR7/4	3条の突帯を貼付し刻み目を施す。突帯の下位は波状文を施す。
21	図20	弥生土器 壺?	4	85		不明		10%以下	内) にふい黄橙10YR7/3 外) 断) にふい赤褐5YR4/4	壺か。擬流水文を施す。
22	図20	弥生土器 壺	4	59		残6.0	(5.4)	底部20%	内) 褐灰10YR6/1～5/1 外) にふい橙7.5YR7/4～6/4	胴部下位～底部のみ。外面はヘラケズリ後ナデ調整、内面は板状工具に よるナデ調整を施す。反転復元。
23	図20	弥生土器 壺	4	60(アゼ)		残6.8	7.4	底部100%	内) 黄灰2.5Y4/1 灰白2.5Y8/1 外) 黄灰2.5Y5/1 断) 黒褐2.5Y3/1	内外面とも摩滅著しく調整不明。底部はナデ調整。一部反転復元。
24	図20	弥生土器 壺	4	74		残2.8	6.4	底部100%	内) 断) 灰N5/ 外) 橙5YR7/6	内外面摩滅著しく、調整不明。一部反転復元。
25	図20	弥生土器 壺	4	78(アゼ)		残5.3	(9.6)	60%	内) 灰5Y6/1 灰N4/ 外) 浅黄橙10YR8/3 にふい黄橙10YR7/3	内外面摩滅著しく、調整不明瞭。外面はケズリ、内面はナデ調整による。底 部外面はナデ調整。反転復元。
26	図20	弥生土器 壺	4	78		残8.0	8.4	底部100%	内) 断) 灰白5YR8/1 外) 橙5YR6/8	底部のみ。外面は幅の広いミガキ、内面はナデ調整による。底部内面に指 頭痕あり。反転復元。
27	図20	弥生土器 壺	4	75	(23.0)	残10.4		口縁10%	内) 橙5YR6/6 外) 明黄褐10YR6/6～6/6 断) 灰N5/	口縁部はヨコナデ調整し端部はやや外傾する平坦面をなす。頸部以下 胴部上位をナデ調整、下位はヘラケズリを施す。反転復元。
28	図20	弥生土器 壺	4	91		残12.6	(6.0)	10%	内) 淡黄2.5Y8/3 外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰5Y5/1	摩滅著しく調整不明瞭。外面はヘラミガキの痕跡あり。内面はヘラ状工具 によるナデか。反転復元。
29	図21	青磁 杯?	5	井戸内		残2.4	(5.9)	10%以下	釉色) 緑灰7.5GY6/1～5/1 断) 灰白N8/	胎土は精良で有は深い青碧を呈する。高台皿付は釉を掻き落とし、掻き落 し部分は赤く色する。高台は削り出し。太宰府編年Ⅲ-1か。

大古II遺跡

30	図21	陶器唐津小鉢	5	4埋桶	11.2	3.3	4.6	70%	釉色) オリーブ灰10Y5/2 断・無釉) 灰白10YR8/1~7/1	内面及び外面上位施釉。目跡4箇所残る。唐津焼。		
31	図21	陶器唐津小鉢	5	4埋桶	(13.4)	4.1	5.6	底部100%	内) 灰白2.5Y8/1 外) 橙5YR7/6 橙5YR6/6 釉色) 灰白2.5Y8/1 断) 橙5YR7/6	内面及び外面の高付近まで施釉。目跡4箇所か。唐津焼。		
32	図21	瓦質土器羽釜	5	1井戸内				残4.9	10%以下	内) 灰N6/ 外) 灰5Y6/1 断) 灰白N8/	やや上反する短い鏝を内傾する口縁部付近につける。鏝の下面は煤の付着あり。	
33	図21	土師器壺	5	L7o12.1				26.0	残7.9	25%以下	内・外・断) にぶい橙7.5YR6/4	頸部強く屈曲する。口縁端部はヨコナデを施し僅かに肥厚する。口縁部内面はハケ調整、外面はハケ後ナデ。反転復元。
34	図21	陶器灯明皿	3	中央攪乱	(8.8)	1.5	(4.4)	口縁40%	内) 橙5YR6/8 外) 橙5YR7/6 断) 浅黄橙7.5YR8/6	口縁部内面及び見込みに透明釉を掛ける。底部は糸切り痕を残す。灯芯の痕跡あり、灯明として使用か。反転復元。		
35	図21	陶器播鉢	5	L7u11	近世礫	(35.4)		残12.3	20%	内・外) 橙2.5YR6/6 断) 明赤褐2.5YR5/6		
36	図22	弥生土器壺	3	第1遺構面直上3層	(16.2)			残8.4	口縁15%以下	内・断) にぶい黄橙10YR7/3 外) 橙5YR6/6	内外面とも摩滅が著しく調整不明。口縁端部をヨコナデ。胴部にケズリを施す	
37	図22	東播系須恵器鉢(片口?)	3	2層				残6.2	10%以下	内・断) 灰N6/ 外) 口縁端部 灰N4/、その他 灰N6/	粘土紐接合痕が顕著である。内外面を回転ナデ。口縁部は外側に肥厚させ底部を僅かに内溝させる	
38	図22	土製品有溝土鉢	3	4層中央凹み	7.6	4.1	4.0	90%		灰白10YR8/2	有溝土鉢	
39	図22	須恵器坏?碗?	6	2層				残2.2	14.2	高台部 25%	内・外・断) 灰白N7/	高台を貼付後、ナデ調整を施す。見込み周縁に指爪状の圧痕あり
40	図22	弥生土器壺	7	箱蓋3-2上面	(24.4)			残6.1	口縁20%	内) 淡黄2.5Y8/3 外) 橙5YR6/6 断) にぶい褐7.5YR6/3	内外面とも摩滅が著しく調整不明。口縁は「J」字に屈曲し端部を僅かに上方へつまみ上げる	
41	図22	弥生土器壺	7	包含層3-1層				残6.1	(7.0)	底部80%	内・断) にぶい黄橙10YR7/3 外) にぶい黄橙10YR6/3	内面は摩滅が著しく、調整不明。外面は4から6本/cmのハケ調整を施す。底面はナデ調整を施す。
42	図22	弥生土器?	7	3-1層					5%以下	内) にぶい黄橙10YR7/4 外) にぶい黄橙10YR6/4	壺肩部か。沈線及び半割りの竹管状工具で刺突文を線状に施す。	
43	図22	弥生土器壺	7						10%以下	内・断) にぶい褐7.5YR5/4 外) 褐7.5YR4/3	沈線で区画された中にへら描き文を施す	
44	図22	土師器皿	7	2	(13.5)	2.7	(10.6)	55%	内・外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/8	口縁部をヨコナデ調整し底面はナデ調整する。		
45	図22	土師器坏?皿?	7	2	(13.6)	3.0	(9.6)	口縁25%	内・外) 橙5YR7/6~7/8 断) 橙2.5YR6/6	内外面は摩滅が著しく、調整不明		
46	図22	土師器碗	7	2	(12.0)	残2.9	不明	20%	内) 浅黄橙10YR8/4 外・断) 灰白色5Y8/2	体部外面はヨコナデ。胎土は径1mm未満の石英粒を含み、雲母片を僅かに含む。内外面摩滅著しい		
47	図22	土師器皿	7	2	(16.4)	3.3	(13.4)	口縁40%以上	内・断) にぶい橙5YR7/4 外) 橙5YR7/6	口縁部はヨコナデし底部から屈曲して立ち上がり外反させる。底面は未調整。口縁内面はミガキか。		
48	図22	土師器碗	7	2	(17.4)	残5.1	不明	20%	外・断) にぶい橙5YR7/4 褐灰10YR4/1 内) にぶい黄橙10YR6/3	口縁部をヨコナデ調整する。内面はミガキかとみられ、外面はケズリ後、ミガキを施す。摩滅著しく調整不明		
49	図22	土師器碗	7	2北端	(16.4)	残4.4		15%	内) 灰N4/~暗灰N3/ 外) にぶい黄橙10YR5/3 灰N4/	内面はミガキ後黒化処理を施す。外面はミガキ調整。		
50	図22	弥生土器直口壺	7	4南半	(14.2)	残4.0		13%	内) にぶい黄橙10YR7/4 外・断) 灰5Y4/1 黒7.5Y2/1	摩滅著しく、調整不明。口縁端部外面に刻み目、口縁部下位に刺突文か。		
51	図22	弥生土器壺	7	4	(25.2)	残5.4			口縁25%以下	内・外) 橙7.5YR7/6 断) オリーブ灰5Y6/1	口縁端部は水平方向の櫛描き文後刺突文、口縁部下位に水平方向の貝殻条痕文。伊勢湾西岸産か。	
52	図22	弥生土器細頸壺	7	4	(10.9)	残12.7		30%	内) 橙7.5YR6/6 外) 明黄褐10YR7/6 断) 不明	口縁部から頸部のみ。受け口状口縁をなす。口縁部外面に沈線文。一部反転復元。		
53	図22	弥生土器壺	7	4		残10.3			頸部約25%	内) 浅黄橙10YR8/3 外) 橙7.5YR7/6 断) 黄灰2.5Y4/1	頸部に突帯を貼付後、ユビオサエ。反転復元	
54	図22	弥生土器細頸壺	7	4南半	(11.8)	(7.7)		25%	外) 浅黄2.5Y7/3 にぶい黄2.5Y6/3 断) 灰5Y1/1	口縁端部はヨコナデにより、水平につくる。口縁部上位に3条の凹線文を施し、その下位に波状文を施す。内外面摩滅著しく、調整不明。反転復元。		
55	図22	弥生土器壺	7	4		残7.3		10%以下	内) 橙5YR6/6 外) 橙7.5YR6/6 断) 暗灰N3/	頸部は屈曲が強く、口縁端部はヨコナデにより、外傾する平坦面をなす。内外面は摩滅著しく調整不明。		
56	図22	弥生土器高杯	7	4	(25.4)	残5.0		10%以下	内) 黄灰2.5Y5/1 外・断) 橙7.5YR7/6	口縁端部はヨコナデにより水平につくる。口縁部は3条の凹線を施す。内外面は摩滅著しく調整不明。反転復元。		
57	図22	弥生土器壺?鉢?	7	4北半	(14.0)	残5.0		口縁20%以下	内) 明黄橙10YR7/6 外) 橙7.5YR7/6 断) 灰5Y4/1	内外面は摩滅著しく調整不明。反転復元。		
58	図22	弥生土器高杯	7	4 取り上げの下		残6.4			脚部20%以下	内・断) 灰黄2.5Y7/2 外) 橙2.5YR6/6	内外面は摩滅著しく調整不明。内面はナデ及びユビオサエ調整。胎土は1~3mmの長石、雲母粒を多量に含む。反転復元。	
59	図22	弥生土器鉢?	7	4	(27.2)	残5.3			口縁20%以下	内) 淡黄5YR8/3 灰白10YR7/1 外) 浅黄橙10YR8/4 断) 褐灰10YR5/1	口縁端部は僅かに内傾する平坦面をなす。外面に刻み目を施す。内面ヨコナデ調整。反転復元。	
60	図22	弥生土器壺	7	4		残6.1	(9.8)	底部100%	内) 赤橙10R6/8 黄灰2.5Y6/1 外) 灰黄褐10YR6/2 橙7.5YR7/6	胎土は片岩礫を少量含む。外面は幅の広いミガキ、内面はナデを施す。反転復元。		
61	図22	弥生土器壺	7	4		残3.4	(7.0)	底部40%	内) 灰白2.5Y8/2 外) 浅黄橙2.5YR8/6 浅黄橙10YR8/4	内外面は摩滅が著しく、調整不明。反転復元。		
62	図22	弥生土器壺	7	4		残5.6	6.8	底部100%	内) 灰白10YR8/1 外) 灰黄褐10YR6/2 灰白10YR8/1	内外面は摩滅が著しく、調整不明。外面はハケ状工具によるナデか。内面はナデ調整。反転復元。		
63	図22	弥生土器壺	7	4		残11.8	(10.0)	底部30%	内) 淡黄2.5Y8/3 外) にぶい黄2.5Y6/3 断・一部内) 黒褐2.5Y3/1 暗灰黄2.5Y4/2	外面はケズリ後ミガキを施す。内面はナデ及び、底部は工具によるナデ痕あり。底面はへら状工具によるナデ調整。反転復元。		
64	図22	弥生土器広口壺	7	5	(36.2)	残3.1		16%	内・外) 明赤褐5YR5/6 黄褐2.5Y3/3 灰5Y5/1 断) 黄灰2.5Y4/1 暗灰黄2.5Y5/2			
65	図22	弥生土器広口壺	7	5	(36.0)	残6.5			口縁10%	内) 灰N6/~5/ 外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 灰N6/		
66	図22	弥生土器壺	7	5	(32.6)	残7.3			口縁10%	内) 橙5YR7/6 灰白2.5Y7/1 外) 橙5YR6/6 灰N4/	摩滅著しく、調整不明。頸部は強く屈曲する。口縁端部をやや上方につまみ上げ外傾する平坦面をなす。反転復元。	
67	図22	弥生土器壺	7	4		残6.5	8.6	底部100%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 赤橙10R6/6 橙2.5YR7/6	摩滅著しく、調整不明。内面は棒状工具により押し当て痕跡あり。底部外面はユビオサエ痕あり。反転復元。		
68	図22	弥生土器広口壺	7	5	(17.8)	残9.2			口縁20%	内) 橙5YR6/8 外) 灰白10YR8/2 橙7.5YR6/8 断) 不明	摩滅著しく調整不明。口縁は端部を平坦につくり、は縄文を施す。受部は刺突列点文か。頸部は2条の突帯を貼付、ナデを施す。反転復元。	
69	図23	弥生土器壺	7	30		残16.3	13.0	底部100%	内) にぶい黄橙10YR7/3 褐灰10YR5/1 外) 黄灰2.5Y5/1 にぶい黄橙10YR7/2	外面は縦方向のハケ目(6~7本/cm)を施す。内面はナデ調整及び指頭圧痕を残す。一部反転復元。		
70	図23	弥生土器壺	7	36		残7.7			頸部50%以下	内・外) 浅黄橙7.5YR8/4 断) 灰7.5Y5/1	頸部のみ、摩滅著しく調整不明。櫛描き文を施す。頸部は2条の突帯を貼付。反転復元。	
71	図23	弥生土器壺? 絵面土器	7	37		残6.8			10%以下	内) 灰白N7/ 外) にぶい橙7.5YR7/4 断) 灰白10YR8/2	絵面土器。外面はハケ調整。内面は摩滅著しく調整不明であるが、ハケ目が認められる。	
72	図23	弥生土器壺? 絵面土器	7	42		残6.2			10%以下	内) 灰白N7/ 外) にぶい橙7.5YR7/4 断) にぶい黄2.5Y6/3		
73	図23	弥生土器広口壺	7	50		残4.6			不明	内) 橙5YR6/6 外) にぶい橙5YR6/4 断) 橙5YR7/6	口縁部か、貼付突帯に指頭圧痕。端部上面は刻み目のほか波状文か。	
74	図23	弥生土器広口壺	7	45	(14.0)	残8.9			口縁25%	内) にぶい黄橙10YR7/4 外) 橙5YR7/6~6/6 断) 灰N4/	小型の広口壺。摩滅著しく、調整不明。口縁はヨコナデし、端部をやや肥厚させ垂下させる。頸部は2条の突帯を貼付。反転復元。	
75	図23	弥生土器壺	7	50	(16.0)	残6.2			口縁20%以下	内・外・断) 橙7.5YR7/6	口縁部は上位をやや内傾させ、受け口状につくる。端部は僅かに内傾する平坦面をなす。口縁端部外面に竹管状工具による刺突文を施す。反転復元。	
76	図23	弥生土器壺	7	37	(26.0)	残7.3			15%以下	内・外) 橙7.5YR7/6 内頤から下) 黄灰2.5Y6/1 断) 灰7.5Y4/1	頸部はやや強く屈曲し、端部をやや肥厚させ凹面状をなす。頸部以下をハケ調整後ナデを施す。内面はナデ調整。反転復元。	
77	図23	弥生土器壺	7	101	(14.6)	残3.9			口縁12%	内) 橙5YR7/6~7/8 外) にぶい橙7.5YR7/4 断) 橙7.5YR7/6	口縁部はヨコナデ調整(端部を上方につまみ上げる。内面はナデ調整。外面はハケ調整。反転復元。	
78	図23	弥生土器壺	7	60		残1.9	7.6	底部100%	内・断) 橙2.5YR6/8 外) 明赤褐2.5YR5/8	摩滅著しく、調整不明。胎土は径1~5mmの白色砂粒、雲母片を含む。反転復元。		
79	図23	弥生土器壺	7	101		残4.1	6.0	65%	内) 灰白10YR8/2 灰白2.5Y8/2 外) にぶい黄橙10YR7/3/7/4	内外面とも摩滅著しく調整不明。外面はハケ調整、内面はナデ調整か。一部反転復元。		
80	-	緑釉陶器碗?	2	機械掘削時		残1.6	6.3	高台100%	釉色) 灰白2.5Y8/2 断・外) 灰白2.5Y8/2	削り出しによる。中央がやや上方に凹む円盤状の平高台。摩滅著しい。透明~淡緑色の釉を全面に施釉。山城産か。		

大古II遺跡

石器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	器種	調査区 地区	遺構 層位	最大 長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
81	図17	打製石器 石鏃(有 茎)	1 M6g25		5.1	2.8	0.4	3.8	サヌカイト	100%	有茎式
82	図17	打製石器 石鏃?	1 M7j3	3層	4.2	3.6	0.6	10.6	サヌカイト	100%	無茎式の石鏃またはその未製品、または刃器の可能性あり。先端を欠損する。一部に原稜面を残す。
83	図17	打製石器 刃器?	1 M7h2	3層	5.5	8.9	1.6	59.7	不明 安山岩?	100%	稜面を残す剥片に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。刃部の一部は磨滅が認められる。
84	図17	打製石器 刃器?	1 M6h25	3層	6.9	7.5	1.4	9.73	頁岩	100%	扁平な円礫の一部を打ち欠いた直線的な縁辺に、両面から剥離を施し刃部をつくる。
85	図17	礫石器 台石	1 M7h2	3層	16.2	17.0	4.3	1655.0	砂岩	不明	両面に磨滅及び敲打痕あり。一部を欠損
86	図17	打製石器 石鏃 未成品?	2 M7b6- b5	3層	3.8	1.9	0.8	4.2	頁岩	100%	石鏃未製品か。両面から剥離を施す。
87	図17	打製石器 刃器?	2 M7c4- d4	3層	6.4	3.9	1.6	49.8	サヌカイト	100%	稜面を残す剥片に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。
88	図17	打製石器 刃器?	2 M7b6- b5	3層	4.5	3.2	1.1	22.5	頁岩または粘 板岩	100%	稜面を残す剥片の縁辺2辺に両側から剥離を施し、刃部をつくる。
89	図17	打製石器 スクレイ パー?	2	1 平面精査	5.8	4.8	0.9	35.5	頁岩	100%	両側縁を剥離し刃部をつくるが、一方に磨滅が認められる。
90	図17	打製石器 スクレイ パー?	2 M7c5- b5 c6-b6	3層	5.3	4.4	0.8	18.5	頁岩または粘 板岩	100%	剥片の一片に両面から剥離を施し、刃部をつくる。
91	図17	打製石器 スクレイ パー?	2 M7c4- d4	3層	5.7	4.0	0.7	18.0	頁岩	100%	稜面を残す剥片の側縁に剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
92	図17	打製石器 スクレイ パー?	2 M7b7-5	3層	5.7	4.1	1.0	28.1	サヌカイト	100%	稜面を残す剥片の側縁に剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
93	図17	打製石器 石斧?	2 M7c7	3層	7.1	6.3	1.5	71.2	頁岩	100%	打製石斧刃部か。やや扁平な円礫。両側縁に剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。部分的に稜面を残す。
94	図17	礫石器 敲石	2	機械掘削	12.0	11.1	3.4	603.5	砂岩	80%	やや扁平な円礫。両面及び側面の計3箇所に敲打痕跡あり。
95	図17	礫石器 敲石	2 M7c6	3層	11.0	9.1	5.7	762.5	砂岩	100%	敲石。砂岩。扁平な円礫。両面及び側面の計4箇所に敲打痕跡あり。
96	図17	打製石器 刃器?	2 M7b7	3層	9.2	5.2	1.9	87.0	頁岩または 粘板岩	100%	円礫の稜面を残す剥片に内湾する弧状の刃部をつくる。
97	図17	打製石器 刃器?	2 M7b7-8	1	7.8	4.7	0.7	39.9	頁岩	100%	剥片の一边に連続的な剥離を施し刃部をつくる。
98	図17	打製石器 刃器?	2 M7a6-7	1 下層	6.9	7.0	1.6	75.9	サヌカイト	100%	二辺に両側から剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
99	図17	打製石器 刃器?	2 M7b7-8	1	5.4	4.3	1.0	25.8	頁岩または 粘板岩	100%	稜面を残す剥片の三辺に両側から剥離を施し、刃部をつくる。刃部にはわずかに磨滅が認められる。筥状の形態をとる。
100	図17	打製石器 刃器?	2 M7a6-7	1 1層	6.8	3.3	1.1	31.3	頁岩	100%	半裁した円礫に対し縦方向に剥離した剥片とみられ、一边に片側からの剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
101	図17	礫石器 敲石	2 M7b7-8	1	7.9	7.0	2.6	196.4	砂岩	不明	敲石または台石。片面に著しい磨滅が認められ、両面に敲打痕跡を残す。2箇所の欠損部分は使用後に破砕したことによるとみられる。
102	図17	礫石器 石皿	2 M7b7-8	1 上層	10.0	10.4	4.4	466.0	砂岩	60%	両面に磨滅がみられる。一部欠損部分は他の部分同様に風化あり。使用後に破砕か。
103	図18	打製石器 刃器?	4 L7u8-t8	3層	5.6	5.4	1.4	41.0	サヌカイト?	100%	2辺に連続的な剥離を両面から施し、やや内湾する刃部をつくるが、両辺の交点は鋭角をなす。
104	図18	打製石器 石斧?	4 L7u10-t 10	3層	6.8	4.8	1.4	50.8	頁岩	100%	側縁2辺を剥離しており、刃部及び基部の一部を欠損した石斧の可能性が有る。
105	図18	打製石器 刃器?	4 L7w8- v8	3層	4.0	2.7	0.65	8.0	頁岩または粘 板岩	100%	主要剥離方向に沿う2辺に連続的な剥離を施す。
106	図18	打製石器 刃器?	4 L7w9	3層	3.6	4.5	0.4	41.8	頁岩	100%	2辺に両面からの連続的な剥離を施し刃部をつくる
107	図18	打製石器 刃器?	4 L7v8- w9	1 精査	5.1	3.5	0.9	13.4	頁岩	100%	2辺に両面からの連続的な剥離を施し刃部状をつくる。一方にはそれに直交する擦痕が認められる。
108	図18	礫石器 刃器?	4 L7s7-t8 s8	3層	6.0	3.7	0.9	31.6	頁岩または粘 板岩	100%	扁平な礫の両端に両面から剥離を施して刃部を設ける。刃部は階段状に調整を連続的に施す。
109	図18	打製石器 刃器?	4 L7u6	試掘トレ ンチ埋土	15.9	10.2	2.8	448.5	頁岩?	100%	剥片の3辺に対し、両面から剥離を施して刃部を設ける。うち2辺の刃先角度は鋭い。
110	図18	磨製石器 石包丁	4 L7s7-t8 s8	3層	9.1	4.8	0.6	8.6	片岩	100%	円礫を剥離し、剥離面に研磨を加える? 稜面多く残存する。一部を欠損する。
111	図18	打製石器 石斧・石 鏃	4	排土中	7.7	4.5	1.6	52	頁岩	100%	刃器或いは石斧の一部か。一端に僅かな剥離を施し刃部をつくる。
112	図18	打製石器 石鏃	4		3.3	1.8	0.45	2.2	頁岩	100%	石鏃未製品か。
113	図18	礫石器 敲石	4	排土中	16.8	12.5	6.3	1908.0	砂岩	不明	層理面の1面及び側面が著しく磨滅する
114	図18	打製石器 石鏃	4	83	3.5	2.1	0.4	2.6	頁岩	95%	有茎式。先端を欠損する。
115	図18	二次加工剥片	4	61	2.6	2.1	0.4	1.8	頁岩	100%	側縁に調整?
116	図18	打製石器 石鏃	4	32	7.9	2.3	0.9	11.1	頁岩	100%	有茎式。両面とも、基部から先端方向へ側縁を連続的に剥離する。
117	図18	打製石器 石鏃(未成 品)	4	50	2.6	1.7	0.4	2.0	頁岩	100%	未製品か
118	図18	打製石器 石鏃	4	63	3.05	(2.5)	0.5	2.8	頁岩	80%	無茎式。
119	図18	打製石器 刃器?	4	32	2.4	2.8	0.6	4.9	頁岩	d	稜面剥片の3辺に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。
120	図18	打製石器 石斧?	4	60	7.3	6.7	2.1	91.0	安山岩	100%	刃部及び基部の大部分を欠損した石斧か。両側縁に剥離を施す。
121	図18	打製石器 刃器?	4	60	2.9	2.2	0.5	3.0	頁岩または粘 板岩	100%	稜面を含む剥片の2側縁を剥離調整し刃部をつくるが、片方は刃溝状となる。
122	図18	打製石器 不明	4	21	3.0	0.6	0.4	0.9	頁岩または粘 板岩	100%	稜面を含む縦長の剥片先端部を剥離調整する。
123	図18	打製石器 石匙?	4	77	4.7	3.3	0.9	12.8	頁岩または粘 板岩	100%	稜面を含む縦長の剥片先端部に剥離を施す。

報告書 番号	図・ 図版番号	器種	調査区 地区	遺構 層位	最大 長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
124	図18	打製石器 スクレイ パー?	4	50	5.75	3.55	0.8	19.0	頁岩または粘 板岩	100%	礫面を残す剥片の3辺に剥離を施し刃部をつくる。うち側縁2辺は直線的につくる。
125	図18	打製石器 スクレイ パー	4	49	3.2	2.9	1.0	7.8	頁岩または粘 板岩	100%	2辺を剥離調整し刃部をつくる。
126	図18	打製石器 スクレイ パー	4	77	4.1	2.9	0.9	10.1	頁岩または粘 板岩	90%	剥片の1辺を剥離調整し刃部をつくる。刃先角度はにぶい。
127	図19	打製石器 スクレイ パー?	4	47	4.0	4.1	0.6	10.5	頁岩	100%	剥片の3辺を剥離調整し刃部をつくる。
128	図19	打製石器 石斧?	4	55アゼ	(6.0)	(6.8)	(1.0)	47.6	頁岩	不明	石斧刃部か
129	図19	打製石器 刃部	4	71	7.7	5.6	1.4	70.9	サヌカイト	100%	剥片の3辺を剥離調整し直線的な刃部をつくる。
130	図19	磨製石器 石斧(片)	4	74	(7.0)	5.9	4.2	243.1		不明	礫の両端に剥離を施す。刃先の角度は鈍く、敲打によるとみられる磨滅がみられる。石器製作時等に間接的な打撃を行うための工具か。
131	図19	打製石器 スクレイ パー?	4	63	5.5	3.9	1.4	35.4	頁岩または粘 板岩	不明	礫面を残す剥片の3辺を剥離調整し直線的な刃部をつくる。No.124と同種の石器である可能性が高い。
132	図19	磨製石器 石斧(柱状 片刃石斧)	4	77	(5.5)	(2.2)	2.3	48.7	凝灰石	不明	
133	図19	工具?	4	70	7.9	4.2	2.45	98.2		100%	
134	図19	磨製石器 石斧(大型 給刃石斧)	4	63	9.4	5.2	4.0	321.0	粗粒玄武岩	100%	基部は大部分が欠損する。No.160と同種の石材を用いる。
135	図19	打製石器 石斧?	4	70	6.9	5.2	2.8	153.0	頁岩または粘 板岩	100%	礫の一部分に剥離を施し、刃先角度のにぶい刃部を設ける。
136	図19	石斧(?)	4	78	(8.1)	(4.5)	(1.4)	60.8	頁岩または粘 板岩	不明	礫面剥片の縁辺を主要剥離面から剥離調整する。扁平な礫の一端を、片面及び側面から研磨し刃部をつくる。2分の1以上を欠損の可能性あり。
137	図19	磨製石器 石斧	4	60	9.7	3.5	1.3	64.6	砂岩	100%	細長く扁平な礫の一端を、片面及び側面から研磨し片刃の刃部をつくる。ノミ状を呈する。
138	図19	砥石(片)	4	92	14.2	9.9	2.5	477.5	泥岩または細 粒の砂岩	不明	層理面で割れた扁平な礫の一面に、研磨によるとみられる線状の痕跡を残す。大部分を欠損する。
139	図19	礫石器 敲石	4	31	9.3	8.8	2.3	269.0	砂岩	100%	敲石または凹み石。円形の扁平な礫両面中央に複数の敲打痕跡を残す。
140	図19	礫石器 敲石	4	74	12.4	8.7	4.0	602.5	砂岩	100%	敲石または凹み石。楕円形のやや扁平な礫の両面中央に凹み及び敲打痕跡を残す。側面にも敲打痕跡とみられるものあり。敲石として使用か。
141	図19	礫石器 敲石	4	60	10.7	9.4	5.4	731.0	花崗岩	100%	やや扁平な楕円形の両面中央に凹み及び敲打痕跡を残す。
142	図19	軽石製品	4	62	7.8	7.8	4.0	53.3	火山砕屑物 (軽石)	100%?	多孔質で形状は低い三角柱に近い。各面は磨滅しているものとみられるがほぼ平坦である。漂着物か。
143	図19	礫石器 台石(石 皿)	4	73	33.7	35.2	8.6	14800	砂岩	100%	台石または石皿。集石遺構から出土。石礫。頁岩。有茎式。一部分を欠損する。
144	図19	打製石器 石礫	5 L7p11	2(ピット)	3.5	1.5	0.45	2.5	サヌカイト	100%	尖基式。一部分を欠損する。
145	図19	打製石器 石礫?	5 o10・11 p11	1精査	2.8	2.1	0.3	1.5	サヌカイト	100%	無茎式の石礫とみられ、一部分を欠損する。
146	図19	打製石器 石礫	5 L7o13 n13		1.4	2.0	0.3	1.0	チャート(青灰色)	不明	石礫。チャート。無茎式。先端部分を欠損する。
147	図24	礫石器 台石	3	2層	7.5	7.5	3.7	327.5	砂岩	100%	台石または敲石。直方体の扁平な礫。両面に敲打痕跡あり。
148	図24	磨製石器 砥石	3	3-1 1層	17.7	5.8	6.1	1094.5	砂岩	不明	直方体の相対する2面に著しい磨滅が認められる。使用後に破砕か。
149	図24	打製石器 石斧・石 鏃	3南 南西端	3溝 最下層	10.2	6.1	2.1	130.0	頁岩または粘 板岩	100%	両側縁を階段状に剥離し、中央付近が凹み分銅形をなす。刃部は磨滅が著しく、縦方向の擦痕が認められる。
150	図24	礫石器 敲石	3北西	1溝 中層	10.2	6.7	4.7	414.5	砂岩	50%	残存部分は2分の1程度とみられ、意図的に破砕された可能性がある。4箇所に敲打痕が認められ、うち1箇所は著しく磨滅した部分に認められる。
151	図24	礫石器 敲石・擦り 石	3	4中央凹み	8.3	5.4	3.9	302.0	砂岩	90%	残存部分は4分の1程度とみられ、意図的に破砕された可能性がある。礫表面の3箇所に敲打痕跡。1か所に著しい磨滅がみられる。
152	図24	礫石器 敲石	3中央	4中央凹み	18.8	5.3	3.0	539.5	砂岩	100%	細長く扁平な直方体をなし、端部の一方は両面に敲打痕跡を残す。随所に磨滅がみられるが、使用時のものか不明。
153	図24	礫石器 台石?敲 石?	7	5西半	25.6	8.6	5.3	2117.0	砂岩	100%	僅かに敲打痕跡を残す。1か所に人為的とみられる磨滅が認められる。
154	図24	礫石器 敲石	6東端	機械掘削	14.7	9.6	4.3	847.0	砂岩	100%	扁平な両表面に敲打痕跡が認められる。側縁の1か所に著しい磨滅が認められる。
155	図24	打製石器 石礫	7	102 3-2層	3.7	2.4	0.7	5.0	頁岩	100%	先端付近は両面から交互に剥離し、刃部をつくる。剥離は刃部先端から基部へ向けて施す。円礫表面付近を利用か。僅かに原礫面を残す。
156	図24	打製石器 石斧	7	4 取り上げ 3の下	7.9	6.2	1.0	55.5	サヌカイト?	不明	打製石斧。両側縁を階段状に剥離する。刃部及び基部を欠損か。
157	図24	打製石器 スクレイ パー?	7	5西半	5.2	3.8	0.8	13.0	頁岩	100%	礫面を残す剥片の2辺を比較的丁寧に剥離し、その交点となる先端部を尖らせるが、他辺1辺に粗い剥離を施しており、刃部が開く台形を呈する石器となる可能性がある。
158	図24	打製石器 スクレイ パー	7	60	4.4	4.1	1.2	17.0	頁岩	100%	両面から剥離し刃部をつくる。刃部角はにぶい。円礫を利用。僅かに原礫面を残す。
159	図24	打製石器 スクレイ パー	7	22北半	4.5	5.4	1.2	38.5	サヌカイト	100%	2辺に剥離を施し、刃部をつくる。剥離は両面からなされるが、主に1面から著しく施される。
160	図24	磨製石器 石斧(大型 給刃石斧)	7	75	12.6	6.2	4.7	572.5	粗粒玄武岩	不明	粗粒玄武岩。基部を欠損する。刃部は著しく磨滅する。
161	図24	礫石器 敲石	7	5	18.2	13.5	10.6	4600	砂岩	100%	扁平な2面を含む3箇所に敲打痕が認められる。風化による剥離部分がある。
162	図24	打製石器 スクレイ パー	7西側 狭小部	3-1	4.3	3.1	1.6	20.0	頁岩	不明	刃部、側縁は大きく剥離したのち、細かく階段状の剥離を施す。刃部僅かに磨滅する。
163	図24	磨製石器 扁平片刃 石斧	7中央 東半	3-1	9.2	6.0	2.6	197.9	玄武岩質溶岩 (粗粒玄武岩)	不明	刃部の一部及び基部の大部分を欠損する。側面は一方のみを研磨する。
164	-	礫石器 台石	4	91	23.3	19.6	5.8	2800	砂岩	100%	集石遺構から出土。台石。粗粒砂岩。一面が著しく磨滅する。

第 4 節 稲成 I 遺跡

第 1 項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設予定地が田辺市稲成町の稲成 I 遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内にかかることから、県文化遺産課により平成 21 年度に試掘・確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、平成 23 年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、本調査を実施した。

第 2 項 位置と環境

1) 地理的環境

遺跡が立地するのは、標高約 30m の尾根状をなす丘陵の先端部である。この丘陵は南流する稲成川と荒光川に挟まれ、両河川により形成された狭小な沖積平野は本遺跡の東西両側において、それぞれ南北に長く延びる。両河川は遺跡の約南 300m 付近で合流し、更に会津川に合流する。田辺湾に注ぐ会津川の河口は、本遺跡から南へ約 1.7km の距離にあり、遺跡の立地する丘陵上からは眼下に平野と田辺湾を望むことができる。

遺跡の北側は尾根が連なり、周囲には紀伊山地の一端を占める山塊が連なるが、稲成川はその山間を縫うように北へ延びる。遺跡の所在する丘陵の南側は、調査前は畑地や果樹園として利用されていた。また斜

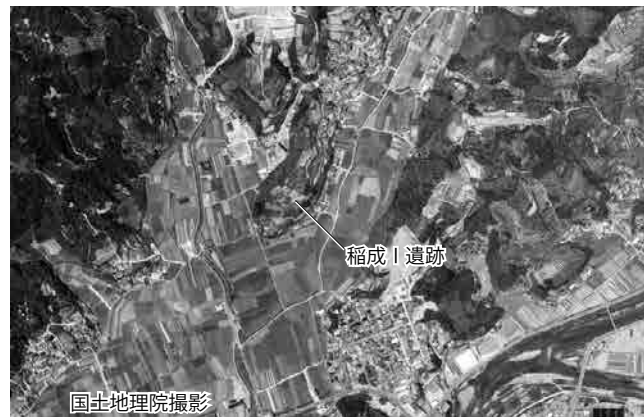


写真 1 調査地周辺の航空写真



図 1 地区割 大区画

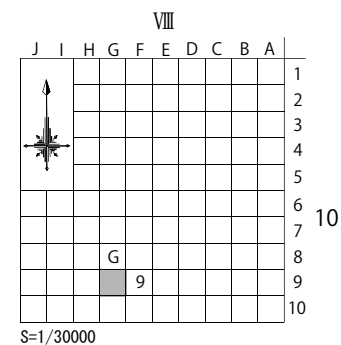


図 2 地区割 中区画

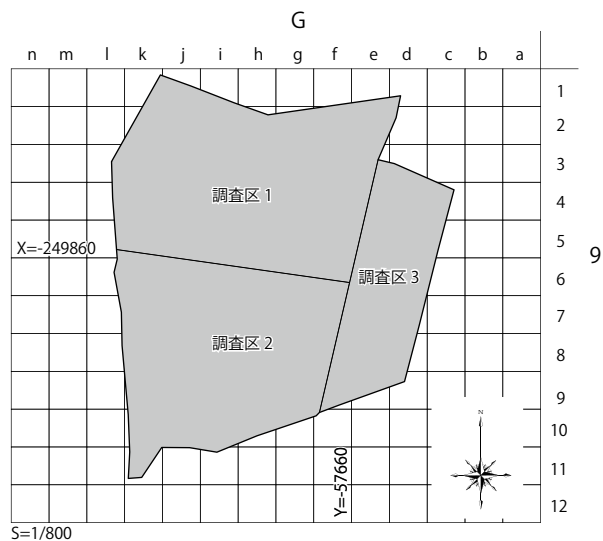


図 3 調査区及び小区画

面の中腹にはそのために造成されたとみられる 2 段の平坦地が存在しており、1974 年に国土地理院により撮影された航空写真（写真 1）でも、既に当該丘陵の東側斜面は荒光川に沿うように宅地または畑地として開発が進んでいる様子が窺え、また、周囲の尾根に囲まれた平野部に向けて半島状に突出した丘陵であることがよくわかる。

(2) 歴史的環境

旧田辺市域における各時代の歴史的環境は、「八丁田圃遺跡」の項で述べたとおりであり、ここでは稲成 I 遺跡周辺の遺跡に限り記すこととする。

稲成川流域において弥生時代の遺跡は奥江原遺跡 (24)、中の段遺跡 (26)、東江原遺跡 (27)、広芝遺跡 (45)、平谷遺跡 (22)、坊の谷遺跡 (44)、稲成 II 遺跡 (161) 等がある。これらはやや標高の高い場所に立地し、高地性集落と考えられる遺跡であるが、中でも富山遺跡 (42) は標高 80m に所在し、その防御的性格が指摘されている。また荒光川流域では標高 30m 程度の丘陵斜面に丸橋丘遺跡 (31) があり、芳養川流域、会津川流域でもやはり同様の遺跡がみられる。

古墳時代には稲成古墳 (28)、下村古墳 (40)、糸田古墳 (35) が築かれ、他に長田遺跡 (21) や北沖代遺跡 (39) がある。

奈良時代の遺跡としては、奥江原窯跡 (23)、小屋川瓦窯跡 (32) の他、丸橋丘火葬墓 (30)、峯の庄火葬墓 (67)、東江原火葬墓 (33) 等、台地上に火葬墓が営まれる。また、西沖代遺跡 (38) は古墳時代から平安時代頃まで続く遺跡で、土師器、須恵器のほか灰釉陶器や緑釉陶器が出土している。

第 3 項 調査の方法

(1) 地区割の方法

地区割りは図 1～3 に示すとおりである。稲成 I 遺跡の大区画は、八丁田圃遺跡第 1～3 次調査時の設定と同様に X=-240000、Y=-50000 を原点として設定している。

また、本調査における調査区 1・2・3 はいずれも、「VIII 10 G9」の範囲内に位置している。

更に、排土置き場の確保等、作業進行上の要請から、調査範囲を調査区 1～3 に分割して調査を進めた。まず調査区 1 について調査を実施した後、反転して調査区 1 の範囲に排土を移動し、調査区 2 及び 3 の調査を行っており、航空撮影・測量についてもこれに応じて 2 回に分け実施している。

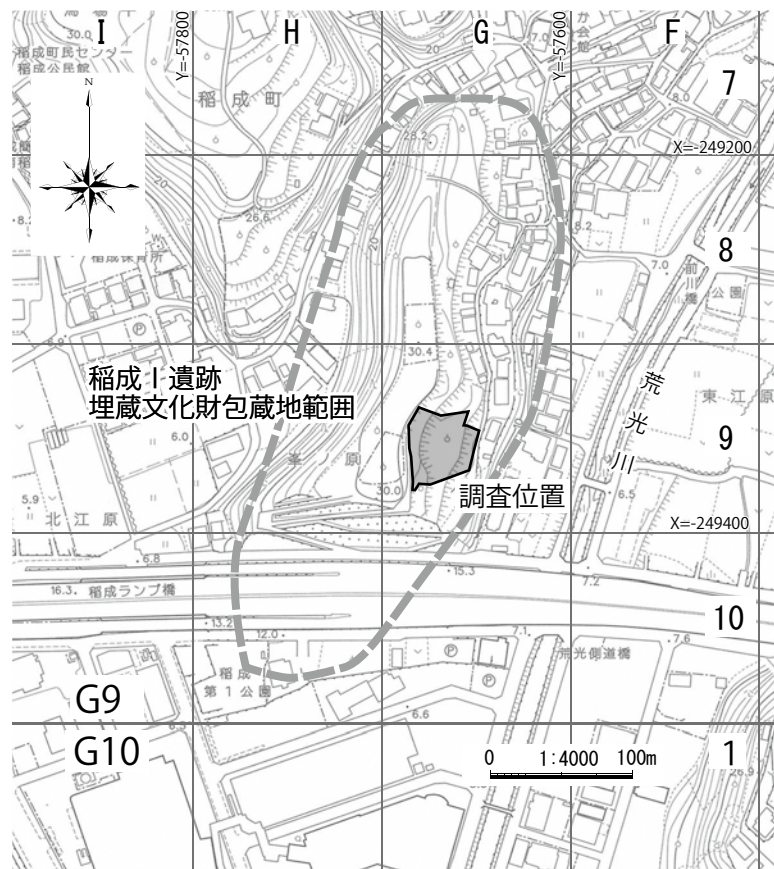


図 4 調査位置及び地区割（中区画）

(2) 基本層序

第1層 表土

第2層 2.5Y5/3 黄褐色土。礫を含む。遺物をほとんど含まない。

第3層 10YR3/2 黒褐色土。古墳時代から古代の遺物包含層である。

第4層 10YR4/4 褐色土。古墳時代の遺物包含層である。さらに分層が可能である

が、これは斜面が繰り返し崩落したことにより生じた土質の違いと考えられる。

第5層 10YR4/4 褐色土 上面が遺構検出面であるが、第5層の堆積が存在するのは調査区1及び調査区2の東端部分のみで、調査区内の一部の範囲に限られる。

第6層 10YR5/6 黄褐色土ほか。第5層の堆積がみられない部分では表土または第2層の直下に丘陵を形成する地盤層が露出しており、この地盤層上面が遺構検出面となるため、これらを総称して第6層とした。調査区1、2、3に共通して以上が基本層序となる。



写真2 基本土層 調査区セクションベルト1 (南から)

第4項 調査成果

(1) 調査区1

調査区1では落ち込み状遺構1が検出されたのみであるが、南西端に第3・4層の堆積があって遺物が集中して出土している。

落ち込み状遺構1 もとは方形の土坑であると考えられるが、隅丸の隅角を含む底辺7.4m×高さ1.8mの平面三角形をなす部分のみ残存するほかはすべて斜面の崩落により失われている。その形状から竪穴建物である可能性も指摘できるが、土層では掘り込みが明瞭でない。

(2) 調査区2

古墳時代の竪穴建物2棟分を検出した。いずれも斜面の崩落に伴い大部分が失われていたが、このうちの1棟でカマド、柱穴等を検出した。

竪穴建物1 (図6、図版32・33) 1辺5.5mの方形に復元可能な竪穴建物である。カマド痕跡を含む建物北西側にあたる約3分の1のみが残存しており、この部分以外は斜面の崩落とともに失われている。

カマドは両袖を検出しており、その上部を覆う焼土及び焼土ブロックは僅かに南側へ偏りを見せることから、カマド燃焼部の天井部分が崩落したもの判断された。また、焼土中より長さ18cm程度の石が出土しているが、被熱の痕跡は見受けられないことから支脚として使用されたものではなく、建物の廃絶後、カマドの崩落に伴って混入したものと判断された。また煙道部分は斜面を上方に伝う長さ40cmほどの浅い溝として検出された。西側壁面は比較的堅い地盤を掘り込んでいることから残存状態はよく、床面からほぼ垂直に立ちあがる。貼り床は認められず、検出範囲に限っては壁溝も確認されていない。また、柱穴とみられるピット(図8)を2基検出した。

竪穴建物2 (図10、図版34) 一辺4.6mの方形に復元可能な竪穴建物であるが、残存するのは北東隅部分を含む面積にして5分の1程度の部分である。重複関係から、竪穴建物1に後出する。カマドの痕跡は検出されず、地山を掘り込んだ壁面の立ち上がりも竪穴建物1に比べ低いもの

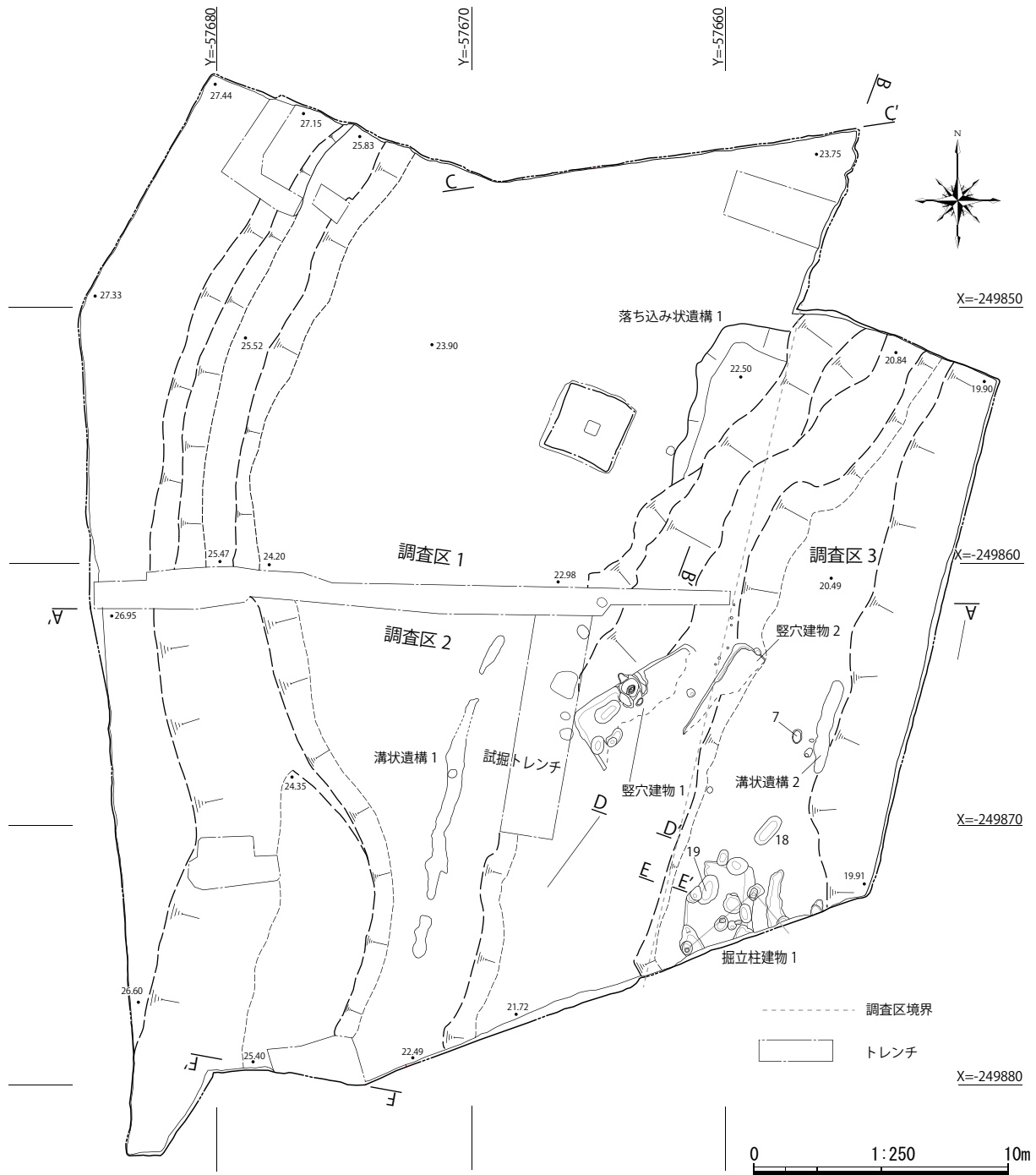


図5 調査区1・2・3 遺構配置図 (S=1/250)

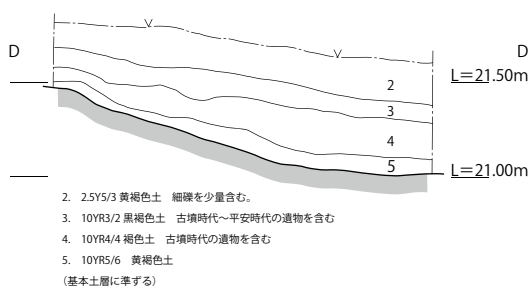


図6 調査区2 D-D' 断面南壁土層 (S=1/40)

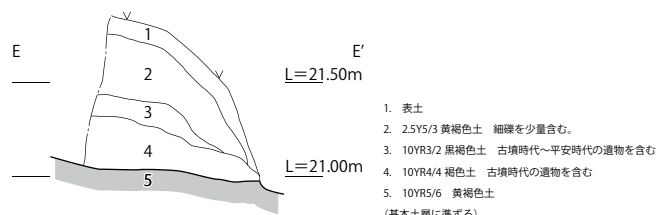


図7 調査区2 調査区東壁 断面南壁土層 (S=1/40)

となっている。また北西側には壁溝を設けている。北東壁面にかかる柱穴は埋土の特徴からこの遺構に伴うものとみられるが、北西側に検出された径 0.1 ～ 0.17m の 2 基の小ピットは関連性が不明である。

溝状遺構 1 (図 5、図版 34) 長さ 13m にわたって検出された幅 0.5m、深さ 0.03m 程度の極めて浅い溝状遺構である。一部途切れる箇所もあるが、削平を受け部分的に残存したものと判断される。更に南北に延長していた可能性が高い。帰属時期は不明である。

(3) 調査区 3

調査区内に第 3,4 層の堆積はみられず、表土層直下が遺構検出面である第 6 層上面となることから全面的に削平を受けているものと判断される。調査区 2 における第 3・4 層の堆積状況と、後述する遺構 7 の検出状況からみて削平は 10cm 程度であると考えられる。

遺構 7 (図 12、図版 36) 長径 0.5m、短径 0.4m の楕円形に近い平面形状をなす土坑で、深さは 0.07m 程度である。弥生土器の鉢とみられる土器及び高坏 (48) の脚部が出土しており、これらを埋納したとみられる。高坏の坏部は削平により失われたものとみられるが、この高坏が完全に埋納されていたとすれば、深さは本来 20cm 程度はあったものと推定される。

遺構 18 (図 11、図版 36) 長径 1.3m、短径 0.55m の楕円形をなす土坑である。深さは 0.2m 前後である。遺物は出土していない。

溝状遺構 2 (図 5、図版 36) 延長 4.3m にわたる溝状の遺構で、本来は南北に更に延長していたものと考えられる。幅 0.5m、深さは 3cm 程度である。幅、深さや延長方向は溝状遺構 1 とよく似ている。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

掘立柱建物 1 (図 11、図版 36) 柱穴 4 基を検出しており、少なくとも 2 間 × 1 間の規模は想定されるが、北西側に斜面が迫り、地形の制約からみて大規模なものとなる可能性は低い。柱穴 3 (P3) から須恵器 (46) 等が出土しており、時期は 6 世紀末～7 世紀初頭頃とみられる。

(4) 石帯巡方について

表土からであるが、石帯巡方 (3) が出土している。

石帯の装着方法は時期によって異なることが分かっており、当初は外鉤によって革帯に留められていたものが、後には潜り孔による穿孔方法を採用し、これに金属線を通して装着する方法に転換すると考えられている。この転換時期については長岡京跡における出土例のほとんどが潜り孔による穿孔方法によるものであることから、潜り孔を採用した石帯の使用は長岡京期までさかのぼるとみられている。

また、石帯具は小孔、線孔、無孔に分類されるが、これらは時期差による違いであることが指摘されており、透かし孔は消滅する方向へと変遷する (*9) ことから、無孔の石帯は、出土例からみて 10 世紀第 IV 四半期に使用のピークを迎えるとされる (*11)。

以上のように、石帯は寸法、透かし孔の有無、装着用の孔の穿孔技法とその数等の特徴がその生産・使用時期を示す。そこで稲成 I 遺跡出土の石帯をみると、復元であるが寸法が 42mm 四方で、周囲 4 面を平坦に磨き、且つ上面には面取りを施す。穿孔方法は中央から放射状に配置された潜り孔で、この孔の表面が他の表面に比べ著しく風化または劣化が進んでいることについて使用時の摩擦等を想定することができ、実際に銅線等の金属線を通して帯に装着していたとみられる。潜り孔は 1 箇所が欠損箇所に開けられているが、この穿孔は深さが他の 3 箇所とほ

ば同じで機能に不足ない状態であることから、穿孔前において既に欠損があったか、当該部分の穿孔作業時に欠損しながらも、再度穿孔を試みたことによると考えられる。更に他の 1 箇所は欠損により潜り孔断面の状況をよく観察することができ、これによると穿孔は 1 度貫通点に向けて方向を変えて穿たれており、初回の穿孔時に用いたものより径の小さい工具を使用して、2 度目に貫通点に到達させ、これを繰り返すことにより 1 組の潜り孔を設けている。

石材はサヌカイトであり、後世のものともみられる比較的新しい欠損部分が新鮮な剥離面となっているため、この部分で石材本来の観察が可能である。あくまでも肉眼観察によるが、剥離面はささくれ状の痕跡を残し、樹脂光沢を思わせるガラス質であることから、讃岐金山産のサヌカイトに近い特徴を有するといえる。また、大きさを平城宮・京出土例と比較してみると、正六位に相当する官位の官人が身につけていたものとされる規格に近似するが、銜帯の規格が律令制上の位階をそのまま現実的に反映するかという点は現在議論の決着をみておらず(*12)、これを装着していた者の人物像は不明である。更に今回の調査において検出された集落の遺構は古墳時代末から飛鳥時代頃と考えられ、石帯が使用される時期とは異なる。よって当該集落遺構とは直接的に関連がないものと判断されるが、遺物包含層第 3 層中に僅かながら黒色土器等平安時代の遺物が混入することから、本遺跡の他地点において当該時期の遺構が存在する可能性が高い。

第 5 項 まとめ

稲成 I 遺跡で検出されたのは 1 棟の掘立柱建物と 2 棟の竪穴建物のほか、土器を埋納した土坑等であり、これらはすべて調査区 1 東南隅から調査区 2 の東端、調査区 3 南半にかかる限られた範囲に集中して検出されている。

遺構検出面上には第 3 層及び第 4 層が堆積しており、これらの包含層は集落の廃絶後、長い年月のうちに、斜面の崩落とともに堆積したものであろうと考えられる。

この第 3 層の堆積を平面上で確認してみると遺構の展開する範囲とほぼ一致しており、且つ第 3 層の堆積がみられない部分については当該山塊の地層がその表面に観察される。第 3 層から第 4 層の堆積範囲が調査範囲のごく一部分に限定されるのは、後世に削平を受けたことでこれら包含層を含む覆土の大半が失われてしまったことによると推定され、本来遺構が展開する範囲は今回遺構を検出した範囲に留まらないことがわかる。

竪穴建物 1 及び 2 は一部分が比較的固い地山を削り込んで構築されており、竪穴建物 1 に設けられたカマドが斜面上方に煙道を持つ構造となっているのは効率的であるといえる。また、竪穴建物 1 及び 2 が掘立柱建物とよく似た方向に軸線を持つことは、集落内の建物配置の一端を示すものとみられ、また調査区 3 の北側では斜面が東へと張り出していることから、今回検出された遺構群を含む稲成 I 遺跡の集落は、南南東方向へ広がる集落の北西端付近と推定される。そう想定した場合、斜面裾部付近では荒光川岸付近まで至る可能性もあり、その水産資源や水運の便といった環境的な恩恵を受けることになる。

今回遺構が検出された範囲は丘陵中腹部にある平坦部分であり、第 3・4 層の堆積状況から、この部分は遺構の帰属時期とみられる弥生～古墳時代において既に存在していた可能性が高い。集落は平坦地等高線に沿うような立地が推定されるが、これは、集落内での往来の利便性を考慮した可能性が高く、遺物の分布状況からも集落の範囲は、丘陵頂部まで及んでいなかったと考え

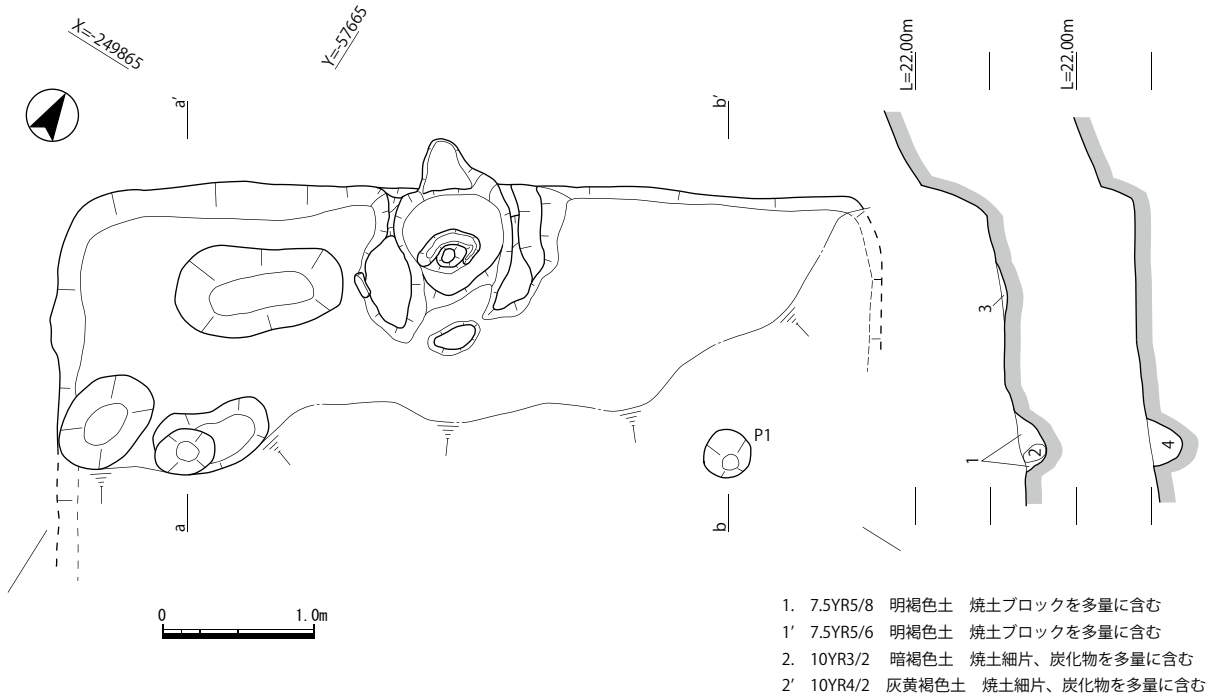


図8 竪穴建物1 平面遺構実測図

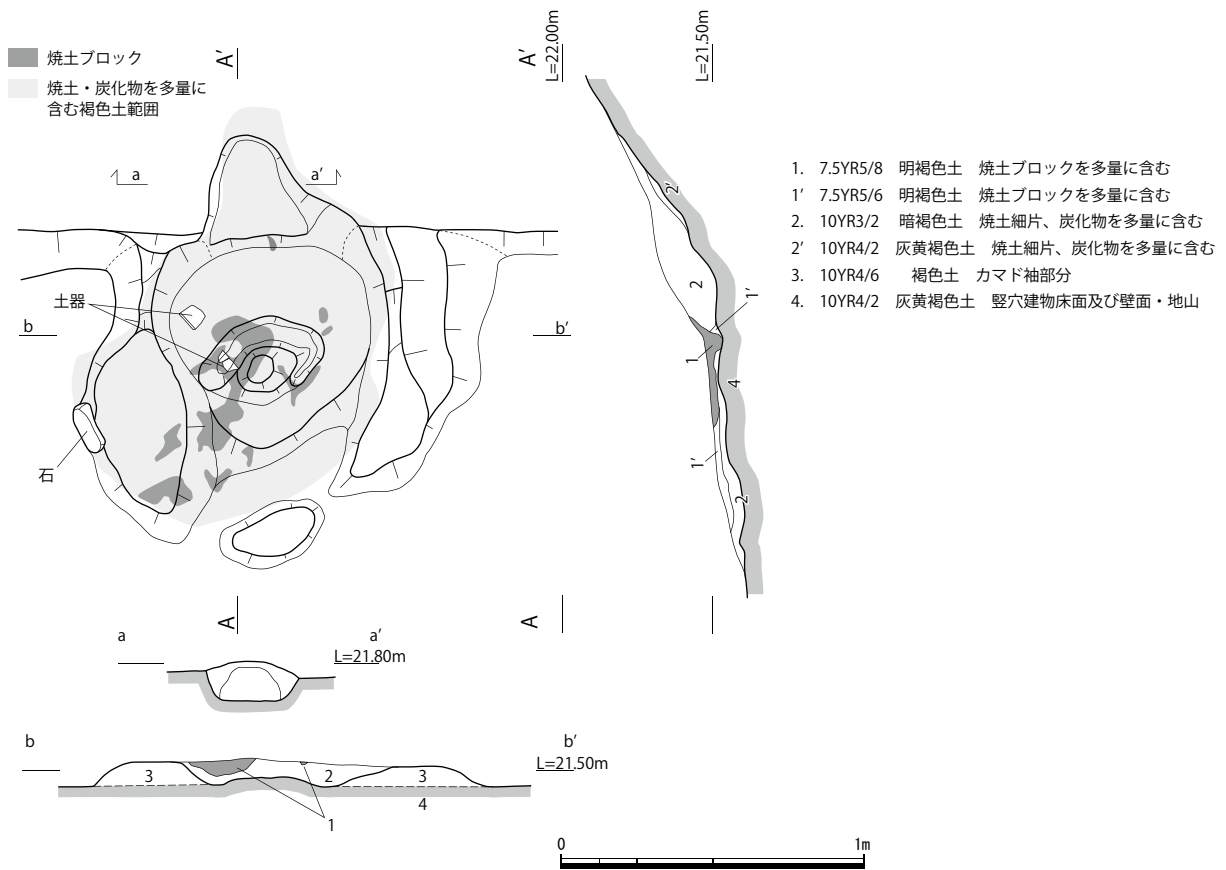


図9 竪穴建物1 カマド実測図

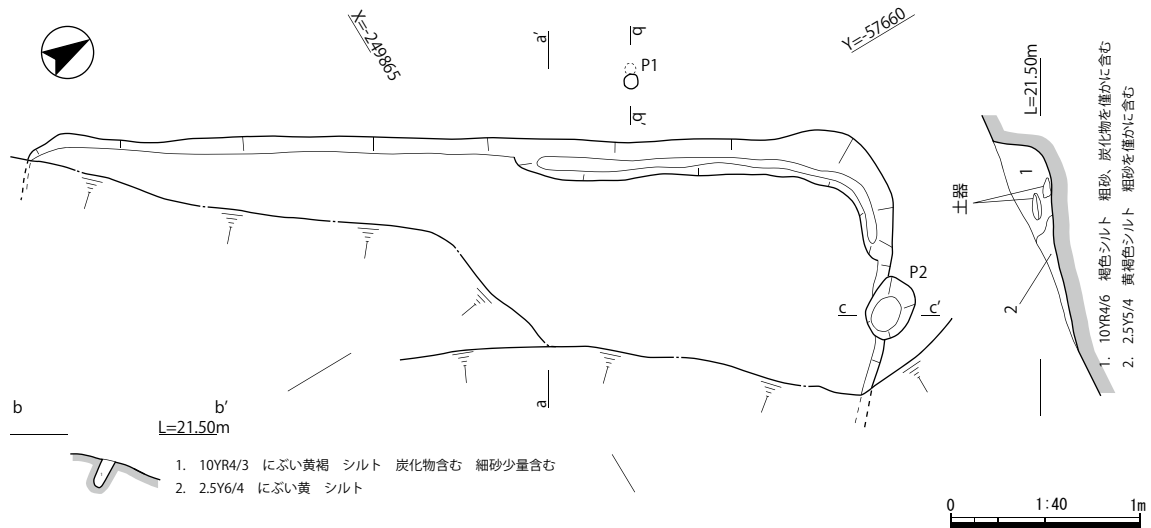


図 10 竪穴建物 2 実測図

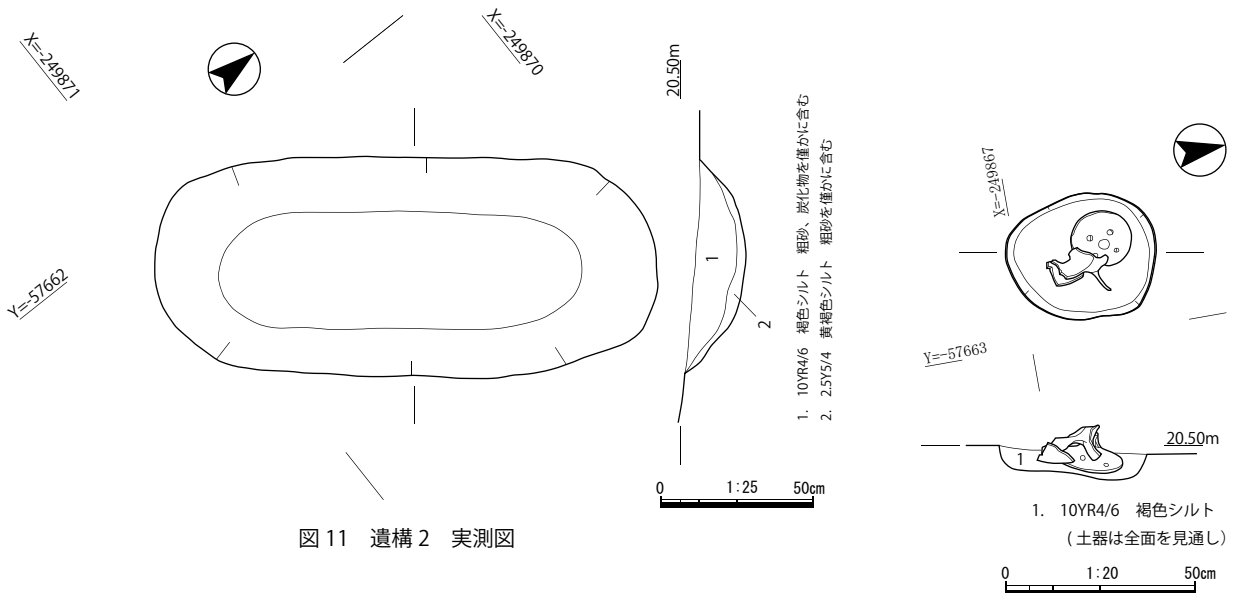
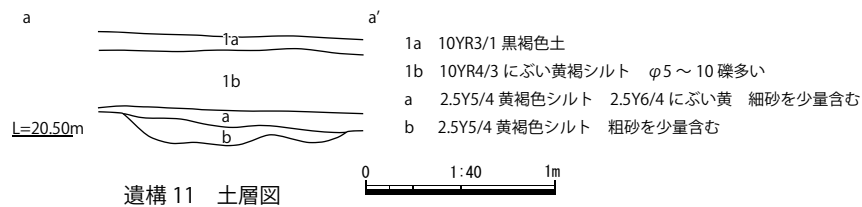
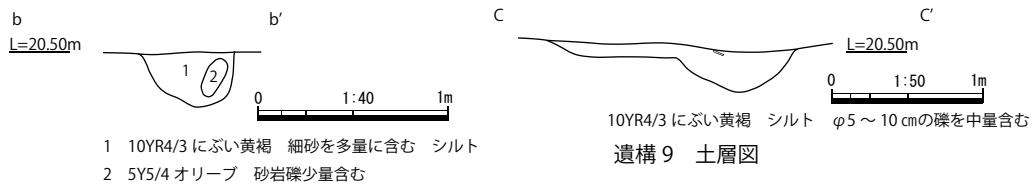


図 11 遺構 2 実測図

図 12 遺構 7 実測図



遺構 11 土層図



遺構 20 土層図

図 13 調査区 3 検出遺構 土層図

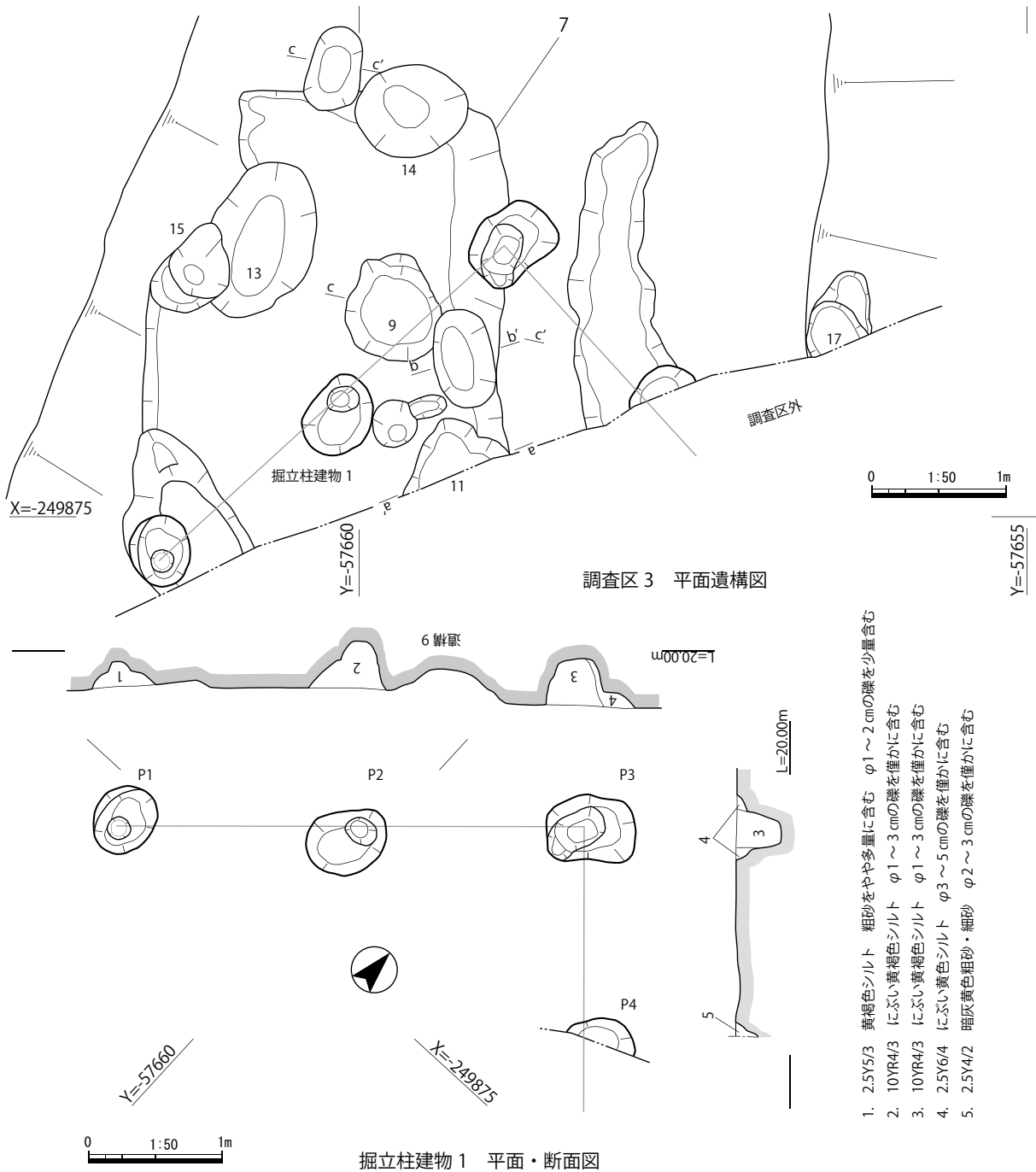


図14 調査区3 検出遺構及び 掘立柱建物1 平面・土層図

られる。

今回検出された遺構は、集落のごく一部分であるが、稲成 I 遺跡は荒光川水系における弥生時代中期以降の遺跡の展開、近接する稲成遺跡、稲成 II 遺跡、北沖代遺跡、上流に存在する窯跡等も含めて検討する必要がある。平野部に立地する稲成遺跡では、自然流路跡で出土した遺物について、土石流等によって押し流されることにより堆積したものであるとの指摘がある (*12)。現在ほど土木技術が発達していない時代では土石流等の自然災害を予防するのは非常に困難であり、そうであっても河川のもたらす資源には依存しなければならないという要請があったものといえる。これら流域に形成された生活圏については近隣の遺跡とともに包括的に分析する必要がある。

あり、今後周辺地域に分布する遺跡の詳細な調査、研究が望まれる。

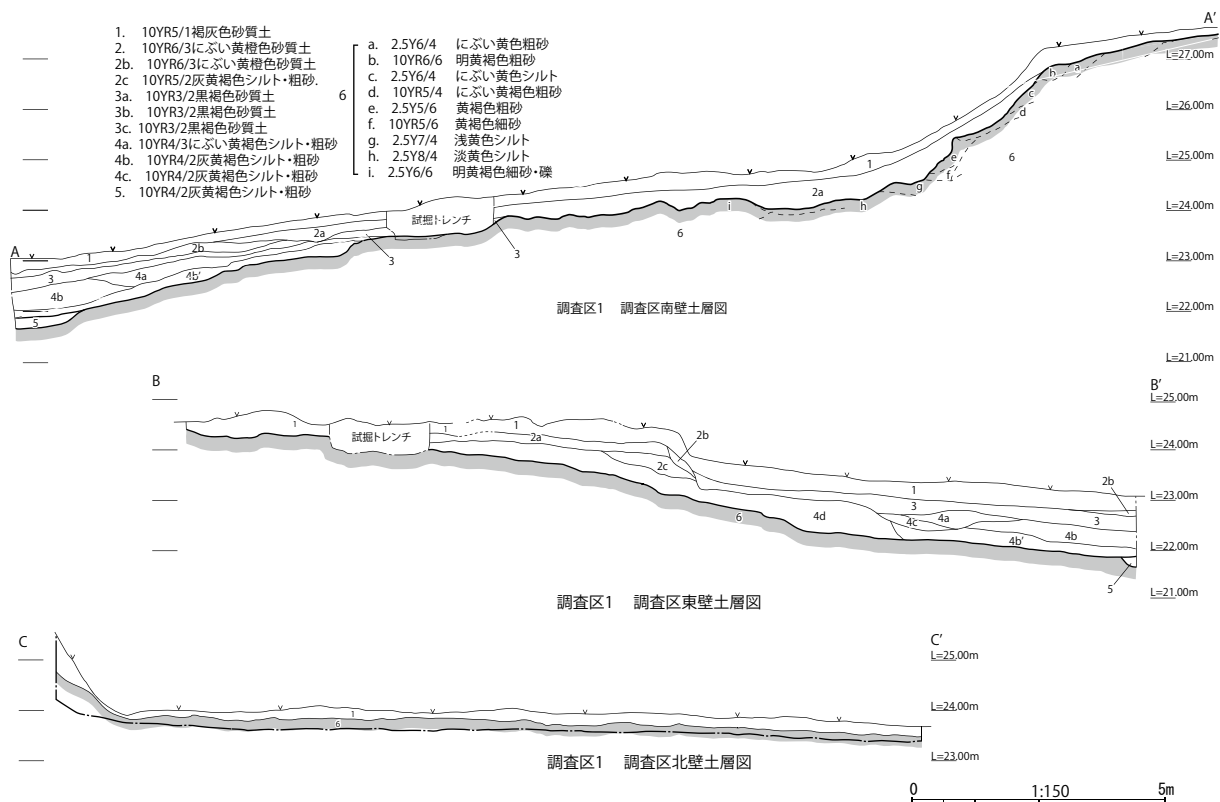


図 15 調査区 1 調査区壁面土層図

土器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
1	図19	土師器 高坏	1 G9	4層	(13.0)	残9.7		受部10%以下	内・外) 黄橙7.5YR7/8 断) 橙7.5YR7/6	摩滅著しく、調整は不明である。脚部に粘土板を巻き付けて成形したとみられ、坏部は椀状を呈する。脚部の穿孔は3箇所に認められる。
2	図19	土製品 又は浮 文?	1 G9p15	3層	3.4	1.2	3.4	100%	全体) 橙7.5YR7/6~6/6	扁平で遠景を呈する。
4	図19	須恵器 甕	2	2b層	(18.2)	残5.1		口縁25%	内・外・断) 灰N6/	口縁は外側に折り返し肥厚させる。内外面とも回転ナデを施す。
5	図19	土師器 甕	2 G9q16	3a層	(17.8)	残4.6		口縁30%	内) にぶい赤橙5YR5/4 外) にぶい赤橙2.5YR5/4 断) 赤橙10R6/6	口縁はやや肥厚して屈曲する。内外面ともヨコナデを施し、端部を上方へつまみあげる。頸部以下は外面をナデ後ハケ調整
6	図19	土師器 高坏	2	3c層		残7.8		30%以下	内) 橙5YR6/6 外) にぶい橙7.5YR6/4 断) 浅黄2.5Y7/3	脚部のみ。中実。縦方向にミガキを施す
7	図19	土師器 高坏	2	3b層		残5.3		20%以下	内) 黄橙7.5YR8/8 外) 黄橙7.5YR7/8 断) 浅黄橙7.5YR8/6	脚部上位のみ残存。坏部は接合後脚部内から充填。摩滅著しく、調整不明。
8	図19	土師器 高坏(脚 柱)	2	3b層		残9.5		30%以下	内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 灰N5/	脚部のみ残存。中実。摩滅著しく、調整不明。
9	図19	土師器 支脚	2	3b層			8.2	90%	外) にぶい橙5YR7/4 橙7.5YR7/6 断) 浅黄橙7.5YR8/4	支脚。外面ほぼ全体に被熱痕跡がみられる。
10	図19	土師器 甕(把手)	2 G9r9	3b層				10%以下	内・外) 明赤褐2.5YR5/8 断) 橙7.5YR6/8	先端部分を欠損。把手部分はナデ調整。
11	図19	土師器 把手	2	3b層				10%以下	内) にぶい黄橙10YR7/4~6/4 外) にぶい黄橙10YR7/4 断) にぶい黄橙10YR6/4	先端部分を欠損。把手部分はナデにより、体部はハケによる調整。
12	図19	須恵器 (長頸)壺	2	3b層		残4.7		頭~肩 25%	内) 灰N6/ 外) 外釉色) 灰7.5Y5/1 灰オリーブ7.5Y4/2 断) 浅黄2.5Y8/3	体部中位に2条の沈線を有し、また刺突文を施す。外面全体に焼成時降灰が認められる。
13	図19	土師器 鉢	2 G9	3c層		残2.1	3.0	底部100% 全体10% 以下	内・外) 橙5YR7/6 断) 黄灰2.5Y5/1	全体的に摩滅著しく、調整不明。
14	図19	土師器 鉢	2 G9p15	3層		残2.0	4.4	高台10%	内) 黄橙7.5YR8/8 外・断) 橙7.5YR8/8	全体的に摩滅著しく、調整不明。
15	図19	須恵器 甕	2 G9	3b層	(12.5)	残5.7		口縁35%	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) にぶい赤褐5YR4/3	口縁には1条の沈線あり。口縁端部はやや外傾する平坦面をなす。
16	図19	須恵器 甕	2 G9	3b層	(16.5)	残4.8		口縁30%	内) 灰N6/ 外) 灰N5/ 断) 褐灰10YR6/1	口縁端部やや肥厚し回転ナデを施す。頸部以下外面に平行線文タキ蟻、内面は同心円の当て具痕。口縁付近のタキはナデにより一部不明瞭となる。
17	図19	須恵器 甕	2 G9o19	3a層	(17.4)	残4.2		口縁20%	内・外・断) 灰7.5Y6/1	口縁端部は外側に折り返し、やや肥厚する。内外面を回転ナデ。

稲成 | 遺跡

18	図19	須恵器 壺	2	3b層	(38.8)	残10.0		口縁20%	内・外) 灰白5Y8/1 断) 灰白N8/	
19	図19	須恵器 壺	2	3b層	(17.2)	残4.2		口縁15%	内・外・断) 灰白5Y8/1	口縁端部は外側に折り返しとみられ、やや肥厚する。口縁部内外面に回転ナデ、頸部以下外面をタタキ、内面に当て具痕あり。
20	図19	須恵器 鉢	2	3b層		残6.7	体部最大部20%		内) 灰N5/ 外) 灰N6/ 断) 青灰5PB5/1~暗青灰5PB4/1	中位に最大径を持ち頸部及び底部は窄まる。体部外面は上位を回転ナデ、下位をヘラズリする。
21	図19	須恵器 鉢	2 G9p18	3c層	(15.6)	残6.9		口縁5%以下	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) 暗赤灰5R4/1	体部中位に2条の沈線が巡る。底部外面をヘラズリ、体部を回転ナデ。見込みに焼成時降灰を認む。口縁端部に摩滅あり。陶邑TG68出土例に似る。
22	図19	須恵器 高坏(無蓋 有蓋は不 詳)	2 G9p16	3b層		残4.5	(9.0)	脚部25%	内・外・断) 灰白2.5Y8/2~灰黄2.5Y7/2	やや小型化した短脚の高坏。上下に開く筒状につくり上方から充填して坏部をつくる?
23	図19	黒色土器 椀	2 G9a18	3a層		残2.0	(8.2)	高台20%	内) 灰N4/ 外・断) にぶい黄褐10YR7/4	A類。内面のみ黒化処理する。内面に粗いミガキか。薄い作りで断面三角形の低い高台を貼付。体部外面は多段状を呈する。
24	図19	須恵器 長頸壺	2 G9	3a・3b層		残10.6		肩~体部 20%以下	内) 灰白N8/ 断) 灰赤2.5YR6/2 外) 灰N6/ 釉色) 灰N4/ 暗オリーブ灰2.5GY4/1	やや肩の張る壺とみられる。肩部を回転ナデ、体部中位以下をヘラズリする。
25	図19	須恵器 蓋	2	3b層	(13.0)	3.8		口縁15% 以下 全体40%	内) 灰白N8/ ~N7/ 外) 灰白2.5Y7/1 灰7.5Y4/1 断) 灰白2.5Y7/1	やや小型。天井部を平坦につくる。口縁端部内面に沈線状を呈する段有り。
26	図19	須恵器 蓋	2 G9q17	3b層	(14.0)	残3.5		口縁25%以下	内・外・断) 灰N6/	口縁端部を丸くつくる。天井部欠損する。
27	図19	須恵器 蓋	2 G9q17	3b層	(13.0)	3.5		5%以下	内) 黄灰2.5Y4/1 外) 灰N4/ 断) オリーブ灰2.5GY5/1に黄灰2.5Y4/1をサンド	口縁部は緩やかに開き、端部を丸くつくる。
28	図19	須恵器 蓋	2 G9p15	3層	(13.0)	残3.7		30%	内・外・断) 灰N5/	天井部及び口縁部の境は凹線状をなし、口縁端部は丸くつくりやかに外側へ開く。
29	図19	須恵器 坏身	2 G9s16	3b層	(12.2)	3.65	(6.6)	10%	内・断) 灰7.5Y6/1 外) 灰7.5Y5/1	立ち上がりは低くやや内傾する。受部は丸みを持ち厚めにつくる。底面は回転ヘラズリにより平坦となる。
30	図19	須恵器 蓋坏(坏 身)	2 G9	3b層	(11.1)	3.6		50%	内) 灰N5/ 外) 灰N6/ 断) にぶい黄褐10YR5/3	立ち上がりはやや低くつくり、折り返しとみられる。受部は断面が丸みをもつ三角形を呈する。胎土内長石の溶融あり。TK209型式の時期か。
31	図19	須恵器 坏身	2	3b層	(11.0)	残2.7		口縁20%以下	内・外) 暗青灰5PB4/1~3/1 断) 青灰5PB5/1 灰赤10R4/2	立ち上がりは低く内傾する。受部上面には浅い凹線状をなす沈線が巡る。TK209型式以降の時期か。
32	図19	須恵器 坏身	2	3c層	(12.7)	残3.9		20%	内) 灰N5/ 外) 灰N6/ 断) 青灰5PB5/1	立ち上がりは低く、直線的でやや内傾する。受部は丸みを帯び、ほぼ水平に突出する。底部中央に縮緬状の痕跡あり。TK209型式の時期か。
33	図19	須恵器 坏身	2 G9	3b層	(11.5)	残4.3		20%以下	内) 灰N6/ ~5/ 外) 灰白N7/ 断) 灰白N8/ ~7/	立ち上がりは断面三角形を呈し、低くやや内傾する。受部は退化し水平方向に突出する。底面は受部付近まで回転ヘラズリを施す。TK209型式の時期か。
34	図19	須恵器 坏身	2	3b層	(11.8)	4.0		45%	内) 灰N6/ 外) 灰N4/ N6/ 断) 灰白N7/	やや小型の坏身。立ち上がりは屈曲して低く内傾する。受部小さい。底部はヘラ切りか。TK209型式以降の時期か。
35	図19	須恵器 坏身	2 G9	3a層	(11.2)	残4.2		口縁20%	内) 灰白2.5Y7/1 外) 赤灰7.5R6/1~5/1 断) 灰赤7.5R5/2	やや小型の坏身。立ち上がりはやや厚くつくり、僅かに内傾する。
36	図19	須恵器 坏身	2 G9p16	3層	(11.5)	2.7	9.0	20%	内) 灰白N8/ ~N7/ 外) 灰白N7/ ~N6/ 断) 灰白2.5Y7/1 褐灰5YR5/1 黄灰2.5Y6/1	器径に対し器高が低い。立ち上がりはやや低く、受部は僅かに斜め上方に突出する。底部は回転ヘラズリによるとみられ、広く平坦面をなす。
37	図19	須恵器 坏身	2 G9	3a層	(10.1)	3.2	(6.6)	底部25%以下	内・外) 青灰5PB5/1 断) にぶい橙5YR6/4	立ち上がりはやや低く、内傾する。受部は斜め上方に突出する。底部は回転ヘラズリによる。
38	図19	須恵器 坏身	2 G9q17	3b層	(13.6)	残3.1		25%以下	内・断) 青灰5B6/1 外) 青灰5B5/1	やや小型。立ち上がりは低く、端部は尖り気味につくり内傾する。受部は小さい。底部は回転ヘラズリによる。TK209~TK217型式の時期か。
39	図19	須恵器 坏身	2	3b層	(10.5)	残3.2		口縁5% 以下 全体40%	内・外) 灰N6/ 断) 灰白N7/	やや小型。立ち上がりは低く、端部は尖り気味につくり内傾する。受部は小さく斜め上方突出する。底部は回転ヘラズリによる。
40	図19	須恵器 坏身	2	3c層	(11.4)	3.4		35%	内) 灰N6/ ~5/ 外・断) 灰N6/	やや小型。立ち上がりは貼付によるとみられ、上端部を鋭くつまみ上げる。器表面に工具痕残り、やや粗雑なつくりである。TK209~TK217型式の時期か。
41	図19	須恵器 坏身	2 G9	3層	(9.8)	残2.5		10%以下	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) 灰赤2.5YR4/2	小型化した坏身である。立ち上がりは断面三角形を呈し、低く内傾する。受部小さく、貼付によるか。TK217型式の時期とみられる。
42	図19	須恵器 坏蓋	2 G9	4a層	(13.4)	残3.7		口縁10%	内・外・断) 青灰5B6/1	器高やや高く、口縁部付近僅かに内湾する。口縁端部は内面に平坦面をつくり、外面は中位より上方を回転ヘラズリする。
43	図19	須恵器 坏蓋	2 G9o14	4層	(12.0)	3.7		口縁15%以下	内・外) 灰白N7/ ~灰N6/ 断) 灰白N7/	立ち上がりは端部を尖り気味につくり、僅かに上方へつまみ上げる。受部は小さく、上面にヘラによるとみられる沈線を有する。底部にヘラ描きあり。
44	図19	須恵器 平瓶?壺 頸部?	2 G9p14	4層	(9.0)	残5.3		口縁20%	内・断) 青灰10BG6/1 外) 灰10Y6/1	壺または平瓶の口縁から頸部とみられる。内外面に回転ナデを施し、口縁端部を直立気味につくる。
45	図19	須恵器 壺	2 G9p15	4層	(20.0)	残5.2		5%以下	内・断) オリーブ灰2.5GY6/1 外) 灰N5/	口縁は内外面とも回転ヨコナデにより調整。外面に僅かに平行線文のタタキ痕跡が認められ、内面は同心円文の当て具痕跡が残る。
46	図19	須恵器 蓋	2 G9	3	(12.6)	残3.6		20%	内・外) 青灰 10BG6/1~5/1 断) 青灰10BG6/1 にぶい褐7.5YR5/4	やや小型の坏蓋。天井部と口縁部の境は丸く稜をなさない。口縁端部はやや肥厚させ丸くつくる。TK43~TK217型式の時期とみられる。
47	図19	須恵器 坏蓋	3 G9	8	14.0	4.2		40%	内) 灰N6/ 外) N5/ 断) 灰N5/ ~4/	天井部と口縁部の境に浅い凹線状の沈線を有する。
48	図19	須恵器 有蓋高坏	3 G9	7	(14.5)	4.3		40%	内) 灰N6/ 外) 灰N5/ ~4/ 断) 灰N5/	ツマミは貼付後ヘラ状工具で側面を削る。天井部と口縁部境は凹線状をなす。天井部内面には粘土紐巻き上げ痕?が残る。TK43~TK209型式の時期か。
49	図19	弥生土器 高坏(脚 部)	3	7		残6.1	(14.7)	30%	内) 橙7.5YR7/6~6/6 外・断) 7.5YR6/6	摩滅著しく、調整は不明である。穿孔は4箇所認められる。

石器一覧表

報告書 番号	図・ 図版番号	器種	調査区 地区	遺構 層位	最大 長 cm	最大幅 cm	最大 厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
3		石帯 巡身	1 G9t15	表探(1層)	3.5	4.2	0.9	26.6	サヌカイト サヌカイト?	75%	表面及び四方の側面は鏡面的に磨く。表面は放射状に溜り孔による穿孔を行う。穿孔は2段階の工程によるとみられ、孔内には穿孔方向を変えた形跡の窺える1段の段差を有する。

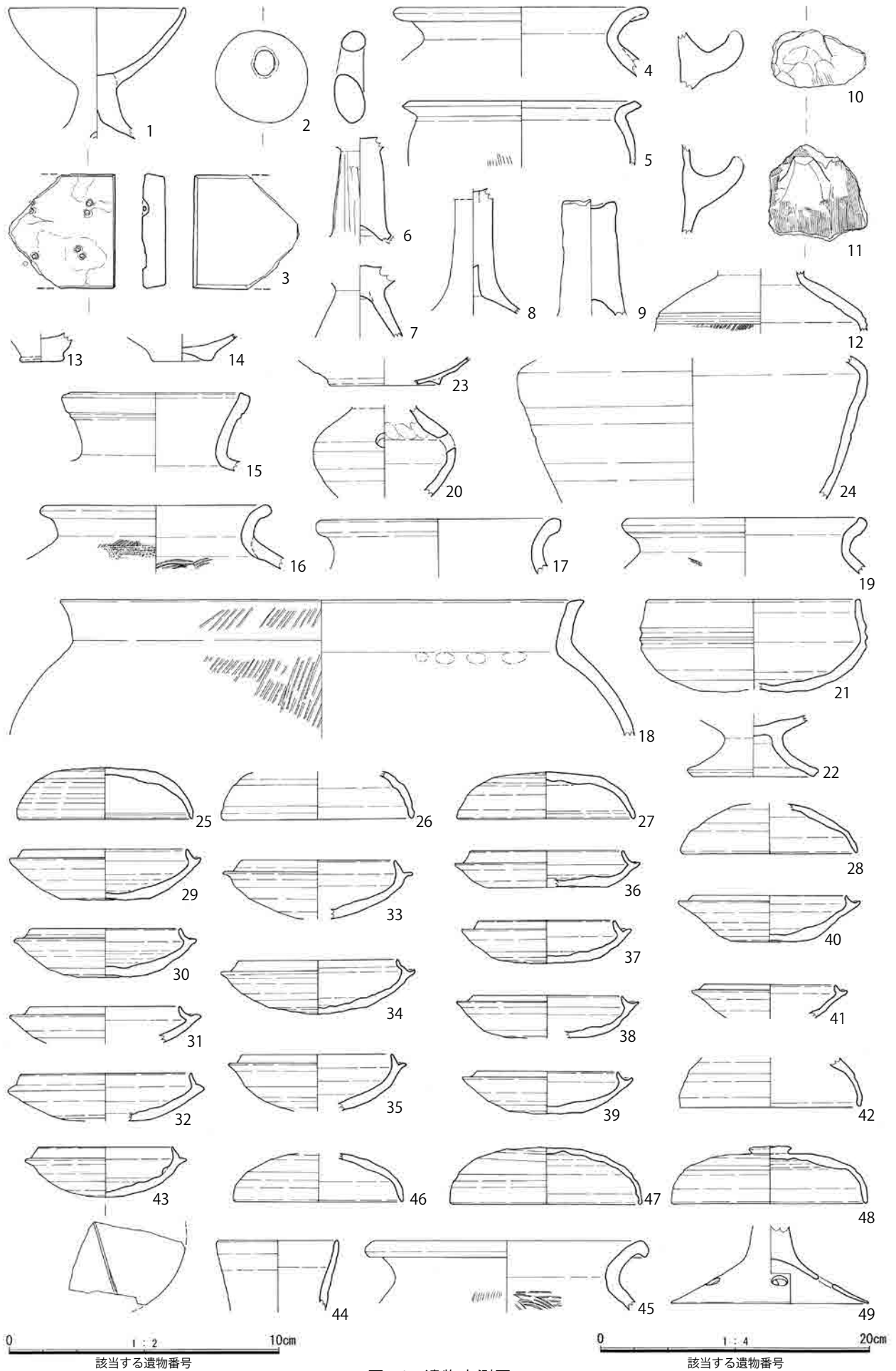


図 16 遺物実測図

第5節 安宅本城跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の建設工事により、安宅本城跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内に自動車道が建設されることとなった。このため県文化遺産課で平成21年度から22年度にかけ5箇所トレンチを設定して試掘確認調査を実施した結果、高架橋の橋脚が設置される2箇所について本調査が行われる運びとなった。また、当該地点は平成21年度に白浜町により実施された発掘調査の1トレンチ(図2)に近接する。

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

安宅本城跡は、西牟婁郡白浜町安宅に所在する。白浜町は、和歌山県南部に位置し、地理的には田辺湾から紀伊水道を望む半島地域と富田川及び日置川の下流域に大きく分けることができる。市街地は北部の半島地域に形成されているが、南部では海岸地域まで迫る紀伊山地の深い谷あいには蛇行する富田川、日置川の下流域に広がる平野に集落が点在する。町域の81%が森林であり、田辺南部白浜海岸県立自然公園及び熊野枯木灘海岸県立自然公園の海岸線、大塔日置川県立自然公園の溪谷や山村風景、自然林など自然環境に恵まれる。

日置川は果無山脈に源を発し太平洋に注ぐ延長77kmの河川で、深い溪谷を蛇行する急流であるために河口域でも狭小な堆積平野が広がるのみである。本遺跡はその河口域の左岸に所在し、支流である安宅川の流れ込みにより形成されたわずかな平野に立地する。

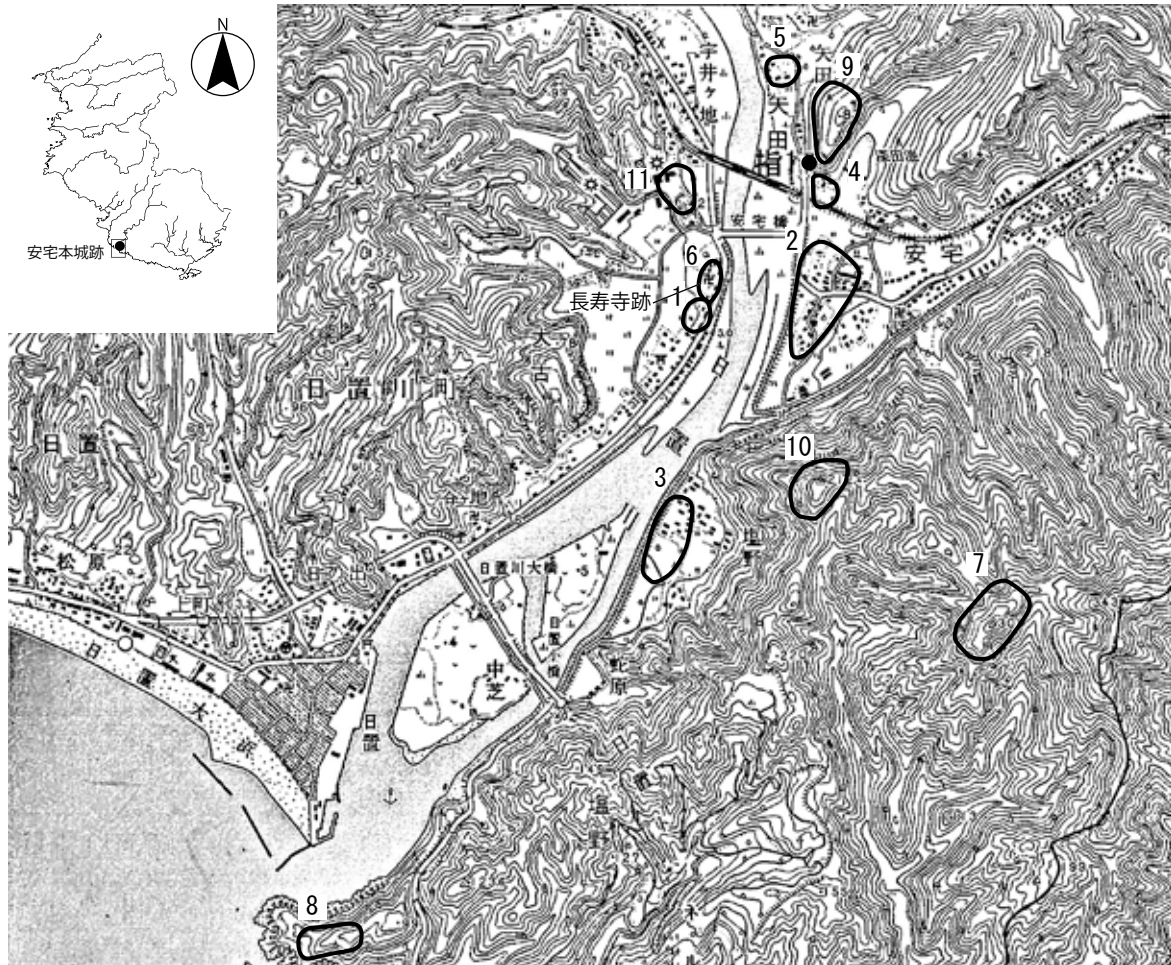
(2) 歴史的環境

安宅本城跡を含む日置川下流域の平野部は遺跡の集中するところである。

縄文時代の遺跡としては大古Ⅰ遺跡(6)があり、前期末の大歳山式、後期中頃の元住吉式が出土している。弥生時代の遺跡としては大古Ⅱ遺跡(1)で中期の土器等が出土、矢田遺跡(5)では石庖丁が採集されている。八幡山城跡(9)からは後期末頃の土器が出土しており、高地性集落の存在が指摘されている。

古墳時代の遺跡は、集落跡として安宅遺跡(4)があるが、古墳は確認されていない。古代律令制下においてこの地域は牟婁郡に属し、その郡内に存在したとされる五ヶ郷のうち岡田郷または栗栖郷に比定される可能性が指摘されているものの、詳細は不明である。また、八幡山城跡では富本銭が出土しており、飛鳥池遺跡で出土したものと字体や形状、成分が異なるため中世の模倣銭である可能性も指摘されているが、後に藤原宮跡で同様の字体のものが出土している。

鎌倉時代前期の天福元(1233)年には、当該遺跡を含む範囲における安宅荘の成立が文書により明らかとなっている。日置川右岸の大古集落北側に位置する長寿寺はその創建年代が不明であるが、その境内地からは暦応5(1342)年の刻書がある備前焼大甕が出土しており、紀年銘を持つ備前焼としては最古のものである。長寿寺に伝わる平安時代中期(10世紀後半)の作とみられる本尊の薬師如来像、脇侍の日光、月光菩薩は必ずしも創建年代を示すものとは言えないが、少なくともその頃には当地域に寺院が造営され、一帯の中核地域的な様相を呈していたことも推定される。室町時代には安宅氏が一帯の領主として活躍するようになり、本拠の安宅本城跡はその安宅



1. 大古II遺跡 2. 安宅本城跡 3. 塩野遺跡 4. 安宅遺跡 5. 矢田遺跡 6. 大古I遺跡 7. 古武之関跡(古武之森城跡) 8. 大向出城跡
9. 八幡山城跡 10. 勝山城跡 11. 大野城跡

図1 安宅本城跡及び周辺の遺跡

荘の中心に位置し、方形区画を持つ居館が想定されている。安宅荘はここを中心として日置川流域河口付近に広がる平野部の大半をその範囲とする(*13)。安宅本城跡の北東は紀伊山地の一端(標高85m)となるが、ここに築かれた八幡山城は麓の安宅本城跡に対する、いわゆる「詰め之城」である。安宅氏の支城は安宅荘に比定される範囲を含む地域を中心に現在9箇所(安宅荘内で8箇所)が確認されており、日置川下流域の限られた範囲においてこのような多数の支城が築かれている点は特徴的である。今回調査を実施した地点は安宅本城跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲の南端にあたり、「安宅一乱記」において湊の所在地として伝承されている。

(3) 既往の調査

安宅本城跡ではこれまでに数度の試掘調査が行われたほか、平成14年度に財団法人和歌山県文化財センターが日置川町教育委員会の委託を受け、安宅小学校の北西100mの位置(図2)でトレンチ調査を実施している。この調査では柱穴や土坑、堀状遺構または自然流路を検出したほか備前焼や輸入陶磁器等12～16世紀の遺物が出土した。

また、平成21年度には白浜町教育委員会により2箇所(図2)においてトレンチ調査が実施されているが、このうち今回の調査地にはほぼ隣接するトレンチ(1トレンチ)で16世紀前半代に帰属すると考えられる大型の掘形を持った柱穴21基が整然と並んで検出された。

第3項 調査の方法

(1) 地区割の方法

地区割りは、大古Ⅱ遺跡の調査と共通である。

平面直角座標系（世界測地系）による $X=-268000m$ 、 $Y=-49000m$ を基点として大区画、小区画を設定した。調査区は大区画の範囲内に位置する（図3）。

(2) 基本層序

調査区1及び調査区2では次のとおり基本層序が異なる。

調査区1

調査時の地表面下0.5mまでは水田耕作土及び床土であり、5面の耕作面を確認した。その下層では東側へと緩やかに下る畑を検出した。これより下層は自然堆積であり、灰黄褐色のシルト及び細砂混じりのシルト層が厚く堆積するが、その下面では自然流路を、更にその下層においても古代に帰属すると考えられる自然流路を検出した。

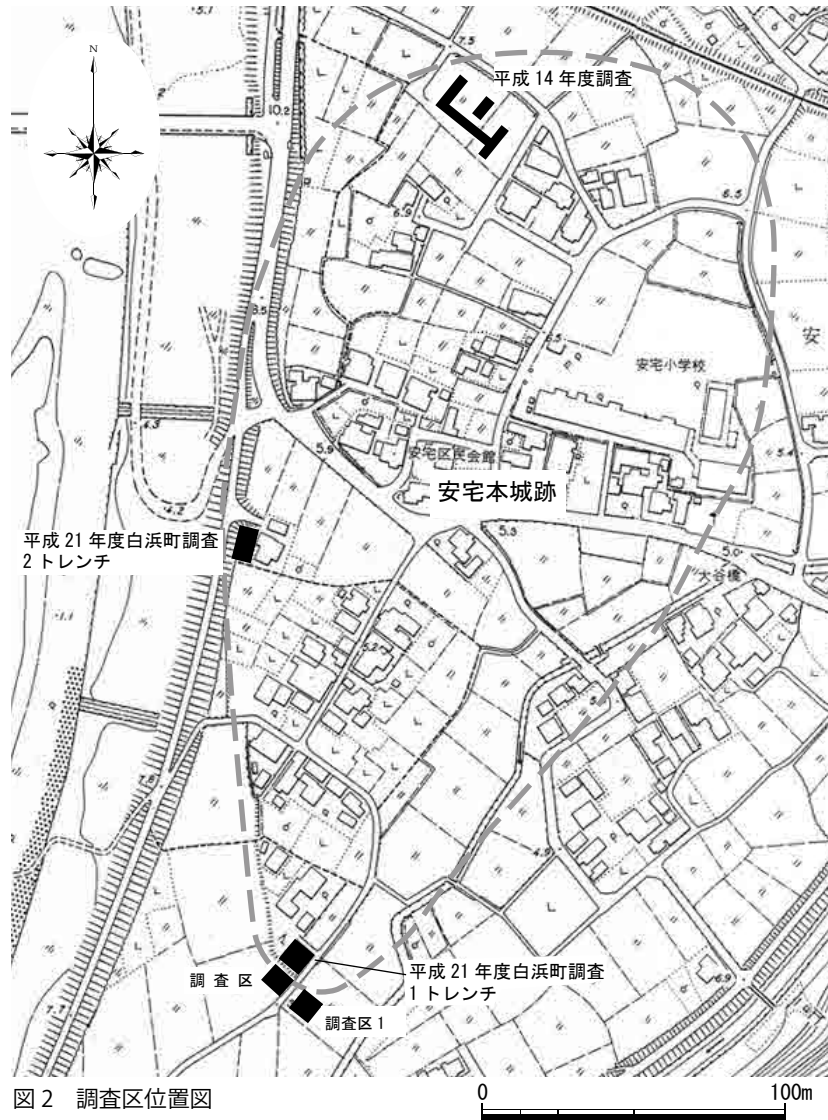


図2 調査区位置図

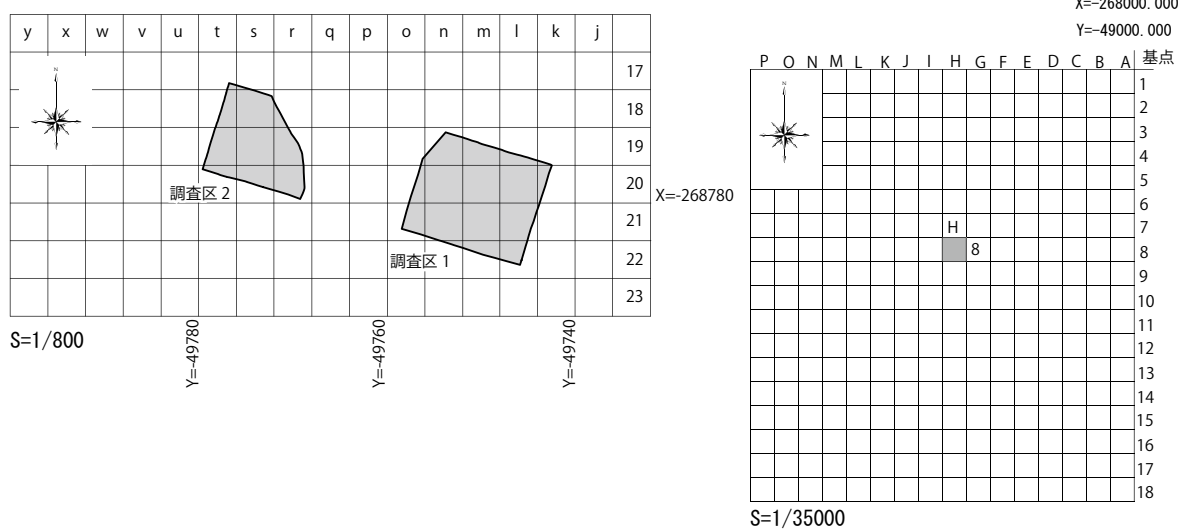


図3 調査区及び地区割

調査区 2

調査時の地表面下 0.9m までは水田耕作土及び床土であり、10 面程度の耕作面を確認したが、それより下層は自然堆積であり、西側の日置川に向かって下る地形となる。水田耕作土下位に含まれる遺物は近世末以降のものであることから、調査区 2 付近が地形的に安定するのは近代以降であると考えられる。

第 4 項 調査成果

(1) 調査区 1

遺構と遺物

第 1 遺構面 (図 4、図版 37)

鋤痕と考えられる耕作痕跡を検出した。これらは 0.8m 程度の間隔を空けて 9 条程度が北北東方向から南南西方向へと延びる。

第 2 遺構面 (図 5、図版 38)

遺構 1 は流路である。自然流路と考えられ、北から南への流水方向が推定される。幅 3.5 ～ 4.5m をはかるが、調査区の北壁付近で東へと広がることから、ここで幅を大きく広げるか、もしくは東へ屈曲していた可能性がある。埋土中に遺物は含まれない。

遺構 2 も自然流路であり、下層確認のため調査区東側に設定したサブトレンチ内に検出したものである。埋土中に土師器、黒色土器 (1) を含むことから、古代に帰属するものと考えられる。黒色土器 (1) は内黒で低い高台が付く。摩滅が著しく、器表面の調整は不明瞭で、内面にミガキの痕跡と考えられる弧状の痕跡も窺えるが不明瞭である。またその形態からは在地産のものと考えられることから、この自然流路は遅くとも 10 世紀初頭には埋没したものと推定される。

(2) 調査区 2

第 1 遺構面 (図 4、図版 37) 近世末頃と考えられる耕作痕跡を検出した。

第 2 遺構面 (図 5、図版 38) 第 1 遺構面から掘り下げたものの、生活痕跡は検出されなかった。調査区周囲の堆積状況から判断して掘削可能な深度は地表面下 2.1m であり、その時点での平面を第 2 遺構面として平面図を作成した。

第 5 項 まとめ

調査区 1 及び 2 において検出されたのは近世以降の耕作痕及び自然流路であり、中世以前の生活痕跡は検出されなかった。また土層で確認された水田耕作の痕跡は短期間にもかかわらず繰り返し上方へとかさ上げされた様子が窺え、今回調査を実施した地点は近世末頃まで、治水面で不安定な状況にあったことが推定され、生活に適した環境であったとは考えにくい。

自然流路から出土した土師器の小片や黒色土器は摩滅が著しく、またこの自然流路以外に古代のものとも認められる遺構は検出されていないことから、その由来は流路上流となる遺跡の中心域付近に求めざるを得ない。

1966 年に撮影したこの付近の航空写真では、今回の調査区より南西側に耕地が広がっており、それらの耕地が占める範囲の東側外郭線は今回の調査区付近まで、北から南へと緩やかに弧を描く。これには旧河岸等の地理的条件が影響している可能性もあり、その対岸 (右岸) の住宅や敷地が河岸に沿って幾重にもラインを描く様に占地する状況も、各時期における河岸のラインを示

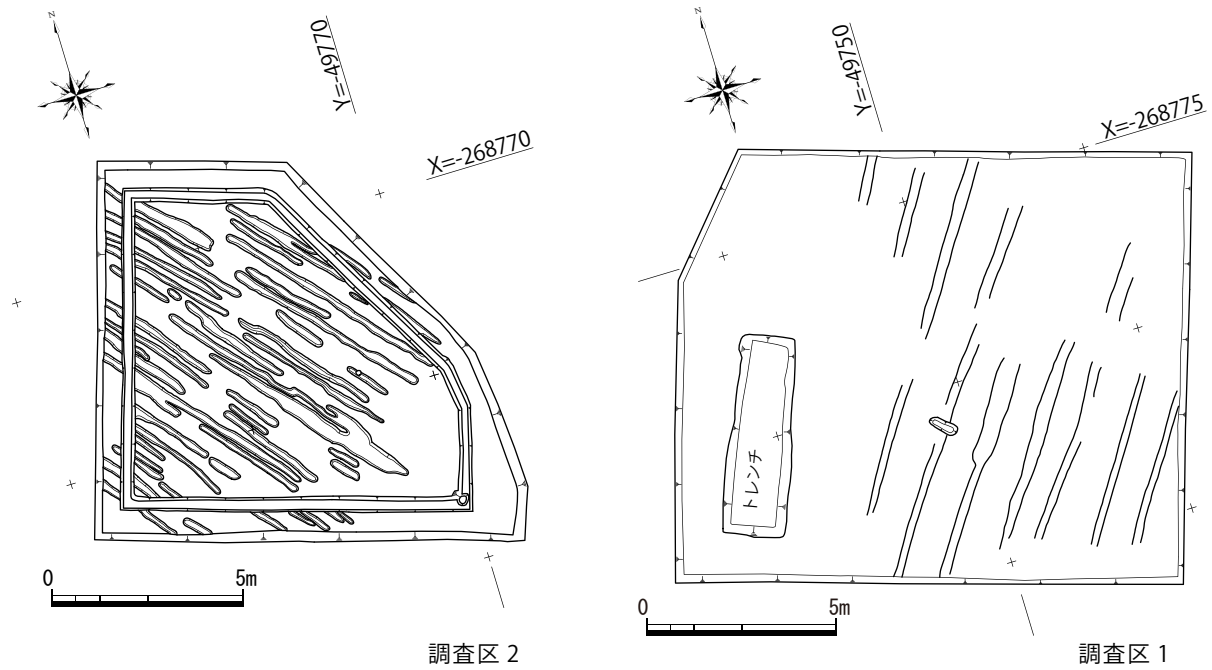


図4 調査区1・2 第1遺構面検出遺構図

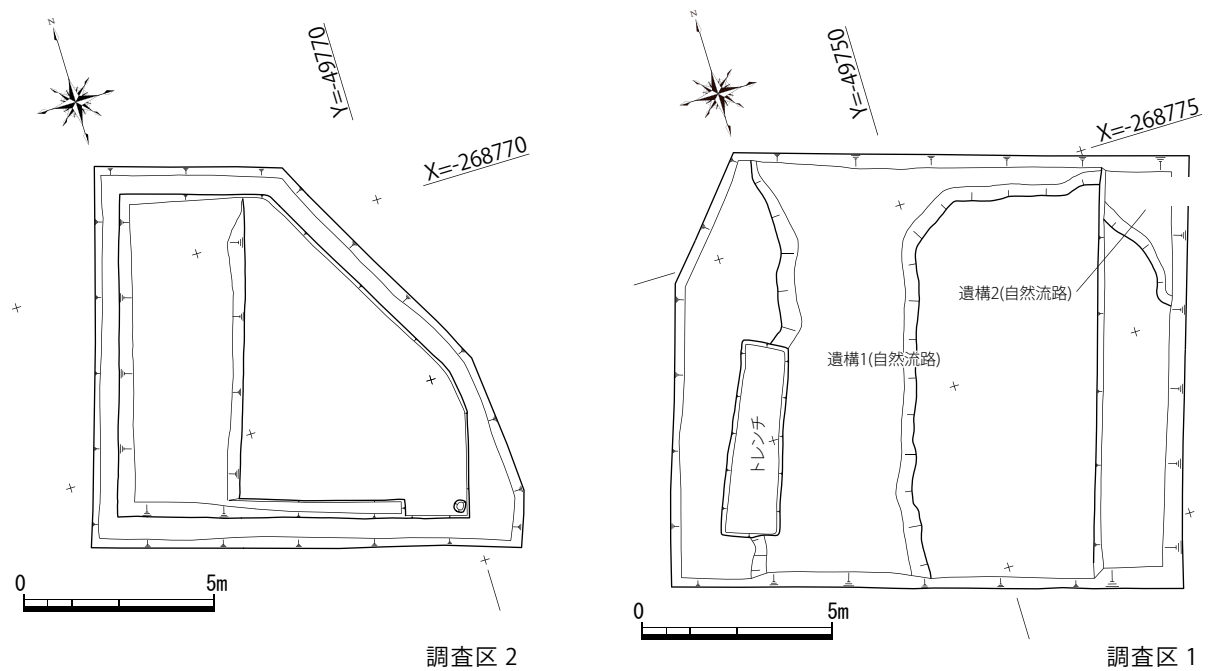


図5 調査区1・2 第2遺構面検出遺構図

しているものである可能性もあり、(*13) 近世末頃以降の遺物を含む土層が厚く堆積する状況とも合わせて、少なくとも近世末頃まではこの位置まで河岸が迫っていた可能性を指摘することができる。

平成21年度の調査で検出された掘立柱建物跡は、中世にはこの近接地域まで生活圈となっていたことを裏付けるものであるが、この付近の遺跡の広がりについては一時期における河川の浸食による影響も考慮する必要があることになり、「安宅一乱記」に描かれる湊の位置の比定には、近接地点での更なる調査が望まれる。

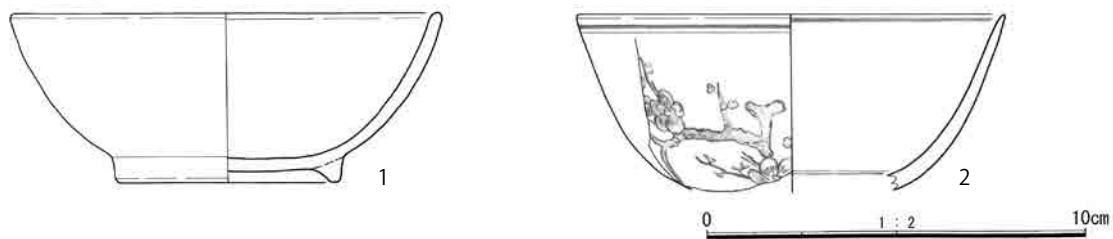


図6 遺物実測図

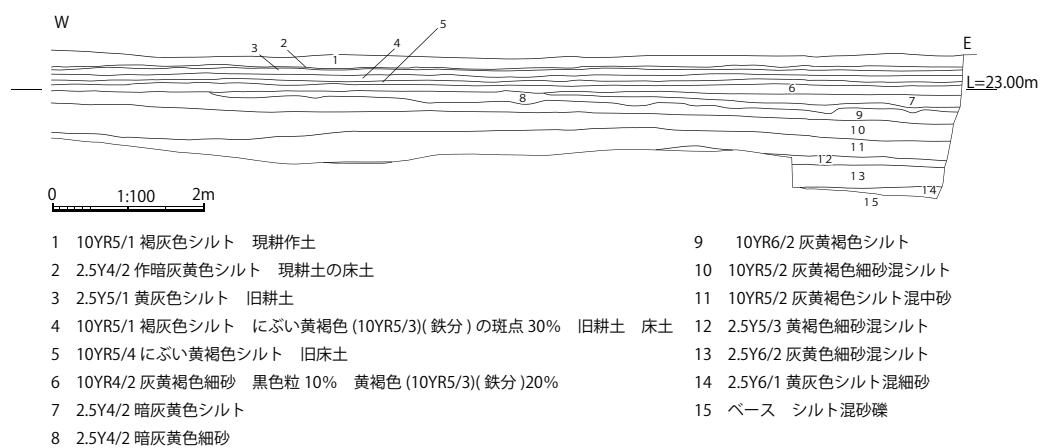


図7 調査区1 北壁土層



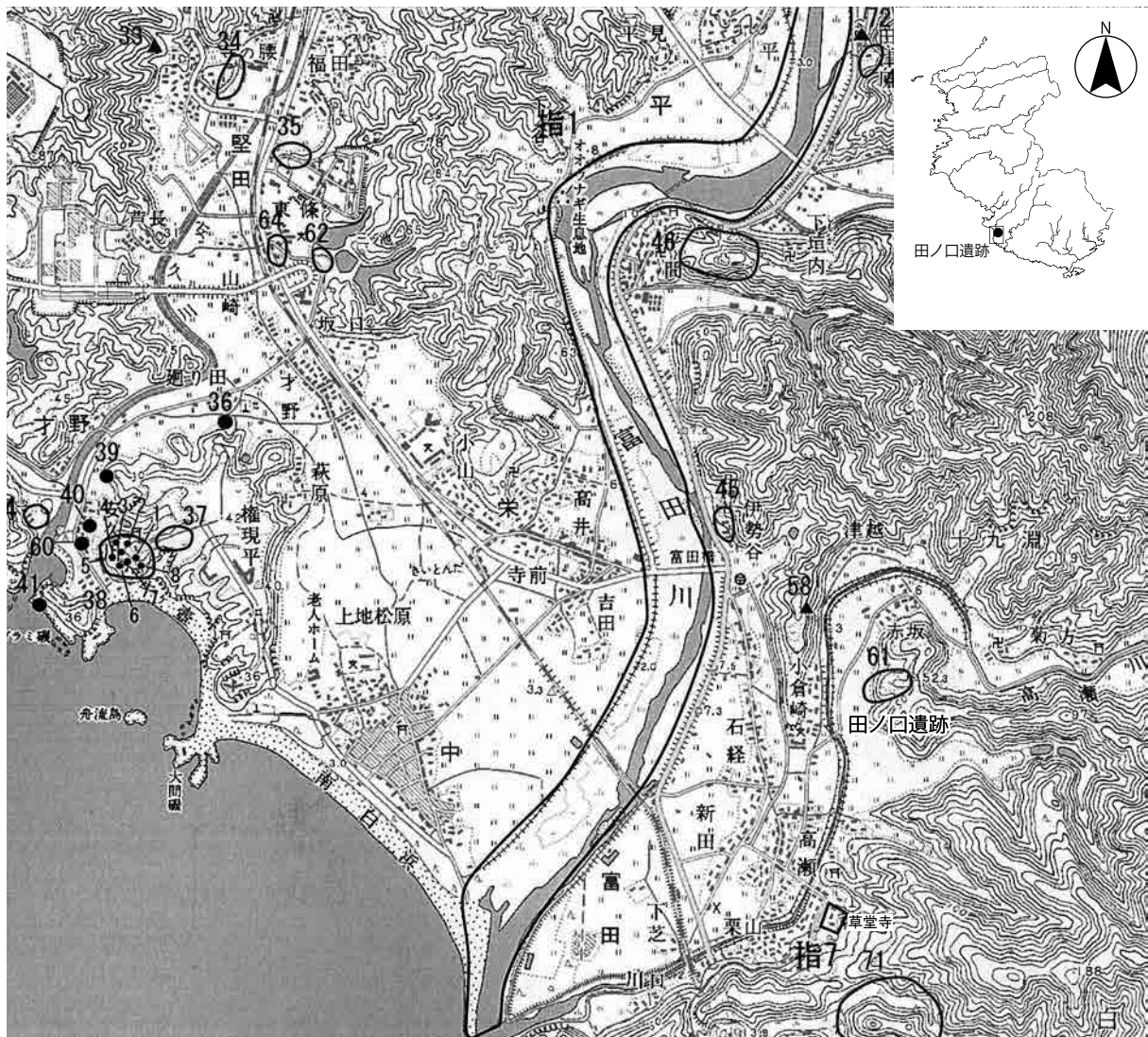
写真1 遺跡周辺航空写真 (国土地理院撮影)

第6節 田ノ口遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺市～すさみ町に至る自動車道及びこの自動車道から白浜空港へのアクセス道路について、その建設予定地の一部が田ノ口遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲にかかることとなった。

これにより、県文化遺産課が平成23年度に確認調査を実施した。その結果、当該建設予定地は本調査の必要があるものと判断され、県文化遺産課が国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所と協議を進めた結果、丘陵斜面及び平野部の一部について本調査を実施する運びとなった。発掘調査は国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。



33. 堅田古銭出土地 34. 西前遺跡 35. 西富田小学校裏山遺跡 36. 後山遺跡 37. 才野遺跡 38. 権現平古墳群 39. オリフ古墳
 40. 安久川古墳 41. 高見山古墳 45. 日神社境内遺跡 46. 血深山遺跡 58. 十九淵遺跡 60. 脇ノ谷古墳 61. 田ノ口遺跡
 62. 裏の地遺跡 64. 東條遺跡 71. 要害ヶ城跡(要害山城跡) 72. 田津原石斧出土地

図1 田ノ口遺跡及び周辺の遺跡

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

田ノ口遺跡が所在する白浜町は和歌山県南部に位置し、町域の81%は森林で、田辺南部白浜海岸県立自然公園、熊野枯木灘海岸県立自然公園、大塔日置川県立自然公園を含み自然環境に恵まれたところである。また太平洋に面した半島域には、海水浴場のほか全国有数の温泉地である白浜温泉があり、観光資源も豊富である。

本遺跡の西側約600mを南北に延びる国道42号は県北部から太平洋沿岸を南へ走り、本州最南端である串本町潮岬付近を経由して三重県熊野市方面へ向かう主要交通路である。

町域には太平洋に注ぎ込む富田川、日置川といった2つの大きな河川があり、その下流域には沖積平野が広がる。田ノ口遺跡は富田川の河口付近に広がる平野の東端にあたるが、現在の河口からは東へ約2kmの位置にあり、富田川へ流れ込む高瀬川の東岸に形成された狭小な沖積平野の一部と、標高40m程度の丘陵西側斜面がその範囲に含まれる。

当該地点は戦後、丘陵上で畑地の開墾や植林がなされ、さらに昭和40年代に山裾の平野で圃場整備が進められたことから、現状では丘陵斜面は大部分が平坦地に造成され、丘陵裾部は住宅の敷地及び耕作地となっていた。山頂付近は海岸方面に眺望のきく場所であり、富田小学校が立地する低丘陵を挟んで遠く太平洋を望むことができる。

(2) 歴史的環境

田ノ口遺跡から約350m北西の丘陵上には、サヌカイト製の有舌尖頭器が出土した十九淵遺跡(58)が知られ、縄文時代草創期の遺跡とみられている。またこのほか、天狗谷遺跡(早期～晩期・25)、横浦岩陰遺跡(前期～後期)、細野遺跡(中期～後期)、垣谷遺跡(中期)、瀬戸遺跡(中期～晩期)、瀬戸田尻浜遺跡(晩期)等の縄文時代の遺跡が点在しており、縄文時代には草創期から晩期まで、この地域が人々の生活の場となっていたことが窺える。

また弥生時代の遺跡としては、瀬戸遺跡、日神社境内遺跡(45)等がある。

瀬戸遺跡は昭和50年代に、京都大学により発掘調査が実施されている。縄文時代中期から平安時代中期まで存続した遺跡と考えられており、縄文時代の遺物としては土偶が出土している。

江津良遺跡、瀬戸田尻浜遺跡は、出土・採集遺物からは海に面して立地する庄内併行期の遺跡であることが推定され、製塩土器も採集されている。端田峠遺跡は標高30m程度の丘陵上に所在する遺跡で、石鏃や石斧などの石器が採集されている。また、日神社境内遺跡は富田川東岸の河岸段丘上に所在し、田ノ口遺跡からは近い距離にある。

古墳時代の遺跡として、滑石製品等祭祀に伴うとみられる遺物が出土した坂田山遺跡のほか、県史跡である火雨塚古墳をはじめ権現平古墳群(38)、脇ノ谷古墳(60)、オリフ古墳(39)、安久川古墳(40)等の古墳が存在する。これらの古墳はいずれも海岸に近い場所或いは河口付近に造営されたものである。火雨塚古墳は近世頃からその存在が知られており、主体部は横穴式石室で石室内には組合式石棺が存在する。墳丘は土の流出が著しいため不詳であるが、円墳であると考えられている。また権現平古墳群は8基の古墳から成る古墳群で、標高40m程度の台地上に所在する。埋葬施設は箱式石棺で、昭和6年の自然災害による崩落の際には、1号墳から直刀や鉄鏃が出土した。

田ノ口遺跡

古代には、田ノ口遺跡の所在地を含む一帯は牟婁郡に属したと考えられている。『日本書紀』には現在の湯崎温泉を指すとされる「牟婁の温湯」に関する記述が登場し、古くからその名が知られる。

さらに平安時代後期から鎌倉時代にかけて盛んになった熊野三山への参詣には、大辺路が富田川流域から新宮方面へ続くことから、田ノ口遺跡を含む一帯が当時、他地域との交通路に近い場所であったことがわかる。



図2 調査区位置図

鎌倉時代には、日置川下流域に安宅氏が本拠を構える。水軍として優れた勢力を有した安宅氏は中世以降もその海運力を駆使し、東海地方から紀南を経て瀬戸内地方へと延びる海上交易路に多大な影響力を持ったと考えられる。安宅氏は日置川沿いに数々の城を構えたが、上富田町に所在する龍松山城をその本拠とした山本氏が坂本付城、釣瓶山城、国陣山城、尻付山城、野田城、蛇喰城（以上は7城郭跡は上富田町内に所在する）等富田川流域に多くの城郭を築いており、現在の白浜町を含む一帯は安宅氏と山本氏の勢力が拮抗する地域であったといえる。

(3) 既往の調査

田ノ口遺跡においてこれまで発掘調査は実施されていないが、平成13年度に実施された分布調査では、土師器や奈良時代の製塩土器が採集されている。

第3項 調査の方法

調査区は調査区1～3の3つに分け、このうち排土の反転など作業進行上、調査区2を調査区2-1及び調査区2-2、調査区3を調査区3-1及び調査区3-2のそれぞれ2区画に分割した。調査は調査区1と調査区2-1、調査区2-2と調査区3-1及び調査区3-2区と3つの工程に分け、順次作業を進めた(図4)。航空写真測量は3回に分けて実施しており、調査面積は、合計4,117㎡である。

(1) 地区割りの方法

調査区の地区割りは、平面直角座標系(世界測地系)第VI系による、X=270,000m、Y=54,000mを基点とした中区画(図3)及び小区画(図4)を設定した。これらの区画は3箇所の調査区相互の位置関係を把握し易くするため、各調査区を網羅するよう設定している。

また、基準点測量により、3級基準点及び4級基準点を

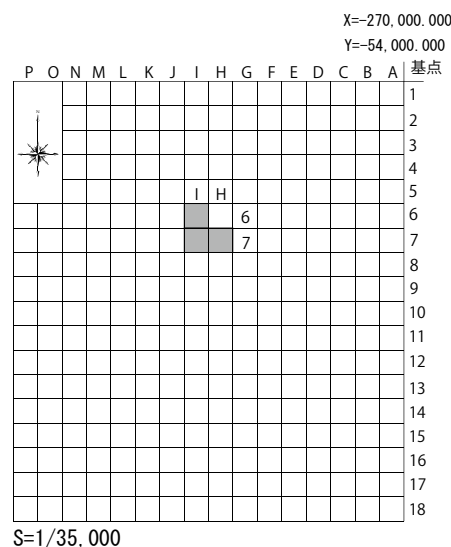


図3 地区割(中区画)

設置した。

水準測量は、1等水準点から3級基準点まで観測を行い、さらに4級基準点まで観測し水準移動を行った。

(2) 基本層序

基本層序は調査区1から3において全て異っており、各調査区に共通する層位はない。よって各調査区について以下のとおり個別に設定した。(図5,6,7)

1) 調査区1 (図5)

第1層 (表土) 圃場整備後の水田耕作土である。

第2層 平安時代後期以降の遺物包含層。複数の層位に細分が可能であるが、この層の堆積は高瀬川の増水や調査区東側にあたる斜面からの土の流出が主な要因であると考えられる。土器のほか、局所的に微細な骨片を含む炭化物が径20～30cmの範囲にまとまって混入する(写真1)。

第3層 第3a層及び第3b層に分層が可能である。第3a層は平安時代後期以降の遺物包含層であり、溝1の埋没後に堆積している。第3b層は薄く堆積した炭化物の層で、遺構109を扇頂として西側に向かい扇状の広がりが見える。微細な土器片を多量に含み、遺構101等周辺の遺構に流入している。

第4層 地山であるシルト層(第4a層)、岩盤及び遺物を含まない砂層(第4b層)を第4層とした。上面が遺構検出面であるが、調査区東半部分では当該土層まで削平が及ぶため、調査区の東側では表土層直下に岩盤が露出しており、そのまま丘陵斜面へ続くと考えられる。砂層は海浜砂と判断され、粒径の小さい砂が主体で、より深い位置では汽水域に見られる貝殻が含まれる。

2) 調査区2 (図6)

調査区2にあたる場所は近代以後に住宅の敷地として造成されており、基本層序は敷地として利用されなくなった後の覆土と、地山である。平安時代後期以降の遺構も検出されているが、敷地造成時の削平は地山にまで及ぶとみられ、遺物包含層は近代以後の遺物を含む。

第1層 近代の廃棄物を含む腐葉土が主体となった表土である。

第2層 近世以降に構築されたと考えられる石垣の、残存する最下段を覆って堆積する。

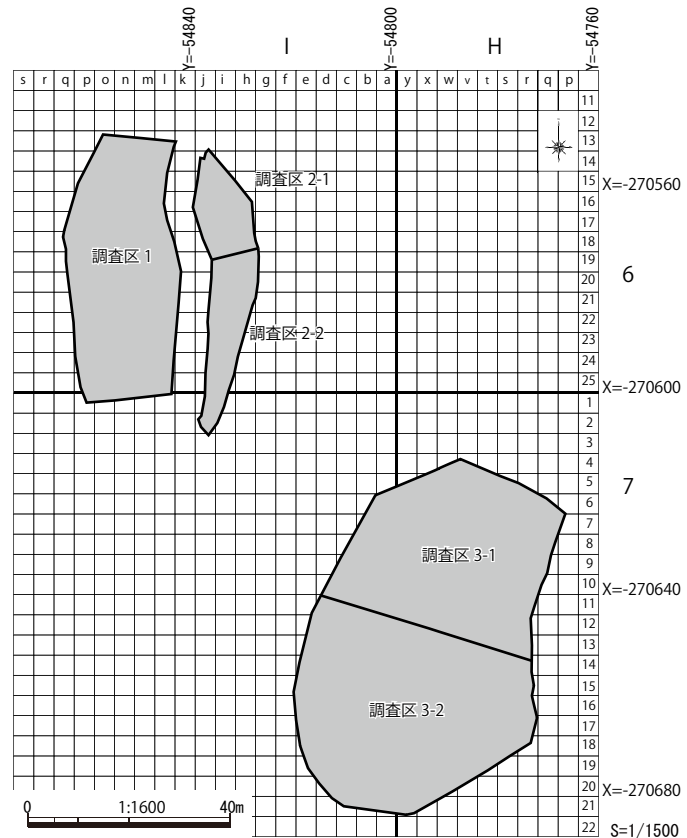


図4 調査区及び地区割 中区画及び小区画

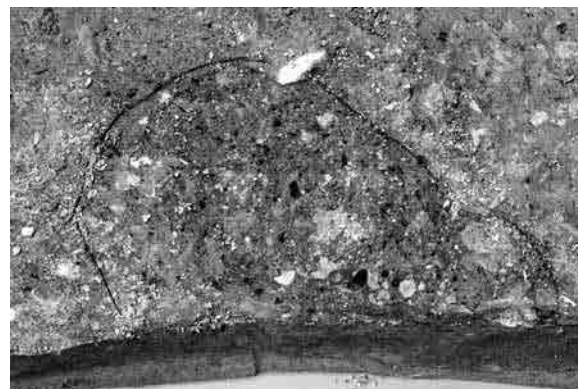
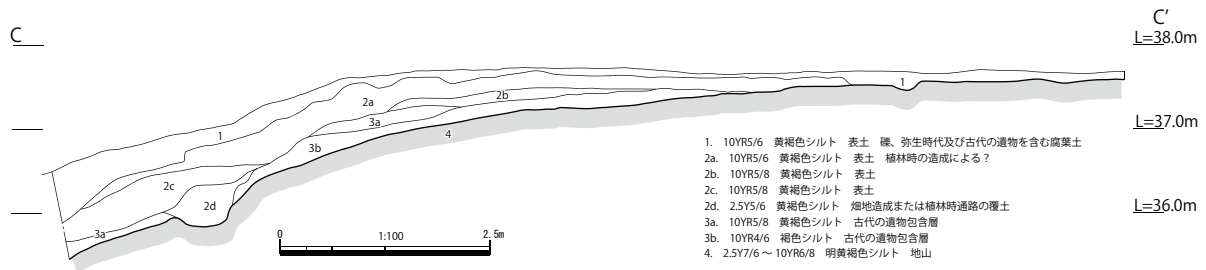
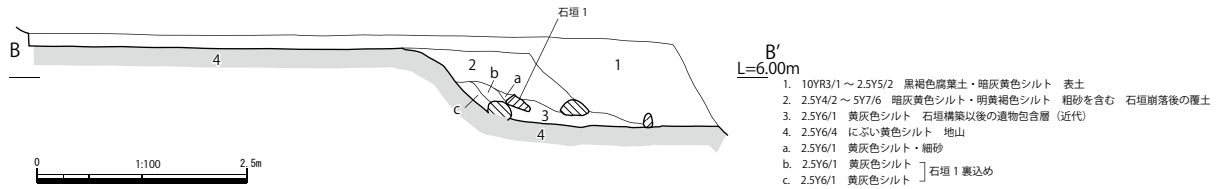
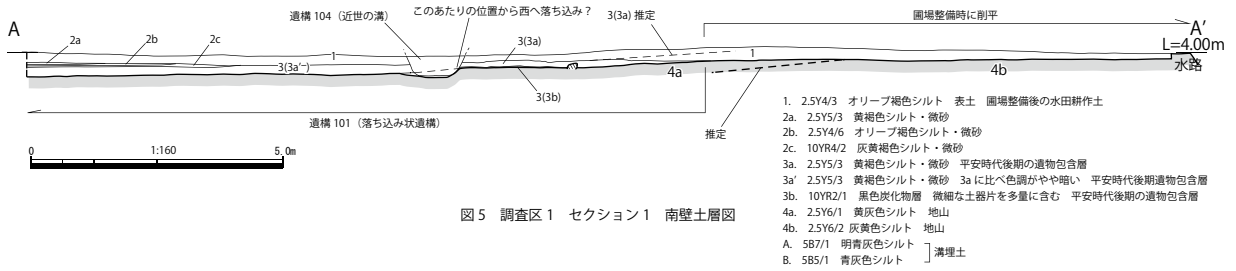


写真1 第2層中にみられる炭化物の集中

田ノ口遺跡



第3層 近世（幕末以降）の遺物を含む包含層であり、下段の石垣から西側に存在する。石垣の構築に伴う整地土であるとみられる。

第4層 地山であり、遺構検出面である。上段では第1層直下となり、重機によるとみられる掘削痕跡が各所に残っていた。また調査区 2-2 の南端では、この層の上面に岩盤が露出している。

3) 調査区3 (図7)

基本土層は調査区 3-1・3-2 について共通である。調査区3には畑地として開墾された平坦部分と丘陵斜面部分といった、地形が大きく異なる部分を含む。平坦部分は斜面を大きく削平しており、その縁辺となる斜面上端付近で僅かに旧地形を留めていると考えられるものの、大部分は地山である第4層上面（遺構検出面）を畑作に伴う土が覆う。丘陵斜面は地形上、絶えず崩落と堆積を繰り返す状況にあったことが想定され、畑地の開墾に伴う排土や土の流出も考慮せざるを得ず、堆積土の帰属時期を判断するのはやや困難であるが、第3層は平安時代以降の遺物包含層と判断された。

第1層 表土。現地表面を覆う腐葉土で、礫及び弥生時代から古代にかけての遺物を含む。

第2層 表土。畑地開墾に伴う排土とみられ、礫及び弥生時代から古代にかけての遺物を含む。

第3層 平安時代以降の遺物包含層。a～cに分層が可能である。斜面上で地山に平行して堆積する比較的均質な土層であるため、平安時代から近代の畑地開墾時に至るまで自然に堆積したものと判断された。ただし現況でも斜面各所に崩落がみられ、遺物の露出がみられることから、3c層以外については、これらのより細分された層ごとに帰属時期を特定することは困難である。

第4層 地山であり、上面は遺構検出面である。削平により一部露出した岩盤を含む。

第4項 調査成果

1) 調査区1

調査区1では第4(4a・4b)層上面で遺構検出を行い、近世以降の攪乱及び平安時代の遺構を同一面上に検出した。また調査区南半では圃場整備に伴うとみられる、粉殻を充填した暗渠が幅約0.3m、深さ約0.6mで柵目状に掘削されていた(図9)。

遺構101(図9、図版40・41・42)東西幅15m以上で西側は調査区外に及び、南北は35mにわたる。当初調査区北側から南方向へと延びる、幅広く浅い溝状遺構と考えられたが、調査区南半で南西方向へ落ち込む様相を見せることから、地形に伴う自然流路或は落ち込み状をなす地形であると判断された。またこの遺構の東側上端は遺構堀形の上端ではなく、圃場整備時に緩やかな斜面となっていたところが全面的に水平に近く削平されたことにより、東側の第3a層が削り取られて地山(第4a・4b層)が露出した結果、一見落ち込み状遺構の上端に近い形を呈しているものと判断された(図5)。そのため、当該遺構埋土の一部を基本土層の第3a層としている。ただし遺構104を挟んだ東西で底面の高さに違いがみられ、傾斜の連続性も認め難いことから、遺構104東側上端に沿った位置に西へ落ち込む段差状の上端が存在していた可能性が高い。遺物は土師器(6～9)、須恵器(10・12・13)、黒色土器(11)が出土しているが、遺物の分布は、これらが本来遺構109近辺に存在した遺物であり、そこから遺構101に落ち込んだとみられる状況を示し、遺構109に近い位置では集中して出土するものの、調査区西壁付近では疎となりほとんど出土をみなかった。

遺構104(図9、図版41)近世以降に掘削された溝であるが、それ以前に窪地として存在していたとみられる落ち込み状遺構101の痕跡を踏襲している可能性が高く、先述した遺構101の段差状の上端に沿って掘削されたと考えられる。埋土は径10cm以上の礫及び粗砂を多量に含んで固く締まっており、圃場整備時またはそれ以前に人為的に埋め戻されたと考えられる。また、調査区南端付近で腐朽の進んだ槌状の木製品の残片を確認しており、調査区南側の現有水路に延長していたことがわかる。染付等の近世陶磁器、灰釉陶器等が出土している。

遺構108(図11、図版42)長径約0.83m、短径約0.53m、深さ約0.3mを測る土坑である。第3a層直下に存在し、西半分を遺構104に切られる。埋土はほとんどが遺構109に伴うとみられる炭化物で、微細な土器片を多量に含む。底付近には自然石が投げ込まれたとみられる状態で出土した。帰属時期は遺構109とほぼ同じとみることができる。

遺構109(図10、図版43,44)長径約3.3m、短径約2.4mの不定形をした土坑である。深さは中央付近で最も深く約0.2mを測る。また底面の3箇所径約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mのピットを検出した。遺物は土師器の小皿(30～44)、椀(45～51)、土師器甕(75～78)、のほか、灰釉陶器椀(58～59)・皿(60～61)、黒色土器椀(65～74)、土釜(79)等があり、それらの一部は口縁を下にし俯せにした状態で出土した。また口縁を上に向けて置かれた小皿(図版43)には3個体程度を重ねて置いた状態で出土したものが確認されている。

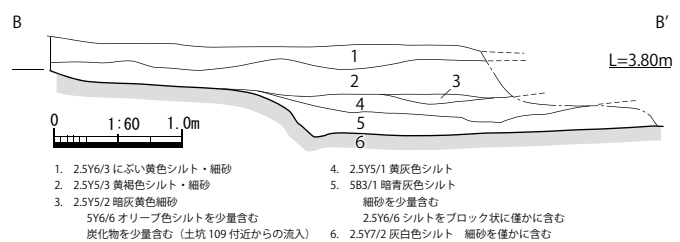


図8 遺構101土層図

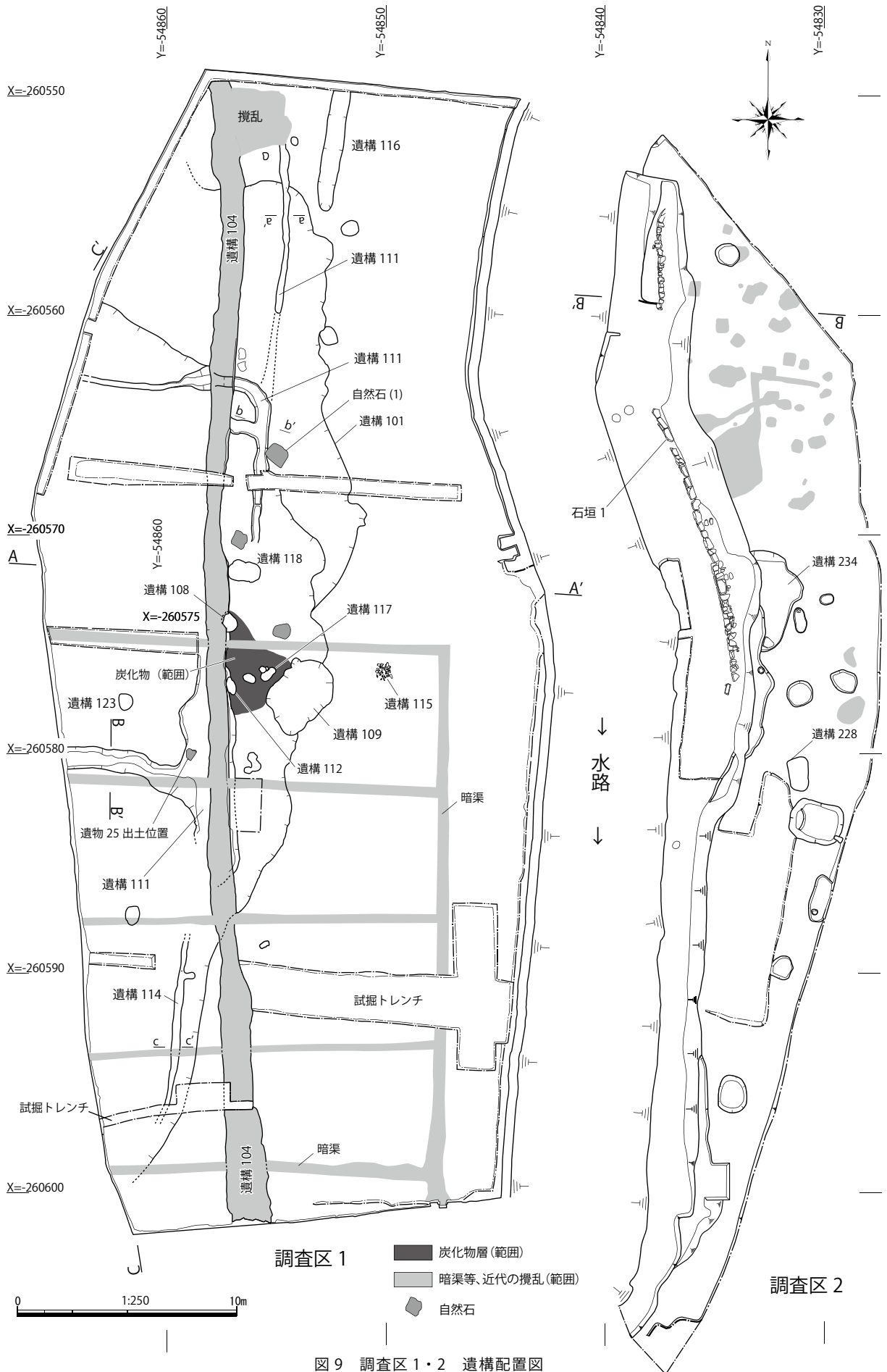


図9 調査区1・2 遺構配置図

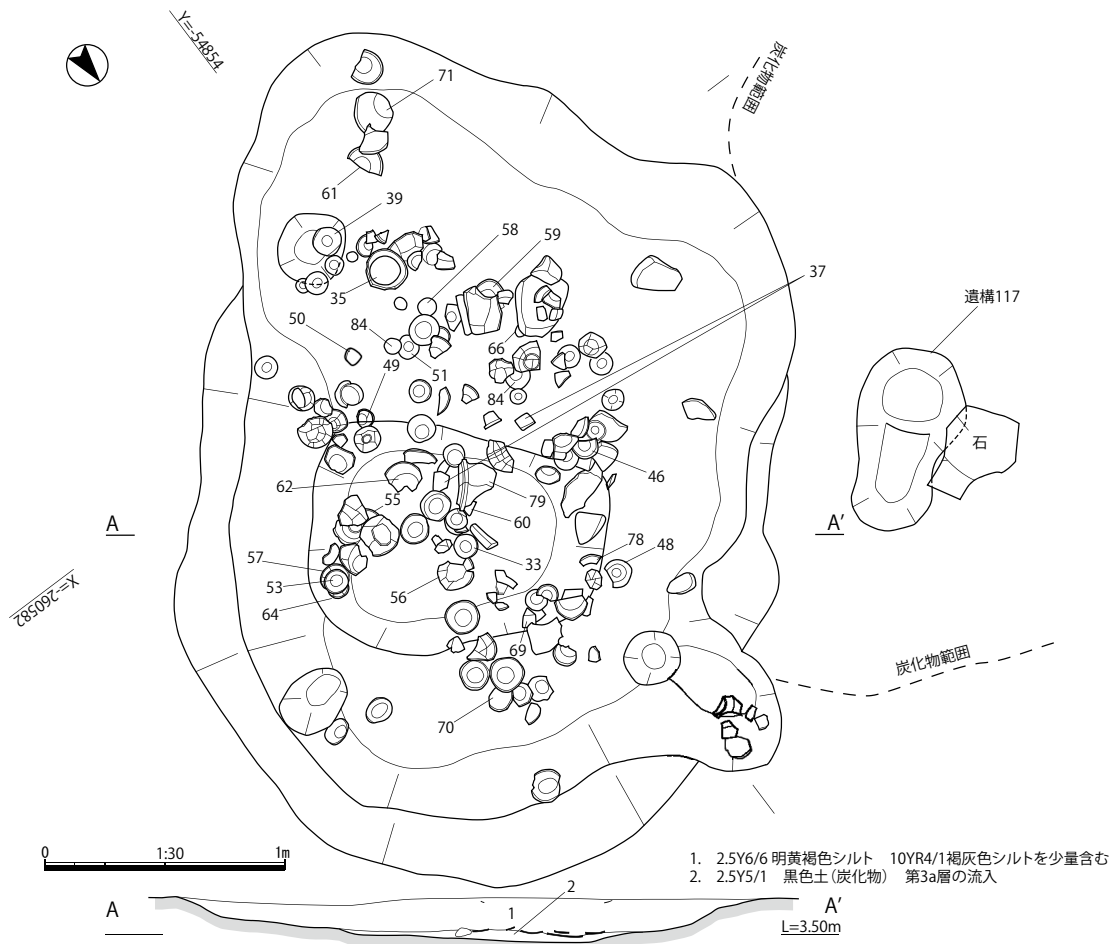


図10 遺構109 遺物出土状況図及び土層図

俯せに置かれた甕、土釜は中位から底部を欠損しており、当該遺構は上半を削平されているものと判断される。埋土中には土器片が多量に含まれており、遺物取り上げ時に確認し得た個体数は土師器、灰釉陶器、黒色土器等合わせて約120個体であるが、本来はより多くの個体が存在したものと考えられる。

埋土は、上層（第1層）が明黄褐色のシルトで、地山由来の微砂を多量に含み、下層（第2層）は炭化物を主体とする黒色土である（図10）。第1層は当初分層が可能であると考えられたものの、土層断面にはマブリング状の様子が観察され、これは雨水等に伴う表土の流入によるものと判断された。また、基本層序の第3b層は当該遺構西側上端から西方向へ広がるように薄く堆積する炭化物で、5～10mmの微細な土器片を多量に含む。

出土遺物が多いため、遺物については種類ごとの説明を次に述べる。また、出土遺物の総合的な検討は「小結」にて後述する。

土師器小皿（30～44、図版61・62）

口径が9～10cm程度の、手捏ねにより成形された皿である。概ね体部内外面をヨコナデ調整し、底部は未調整である。ほとんどの個体の体部外面には、多段状をなす。

形態上大きく分けて、底部から口縁部にかけて体部を曲線的につくるものと直線的につくるものがあり、曲線的につくるものは口縁端部を僅かに丸く肥厚させるもの（35）、不明瞭であるが内面に沈線をほどこすもの（39）等がある。体部が直線的に延びるものは底部から体部にかけての屈曲が著しく、口縁端部を外反させるもの（42～44）も存在する。両者の区別は必ずしも明確

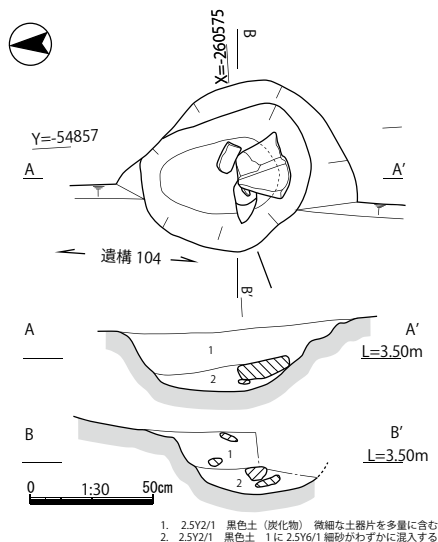


図 11 遺構 108 実測図

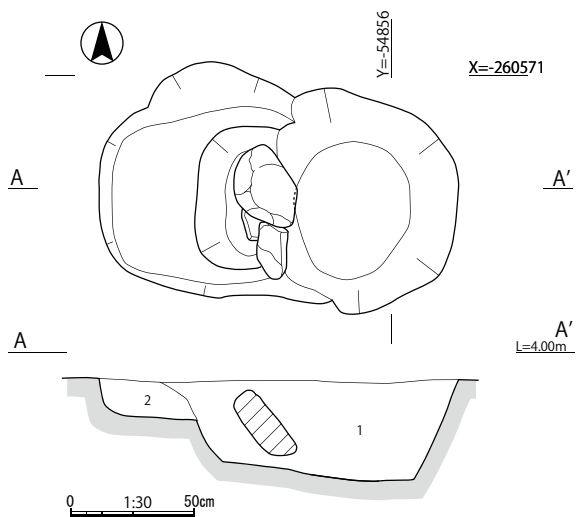


図 14 遺構 118 実測図

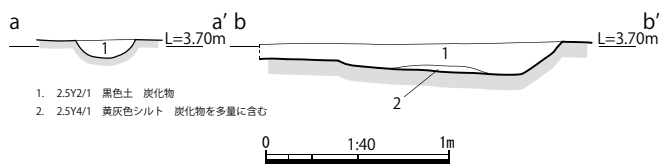


図 16 遺構 111 土層図

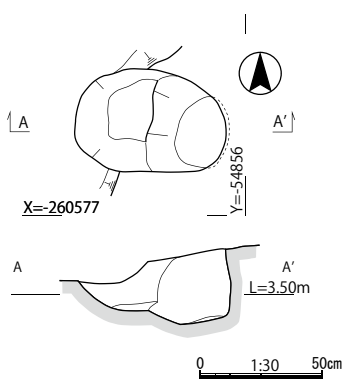


図 12 遺構 112 実測図

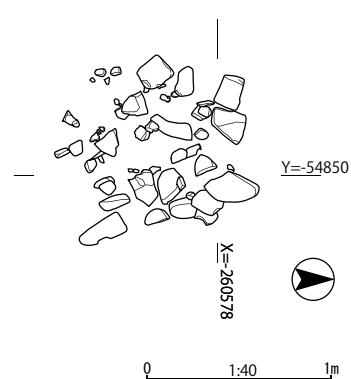


図 13 遺構 115 実測図

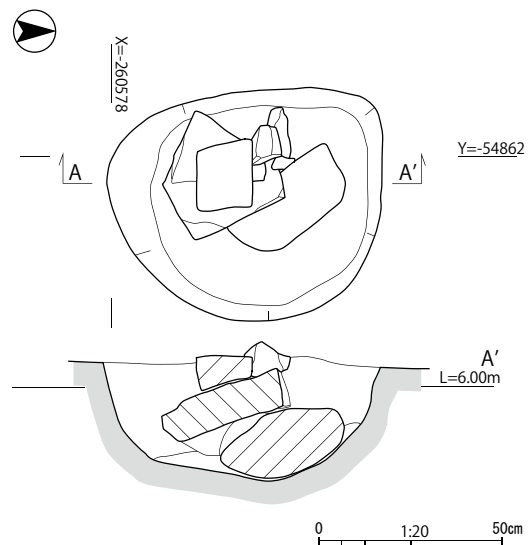


図 15 遺構 123 実測図

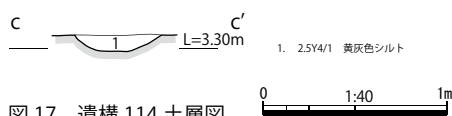


図 17 遺構 114 土層図

でなく、曖昧なものも含まれる。形態の詳細な区別については「小結」において後述する。

土師器碗 (45 ~ 51、図版 62・63)

土師器碗は「多段ヨコナデ技法」(*14)を施すもので、体部外面の稜線はやや不明瞭なものが多い。内面は使用に伴うとみられる摩滅が著しいが、幅 1cm 程度のハケによるとみられる調整痕を残す個体が存在する。高台は貼り付けにより、断面形状は長方形をなし「ハ」の字に開くもの(45 ~ 47)、断面三角形を呈するもの(48 ~ 51)まで様々である。また、見込みに重ね焼の痕跡を残すもの(46)や、底部に木の葉の圧痕を残すもの(57)も存在する。

土師器皿 (52 ~ 57 図版 62)

土師器皿としたものには2種類あり、浅く広がる体部に径の小さい高台がつくものと、椀をの器高のみを低くした形態のものがあるが、この細分については「小結」において後述する。53、54は体部下位で屈曲する特徴を持つもので、白磁の皿Ⅰ類(*4)に近い形態をとり、高台の形状も角高台に似る。さらに56、57は口縁から底部まで体部は緩やかに弧を描き外面が多段状を呈する

黒色土器（65～74、図版63）

黒色土器は、椀のみでA類（内黒、65～70）が大半を占め、B類（両黒、71～74）は少量である。

A類には体部が丸みをもって外湾し径の大きい高台を持つもの（65・66）、体部が直線的に延び、径の小さい高台を持つもの（67）、やや小型で体部は丸く、径の小さい高台を持つもの（69、70）がある。これらは黒化処理した内面にヘラミガキの痕跡は不明瞭で、外面は多段状をなす。

B類（71・72）は薄いつくりで器の内外面にヘラミガキが施される。図に示したものは高台部分を欠損しているが、73のような内側までヘラミガキを施した低い高台が貼り付けられていたものと考えられる。

土師器甕（75～77、図版64）

4個体分が出土しており、いずれも口縁部及び胴部の形態が異なる。

75は屈曲した口縁にヨコナデを施し、端部を上方につまみ上げる。頸部以下は調整が不明瞭ではあるが、内外面ともにハケ目の痕跡、外面のみに指頭圧痕が観察される。肩部以下を欠損しているが、胴部は球形をなすものと考えられる。胎土は砂粒及び結晶片岩の細礫を含む。76はやや肥厚した口縁に横方向のハケ調整を施すもので、頸部以下は摩滅のため調整が不明である。最大径が頸部よりやや下がった位置になると考えられ、やや長胴になるものと考えられる。77は口縁部から頸部にかけての屈曲が強く、口縁端部は僅かに外側へ折り返す。口縁部から頸部までにヨコナデを施し、頸部以下は内外面にナデを施すが、内面は上位にヘラ状工具の使用痕跡が観察される。肩部に最大径を持つとみられ、底部に向かって径を小さくする長胴の形態をとるものと考えられる。78は口縁部は直線的に斜め上方へ開くもので、肩部付近までの出土であるが、寸胴の形態を示すと考えられる。摩滅のため調整は不明瞭であるが、ハケ目の痕跡及び指頭圧痕が観察される。

以上の形態的差異は時期的変化を示す可能性があり、その帰属時期については土釜(79)の出土とも合わせ検討する必要があるものと考えられる。

土釜（79、図版64）

土師器釜で、口縁部に極めて近い位置に幅の狭い鏝を巡らせるものである。胎土に含まれる砂粒は径1～3mmの石英が大部分であるが、雲母片も観察される。やや丸みを帯びる体部下位から底部付近までが残存しており、口径とほぼ同じ22cm前後の器高が復元される。形態からは摂津C型(*16)とされるものに近いと考えられ、搬入品である可能性が高い。時期は10～11世紀後半頃と考えられる。

灰釉陶器（58～61、図版63）

灰釉陶器は、椀、皿、長頸壺が出土している。

58は椀で、体部は薄く、底面は高台貼付後糸切り痕をナデ消す。釉を内面にハケ塗りしているとみられる。時期は、K-90からO-53窯式の時期(*注)であると考えられる。59も椀で、底

部に糸切り痕を残し、所謂「三日月高台」に近い形状を示す貼り付け高台で、貼付後に内側のみナデを施す。釉はハケ塗りによるとみられ、見込みに重ね焼の痕跡を残す。O-53 窯式の時期と考えられる。60 は段皿で小型のものである。幅のやや狭い口縁部内面及び高台部を除く外面に釉を施すが、施釉方法は不明である。O-53～H-72 窯式の時期と考えられる。61 は小型の皿で、釉は見込みと高台以外を漬け掛けする。口縁は端部を丸く作り、やや外反気味となる。K-90～O-53 窯式の時期に相当すると考えられる。

その他、62 は円盤状の平高台を持つもので椀とみられ、同様の底部を持つ皿が出土している。64 は小型の「て」字状口縁皿で、胎土から搬入品とみられる。

遺構 111 (図 8、図版 44) 幅 0.2～0.4m で、調査区北端付近から中央付近までの延長 18m にわたる。遺構 101 の底面にも検出された、調査区南側の溝状遺構 114 とは本来一連の遺構であった可能性が高い。深さは 5cm 程度 (図 16,17) であるが、調査区南側は北側に比べ比高差 0.6m を測る低地であることからみて、当該遺構は調査区北側から遺構 101 内に向かう北から南への

水流痕跡であると判断される。途中分岐して西側へと流れる箇所が有るのは、より標高の低い高瀬川方向へと流れが向かったものであろう。圃場整備時の暗渠が同様の方向に掘削されているところからも、当該地点の水の流れとしては自然であると考えられる。遺構 104 (近世溝) が位置的に重複しこれに切られているが、当該遺構の埋土は地山に由来するとみられる微砂を多量に含むシルトであり、両者の埋



写真 2 自然石 (1) 及び周囲の断割

土の判別は容易である。須恵器甕胴部の破片がまとまって出土しており、また、遺構 101 から遺構 109 に関わるとみられる炭化物がまとまって出土していることから、当該遺構の帰属時期は土坑 9 とほぼ同時期であるか、先行すると考えられる。遺物は須恵器のほか、権状石製品 (25) が出土した。

遺構 112 (図 12、図版 45) 長径約 0.6m、短径約 0.4m の、平面が楕円形をなす土坑である。深さは最深部で約 0.3m を測るが、西半部分はテラス状の平坦面となっている。埋土は第 3b 層の流れ込みと見られる炭化物を多量に含むもので、径 5cm 程度の小さな円礫が混入する。

遺構 114 (図 9,17、図版 40) 遺構 111 と同様の溝状遺構である。幅約 0.3m で、延長 7.5m を検出した。深さは平均 5cm 程度であり極めて浅く (図 17)、遺構 111 から延長する水流の痕跡であると考えられる。遺物は土師器椀または皿の高台部が出土しており、時期は遺構 111 と同時期に帰属すると考えられる。

遺構 115 (図 13) 径 0.05～0.2m 程度の石が 40 個程度、集石状に集中する遺構である。礫は同様の大きさのものが第 4 層中にも確認されているが、これらはもろい砂岩礫で形状や色調が大きく異なっており、当該遺構出土の礫は表面の摩滅が進んだ所謂河原石である。堀形は検出されおらず、上部のほとんどが削平された土坑等の底面付近であると考えられる。

遺構 116 (図 9、図版 40) 幅約 1.0m の溝状以降で、調査区北端付近に長さ約 5.8m にわたり検出された。深さは中央付近で約 5cm と極めて浅いものである。遺構 111、114 と同様に、北から南方向への流水痕跡と考えられる。

遺構 117(図 9、図版 45)長径約 0.96m、短径約 1.8m の土坑である。深さは 0.1～0.2m で、遺構 109 に由来する炭化物層(第 3b 層)下に検出された。

遺構 118(図 14、図版 40)長径約 1.5m、短径約 1.0m の、平面形がやや方形に近い楕円形をした土坑である。深さは最も深い位置で 0.4m を測り、第 3b 層の流れ込みと見られる炭化物を多量に含んだ黒色の埋土は径 20～30cm の礫を含む。西端にテラス状の平坦面を有する。



写真 2 調査地周辺の空中写真

遺構 123(図 15、図版 40)径約 0.64～0.74m の、やや円形に近い平面形をなす土坑である。深さは約 0.3m で、炭化物を多量に含む埋土から一辺 30cm 程度の礫が投げ込まれたとみられる状態で出土した。

自然石 (1)(図 9、写真 2)上面は平坦であり、表面の風化及び摩滅の状態から、本来は地表に長く露出していたものと考えられるが、表面には何らかの使用痕跡とみられるものは観察されなかった。



写真 3 遺構 346 出土焼土塊・礫

周囲を掘り下げたところ(写真)、下半は地山に埋もれた状態であった。調査区東側の丘陵斜面には砂岩の露出がみられ、他所より持ち込まれた等の可能性は無く、地山である砂層には径 20cm 以上の比較的大きな礫も多く含まれていることから、調査区周辺においては普遍的に同様の転石が見られるものと推定される。調査区北端に攪乱坑があり、径 2.0m 以上とみられる巨大な自然石を確認したが、これらはかつて近辺の地表に存在していた転石である可能性がある。

(2) 調査区 2

調査区 2 は調査区 1 東側の用水路を挟んで山裾にあたる位置に設定した。用水路は調査 1 で検出した遺構 104 に変わる水路として近代以降に掘削されたもので、本来の地形は調査区 1 から調査区 2 にかけて、緩やかな傾斜をなしていたと推定され(図 17)、調査区 2 の平坦部分は山裾部分を切り取り、谷側へは石垣を構築することで敷地の平坦面を確保したものと考えられる。

調査区 1 で検出した遺構に近い時期と考えられるのは遺構 234 のみで、ほとんどは遺物を含まないか、近世末以降に帰属するとみられる染付片等の出土をみるのみである。

遺構 228(図 19、図版 45)長辺約 2.5m、短辺約 1.5m の、平面形が隅丸の長方形をなす土坑である。深さは約 1.2m で、埋土は径 20cm 以上の礫を含む。遺物は陶器の甕(84)等が出土しており、帰属時期は近世末以降と考えられる。

遺構 234(図 20、図版 44)南北約 4.5m、東西約 1.9m の不定型な平面形をなす土坑で、深さは最深部で 0.3m であるが、旧地形の凹んだ部分が依存したものである可能性もある。西側は石垣堀形により切られており、遺物も少量のため時期を判断するのは難しいが、土師器や黒色土器の小片が埋土中に含まれることから、調査区 1 の検出遺構に近い時期に帰属すると考えられる。

4.3 調査区 3

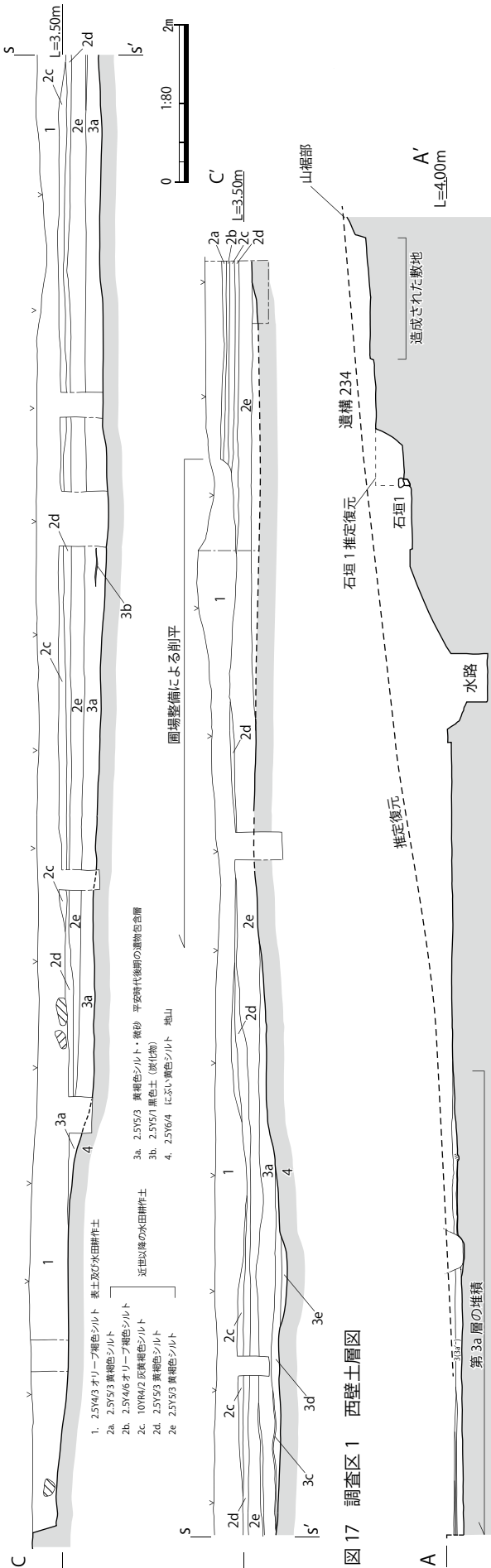


図 17 調査区 1 西壁土層図

図 18 調査区 1 ~ 2 横断面及び旧地形復元図

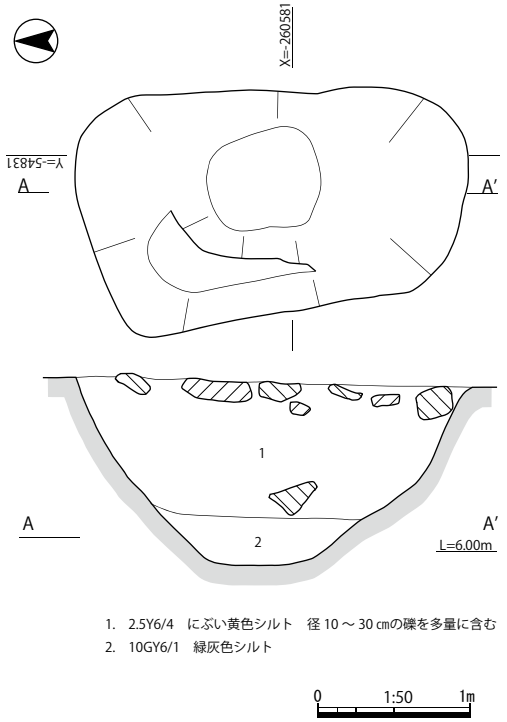


図 19 調査区 2 遺構 228 実測図

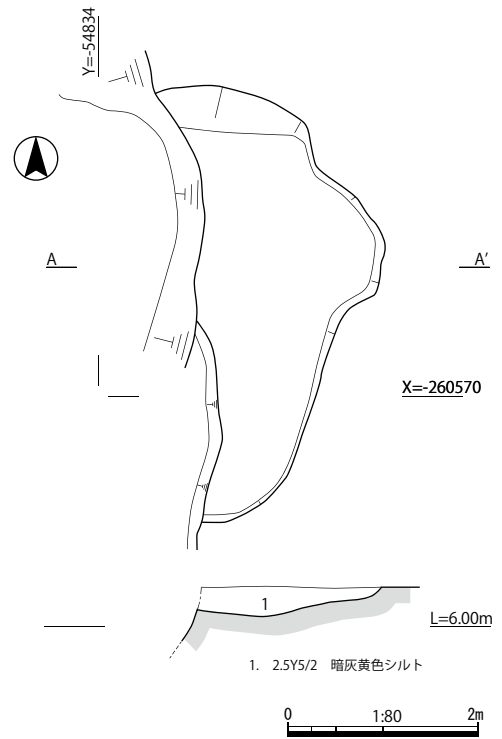


図 20 調査区 2 遺構 234 実測図

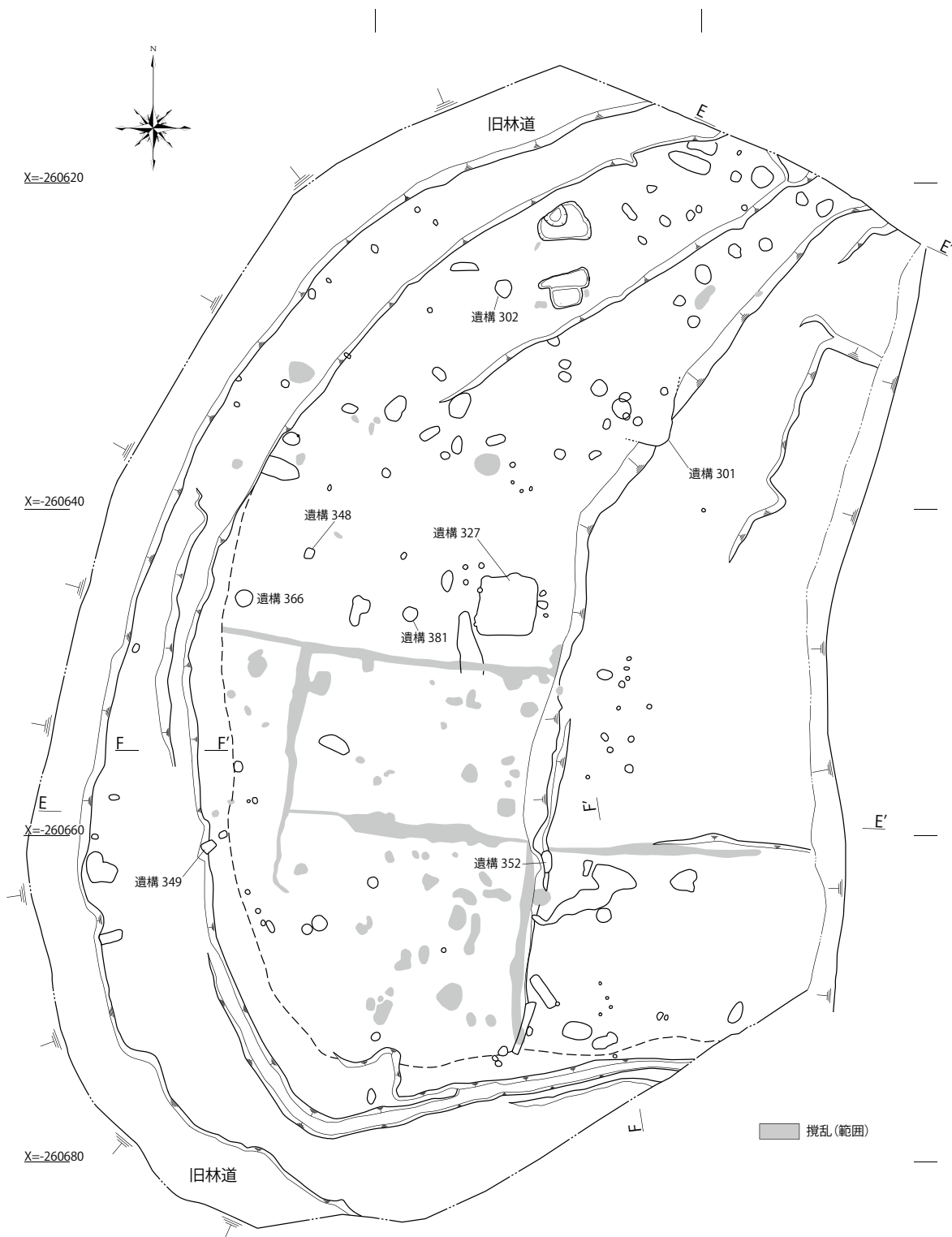


図 21 調査区 3 遺構配置図 (第 4 層上面)

0 1:380 10m

Y=54800

Y=54780

田ノ口遺跡

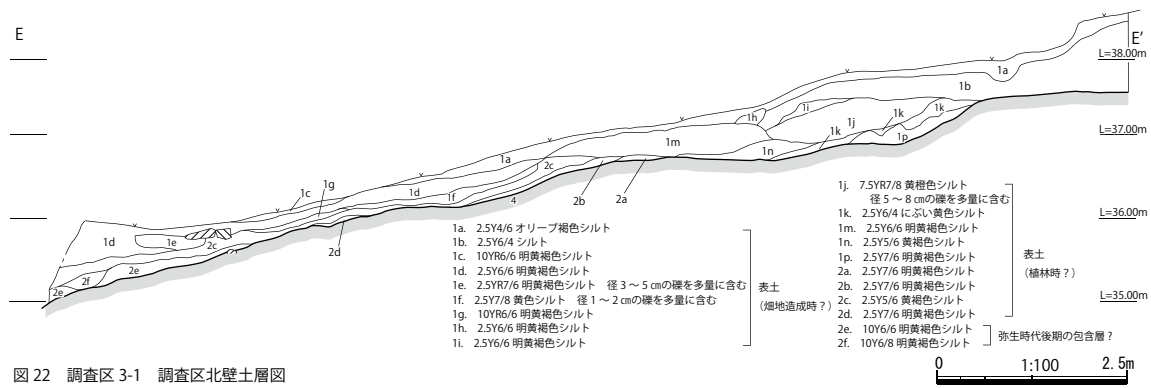


図 22 調査区 3-1 調査区北壁土層図

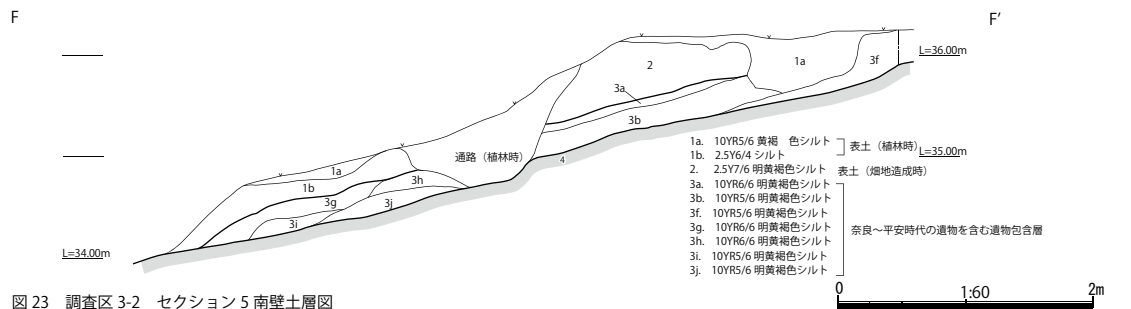


図 23 調査区 3-2 セクション 5 南壁土層図

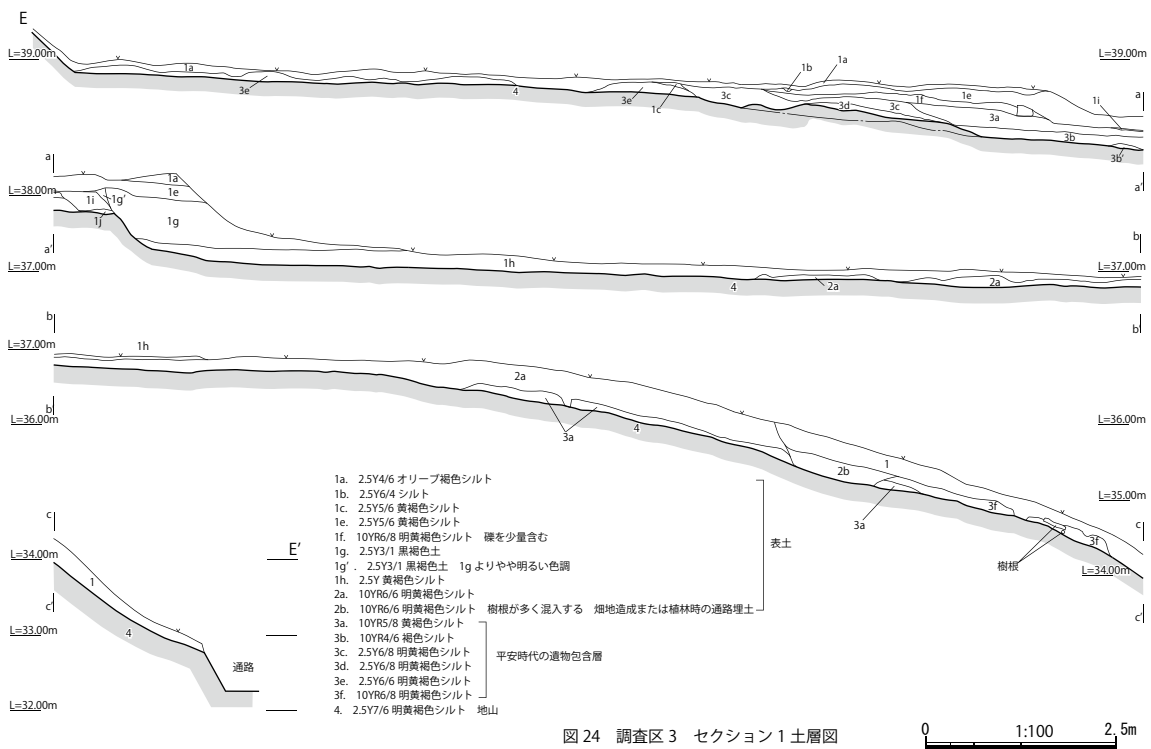


図 24 調査区 3 セクション 1 土層図

調査区 3 を設定した丘陵斜面の土地利用状況については、終戦直後の 1948 年に米軍が高度 6700m から撮影した航空写真（国土地理院 WEB サイト、国土変遷アーカイブ上での公開画像）により、この時既に当該斜面において広範囲に伐木がなされ、開墾が行われている様子を把握することができる。（写真 2）また次に述べるとおり、調査区 3 の全体に及ぶ削平は調査区 3-1 の北側において著しく、標高の高い場所を切り取り平坦地を造成していることが土層から窺える。

第 1a～1n 層は植林に伴い、もとの畑地に排土を移動させて盛り土状にしたものと考えられ

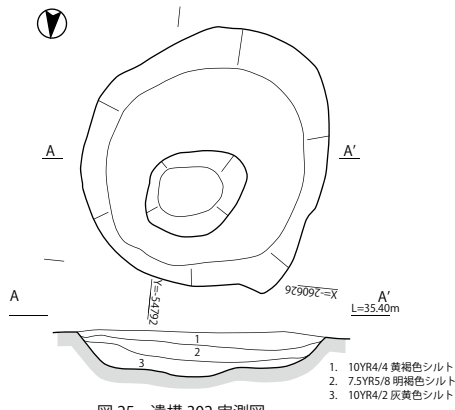


図25 遺構302 実測図

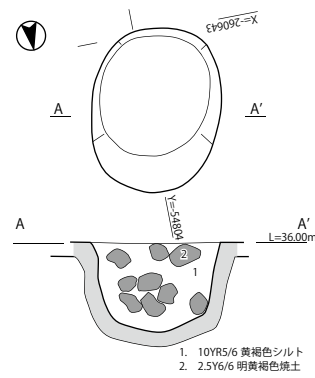


図26 遺構348 実測図

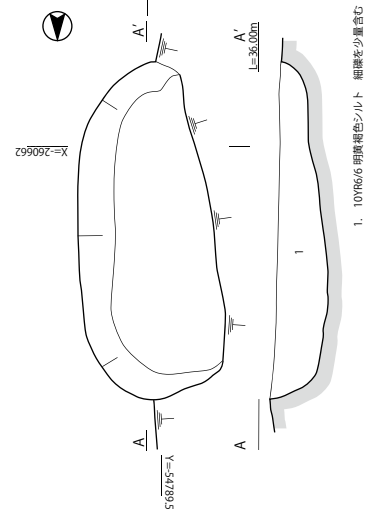


図29 遺構352 実測図

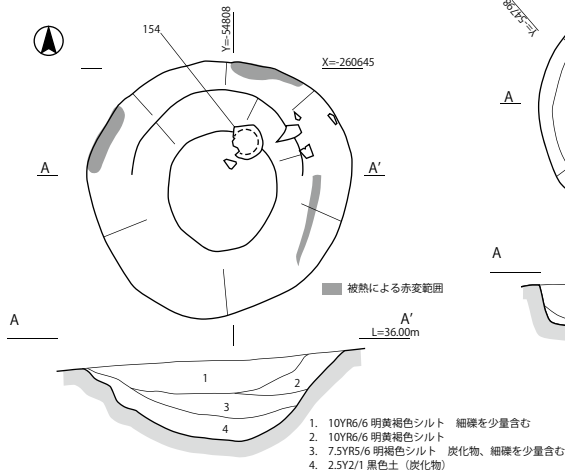


図27 遺構366 実測図

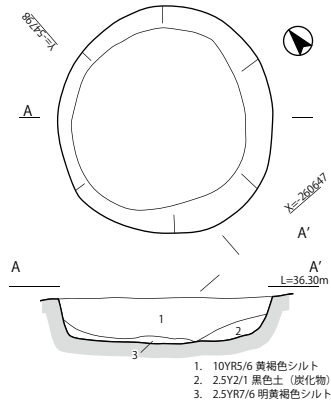


図28 遺構381 実測図

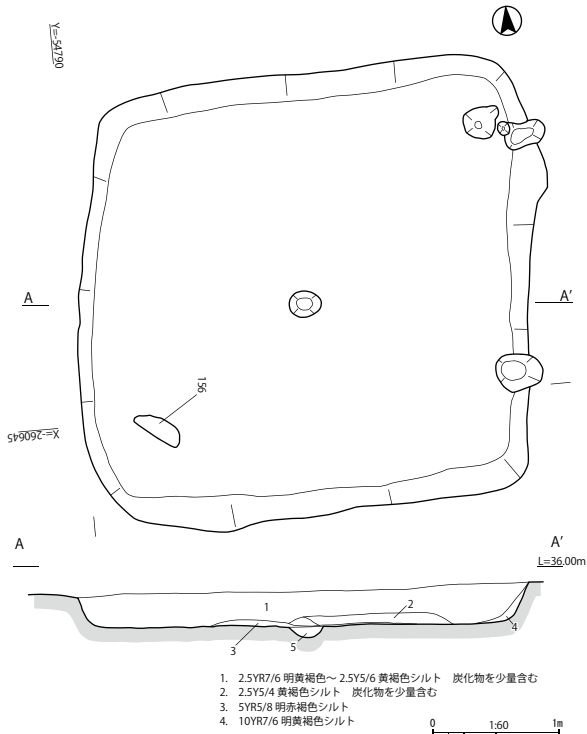
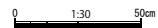


図30 遺構327 実測図

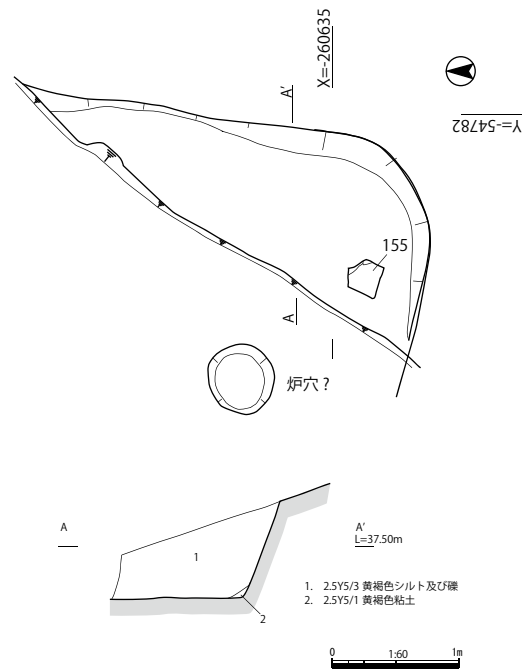
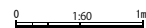


図31 遺構301 実測図



(図 22)、土中にはプラスチック製品の混入もみられた。また第 2a～2d 層は畑地に伴う土であると考えられ、西側の斜面に盛り土としていたことがわかる(図 24)。いずれにしても調査区 3 では大部分で地山まで攪乱が及んでおり、その範囲では表土直下が遺構検出面となった。ただし第 2e,2f 層は比較的土質が均一であり、弥生時代後期の遺物をやや多量に含むことから、弥生時代後期の包含層である可能性がある。

遺構は、弥生時代及び平安時代の遺構を検出したが、これらは同一の遺構検出面上において検出された。ただし弥生時代の遺構、遺物は調査区 3-1 の範囲内にほぼ限られており、平安時代の遺構、遺物は調査区 3-1 南端から調査区 3-2 にかけて集中する傾向がみられた。

第 3a～3j 層は平安時代の遺物を含む遺物包含層であり、斜面の縁辺付近にのみ残存するが、比較的均質であることから平安時代以降、畑地が開墾されるまでの期間に、自然に堆積したものと考えられる。機械掘削は第 1 層及び第 2 層の一部について行い、第 3 層以下を人力で掘削した。

表土(第 1 層、第 2 層)からの出土遺物は土師器、須恵器、製塩土器(100)、石錘(102)等がある。

第 3 層の出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、土釜等があり、土師器は皿(111～115)、坏(119～120)がある。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構及び遺物

遺構 301(図 31、図版 46) 竪穴建物と考えられる遺構で、検出されたのは隅角部分を含む一部分のみであるが、削平された第 4 層上面に、同遺構に伴うと見られる炉跡等の遺構を検出した。建物の規模は不明である。床面には中央に凹みを持つ台石(155)が、凹みのある面を下にして置かれた状態で出土した。また、庄内式併行期と考えられる時期の甕の小片も出土したが、摩滅の著しいものがほとんどである。

遺構 327(図 30、図版 47) 一辺 3.6m のほぼ正方形をなす遺構で、竪穴建物跡と考えられる。貼床は検出されておらず、中央に設けられた径 0.2m のピットは柱穴であるとみられるが、深さは 8cm と浅いものである。北東隅付近より台石とみられる石器(156)が出土したほか、庄内式併行期とみられる時期の甕の底部(150)、高坏(151)が出土した。

平安時代の遺構

遺構 302(図 25、図版 46) 径 1.0m の平面形が円形をなす土坑である。深さは 0.14m であり、底面はほぼ平坦で一部分が凹む。壁面に被熱による赤変部分は認められず、埋土中にまとまった炭化物の混入もみられない。

遺構 348(図 26、図版 47) 長径 0.64m、短径約 0.5m の土坑である。遺構内は径 5～10cm の焼土塊 50 個が詰め込まれた状態で、間隙を黄褐色シルトが占める。焼土塊は黄褐色で表面には皺状の凹凸が目立ち、径 1～5cm 程度の円礫や角礫を含む。接合することができたのは僅か 2 点であるが、幅 6cm 程度、厚さ 2～3cm 程度の帯状となる可能性がある。なお、これらの焼土塊は被熱の程度において部分的差異が認められる。

遺構 352(図 29、図版 47) 長径 1.1m、短径 0.5m の平面形が楕円形をなす土坑である。深さは 0.2m

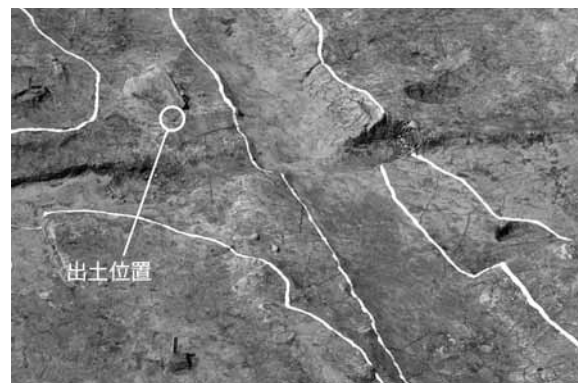


写真 5 権状石製品出土位置

で、一部分が削平されている。土師器や須恵器の小片が出土した。

遺構 358 (図 21、図版 48) 1 辺 0.4m の長方形に近い、やや不定形な平面形をなす土坑で、深さは 0.03m と非常に浅い。二彩または三彩 (52) が出土した。

遺構 366 (図 27、図版 47) 径約 1.0m の平面形が円形をなす土坑である。深さは 0.3m で断面は半円形となる。壁面には被熱による赤変部分が 3 箇所に認められ、第 1～4 層に分層可能な埋土の最下層 (第 4 層) には炭化物の集中がみられる。以上のことから、この土坑内で火を焚く行為が行われたと考えられ、その後埋め戻されることなく放置された結果、第 1～3 層にあたる埋土が遺構内に流れ込んで堆積したものと考えられる。第 1 層からは土師器皿 (154) が出土しているほか、黒色土器片等が第 2～4 層中から出土しており、遺構の帰属時期はこれらの遺物に極めて近いものと考えられる。

第 5 項 まとめ

(1) 遺構 109 及びその出土遺物について

今回の調査において検出した遺構は遺構 109 及びその周囲に位置する遺構 108、112、117、118、123 等の土坑群であり、それらの一部は遺構 101 とした落ち込み内にも存在する。

遺構 109 周囲の土坑群は径 0.5～1.5m まで様々な大きさがあるが、比較的大きな石が出土することと、埋土の大部分が炭化物で占められることが共通する。また、いずれも土層にはマーブルリング状の模様を観察することができることから、一部は地表面の炭化物が雨水等によって流され遺構内に侵入し堆積したものと考えられるが、その炭化物中には多量の土器小片が含まれており、人為的に投げ込まれた可能性がある。また地形的にみても、これらの土坑群は必ずしも地表面の堆積物が流れ込み易い地形的条件にあるとはいえない。以上のことから、これらの遺構は埋め戻すという行為を伴わず、埋土中の遺物も埋納されたものではなく、煮炊き後の炭化物や台石等として使用した自然石を集めて随時これらの土坑に廃棄したものと推定される。各土坑の炭化物は検出面上で確認が可能であったことから、土坑が炭化物で満たされた時点で、新しい土坑を掘削したと考えられ、その間には雨水等による炭化物の流れ込みもあったものと推定される。

遺構 109 の埋土を洗浄した結果、上層に含まれる微砂は、その粒度や組成から基本層序第 4 層 (地山) に含まれるものと同一であると判断され、埋土第 1 層は表土の流れ込みによる堆積であることが分かった。炭化物を多量に含む埋土第 2 層の堆積は土坑の下位中央付近において顕著であるが、これは遺構の西側に広く堆積する第 3b 層の流れ込みによるものとみられる。第 3b 層が土坑上端から連続して流入する状況は土層断面において確認されてはいないが、これには雨水等が上端から第 3b 層を洗い流しつつ土坑内へ流入したことにより堆積したものが埋土第 2 層であると理解することができる。このことから、遺構 109 内に土器が持ち込まれ始めた時点で遺構西端付近或いは遺構 117 付近で火を焚く行為が行われたとみることができ、その後も土器を持ち込む行為は続けられたものの、遺構 109 内には、雨水等とともに周囲から容易に土が流れ込む状態で有ったと推定される。また遺構 109 の底面に検出した 3 基のピットは埋土内に第 2 層の流入が見られず、第 1 層の流入により土坑が完全に埋没するまで、これらを柱穴とした掘立柱の覆い屋が設けられていた可能性もある。

炭化物の検出範囲は土坑の西側に限られるが、遺構 117 付近から西側へ広がるように極めて薄く堆積しており、遺構 117 付近においては大きさ 5～10mm の微細な土器片を多量に含む。こ

田ノ口遺跡

これらの土器片は本来、遺構 109 内か若しくはその近辺に置かれていた土器の破片とみられ、土坑内に土器が持ち込まれる等の、往来の際に踏み砕かれたものである可能性が高い。

土坑内からは土師器碗、皿等供膳具のほか土師器甕、土釜が出土しており、多量の炭化物の検出からみても、この付近で食物の煮炊きが行われた可能性は極めて高い。また土師器碗、皿、黒色土器碗は内面に摩滅がみられ、日常で使用していたものを持ち込んだ可能性もあるが、同時に近辺において飲食が行われたと考えられる。土坑内の遺物は、その飲食に使用した後の器を土坑内に納めたものと理解されるが、器を丁寧に重ね置く、或いは俯せにするといった置き方からは、単なる廃棄であるとは考えにくく、祭祀による等の見方が可能である。埋土中には小片が多量に含まれ、重ねて置かれたものが中央やや東寄りの位置に認められたほかは、一定のまとまりや特定の位置的傾向は認められなかった。また平面形状は不定形であるものの、炭化物層の堆積は中央付近のみに認められることから、土坑が繰り返し掘削され拡張されたような形跡も窺われず、最初に掘削された土坑に複数回土器の持ち込みがなされたものと推定される。

次に土器等の種類別による比率を表 1 及び図 32 に示す。対象としたものは合計 129 点である。出土遺物には小片となったものも多く、全ての個体を網羅しているわけではないが、概ね数量的傾向は捉え得るものと考えられる。土師器碗 (a、b)、土師器皿、土師器甕、土釜、灰釉陶器、黒色土器、「て」字状口縁皿の 8 種類に分け内訳を表示しているが、土師器碗及び土師器皿が最も多く、両者の比率はよく似た数値を示す。次に多いものは黒色土器で、A 類 (内黒) が全体の 84% を占め B 類 (両黒) を圧倒する。灰釉陶器は 5 個体分出土しており、碗 2 個体、皿 2 個体、長頸壺 1 個体である。土師器は更に、「て」字状口縁皿が 1 個体含まれるが、埋土中に含まれる微細な破片からは、少なくとも 2 個体以上の存在が確認できる。

遺構 109 から出土した土師器皿は先述したとおり形態上の差異が認められ、以下の 4 タイプが認められる。a：体部は緩やかなカーブを描き、1 から 2 段のナデを施す。底部から体部への屈曲は弱く、丸みを帯びる。口縁端部はやや厚めに丸くつくり、不明瞭な沈線を施すものや、丸く肥厚させるものがある。b：a タイプによく似る形態を示すものの、体部のカーブはより直線的で、口縁端部は、やや薄くつくる傾向が認められる。c：体部に 1 から 2 段のナデを施し、底部から底部にかけての屈曲は、丸みを帯びるものやや顕著である。体部上位は直線的になり口縁端部は薄くつくる。d：体部に 1 から 2 段のナデを施しものがあり、底部から底部にかけての屈曲は顕著である。体部は口縁端部にかけて外反させるといった分類が可能である。

これらの土師器皿について、口径及び器高の数値から散布図を作成したのが図 33 である。各個体の口径を横軸方向に、器高を縦軸方向に表しており、図上では、体部を丸くつくる傾向のみられる a、b タイプと、直線的または外反させる c、d タイプを分けて表示し

種類	割合 (%)	種類	割合 (%)
土師器碗 a	38.8	土釜	0.8
土師器碗 b	1.6	黒色土器 A	14.7
土師器皿	34.1	黒色土器 B	2.3
土師器甕	3.1	灰釉陶器	3.9

表 1 遺構 109 出土土器等の種類別割合

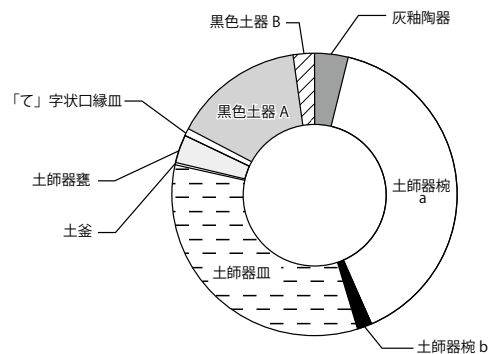


図 32 遺構 109 出土土器等の種類別構成

た。63は比較のため表示したもので、平高台の皿である。口径に比較して器高の低さが目立つ。また、36は接合可能であったものの中に1例のみ認められたもので、他に比べひと回り大きくつくられる。この2個体を除いて、口径は α 、 β タイプで9.0～10.0cm、 γ 、 δ タイプで9.4～10.4cmの範囲に収まり、口径が大きくなるとともに器高が増す傾向を示すが、法量の分化は明瞭でなく、大小に関わらず両者はそれぞれほぼ同様の形態を指向することがわかる。

次に、土師器碗についてであるが、出土した土師器は必ずしも高い器高に見込みの深い形態をとるものばかりでなく、52～57のように浅く、且つ器高の低いものが存在する。そこで遺構109、101及び炭化物層出土の個体を含め、合計37個体の土師器について口径及び器高を計測し散布図を作成した結果、図34に示すとおりとなり、土師器碗aとしたものは全体として口径が大きくなれば器高が高くなる傾向を示し、器の大小に関わらず全体的なプロポーションが維持され、ほぼ一定した形態を指向して作られる傾向が窺える。52、53、54は碗aとは分布傾向をやや異にしており、形態は体部外面が多段状を呈し、高台は小さく断面が逆台形を示すもので体部からほぼ垂直か、わずかに内側に傾いて接地する。また口径は碗よりやや大きくなる傾向を示す等、土師器碗aに近い特徴を有しながら口径に比べ器高が低くなっており、青磁浅形碗に近い形態をとるもので、これらを土師器碗bとした。胎土はいずれも砂粒をほとんど含まない精良なものである。55は高台を欠損しているが、これに含まれると考えられる。

56、57は碗aに近似する形態をとるが、口径が小さく、器高の下がるものである。これらは碗aに含めたが、同様な形態のものが増加すれば、この形態のものについて、a、b以外のタイプとして取り扱うことも可能であると考えられる。

比較のため遺構109出土の黒色土器から得られた数値の分布状況を同時に表示したが、黒色土器については、口径が大きくなれば器高も高くなる相関関係がみられ、器の大小によらず一定の形態を維持する傾向がより明らかである。これらのことから、土師器碗については、口径及び器高から得られる数値の偏在性による差異が認められ、明瞭な一線をもって分類することは困難であるが、形態上いくつか分類できる可能性が高い。口縁部の形態が内湾するもの、外湾するもの、内面に沈線を有するもの等様々であることも、このことを補強する。またこれらの土器の胎土は浅黄色から淡黄色を示すものが多い。

遺構109を含む調査区1全体における出土遺物を概観すると、一定の時期幅をもつ可能性があると見える。灰釉陶器では、遺構109出土の碗及び皿はK-90～O-53及びH-72窯式の段階にあたり、尾張、西三河、東美濃において出土した灰釉陶器を10段階に区分した編年(*15)では第5～7段階に相当し10世紀末～11世紀前半頃の時期が推定される。また遺構104からの出土であるが、削り出しの角高台を有する皿の小片があり、時期はそれ以前にさかのぼる可能性も

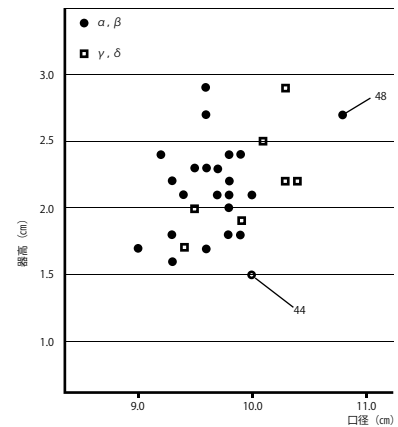


図33 土師器皿の口径と器高

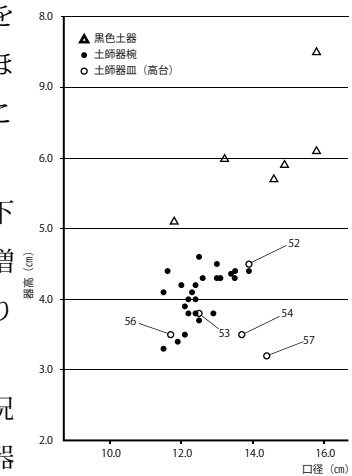


図34 土師器碗の口径と器高

残る。

遺構 109 では形態の異なる土師器甕 4 個体及び土釜は、10 世紀末～11 世紀前半頃のものともみられ (*16)、それは土器が持ち込まれ始めてから放棄されるまでの時期にあたる可能性がある。また遺構 109 の出土遺物は土師器を主体とする椀、皿の器種構成が指摘できるが、黒色土器は椀が主体であるものの B 類の割合は少なく、瓦器は含まれない。土師器椀、皿については法量未分化の傾向 (*17) がみられ、10 世紀後半頃の特徴を示すといえる。灰釉陶器折縁皿 (27) は O-53 期 (*18) に相当するとみられる。遺構 101 において、遺構 109 が帰属すると考えられる時期の前及び以後の遺物を出土をみていることは、遺構 109 が掘削される以前にも、この場所で同様の行為が行われていたことが推定されるが、検出された調査区 1 の遺構群は概ね、10 世紀後半～11 世紀前半の時期に帰属すると考えられる。また土師器椀は、高台の断面が長方形をなし「ハ」の字に開くものや、断面三角形をなすもの、さらには体部下位がやや屈曲するもの等がみられ、これらは灰釉陶器の影響を検討する必要があると考えられる。

調査区 1 に存在する自然石 (1) は周囲を断ち割って土層を観察した結果、移動の形跡が窺えず、本来この近辺に産出する砂岩の転石であることが分かった。また上面が平坦で風化・摩滅していることから、かつて長期間地表面に露出していたことが推定され、その平坦面を何らかの目的で使用した等の可能性は残る (*19)。

(2) 権状石製品について

遺構 101 から出土した権状石製品は、滑石製で頂部に紐を作り、底部は平坦に磨かれている。管見では、同形の遺物は類例に乏しいとみられるが、形状及び紐の存在から紐にひも等を通して使用する用途の石製品に近いとみて、棹秤のおもりである「権」を模した可能性の高いものと判断し「権状石製品」とした。ただし重さは 756.0g (*20) で、同時期の権衡の基準とされた唐の 1 両 (約 41.9g) から計算するとほぼ 18 両 (18.0429) という値が算出される。同様に、やや下る時期ではあるが 1 匁 (3.73g) からは、200 匁 (202.681) が算出され、分銅としての使用も考慮に入れる必要がある。県内では、形状や大きさは異なるものの、岡田遺跡で分銅形石製品の出土があり、円柱に近い形状をなし頂部に紐を作り出すところは類似する。

(3) 遺構 366 について

調査区 3 における出土遺物の分布状況を見ると、c13 区画が最も遺物量が多く、その区画に位置するこの土坑が本遺跡の中心的な遺構の一つとなり得る可能性は高い。埋土に含まれる遺物は 9 世紀前半頃のものと考えられ、周囲から出土する遺物もほぼ同時期とみられる。

(4) 調査区 3 出土土師器について

調査区 3 では庄内式併行期に相当する土器の他、古代の土器が出土している。次に、これらについて述べる。

土師器坏・皿・須恵器坏・長頸壺、製塩土器、緑釉陶器、二彩或いは三彩とみられる小片等があり、第 3a,b 層からの出土が多く、大部分が斜面上に廃棄されたとみられる状況で出土しているが、152 のように土坑からの出土もあり、投棄の際には地表面を浅く掘り窪める場合もあったものと推定される。119、120 は土師器坏で、119 は蓋 (130) と組み合わせられるものである。120 は直線的な体部が広い口縁をつくり、底部に低い高台がつく。体部内面は右回りのナデを施し、外面はヘラ削りの後ヘラによるミガキを施すが、間隔の広い粗雑なものを弧状に数回に分け

て施すものである。130は蓋で、上面中央が浅く窪んだツマミを持ち、外面、内面とも不定方向のナデを施す。外面にはヘラミガキを施すが、数度往復し方向を変え4回行うもので、ミガキというよりは沈線状の装飾となっている感があり粗雑な印象を受ける。これらはいずれも搬入品とみられるが、120は平城京跡SE311-Bに同様の出土例があり、これによれば時期は天長2(825年)以降と推定されている(*21)。また、形態及び技法等からみて、調査区3出土の古代の遺物は概ねその時期に帰属するものとみられる。

(5) 墨書土器について

墨書土器は3点(130、146、147)出土している。147は「佐夜」の文字が読み取れる。「佐夜」からは「佐夜部氏」等が連想されるが、この2文字が本来何を表現したものかは不明である。また130は判読できない。146は土器片の一端に残るのみで、文字の一部分とみられる。

(6) 緑釉陶器について

調査区1遺構101で出土した緑釉陶器はすべて小片で器種は不明であるが、軟質の素地に濃い緑色の釉がかかり、近江産である可能性が高く、時期は10世紀中頃以降とみられる。

調査区3では包含層中より3点出土しており、椀(98)及び皿とみられる器種(101)があるが、胎土や釉の特徴から、同一個体である可能性がある。硬質で淡い緑色の釉が掛けられ、表面にはラスター現象がみられる。高台は底部外面の中央がやや凹んだ円盤状の平高台で、縁辺に沿って使用時のものと考えられる釉の剥落がある。釉及び胎土から東海産の可能性を検討したが、平高台である等の特徴から洛北産であると考えられ(*23)、時期は9世紀前半頃とみられる。

(7) 遺構の性格等

調査区3から出土した二彩(三彩)は県内において出土例の少ないもので、全国的にみれば官衙跡等での出土が顕著な遺物である。また灯明皿に使用したとみられる坏に付着した多量の煤及びこれらの土器が斜面に廃棄されたとみられる出土状況を示す。

また遺構はその性格を明らかにし得たものはないが、円形に掘られた火を焚く行為を伴う土坑や、焼土塊を詰め込んだ土坑等単なるたき火や廃棄に伴うものと考えにくい遺構の存在は祭祀的な行為を想起させ(*24)、これらが仏教または山岳信仰等の祭祀に伴うものであるという解釈について、検討の余地があるといえる。また多彩陶器はその産地を特定し得なかったが、緑釉陶器の出土と併せ、当時の政権中枢部と関わりの深い、官的な性格を想起させる。

調査区1の出土遺物は、調査区3の出土遺物と比べ帰属時期が下ることから、調査区1の遺構群は調査区3に後出するものと考えられる。検出遺構群の性格としては、祭祀に伴うものとの見方が可能な点で共通しており、双方において検出された遺構には何らかの関連性を想定することが可能で、調査区1でも権状石製品の出土をみていることから、ともに官的な要素を帯びるといえる。出土遺物の産地からみれば、調査区1出土土器は僅かに白磁が含まれるものの、紀の川流域産とみられる片岩礫を含んだものや、体部外面が多段状をなすものなどが多く、在地産のものが多数を占めるといえる。同様に灰釉陶器も、東海地域には太平洋側からアクセスし易いという地理的条件から、本遺跡に直接持ち込まれた可能性が高い。調査区3では猿投産とみられる須恵器が出土しているものの、搬入品とみられる坏のほか、墨書土器や緑釉陶器、多彩陶器等、政権中枢と関わりの深い地域において多くみられる遺物の出土がより顕著である。

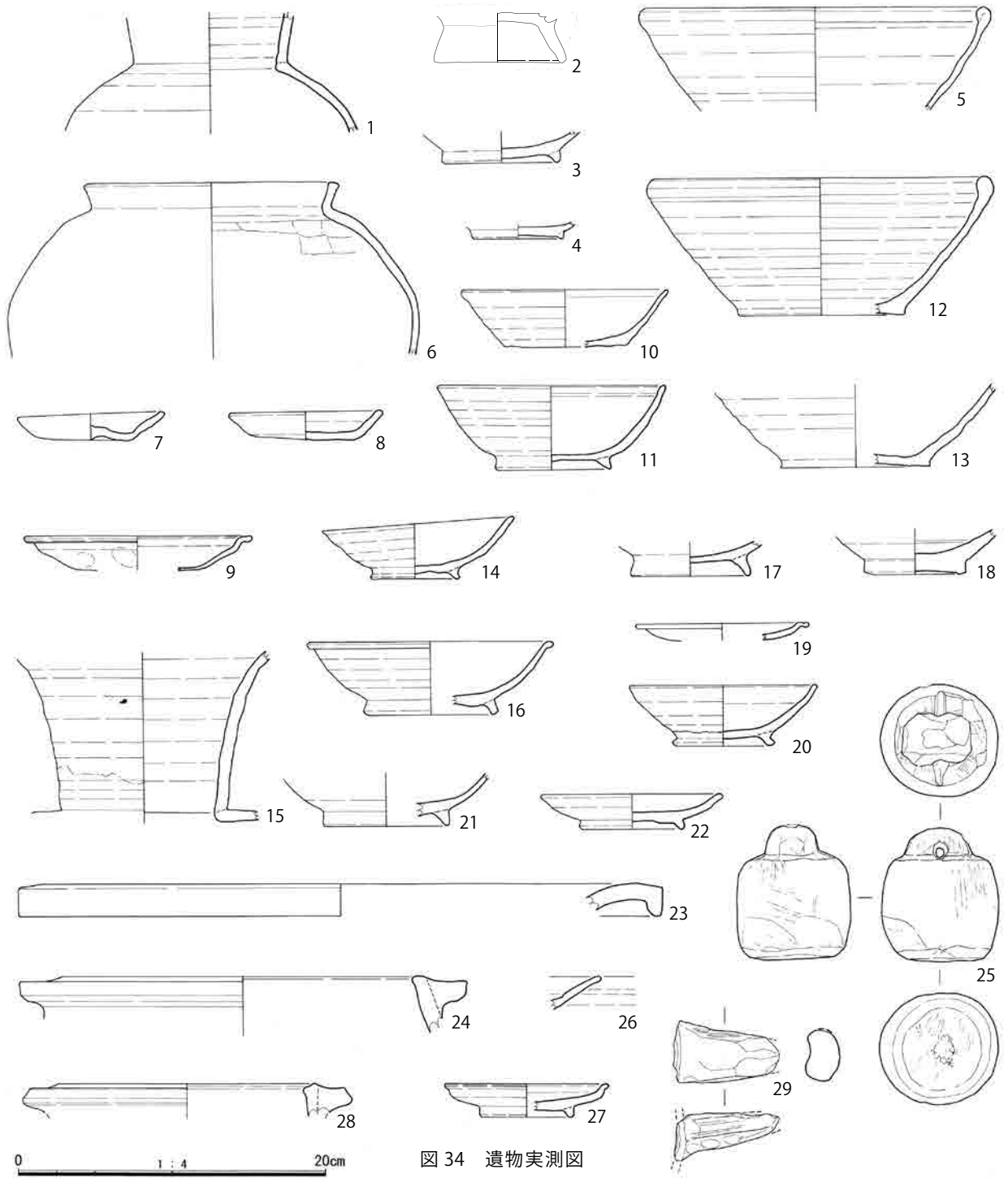


図 34 遺物実測図

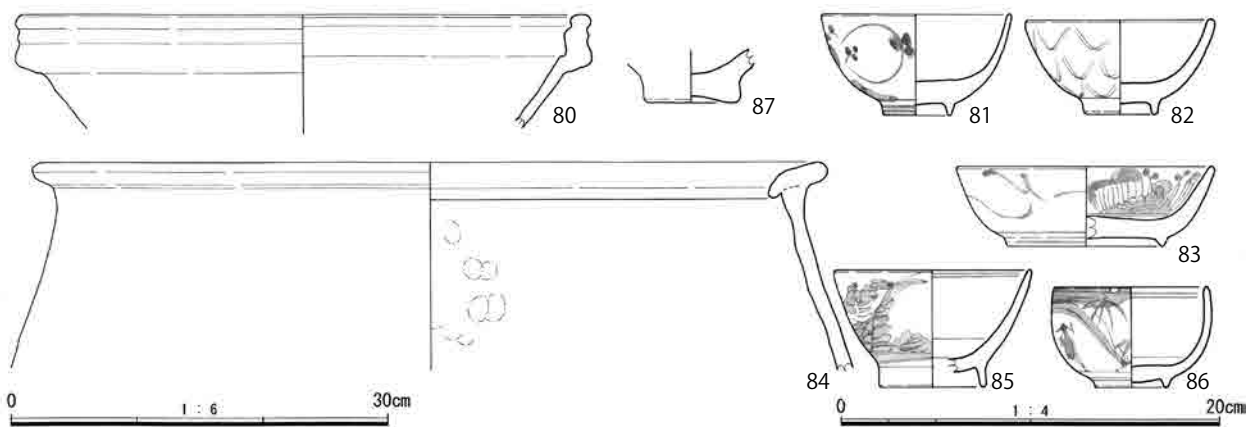


図 35 遺物実測図

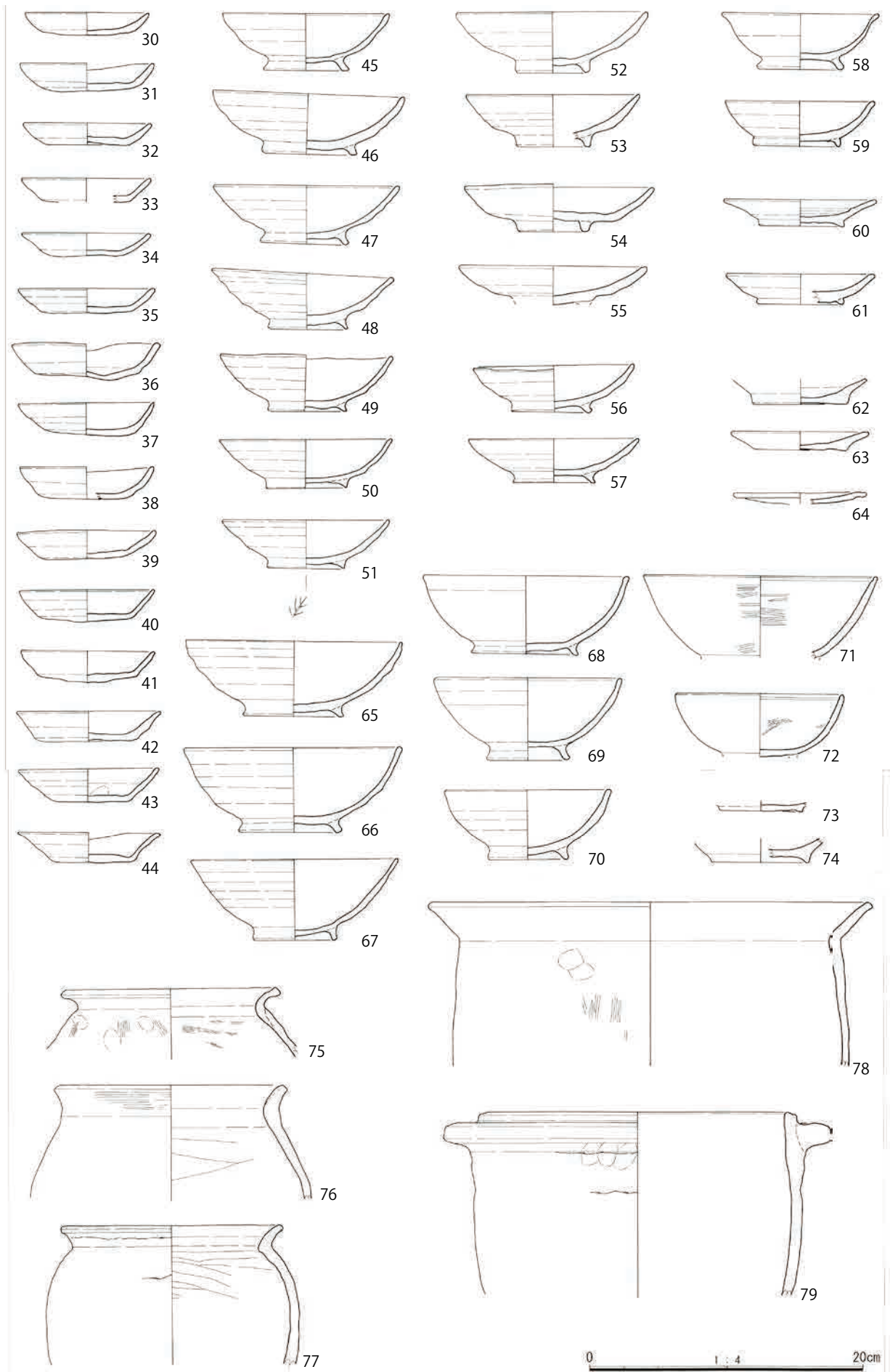


图 36 遺物実測図

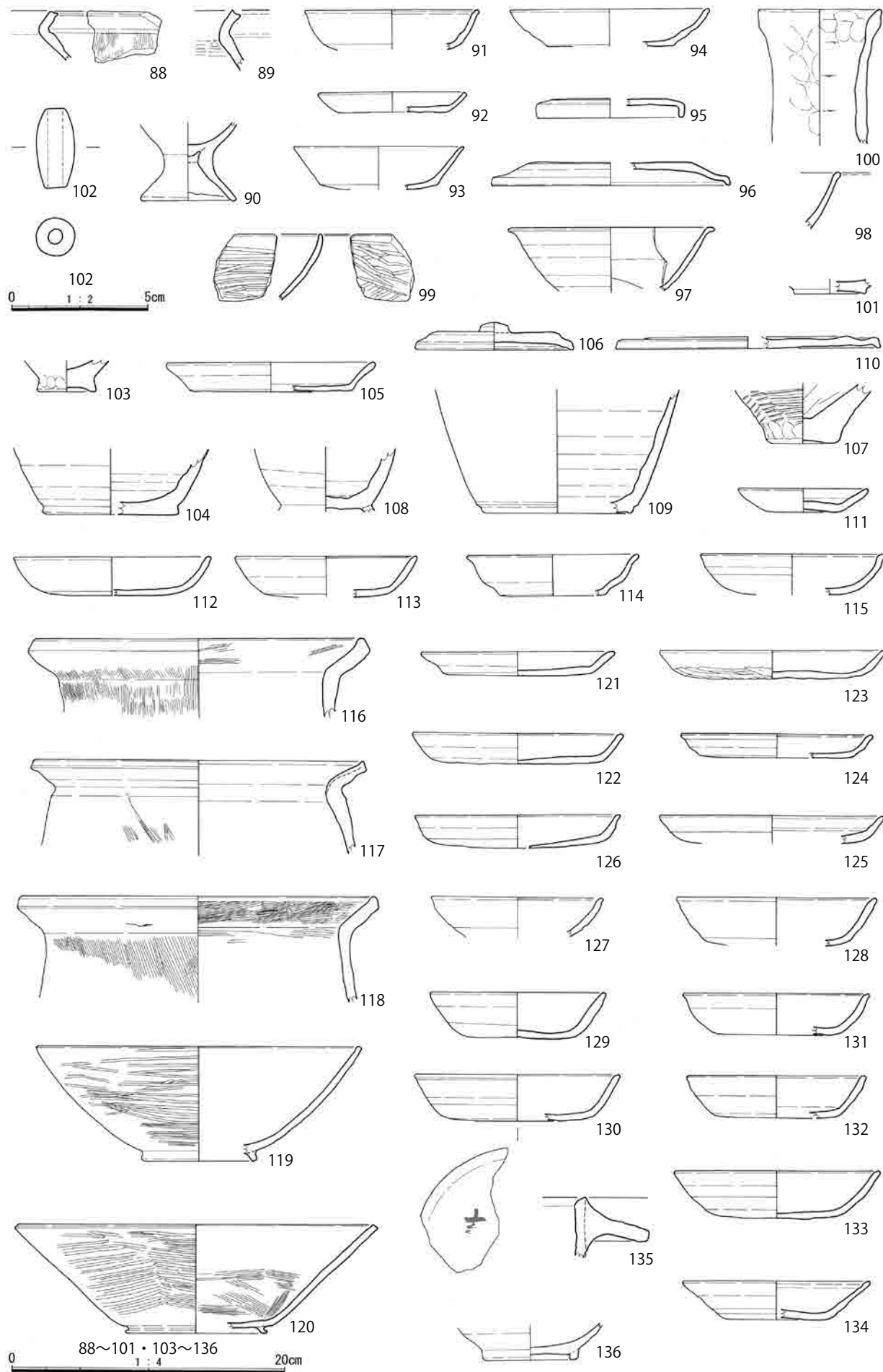


図 37 遺物実測図

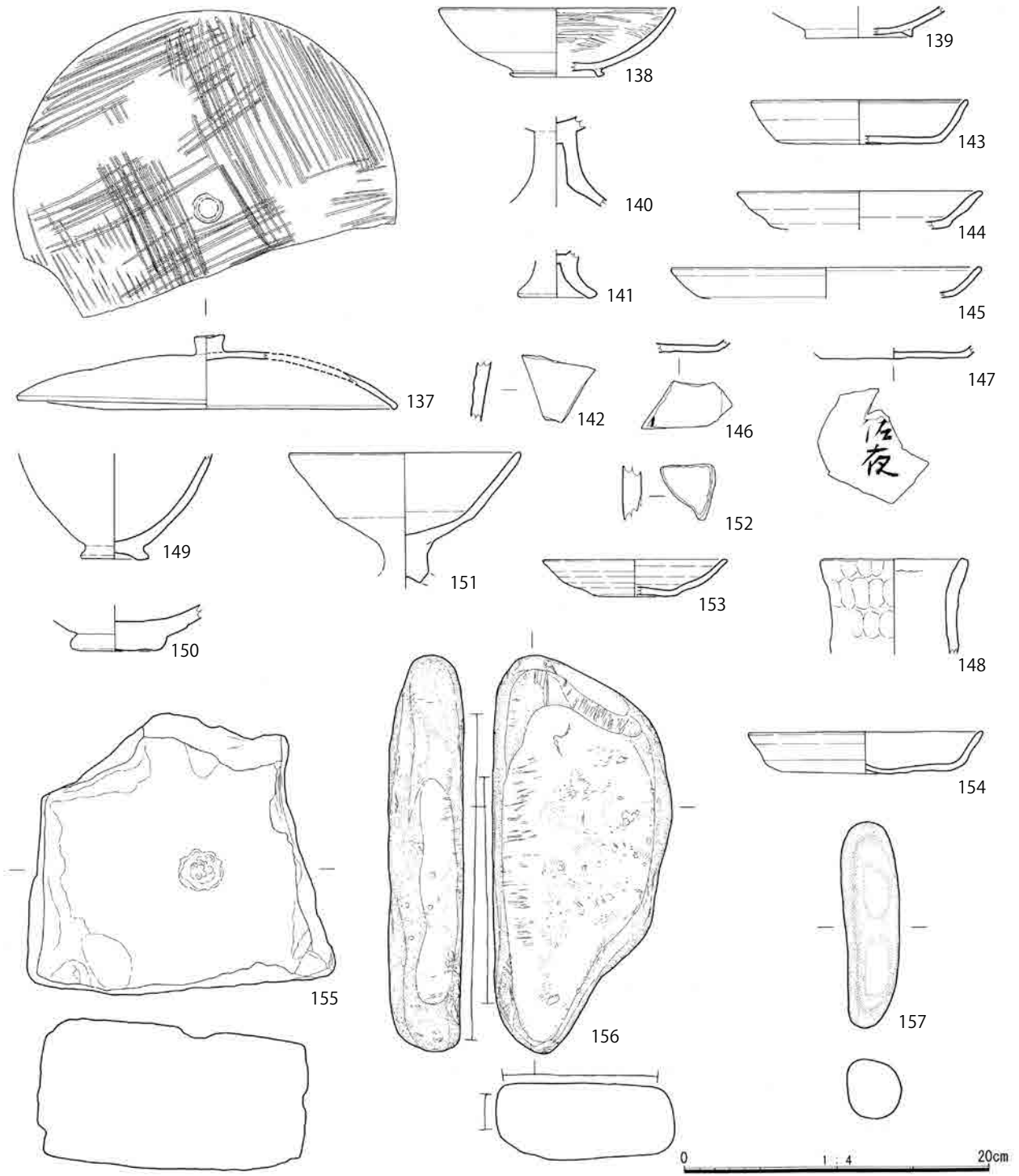


图 38 遺物実測図

田ノ口遺跡

土器一覽表

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
1	図34 図版61	灰釉陶器 長頸壺	1 16	1層				残7.8	全体) 灰白N8/ ~7/ 釉色) 灰白ナリフ7.5Y6/2~5/2	頸部から肩部にかけて残存。頸部内面及び肩部外面にみられる釉の付着は焼成時の自然降灰及び施釉による。
2	図34 図版61	土師器 盤	1 16n19	3b層	8.3	3.4	7.8	口縁40% 底部70%	内) 浅黄橙10YR8/3 浅黄橙7.5YR/3 外) 浅黄橙10YR8/3 底部) にふい橙7.5YR7/4 断) 浅黄橙10YR8/3~8/4	高台部のみ残存。摩滅著しく、調整不明。
3	図34 図版61	黒色土器 碗	1 16n19	遺構検出 面直上				残1.9	内) 暗灰N3/ 外) 赤橙10R6/6 断) 灰白10YR8/2	摩滅著しい。A類、内面のみ黒化させる。見込みには僅かにミガキの痕跡あり。高台は径が大きく、貼付後ナデ調整を施す。
4	図34 図版61	灰釉陶器 椀?	1 16n19	3b層				残1.0	全体) 灰白N8/ 釉色) 灰白7.5Y8/1~8/2	底部付近のみ。底面に糸切り痕を残し、断面三角形の低い高台を貼付後、高台内をナデ調整。釉は体部外面高台部まで施す。重ね焼き痕跡(トナシ?)あり。
5	図34 図版61	須恵器 鉢	1 16n19	遺構面直上	(22.0)			残6.7	内) 灰白N8/ 口縁端部) 灰N4/ 外) 灰白N8/ (口縁) 灰N4/ 断) 灰白N8/	口縁は内側に折り返し、やや外側に向かって玉縁状に肥厚させる。口縁から体部は内外面に回転ナデを施し、ほぼ直口となる。胎土は精良で軟質である。
6	図34 図版61	土師器 壺	1 16n20	3b層	(15.3)			残11.3	口縁30% 断) 浅黄7.5YR/6 外) 橙5YR6/6 浅黄2.5Y7/3	口縁はヨコナデ調整。端部を平坦につくり、僅かに外傾させる。肩部以下は外面を指ナデ調整、内面は工具によりナデ調整を施す。
7	図34 図版61	土師器 皿	1 16	3層	9.6	2.9	5.0	口縁75% 底部100%	内・外) 灰白10YR8/2~浅黄橙10YR8/3 断) 灰白10YR8/2	手づくねによる成形。底部中心に径1cm前後の窪を含む。口縁内外面にユビオサエ及びナデ調整を施す。底部未調整。
8	図34 図版61	土師器 皿	1 16n20	3b層	9.8	2.0	7.4	75%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 浅黄橙7.5YR8/3~8/4 断) 浅黄橙10YR8/3	厚手のつくり。口縁はヨコナデ調整を施し、内面に稜が巡る。口縁端部は丸くつくる。底面に指頭圧痕が残る。胎土は精良で微細な雲母片を含む。
9	図34 図版61	土師器 皿	1 16n20	3b層	(14.7)			残2.2	内) 灰白10YR8/2 外) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰白10YR8/1~8/2	「て」字状口縁皿。口縁上位にヨコナデ調整を施す。下位はユビオサエ痕あり。胎土は精良で浅黄橙色を呈する。摂津地方等からの搬入品か。10世紀後半?
10	図34 図版61	須恵器 鉢	1 16	3層	(13.4)			残3.7	内・外) 灰白2.5Y8/1 浅黄橙10YR8/4 断) 灰白2.5Y8/1 浅黄2.5Y8/3	口縁は底部から直線的に延びる。外面は回転ナデ調整痕が残るが、全体的に摩滅が著しく調整は不明瞭である。
11	図34 図版61	黒色土器 碗	1 16n20	3b層	14.6			残5.5	口縁50% 高台90% 断) 灰N4/ 外) にふい橙7.5YR7/4 断) にふい黄橙10YR7/3	A類、内面のみを黒化処理し、ミガキは認められない。口縁端部内面に沈線状の浅い凹みあり。体部外面は多段状をなし、断面三角形の高台を貼付。
12	図34 図版61	須恵器 鉢	1 16n19	3a層	(21.4)			残9.0	口縁30% 底部25% 内・断) 灰白N8/ 外) 灰白2.5Y7/1	口縁端部はやや内傾し玉縁状に肥厚する。高台は貼付後内外面に回転ナデを施し、ほぼ直口となる。胎土は精良で軟質。底部は回転糸切り痕跡を残す。
13	図34 図版61	須恵器 鉢	1 H7o23	3層				残5.3	(9.8) 底部20% 全体) 灰白N7/	体部から底部にかけて僅かに内湾し、内外面に回転ナデ調整が明瞭に残る。底部は回転糸切り痕跡を残す。胎土は長石粒を僅かに含む硬質である。
14	図34 図版61	土師器 碗	1 16n20	遺構検出 面直上	(12.3)			残4.1	口縁55% 高台100% 内) 浅黄灰7.5YR8/3 浅黄灰7.5YR8/4 外) 橙7.5YR7/6 浅黄灰7.5YR8/3~8/4 断) 灰白7.5YR8/2	口縁は端部を丸くつくり、体部は多段状を呈し3条の不明瞭な稜をなす。内面は摩滅が著しいが、口縁端部付近にナデ調整の痕跡が僅かに残る。断面三角形を呈する高台を貼付後、その内外面をヨコナデ調整。
15	図34 図版61	灰釉陶器 長頸壺	1 16n19	3b層				残11.1	内・外) 灰白N8/ ~ N7/ 自然釉) オリブ灰10Y4/2 断) 灰白N8/	頸部内面は焼成時降灰あり。頸部以下外面はハケ塗りで見られる施釉。制作時乾燥以前に肩部を外側から穿れして筒状の頸部を接合したものとみられ、接合部は段をなす。内外面に回転ナデ調整痕跡を明瞭に残す。
16	図34 図版61	灰釉陶器 椀?	1 16n19.n 18	3b層	(16.0)			残4.8	口縁10% 高台30% 全体) 灰白N8/	口縁端部は玉縁状に肥厚しやや外反する。高台は貼付後三日目高台。その内部に糸切り痕跡が認められる。無釉。時期はO-53窯式期か。
17	図34 図版61	灰釉陶器 椀	1 16o21	3b層				残2.2	(7.6) 高台100% 全体) 灰白N8/ ~7/	高台のみ。底面は回転糸切り痕跡を残す。内面に器を左方向へ回転させた回転ナデ調整の痕跡あり。時期はO-53窯式期か。
18	図34 図版61	白磁 碗	1 16p24	3b層				残2.9	(6.6) 底部100% 内) 灰白5Y7/1 外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/ ~7/	内面は化粧土を施した後施釉。見込み周縁に浅い沈線状の段を有す。体部外面に施釉なし。高台は削出し。太宰府編年XII類に相当か。時期は10世紀末?
19	図34 図版61	土師器 皿	1 16n19	101	(11.2)			残1.1	10%以下 内・外) 浅黄2.5Y8/8 ~浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	「て」字状口縁皿。口縁にヨコナデ調整を施す。胎土は精良で浅黄橙色を呈する。摂津地方等からの搬入品か。10世紀後半?
20	図34 図版61	土師器 鉢	1 16o23	101	(12.1)			残3.9	(6.6) 口縁45% 高台45% 内) 橙7.5YR7/6~6/6 黄灰2.5Y5/1 外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6	口縁は僅かに肥厚し丸くつくる。外面は多段状を呈し3条程度の不明瞭な稜をなす。高台は貼付後外側に「ハ」の字に開く。胎土は精良で、内面に煤状の付着物が残る。
21	図34 図版61	灰釉陶器 椀	1 16n16	101				残3.4	(8.0) 高台30% 内) 灰白N8/ 明オリブ灰2.5GY7/1 外・断) 灰白N8/	内面は見込み以外に施釉及び焼成時降灰が認められる。高台は貼付後断面三角形をなす。体部外面は無釉。
22	図34 図版62	灰釉陶器 皿	1 16o18	101	(11.7)			残2.3	(6.3) 口縁15% 高台50% 全体) 灰N8/	底部は回転糸切り後、高台を貼付、高台内面にナデ調整を施す。口縁端部を丸くつくり、やや外反する。内外面とも無釉。
23	図34 図版62	須恵器 壺	1 F10n16	101	(42.0)			残2.1	15% 内) 灰N6/ 外) 灰N5/ 灰N4/ 断) 灰白N7/	口縁のみ。端部は外方に平坦面をつくり垂下させる。内外面に回転ナデ調整を施す。
24	図34 図版62	土師器 羽釜	1 16o17	101	(23.6)			残3.2	10%以下 内) 浅黄2.5Y7/3 外) 浅黄2.5Y8/3 断) 灰N6/	口縁は短く、断面が矩形をなし、下面に煤が付着する。上面はほぼ口縁端部と同一。摂津地方からの搬入品か。
26	図34 図版62	灰釉陶器 椀	1	105				残2.1	5%以下 全体) 灰白N8/	口縁は幅広く、内外面に回転ナデ調整を施す。無釉。
27	図34 図版62	灰釉陶器 折縁皿	1	5サプトレ 5層	(10.4)			残2.2	(5.9) 口縁5%以下 高台45% 内) 灰白N7/ 外・断) 灰白N8/	底部は回転糸切り後、高台を貼付。施釉は漬け付けによるとみられ、内外面に及ぶが、見込みは無釉。時期はO-53~H72窯式期(7~8段階)か。
28	図34 図版62	土師器 土釜	1 16n16	111	(16.6)			残2.1	10%以下 内) 灰黄褐10YR5/2 外) 橙2.5YR6/6 灰黄褐10YR6/2 断) 褐灰10YR5/1~4/1	口縁は短く、断面が矩形をなし、下面に煤が付着する。上面はほぼ口縁端部と同一。口縁部径と同程度の器高が復元される。摂津地方からの搬入品か。
29	図34 図版62	土師器 把手	1 16o15	112				厚さ2.1	5%以下 内) 灰黄褐10YR5/2 外) 橙2.5YR7/6 灰黄褐10YR5/2 断) にふい橙7.5YR7/4	全面にハケ調整を施す。ほぼ水平方向に直線的に延び体部に接合するものとみられる。
30	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	(9.0)			残1.7	口縁25% 全体) 橙7.5YR7/6	粘土紐巻き上げによる成形か。口縁はヨコナデ調整により、端部をやや尖らせる。底部は未調整であるが、不定方向のナデ調整が僅かに認められる。
31	図36 図版62	土師器 皿	1 17n20	109				残2.1	7.3 70% 内) 浅黄橙10YR8/3 外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰N5/	口縁外面はヨコナデ調整を施し、2条の不明瞭な稜をなす。ゆがみが著しい。
32	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	(9.3)			残1.6	(6.3) 口縁20% 内) 灰白2.5Y8/2 外) 灰白2.5Y8/2(口縁) 黄灰2.5Y5/1(底部) 断) にふい黄橙10YR7/3	口縁は底部から緩やかに屈曲して立ち上がり、器高は低い。口縁はヨコナデ調整。底面及び内面はナデ調整を施す。
33	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	(9.4)			残1.7	(6.6) 口縁35% 内) 橙7.5YR7/6~6/6 外・断) 橙7.5YR7/6	口縁部はヨコナデ調整を施し、僅かに外反させる。底面はナデ調整を施す。
34	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	9.3			残1.8	5.2 25% 内・外) 橙5YR6/6 断) にふい橙7.5YR6/6	口縁部はヨコナデ調整を施し、端部を丸くつくる。外面は不明瞭な稜をなし、内面にはナデ調整及びユビオサエの痕跡が認められる。
35	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	9.9			残1.8	6.6 65% 内) 浅黄橙7.5YR8/4 浅黄橙7.5YR7/4 外・断) にふい橙7.5YR7/4	口縁はヨコナデ調整を施し、端部外面は沈線状の凹線が巡る。外面は多段状を呈し不明瞭な稜が認められる。底面は未調整。
36	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	10.8			残2.7	7.5 口縁85% 底部100% 内・外) 橙5YR7/6 断) 浅黄橙10YR8/3	口縁は内外面をヨコナデ調整する。口縁端部を丸くつくり、底面は未調整である。
37	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	9.9			残2.4	6.5 口縁70% 内) 灰白10YR8/2 外) にふい黄橙10YR7/3 にふい橙7.5YR7/4 断) にふい黄橙10YR7/2	底面にはナデ調整を施すが、著しい凹凸が残る。口縁外面はヨコナデ調整するが、多段状をなす。
38	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	9.7			残2.3	6.8 口縁75% 内) 橙5YR7/6~6/6 外) 橙5YR7/6 断) 浅黄橙10YR8/3	口縁は底部から緩やかに弧を描いて立ち上がり、やや内湾して端部を丸くつくる。底面はナデ調整による凹凸が目立つ。
39	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	10.0			残2.1	6.0 口縁75% 内) にふい橙7.5YR7/4 外) 灰白2.5Y8/2 にふい橙7.5YR7/4 断) 灰白2.5Y8/2	口縁は底部からやや屈曲して立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部は丸くつくる。底面は未調整である。
40	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	9.8			残2.4	7.0 70% 内) 灰白2.5Y8/2 外) 浅黄橙10YR8/4 断) 灰白2.5Y8/2 灰N5/	口縁はヨコナデ調整により、不明瞭な稜が認められる。内面はユビオサエ、底面は未調整である。
41	図36 図版62	土師器 皿	1	109	(9.6)			残2.3	口縁35% 全体) 灰白10YR8/2	口縁は底部から緩曲して立ち上がり、端部はやや尖らせる。全体にわたって内外面にナデ調整を施す。
42	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	10.4			残2.2	7.5 口縁75% 底部100% 内) 橙5YR6/6(口縁) にふい黄橙10YR7/4(底部) 外) 橙5YR6/6 断) 不明	口縁は底面からやや屈曲して立ち上がる。外面はヨコナデ調整によりやや稜をなす。口縁端部はやや尖り気味につくる。
43	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	10.1			残2.5	5.5 口縁50% 内・断) 浅黄橙10YR8/4 外) 浅黄橙10YR8/4 灰N6/	口縁は底部から屈曲して立ち上がり、外面はヨコナデ調整し多段状の稜をなす。口縁には右回り方向の粘土紐巻き上げ痕が認められる。
44	図36 図版62	土師器 皿	1 16n20	109	10.3			残2.2	6.0 70% 内・断) 灰白10YR8/2 外) にふい橙7.5YR7/3 灰白2.5Y8/2	やや歪みあり。口縁は底部から屈曲して立ち上がり外反する。底面及び内面にナデ調整を施す。
45	図36 図版62	土師器 椀	1 16n20	109	(12.0)			残4.2	(6.2) 口縁25% 高台80% 内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6	全体的に摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが、ヨコナデによるとみられる不明瞭な稜を有する。「ハ」の字に開く高台を貼付後、高台内をナデ調整する。

報告書 番号	図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
46	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	13.9	4.4	6.9	口縁50% 高台100%	内) 浅黄橙10YR8/4 外) 橙7.5YR7/6 断) ぶい黄橙10YR7/3	口縁は端部を丸くつくる。外面は多段状をなし、3程度の不明瞭な稜が認められるが、緩やかに内湾する。高台は貼付で「ハ」字状に開く。
47	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	(13.4)	4.3	6.4	口縁50% 高台80%	内・外) 淡黄2.5Y8/3 断) 不明	口縁は端部を丸くつくる。外面は多段状をなし、3程度の不明瞭な稜が認められる。内面は厚減が著しい。高台は貼付で「ハ」字状に開く。
48	図36 図版63	土師器 椀	1	109	13.5	4.4	5.8	高台100%	内・外) 浅黄橙10YR8/3 浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙10YR8/3	口縁は端部を丸くつくる。外面は多段状をなし、3程度の不明瞭な稜が認められる。内面は厚減が著しい。高台は貼付で「ハ」字状に開く。
49	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	12.4	4.2	5.5	口縁70% 高台100%	内・外) 浅黄橙10YR8/3 橙7.5YR7/6 断) 浅黄橙10YR8/3	高台は貼付後ナデ調整を施し接合痕を消す。内面はナデ調整を施し、外面は多段状をなし3程度の不明瞭な稜が認められる。
50	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	12.5	3.7	5.8	85%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外・断) 浅黄橙10YR8/4	口縁は端部を丸くつくる。外面は多段状をなし、3程度の不明瞭な稜が認められる。内面は厚減が著しい。断面三角形の高台を貼付後、高台内面をナデ。
51	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	12.1	3.5	5.6	口縁50% 高台100%	内) ぶい黄橙10YR7/4 灰白2.5Y8/2 外) ぶい黄橙10YR7/4 断) 灰白10YR8/2	口縁は端部を丸くつくる。外面は多段状をなし、3程度の不明瞭な稜が認められる。断面三角形の高台を貼付。高台内面に葉脈状の痕跡あり。
52	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	(13.9)	4.5	(5.0)	口縁30% 高台75%	内・断) 灰白2.5Y8/1~8/2 外) 浅黄橙10YR8/3	口縁は端部を丸くつくり、体部は緩やかな弧を描き内湾する。体部外面はヨコナデ調整を施し、高台は貼付後ナデ調整を施す。
53	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	(12.5)	残3.8	(5.3)	口縁25% 高台40%	内) 不明 (表面剥離) 灰白7.5YR8/2 外) ぶい黄橙7.5YR7/4 (表面剥離) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白10YR8/1	口縁は端部を丸くつくり、やや腰が脹るように屈曲味に開く。断面台形の直立する高台を貼付。内外面は厚減のため調整は不明瞭である。
54	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	(13.7)	3.5	5.1	口縁40% 高台75%	内) 浅黄橙10YR8/3 浅黄橙7.5YR8/3 外) 浅黄橙10YR8/3 ぶい黄橙10YR7/3 断) 浅黄橙10YR8/3	口縁は端部を丸くつくり、体部はやや腰の張る断面を呈す。外面はヨコナデ調整により、多段状を呈し2程度の稜が僅かに認められる。断面長方形の直立する高台を貼り付ける。胎土は精良で、軟質である。
55	図36 図版63	土師器 皿	1 I6n20	109	(13.6)	残3.1		口縁15%	全体) 浅黄橙7.5YR8/4	口縁端部は丸くつくり、緩やかに弧を描いて開く。外面にヨコナデ調整を施す。直立する低い高台を有するものと推定される。
56	図36 図版63	土師器 皿	1 I6n20	109	11.7	3.5	5.4	口縁100% 高台70%	内・外) 浅黄橙10YR8/3 ぶい橙7.5YR7/4 断) ぶい橙7.5YR7/4	器高はやや低い。口縁端部を丸くつくり、体部外面は多段状をなし2程度の不明瞭な稜を呈す。胎土には僅かに角四石粒がみられる。
57	図36 図版63	土師器 椀	1 I6n20	109	(14.4)	3.2	6.0	口縁55% 高台100%	内・外) ぶい橙7.5YR7/4~浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙7.5YR8/3	口縁は端部をやや尖らせる。体部外面は多段状を呈し、2~3程度の不明瞭な稜を呈す。高台は貼付で、「ハ」の字に開く。内面は厚減が著しい。器高低い。
58	図36 図版63	灰釉陶器 椀(小椀)	1 I6n19	109	(11.3)	4.1	6.0	口縁15% 高台100%	内) 灰白N8/ 自然釉) オリーブ灰10Y6/2 外・断) 灰白N8/	器壁薄い。猪成時降灰が認められるが見込みに及ばず。重ね焼きか、端部僅かに肥厚し外反する。底部に回転車切り痕跡あり。K-90~O53窯式期か。
59	図36 図版63	灰釉陶器 椀(小椀)	1 I6n20	109	10.8	3.3	6.1	100%	灰釉) 2.5Y8/1~7/1 自然釉) 灰オリーブ7.5Y6/2 露胎) ぶい黄橙10YR7/2	輪は内外面にハケ塗り、見込みは無釉。口縁端部を丸くつくり、僅かに外反する。底部に回転車切り痕を呈し、高台は貼付。時期はO-53窯式期以降か。
60	図36 図版63	灰釉陶器 段皿	1 I6n20	109	11.0	1.9	6.0	口縁50% 高台65%	内・外) 灰白N8/(露胎) 灰白7.5Y7/2(釉) 断) 灰白N7/	見込み及び高台以外の内外面をハケ塗りに施す。口縁はやや幅狭い。断面三角形の高台を貼付。時期は6~7段階か。
61	図36 図版63	灰釉陶器 皿	1 I6n20	109	(10.6)	2.2	(6.2)	35%	内) 灰白N7/ 灰白5Y8/1 外・断) 灰白N8/	口縁付近のみ施釉し、見込み高台は無釉。低い高台を貼付、高台内部をナデ調整する。時期はO-53窯式期か。
62	図36 図版63	土師器 皿	1 I6n20	109		残1.9	(6.8)	底部80%	内) 灰白10YR8/2 灰白N7/ 外・断) 浅黄橙10YR8/3	底面が僅かに凹む皿状の平高台を有する。外面はナデ調整またはヘラケズリを施す。
63	図36 図版63	土師器 皿	1 I6n20	109	10.0	1.5	6.6	口縁25% 高台60%	内・外) 橙5YR6/6 断) ぶい橙7.5YR7/4	平高台の皿。胎土はやや粗であるが、焼成は良好で橙色を呈する。口縁にヨコナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。
64	図36 図版63	土師器 小皿	1 I6n20	109	(9.6)	残0.8		25%	内・外) 浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙10YR8/3	「Γ」字状口縁皿。口縁にヨコナデ調整を施す。胎土は精良で浅黄橙色を呈する10世紀後半?
65	図36 図版63	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(15.8)	7.5	7.2	口縁35% 高台90%	内) 灰N5/ ~N4/ 断) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 黄灰2.5Y4/1 浅黄橙10YR8/3 断) ぶい黄橙10YR8/3 ぶい橙7.5YR7/3	A類。内面にのみ黒化処理を施し、口縁端部は尖り気味。内湾する体部に「ハ」字状に開く低い高台を貼付。体部外面はヨコナデ調整により、3程度の不明瞭な稜が認められる。
66	図36 図版63	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(15.8)	6.1	7.5	口縁40% 高台100%	内) 暗灰 N3/ 外) 灰白2.5Y8/2 橙7.5Y7/6 断) ぶい黄橙10YR7/4	A類。内面にのみ黒化処理を施し、口縁端部内面は沈線状の凹みが巡る。内湾する体部に「ハ」字状に開く高台を貼付。
67	図36 図版63	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(14.9)	5.9	(5.8)	口縁10%以下 高台85%	内) 浅黄橙10YR8/3 灰N5/ 外) 橙7.5YR7/6 断) ぶい橙7.5YR7/4	A類。内面にのみ黒化処理。体部外面はヨコナデ調整により、3程度の不明瞭な稜が認められる。内湾する体部にやや直立する断面長方形の高台を貼付。
68	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(14.6)	5.7	7.5	口縁15% 高台90%	内) 灰N4/ 外) ぶい橙7.5YR7/4~6/4 断) ぶい黄橙10YR7/3	A類。内面にのみ黒化処理を施し、口縁端部内面は沈線状の凹みが巡る。内湾する体部に「ハ」字状に開く低い高台を貼付。
69	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(13.4)	6.0	(6.0)	口縁35% 高台25%	内・断) 暗灰N3/ 外) (口縁) 暗灰N3/ (その他) 浅黄橙10YR8/3	A類。内面にのみ黒化処理を施し、不明瞭であるがヘラミガキ痕跡が認められる。内湾する体部に「ハ」字状に開く高台を貼付。
70	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(11.8)	5.1	(5.6)	30%	内) 灰N4/ ~暗灰N3/ 外) 浅黄橙10YR8/3 暗灰N3/ 断) 不明	A類。内面にのみ黒化処理。内外面は厚減により調整不明瞭であるが、体部外面はヨコナデ調整により、4程度の不明瞭な稜が認められる。高台は貼付。
71	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(16.9)	残6.0		口縁20%	内・外) 灰N4/ ~暗灰N3/ 断) 灰N4/	B類。内外面にヘラミガキ痕跡を有する。口縁端部は内面に沈線が巡る。高台は欠損する。
72	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109	(12.2)	残4.6		口縁15%	内・外) 暗灰N3/ 断) 灰N4/	B類。内外面にヘラミガキ痕跡を有する。口縁端部は内面に浅い沈線が巡る。高台は欠損するが、貼付の痕跡が残る。
73	図36 図版64	黒色土器 椀	1 I6n20	109		残0.7	(6.0)	高台40%	全体) 灰N4/	B類。低い高台のみ残存するが、内外面にヘラミガキ痕跡を有する。
74	図36 図版64	土師器又は 黒色土器 (胎)	1 I6n20	109	現状(9.1)	現状(1.8)	現状(7.0)	40%	内) 灰白N7/ 淡黄2.5Y8/3 外) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰白10YR8/2	A類。内面にのみ黒化処理。内外面は厚減により調整不明瞭であるが、胎土は一部の椀と同質で、他の黒色土器にみられないものである。
75	図36 図版64	土師器 壺	1 I6n20	109	(15.3)	残5.1		口縁35%	内) ぶい黄橙10YR7/4 外) 褐灰10YR5/1 断) 灰N4/	口縁端部は平坦面をなし、内側を僅かに上方へつまみ上げる。口縁部及び肩部の接合により肥厚する。
76	図36 図版64	土師器 壺	1 I6n20	109	(16.0)	残8.3		口縁25%	内) 灰黄褐10YR5/2 外・断) ぶい黄橙10YR5/3	口縁部はやや肥厚し外反するが、口縁部と頸部の境界は不明瞭で緩やかに屈曲する。内外面とも厚減が著しいが、外面はナデ調整を施す。
77	図36 図版64	土師器 壺	1 I6n20	109	(16.0)	残10.1		口縁75%	内) ぶい黄橙10YR7/3 外) 灰黄褐10YR6/2 断) 灰白10YR8/2	頸部は明確に屈曲し、口縁は端部を僅かに外方へ折り返す。頸部以下は外面をナデ調整、内面を工具によりナデ調整する。
78	図36 図版64	土師器 壺	1 I6n20	109	(32.0)	残11.9		口縁20%	内) 褐灰10YR4/1 ぶい黄橙10YR5/3 外) 褐灰10YR4/1 浅黄橙10YR8/3 断) 褐灰10YR4/1	口縁部はヨコナデを施し、端部内側を僅かに上方へつまみ上げる。外面には指頭圧痕が残り、内面はハケ調整またはナデによる。胎土に結晶片岩の細礫を含む。
79	図36 図版64	土師器 土釜	1 I6n20	109	(22.0)	残13.3		口縁45%	内) 褐灰10YR5/1~4/1 外) 橙5YR6/8 灰黄褐10YR6/2 断) 褐灰10YR4/1	口縁付近に断面台形の短い鐙を有する。鐙は貼付後ナデ調整を施すが、鐙直下には指頭圧痕も認められる。摂津地方からの搬入品か。胎土に径1mm以下の砂粒を多量に含む。時期は10~11世紀頃?
80	図35 図版64	陶器 すり鉢	2 F5j24	1層	(30.0)	残6.0		口縁37%	内) ぶい赤褐2.5YR5/4 赤褐10R5/4 外) 暗赤褐7.5R3/2 赤褐10R5/3 ぶい赤褐5YR5/4 断) 赤褐10R6/6~赤10R5/6	時期は近世以降とみられる。
81	図35 図版64	磁器(染付 椀)	2 I6	1層	9.9	5.4	3.6	60%	釉色) 明オリーブ灰2.5GY7/1 露胎) 灰白N8/	外面に草花文、高台に二重圏線文を描く。畳付は露胎。
82	図35 図版65	磁器 碗(波佐見 様?)	2 I6	125	(9.8)	5.0	(3.9)	口縁45% 高台25%	内・外) (釉色) 明オリーブ灰2.5GY7/1 断) 灰白N8/	外面に二重網目文を描く。厚手で釉の色調は深い。
83	図35 図版65	磁器(染付 大甕)	2 I6	127	(13.5)	4.2	(8.2)	50%	内) (釉色) 灰白N7/ 外) (釉色) 灰白7.5Y7/1 露胎) 灰白10Y7/1	見込みにには蝶及び草花とみられる文様を描く。高台は圏線文を描き、内側に「福」字あり。
84	図35 図版65	備前焼? 大甕	2 F5	128	(62.6)	残16.6		口縁15%	内) 灰褐7.5YR4/2 外) 紫灰5RP5/1 断) 黄灰2.5Y4/1	
85	図35 図版65	磁器(染付 碗)	2 I6g21	132	(10.4)	6.2	5.6	口縁30% 高台50%	内・外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 灰白N8/	広東焼。口縁端部内面に二重圏線文を描く。
86	図35 図版65	磁器(染付 碗)	2 I6g21	132	(8.0)	5.3	3.8	口縁25% 高台100%	内・外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/	口縁端部内面に二重圏線文を描く。見込みに3箇所目の目跡及び「福」字あり。
87	図35 図版65	弥生土器 壺	2 I6i15	石垣1表 込め		残2.8	4.7	底部100%	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) 灰白2.5Y8/2	厚減が著しく調整は不明である。
88	図37 図版65	土師器 壺	3 I7b18	1層		残3.6		5%以下	内) ぶい黄橙10YR7/4 外) 橙2.5YR7/8 断) 内と外の間	頸部は明確に屈曲し口縁はヨコナデ調整を施し、端部はやや凹面状を呈す。外面は頸部以下に縦方向のハケ調整を施す。
89	図35 図版65	土師器 壺	3 I7c13	掘削		残4.4		5%以下	内) 橙5YR7/6 褐灰10YR6/1 外) 浅黄2.5Y7/4 断) 内と外の間	頸部はやや明確に屈曲し口縁はヨコナデ調整を施し、端部はやや凹面状を呈す。外面は頸部以下未調整またはエボサエ。

田ノ口遺跡

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
90	図35 図版65	土師器 鉢	3 H7y7	1層			残5.8	(6.7) 底部50%	内・外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR7/6	摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、外面はナデ調整によるとみられる。
91	図35 図版65	土師器 皿(灯明)	3 I7c12	1層	(12.6)		残2.9	25%以下	内・外) 暗灰黄2.5Y4/2 (煤)黒N1.5/ 断) にぶい黄2.5Y6/4	口縁は底部から僅かに内湾して立ち上がり、端部には次線状の凹みが巡る。内外面をヨコナデ調整。口縁端部付近に煤が付着。灯明皿として使用か。
92	図35 図版65	須恵器 皿	3 I7b9	1層	(10.5)		残1.5	(8.1) 10%	内・外) 黄灰2.5Y6/1 断) 橙7.5YR7/6	口縁端部は平坦で、やや外傾する。小型の皿である。
93	図35 図版65	須恵器 杯	3 I7b10	1層	(12.4)		残3.2	口縁20%	内・外) 灰白5Y8/2 (端部)灰白N7/ 断) 灰白5Y8/2	口縁は底部から直線的に立ち上がり、端部やや尖り気味につくる。内外面をヨコナデ調整。底部はヘラズリ後ナデ調整を施す。
94	図35 図版65	土師器 碗	3 I7b11	1層	(14.6)		残2.7	口縁20% 体部10%以下	内・外) 橙7.5YR7/8 断) 橙7.5YR7/6	口縁は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施す。底部は未調整。
95	図35 図版65	須恵器 乗蓋	3 H7y21	表探	(10.6)		残1.4	25%	全体) 灰N6/ ~5/	小型の乗蓋とみられる。口縁は直角に近く屈曲し、端部は平坦面をなす。ツマミの有無は不明である。
96	図35 図版65	須恵器 蓋	3 I7c19	1層	(17.4)		残1.7	10%	内) 灰白10YR7/1 外) にぶい黄橙10YR5/3 断) 灰白2.5Y7/1	やや大型でツマミを有しない蓋である。天井部はヘラズリにより平坦面をなし、口縁は緩やかに「S」字を描き屈曲する。
97	図35 図版65	灰釉陶器 碗	3 I7c13	1層	(15.1)		残4.6	口縁10%以下	内) 灰白2.5Y7/1 (釉) 浅黄2.5Y7/4 (線釉) オリーブ 灰10Y6/2 外) 灰白2.5Y7/1~灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	薄いつくりで体部は僅かに弧を描き、口縁端部はやや尖り気味につくり外反する。体部k下位はヘラズリを施す。内面には僅かに焼成時降灰とみられる釉の付着がある。
98	図35 図版65	緑釉陶器 碗	3 I7c10	1層	(10.0)		残4.1	10%以下	内・外) (釉)浅黄7.5Y7/3~オリーブ黄7.5Y6/3 口縁端部) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	残存する部分の内外面全体に施釉するが、口縁部は剥離する。釉色は淡い浅黄色を呈し、ラスタ現象が僅かにみられる。硬質。洛北産とみられ、時期は9世紀前半以降。
99	図35 図版65	黒色土器 杯	3 H7y15	攪乱			残4.9	10%	内) 暗灰N3/ 外) 橙7.5YR7/6 断) 暗灰N3/ 橙7.5YR7/6	口縁のみ残存。B類。内外面を黒化処理する。緩やかに内湾し、口縁端部は直立気味となる。内外面にヘラミガキを施す。
100	図35 図版65	埴土器 蓋	3 I7b10	1層	(8.9)		残9.9	口縁50%	内) 断) 灰白2.5Y8/2 外) 淡黄2.5Y8/3	口縁部はやや厚し、僅かに外方へ開く。底部は残弾形を呈すとみられる。外面はナデ調整またはユビオサエを施す。
101	図35 図版65	緑釉陶器 碗又は皿	3 I7c10	1層			残1.0	(5.7) 底部20%	内) 浅黄7.5Y7/3~オリーブ黄7.5Y6/3 外) 浅黄7.5Y7/3 断) 灰白5Y7/1	中央が僅かに凹む平底の碗又は皿。釉は淡黄色でラスタ現象が僅かにみられる。硬質。洛北産とみられ、時期は9世紀前半以降。
103	図35 図版65	弥生土器 壺又は壺	3 H7v8	2層			残2.3	(4.2) 底部80%	内) 淡黄2.5Y8/3 外) 淡黄2.5Y8/3 黒褐2.5Y3/1 断) 淡黄2.5Y8/3 黄灰2.5Y5/1	底部は外面にユビオサエの痕跡を有する。
104	図35 図版65	須恵器 壺	3 H7v12	2層			残4.9	(10.0) 20%	全体) オリーブ灰2.5G6/1	底部に回転糸切り痕跡を有する。体部は回転ナデ。
105	図35 図版65	土師器 皿(灯明)	3 H7t18	2層	(15.1)	2.15	(12.0) 20%		内・外) にぶい黄橙10YR7/4 外) 橙7.5YR7/6~6/6	口縁は底部から屈曲して立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施す。底部は未調整である。灯明皿として使用されたこととみられ、灯心の痕跡が残る。
106	図35 図版65	須恵器 蓋	3 I7b17	2層	(11.4)		2.0	20%	内・外) 灰N5/ 断) 灰褐7.5YR5/2	小型の蓋である。中央がやや盛り上がるツマミを有し、口縁は緩やかに「S」字を描いて屈曲し、端部は丸くつく。
107	図35 図版65	弥生土器 壺	3 H7y18	3b層			残4.4	(5.4) 底部40%	内) 灰N5/ 外) 明黄褐10YR7/6 断) 灰N5/ 灰白10YR8/2	底部のみ残存。外面にはやや右立ちのタタキが認められる。内面は板状工具によるとみられるナデを施す。
108	図35 図版66	須恵器 瓶	3 I7b9	3層			残4.7	25%以下	内) 灰N5/ 外) 灰N6/ ~5/ 断) 灰N6/ にぶい橙7.5YR6/3	長頸壺または水瓶とみられる。高台は貼付で体部下位をヘラズリ後、ナデを施す。
109	図35 図版66	須恵器 瓶	3 I7c15	3b層			残9.1	(10.6) 10%以下	内) 灰N5/ ~4/ 外) 灰N4/ 断) 赤灰2.5YR4/1	長頸壺または水瓶とみられる。高台は低く削り出すが、不明瞭である。
110	図35 図版66	須恵器 蓋	3 I7b18- e16	攪乱	(19.3)		残0.7	30%	全体) 灰N6/	器形に対し器高が著しく低い。口縁はやや「S」字を描き屈曲し、端部は丸くつく。類例から、ツマミを持つものと推定される。
111	図35 図版66	土師器 杯	3 H7v14	3b層	(9.4)	1.7	(6.0) 口縁10%以下		内) 明黄褐10YR7/6 外) 浅黄橙10YR8/4 断) 明黄褐10YR7/6 黒褐2.5Y3/1	口縁はヨコナデにより、直線的に開く。底部は未調整である。
112	図35 図版66	土師器 杯	3 I7c15	3b層	(14.4)		残2.8	口縁10%以下 底部25%	全体) 橙5YR6/8	口縁は底部から緩やかに弧を描いて開き、ヨコナデ調整が認められる。端部外面に凹線状の凹みが巡り、煤が付着する。底部は不定方向のナデ。
113	図35 図版66	土師器 杯	3 I7b11	3b層	(13.2)		残3.0	(9.0) 口縁25%	内) 断) 橙7.5YR7/6~6/6 外) 橙7.5YR7/6	口縁は底部からやや屈曲して立ち上がり、内外面にヨコナデを施す。底部は未調整である。
114	図35 図版66	土師器 杯	3 I7e5	3b層	(14.2)		残3.0	口縁20%	全体) 橙5YR7/8	口縁部は底部からやや屈曲して立ち上がり、緩やかに内湾した後外反する。口縁内外面にヨコナデを施し、底面は未調整である。
115	図35 図版66	土師器 皿	3 I7c12	3a層	(13.2)	3.0	(7.0~8.5) 口縁25%		全体) 橙7.5YR7/6~6/6	口縁は明瞭に屈曲して太くつく。端部は僅かに上方へつまみ上げる。口縁部内面はハケ調整後ナデ、口縁端部はヨコナデ、頸部以下外面はハケ調整。
116	図35 図版66	土師器 壺	3 I7c15	3b層	(24.0)		残5.8	口縁35%	内・外) にぶい黄橙10YR5/4 断) 褐灰10YR4/1 明褐7.5YR5/6	口縁は明瞭に屈曲して太くつく。端部は僅かに上方へつまみ上げる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部以下外面はハケ調整を施す。
117	図35 図版66	土師器 壺	3 I7b10	3b層	(24.0)		残6.8	口縁15%以下	内) にぶい橙7.5YR7/4 外) にぶい橙5YR6/4 にぶい黄橙10YR6/3 断) にぶい黄橙10YR7/4	
118	図35 図版66	土師器 壺	3 H7x13	3層	(26.0)		残7.7	口縁25%	内・外) にぶい黄橙10YR6/4~にぶい黄橙10YR5/4 断) にぶい黄橙10YR7/4	口縁は明瞭に屈曲して太くつく。端部は僅かに上方へつまみ上げる。口縁部内面はハケ調整。頸部から外面はヨコナデ、頸部以下外面はハケ調整を施す。
119	図35 図版66	土師器 杯	3 I7c12	3層	(23.6)	8.4	(7.9) 口縁30% 高台10%		内・外) 橙7.5YR6/6 断) 明褐7.5YR5/6	高台を有する杯である。外面は底部~口縁までヘラズリ後粗いヘラミガキを施し、内面は不定方向のナデ調整。搬入品とみられ、時期は9世紀前半頃。
120	図35 図版66	土師器 杯	3 I7c12	3層	(26.0)		残8.0	(10.0) 20%	内・外) 明赤褐2.5YR5/8 断) 明赤褐5YR5/8	高台を有する杯である。外面は底部~口縁までヘラズリ後粗いヘラミガキを施し、内面は不定方向のナデ調整。搬入品とみられ、時期は9世紀前半頃。
121	図35 図版66	土師器 皿(灯明皿)	3 I7c15	3b層	14.0	1.8	11.0 75%		全体) 橙5YR6/8	口縁は底部からやや屈曲し直線的に開く。底部は未調整である。口縁端部に煤またはタールの付着があり、灯明としての使用が推定される。
122	図35 図版66	土師器 皿(灯明皿)	3 I7b11	3b層	(15.3)	2.2	(12.8) 25%		内・外) にぶい黄橙10YR7/4~6/4 断) にぶい黄橙10YR7/4	口縁は底部からやや屈曲し直線的に開く。底部は未調整である。口縁端部に煤またはタールの付着があり、灯明としての使用が推定される。
123	図35 図版66	土師器 皿	3 I7d11	3層	16.4	2.1	13.0 65%		内) 明黄褐10YR6/6 外) 橙7.5YR6/6 断) にぶい黄橙10YR7/4	口縁は底部から僅かに内湾して開く。口縁は上位のみヨコナデを施し、下位はヘラズリ。底部は指頭痕が残る。ナデ調整が認められる。
124	図35 図版66	土師器 皿	3 I7b11	3b層	(14.0)		1.7	口縁20%	全体) 橙7.5YR7/6	口縁は底部からやや内湾して立ち上がり、端部が僅かに外反する。端部内面に煤が付着し、灯明皿としての使用が推定される。
125	図35 図版66	土師器 皿	3 I7d13	3a層	(14.4)		残2.0	口縁5%以下	全体) 橙5YR7/6	口縁は緩やかに内湾して底部から立ち上がり、内面及び外面の上位にはヨコナデを施すが、外面下位は未調整である。
126	図35 図版66	土師器 皿	3 I7b11	3b層	(15.0)		残2.4	口縁~体部 15%	全体) 橙5YR7/8	口縁は内湾して立ち上がり、端部を僅かに外反させる。口縁は内外面をヨコナデ調整し、底部は未調整である。口縁端部に灯心痕跡(煤の付着)がある。
127	図35 図版66	土師器 碗	3 I7b11	3b層	(12.6)		残2.9	口縁25%	全体) にぶい黄橙10YR6/4 褐灰10YR5/1	口縁端部は内面に僅かに段を有し、体部は緩やかに内湾する。
128	図35 図版66	土師器 碗	3 I7b11	3b層	(14.6)		残3.5	口縁25%	内・外) 橙7.5YR7/8 断) 黄橙10YR8/6	口縁は内湾して立ち上がり、端部付近で僅かに外反する。口縁は底部までをヨコナデ調整し、底部は未調整である。
129	図35 図版66	土師器 杯	3 I7c16	3b層	12.7	3.4	8.2 60%		内・外) にぶい橙5YR6/4 断) 橙7.5YR6/6	口縁はやや屈曲気味に底部から立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施す。底面は未調整であるが、部分的にナデを施す。口縁に煤・タールの付着あり。
130	図35 図版66	土師器 杯	3 I7c13	3b層	(15.0)		残3.4	(11.0) 15%	全体) 橙5YR6/6	口縁はやや屈曲気味に底部から立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施す。底面はナデ調整を施す。墨書あり。
131	図35 図版67	土師器 碗	3 I7	3b層	(13.6)		残3.0	(9.6) 口縁30%	内) 橙7.5YR7/6 外) 橙5YR7/6 断) 明黄褐10YR7/6	口縁は内湾して底部から立ち上がり、端部は外反し内面に沈線が巡る。底面は部分的にナデ調整。口縁端部に粘土粗痕跡あり。
132	図35 図版67	土師器 皿(灯明皿)	3 I7c16	3b層	(13.0)		残3.1	25%	全体) 橙2.5YR6/8	口縁は屈曲して底部から立ち上がり、端部はやや肥厚する。口縁内外面をヨコナデ調整する。煤・タールの付着あり。灯明皿として使用か。
133	図35 図版67	土師器 杯	3 H7y20	3a層	(15.0)	3.5	(10.0) 口縁20%		内) 橙5YR7/6~6/6 (タール)黒N1.5/ 外) 橙5YR6/6 (タール)黒N1.5/ 断) にぶい黄橙10YR5/4	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がり、端部はやや肥厚する。口縁内外面をヨコナデ調整する。底面未調整。煤・タールの付着あり。灯明皿として使用か。

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
134	図35 図版67	土師器 坏	3 I7c12	3a層	(13.7)	2.8	(8.0)	30%	内・外) 5YR6/6 断) 5YR7/6~6/6	口縁は英部から直線的に開き、内外面ともヨコナデ調整を施す。口縁端部内面に浅い沈線が巡る。底面は未調整であるが、指頭圧痕が残る。
135	図35 図版67	土師器 土釜	3 I7c6	3a層		残4.5		5%以下	内・外) 灰白2.5Y8/1~8/2 断) 灰白2.5Y8/1	口縁付近から長い頸がやや下方に延びる。頸部分はヨコナデ調整。内面はナデ調整及び指頭圧痕が残る。
136	図35 図版67	灰釉陶器 椀	3	3b層		残2.6	7.0	高台50%	全体) 灰白N8/	底部に回転糸切り痕跡を有する。高台は断面長方形で貼付。内外面とも無釉。
137	図38 図版67	土師器 坏蓋	3 I7c13	3a層	25.6	4.8		50%	内・外) 橙5YR6/8 断) 明黄褐10YR6/6	坏(120)に伴うとみられる蓋である。太い線状となった粗いミガキを4方向から施す。ミガキは1方向につき十数回往復させて施す。口縁端部は平坦につくる。
138	図38 図版67	黒色土器 椀	3 I7c16	3a層	(15.2)	残4.4	(6.1)	口縁40% 高台15%	内) 灰N4/ 外) 浅黄橙10YR8/4 断) 浅黄橙10YR8/3	A類。内面のみ黒化処理する。内面はやや粗いミガキを施す。外面は口縁部上位をヨコナデ調整し、下位は未調整である。低い高台を貼付後、ナデ調整。
139	図38 図版67	黒色土器 椀?	3 I7c16	3b層		残2.0	(6.8)	底部45%	内) 暗灰N3/ 外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6	A類。内面のみ黒化処理する。内面は摩滅が著しく調整は不明である。断面三角形の低い高台を貼付。
140	図38 図版67	弥生土器 高坏	3 H7x8	3c層		残5.9		脚部20%	内) 橙7.5YR6/8 外・断) 橙5YR6/8	摩滅著しく、調整不明である。
141	図38 図版67	土師器 鉢	3 H7w6	3c層		残3.1	5.1	底部100%	内・外) 灰白10YR8/2 断) 灰N4/	摩滅著しく、調整不明瞭であるが、内外面はナデ調整とみられる。
142	図38 図版67	陶器 壺?	3 H7x8	3c層				角度不明	内釉) 灰オーパー7.5Y5/2~4/2 外釉) 褐7.5YR4/3~暗褐7.5YR3/3 断) 灰N6/	外面に黒褐色の釉。内面に透明釉を掛ける。器種不明である。輸入陶磁器か。
143	図38 図版67	土師器 皿	3 I7b11	3b層	(14.0)	2.4	(11.0)	30%	全体) 橙5YR6/8	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がる。口縁内外面をヨコナデ調整し、底面ナデ調整を施す。口縁端部内面に沈線を巡らす。
144	図38 図版67	土師器 皿	3 I7a10	3b層	(16.0)	残2.5	(12.0)	20%以下	内・外) 橙2.5YR6/6 断) 橙5YR6/6	口縁は底部から直線的に開く。外面はヨコナデ調整により、やや段をなす。
145	図38 図版67	土師器 皿	3 I7a10	3b層	(20.2)	残2.0		口縁25%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) 浅黄橙10YR8/4	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がる。口縁内外面をヨコナデ調整し、底面ナデ調整を施す。口縁端部内面に沈線を巡らす。
146	図38 図版67	土師器 皿	3 I7b10	3b層		残0.7		10%以下	内) 橙2.5YR6/6 外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR7/6	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がる。底面ナデ調整を施す。ごく僅かであるが墨書が残る。
147	図38 図版67	土師器 皿	3 I7b10	3b層		残0.8	(9.6)	底部40%	内) 橙7.5YR6/6 外) 橙2.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6~明褐7.5YR5/6	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がる。底面ナデ調整を施す。「佐夜」と判読可能な墨書が残る。
148	図38 図版67	製塩土器	3 I7c10	3b層	(9.0)	残6.2		20%	内) 灰白2.5Y8/1 淡黄2.5Y8/3 外) 淡黄2.5Y8/3~淡黄2.5Y7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	口縁は僅かに外反し、底部は砲弾形を呈するとみられる。外面に指頭圧痕が数多く残る。
149	図38 図版67	弥生土器 鉢	3 E6v9	304		残6.9	(4.4)	底部100%	内・断) 黄橙7.5YR7/8 外) 黄橙7.5YR7/8 黄灰2.5Y4/1	摩滅著しく調整は不明である。
150	図38 図版67	弥生土器 釜又は壺	3 H7w12	327		残3.0	(5.9)	底部70%	内・断) 浅黄橙10YR8/4 外) 浅黄橙7.5YR8/4	摩滅著しく調整は不明である。
151	図38 図版67	弥生土器 高坏	3 H7w12	327	(15.0)	残8.5		口縁10%	内) 明黄褐10YR7/6 外) 橙7.5YR7/6 断) 灰7.5Y6/1~5/1	摩滅著しく調整は不明瞭であるが、坏部内面はナデ調整とみられる。脚部は中央でユビオサエが認められる。
152	図38 図版67	二彩又は三彩 不明	3 I6	358		残1.8		5%以下	内) 灰白2.5Y8/2 (釉)緑灰7.5GY6/1 外) 灰白10YR8/2 (釉)緑 該当色なし 断) 暗灰N3/	軟質の胎土で、両面とも薄く化粧土を掛けた後、施釉する。釉は透明釉及び緑釉で、二彩又は三彩とみられる。
153	図38 図版67	土師器 皿	3 H7w13	386	(11.9)	2.4	(5.6)	口縁15% 底部25%	内) 黒褐2.5Y3/1 外) 褐灰10YR4/1 断) 黒2.5Y2/1	口縁は底部から僅かに弧を描いて開くが、受け口状の段をなす。被熱痕跡が認められる。
154	図38 図版67	土師器 皿	3 I7b11	366	(15.2)	2.7	(12.5)	50%	内) 明赤褐2.5YR5/6 明黄褐10YR7/6 外) 明黄褐10YR7/6~6/6 橙5YR6/6 断) 明黄褐10YR7/6	口縁はやや屈曲して底部から立ち上がる。口縁内外面をヨコナデ調整し、底面は未調整であるが部分的にナデが認められる。

石器一覧表

図・ 図版番号	器種	調査区 地区	遺構 層位	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率	備考
25 図34 図版62	権状石製品	1 I6e21		101	8.7	7.4	7.3	756	100%	滑石製で、底面は平坦に磨く。環状の紐を有し、中位が膨らむ円柱状を呈する。
102 図37 図版65	石製品 石錘	3 H7	表探		2.9	1.4	1.4	6.3	不明	
155 図38 図版67	礫石器 台石	3	101	30.5	28.0	15.0	16500	砂岩	100%	中央に半球状の凹みを有する。
156 図38 図版67	礫石器 台石	3	327	39.3	18.0	7.5	8100	細粒砂岩	100%	
157 図38 図版67	礫石器 擦り石(棒状)	3 H7v9	101	13.6		3.8	304.5	砂岩	100%	

第7節 岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設により、その建設予定地の一部が西牟婁郡上富田町の岩崎大泓遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内にかかることから、県文化遺産課により平成23年度に確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、平成24年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、本調査を実施した。

第2項 位置と環境

岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡は塗屋城跡と非常に近い位置にあり、地理的環境及び歴史的環境については塗屋城跡の項において先に述べたとおりである。両遺跡の立地するところは富田川西岸にあたり、岸に沿って北東から南西へと長く連なる丘陵地にある、狭小な平野部を有する谷筋である。遺跡の範囲は北、西、南方を丘陵に囲まれた盆地状の地形を呈する平野部を中心に、丘陵斜面の裾部分を含む。(図1)

第3項 岩崎大泓遺跡

岩崎大泓遺跡は北西から南東方向に延びる細い谷筋に立地する。岩崎大泓Ⅱ遺跡とは指呼の距離にあり、現況は水田である。これらの水田は谷筋の北西から段をなして標高を下げ東南端は低地となるが、今回の調査区は谷筋で最も標高の低い部分(標高14.0m付近)に位置する(図1)。

(1) 調査の方法

1) 地区割の方法

調査地は中央を現有水路によって南北に分断されることから、便宜的にこの水路より北側を調査区1、南側を調査区2とした(図3)。調査面積は調査区1が1013㎡、調査区2が302㎡である。

地区割り(図2・3)は岩崎大泓遺跡及び岩崎Ⅱ遺跡の両遺跡について共通で、X=-255,700、Y=-54,200を原点として中区画を設定している。両遺跡とも中区画C8・C9・C10の範囲にあり、小区画は図3の通りである。

2) 基本層序(図5)

第1・2層 現在の水田耕作土及び床土

第3・4層 近世の水田耕作土及び床土。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、近世陶磁器を含む。

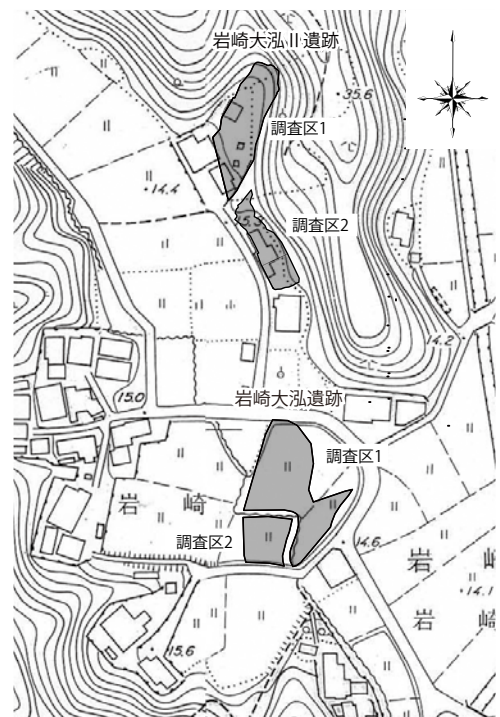


図1 調査区及び周辺の地形 S=1/3000

第5層 中世の遺物包含層。3層に分層可能であり、土師器、瓦器等を含む。

第2～5層においては磨滅の著しい弥生土器片（時期は弥生時代後期末）が含まれる。第5層を掘削後、第6層上面において遺構検出を行った。

(2) 調査成果

1) 調査区 1

調査区は中央が狭まり、東西両端で広がる垂鈴状の平面形となる。その東側で鋤溝群を、西側で土坑群（遺構1～13）と落ち込み状遺構（遺構31・32）を検出した（図4）。遺構1～13は浅いものが多く、遺物の出土がみられないものについては自然地形である可能性も検討したが、埋土の特徴から遺構であると判断された。

また、遺構検出面以下の堆積状況を確認するため、トレンチ(A～E)を設定した。各遺構の規模等は以下のとおりである。

遺構1 (図4・6) 長径1.1m、短径0.6m以上、深さ0.08mの楕円形をなすとみられる土坑である。埋土は1層で、出土遺物はない。

遺構2 (図4・6) 長径1.1m、短径0.9m、深さ0.08mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で、弥生土器の細片が出土した。

遺構3 (図4・6、図版49) 長径1.2m、短径0.6m、深さ0.2mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。弥生土器の細片2点が出土した。

遺構4 (図4・6、図版49) 長径1.15m、短径1m、深さ0.1mの楕円形をなす土坑である。底面には凹凸がある。埋土は1層である。出土遺物はない。

遺構5 (図4・6) 長径0.75m、短径0.45m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。土師器細片1点、近世とみられる陶器の甕(54)、染付碗(55)が出土した。

遺構7 (図4・6、図版49) 長径0.6m、短径0.4m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で出土遺物はない。

遺構8 (図4・6) 長径1.3m、短径0.6m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で出土遺物はない。

遺構11 (図4・6) 長径1.15m、短径0.5m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。弥生時代後期末の高坏脚部(60)、底部(58)が出土した。

遺構12 (図4・6) 径0.5mの円形をなす土坑である。埋土は1層である。出土遺物はない。

遺構13 (図4・6、図版49) 長径1.1m、短径1m、深さ0.5mの楕円形をなす土坑である。埋土は3層で、出土遺物はない。

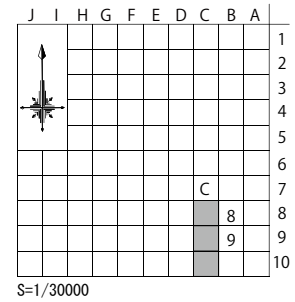


図2 調査区及び小区画

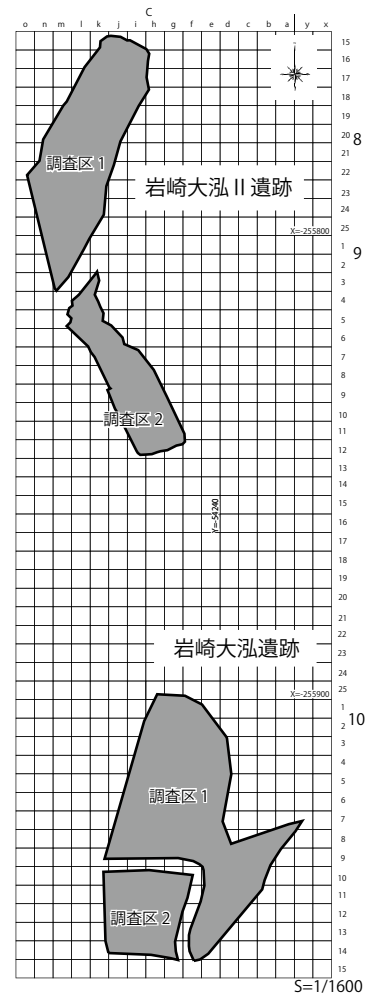


図3 地区割り 中区画

遺構 14(図 4・6) 長径 1.95 m、短径 1.1 m、深さ 0.14 m の土坑である。鋤溝を切っており、これより新しい。埋土は 3 層に区分可能で、第 4 層から、陶器(天目茶碗)の細片 1 点が出土した。

遺構 21(図 4・6) 径 0.35 m の円形をなす土坑で、深さ 0.15 m、埋土は 1 層である。

遺構 22(図 4) 径 0.26m の円形をなす深さ 0.1m の土坑で、弥生土器片及び須恵器片が出土した。

遺構 24(図 4) 長径 0.4 m、短径 0.25 m の楕円形をなす土坑で、深さ 0.15m である。遺物は、瓦器皿の小片、土師器片、瓦器皿が出土した。瓦器皿は 13 世紀代に帰属するとみられる。

遺構 26(図 4・6) 長径 0.45 m、短径 0.2 m の楕円形をなす土坑で、深さ 0.25 m のピットである。25cm の柱痕跡が確認できるが出土遺物はない。

遺構 28(図 4・6) 長径 0.42 m、短径 0.3 m、深さ 0.05m の楕円形をなす土坑である。埋土は 1 層で、出土遺物はない。

遺構 29(図 4・6) 直径 0.25 m、深さ 0.1 m を測る円形のピットである。埋土は 1 層である。

遺構 30(図 4・6) 直径 0.35 m の円形をなす、深さ 0.15 m の土坑である。埋土は 1 層で出土遺物はない。

遺構 31(図 4・5) 北西方向への落ち込む状をなす遺構である。埋土には中世の遺物を含む。

遺構 32(図 4・5) 西側への落ち込み状をなす遺構である。出土遺物はない。

A トレンチ(図 4・5) 遺構 31 に対し設定した。遺構 31 埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層で、上層から古墳時代から中世にかけての遺物が出土し、下層から古墳時代の遺物が出土した。

B トレンチ(図 4) 遺構 32 に対し設定した。遺構 32 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層で、A トレンチにおいて確認した土層と同様である。

C トレンチ(図 4・5) 遺構 33 に対し設定したトレンチである。遺構 33 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層の堆積である。

D トレンチ(図 4) 遺構 33 に対し設定した。遺構 33 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層であり、C トレンチにおいて確認した土層と同様の状況が観察された。

E トレンチ(図 4・5) 遺構 20 に対し設定した。遺構 20 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層であるが、上端から下端方向への傾斜が遺構 31・32 と比べ幾分急角度となる状況が窺えた。

2) 調査区 2

水田遺構とみられる落ち込み状の遺構 18・19 を検出した、いずれも平面形状は方形をなすと考えられる。また、北東～南西方向への水流が推定される溝状遺構を検出しており、遺構 18・19 に関わるものとみられる。遺構検出面以下の堆積状況を確認するため、E トレンチを設定した。

遺構 15(図 4・6、図版 49・50) 南西方向から北東方向に延び幅 0.6～0.8 m、深さ 0.4 m を測る。断面 U 字形をなし、底部で長さ 3.25 m、幅 5～10cm、厚さ 0.5cm の薄い板状の木片を検出した(写真 1)。底部のレベルから北東から南西への水流が推定され、水田跡と考えられる遺構 18 に流れ込む。堆積土は 4 層に分層が可能で、第 2 層から細片の黒色土器片、土師器碗の小片、弥生土器及び焼土片が出土した。

遺構 16(図 4・6、図版 49) 幅 0.7～1 m を測る溝である。断面形状は肩部に段をなすもので、段は幅約 0.3 m を測る。底部は断面 U 字形を呈し、残存する深さは約 0.25 m を測る。堆積土は 3 層に分層可能で、第 1,2 層からは、土師器、瓦器、須恵器坏蓋の細片が出土した。

遺構 17(図 4・6、図版 49) 遺構 16 に平行して掘削された遺構 17 は、途中で二股となるが、

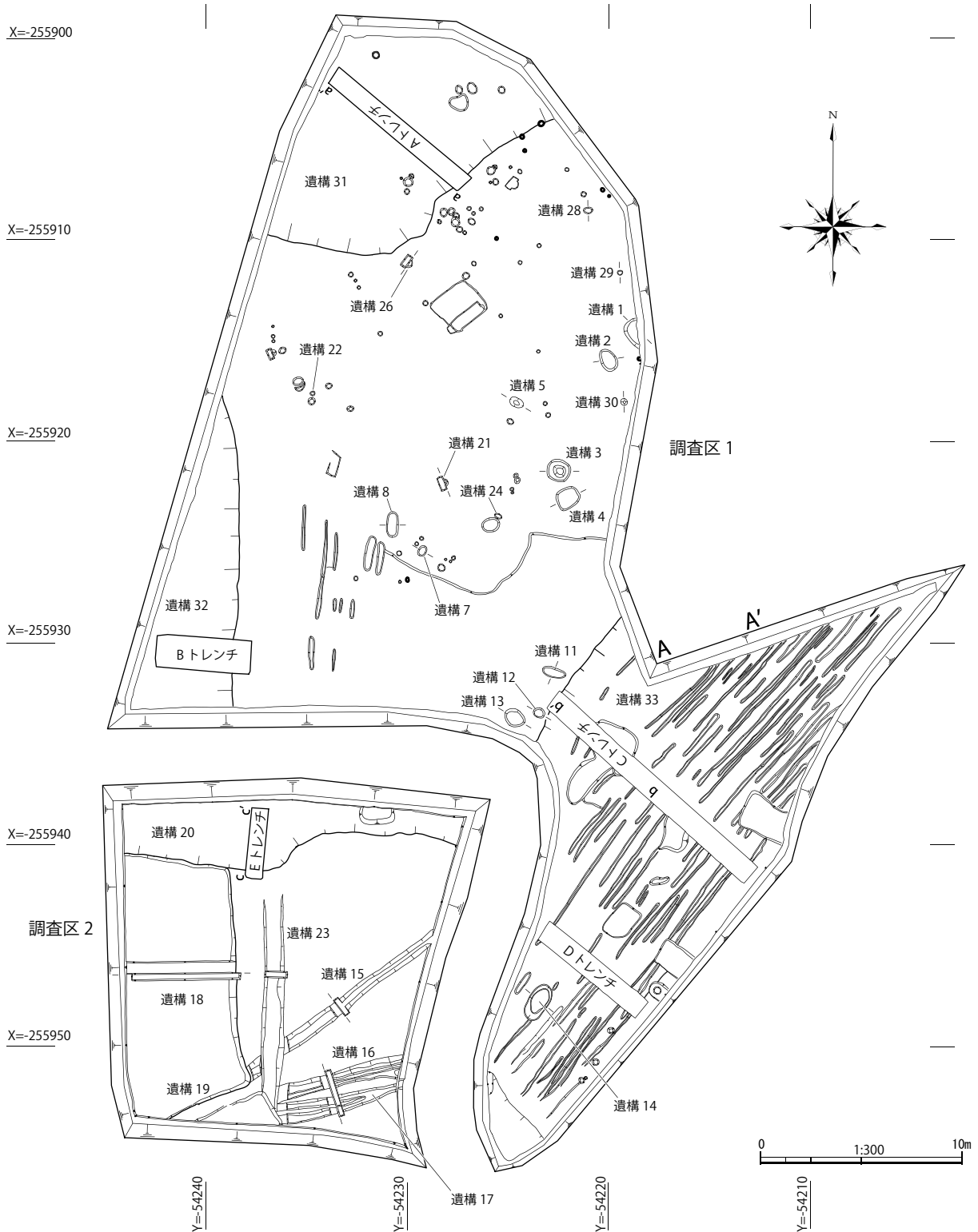


図4 岩崎大泓遺跡 遺構配置図 S=1/300

両者の切り合い関係は明瞭でなく、双方ともに幅約0.35mを測る。深さは北側が0.25m、南側が0.35mである。ともに断面はU字形を呈し、底部のレベルから遺構16同様、遺構19へと流れ込んでいたものと推定される。埋土から弥生土器の細片が出土した。

遺構18(図4・6、図版50) 水田遺構と考えられる方形の区画である。11～13m×5.5mにわたって検出され、深さは0.14mである。堆積土は2層に分層可能で、白磁の細片が出土した。

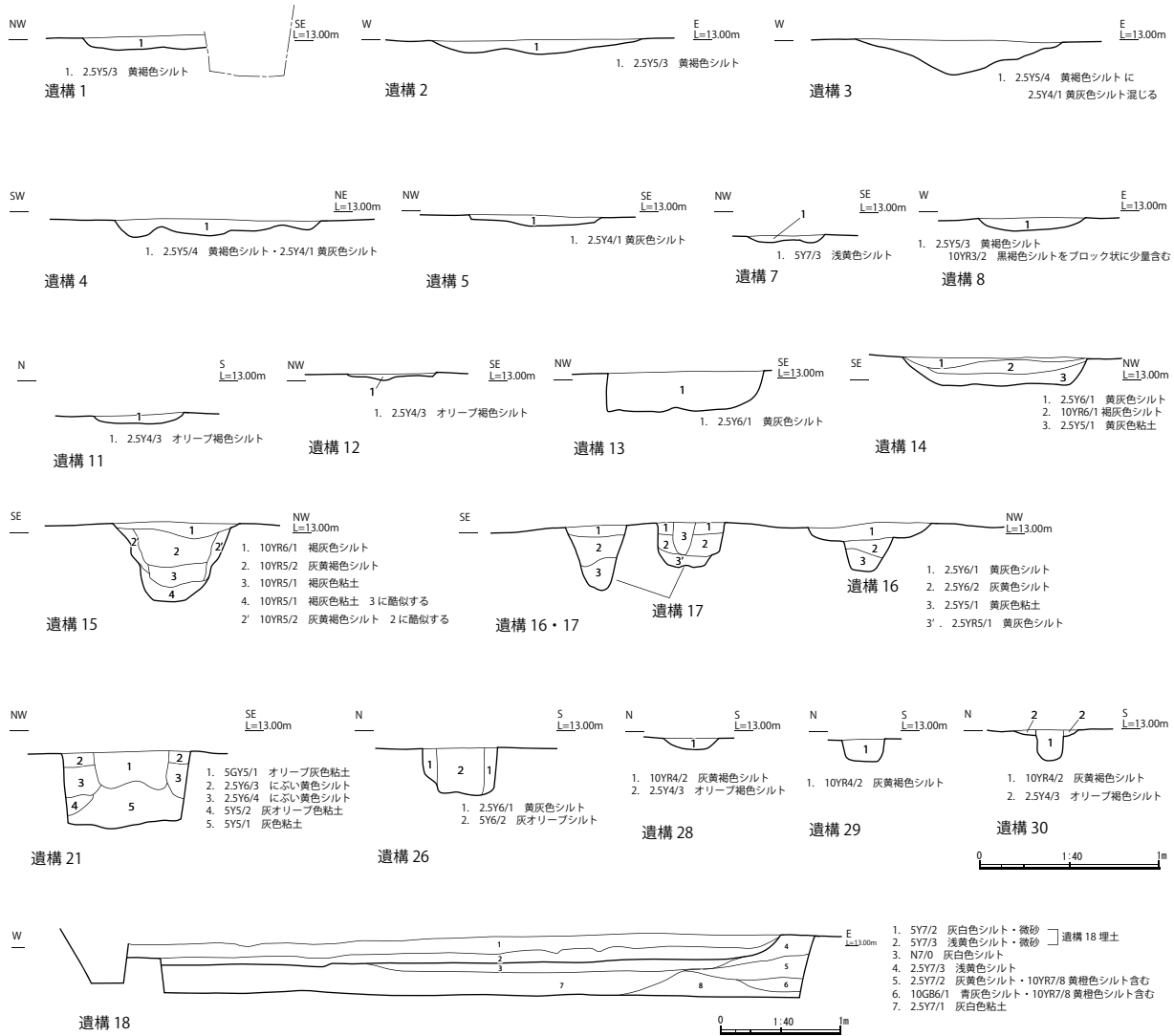


図6 調査区1・2 検出遺構 土層図

遺構 19(図 4) 遺構 18 同様、水田遺構と考えられる。遺構 18 に南面し、検出された範囲は方形区画をなす遺構の一边とみられることから、遺構 18 とは同時期に存在した水田の可能性はある。水路とみられる遺構 16・17 が流れ込み、埋土からは、瓦器碗底部とみられる小片や土師器、ふいごの羽口、須恵器片などが出土した。瓦器碗は細片であるが、復元高台径 5cm で高台の断面形は台形を呈することから、13 世紀前半の碗とみられる。

遺構 20(図 4) 現有の溝に並行し、幅 3.5 m 以上、深さ 1.1 m 以上を検出した。E トレンチの土層観察によれば、北方向へなだらかに落ち込む傾斜をもつことがわかる。調査区 1 では当該遺構とみられるものは検出されていないが、現有の溝に平行することから、この溝の前身である可能性がある。埋土からは外面に叩きをもち、煤がついた弥生土器甕の細片が出土した。

遺構 23(図 4) マンガン粒を多量に含む黄色系のシルト土からなる畦畔状の遺構である。長さ 10.5 m にわたって検出され、幅 0.7 ~ 0.8 m、高さ 0.5m を測る。須恵器片が出土した。遺構 15・16・19 を切っており、これらに後出するものと考えられる。

(3) 小結

落ち込み状遺構は、調査区 1 及び 2 の北側と西側に存在しており、この場所は調査区中央付

近を中心として、中世頃まで島状の微高地となっていたことが推定される。またこれらの落ち込み状をなす遺構は水田遺構と判断されることから、当該調査区周辺においては中世頃から水田が営まれていたとみられる。

第4項 岩崎大泓Ⅱ遺跡

(1) 調査の方法

1) 地区割の方法

岩崎大泓Ⅱ遺跡は新規に発見された遺跡である。今回の調査地は岩崎大泓遺跡が立地する谷筋から、北東方向へ伸びる小規模な谷及び丘陵の南西裾を占める南北約90mにわたる範囲である。この範囲は丘陵斜面に設けられたコンクリート擁壁によって南北に分断されることから、南側を調査区1、北側を調査区2とし、併行して調査を進めた。調査面積は調査区1が307㎡、調査区2が671㎡である。

2) 基本層序

両調査区で堆積状況及び土層に差異が認められたため、基本土層は調査区毎に設定した。

調査区1

第1・2層 現在の水田耕作土及び床土である。

第3層 中世から近世に堆積したとみられる遺物包含層。中世及び弥生時代の遺物を多量に含む。

第4層 丘陵から続く傾斜に沿って堆積する。中世及び弥生時代の遺物を多量に含む。

調査区2

第1・2層 現在の整地土層、水田耕作土及び床土。

第3層 中世の遺物包含層。中世及び弥生時代後期末頃の遺物を含む。

第4層 丘陵から続く傾斜に沿って堆積する。中世の遺物を含む。

(2) 調査成果

1) 調査区1

遺構検出面は2面で、第3層上面及び第5層上面である。

第3層上面(第1遺構面) 検出遺構

検出した遺構は井戸、土坑、ピット等である。井戸は平面円形の掘形に漆喰を塗るかため円柱状の井筒をつくるもので、ここからは近世陶磁器等が出土した。当該遺構面上に検出された遺構はいずれも近世に帰属するとみられるもので焙烙、すり鉢等の近世陶磁器が多く出土したが、ほかには少量且つ小片ながら弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器等がある。

第5層上面(第2遺構面) 検出遺構

落ち込み1(図5) 西側に落ち込む自然地形に沿ってシルト及び粘土の堆積(第3・4層)があり、ここから弥生時代後期末の遺物等が出土した。第3層は近世の遺物を含むことから、この頃までは斜面から低地に土砂が自然に流れ込む状態であったことがわかる。第4層の除去後、下位の第5層上面では落ち込み状の地形が検出され、斜面裾部分にあたるものと推定された。調査はこの落ち込み状の地形と谷筋の方向に直交するセクションベルト及びトレンチ1～4(図6)を設けて進めた。

出土遺物は、小片で磨滅の著しいものが多いが、弥生時代後期末頃に帰属するとみられる弥生

土器が大半を占める。出土遺物については以下のとおり層位ごとに述べる。

第1・2層 土師質の焙烙(1)、近世陶磁器、弥生土器が出土した。

第3層 土師質の羽釜(17)及び弥生土器が出土した。

第4～9層 弥生土器片が出土した。時期は弥生時代後期末に帰属するとみられ、壺・甕・高坏・鉢・器台・小型土器等がある。壺は広口壺(21～23・25)と二重口縁壺(25)がある。広口壺は口縁部を拡張せずその端部に加飾を施さないもの(21～23)や、口縁部を拡張をするもの(24)がある。口縁部を拡張するものには竹管文を施すもの(24)がみられるが、二重口縁壺(25)には、口縁端部の加飾がみられない。高坏は、屈曲する坏部を持つもの(12・27・28・31)と椀状の杯部(40～42)を持つものがある。脚柱部は中実のもの(29・30・36～39)と中空のもの(31・33・42)があって、裾部は逆漏斗状に開くもの(34～36・42)がみられる。また、中実で短い脚柱部をもつもの(15・16)も認められる。

以上のとおり、高坏は坏部及び脚柱部の形状が多様であるが、坏部の形状が椀状をなすものは、脚柱注部が短く、逆漏斗状に開く裾部を付けるものが多いという傾向が認められる。また裾部に穿たれる透孔は径1.6～1.8cmで比較的大きいものが目立つ。器台(26)は、中実の脚柱部に低い坏部を持つもので、高坏と作りは同一である。鉢は脚台を伴うもの(46)がみられるが、残存状態からは全体の形状を復元することができない。他に小型のコップ型をなす手づくねの土器(50)があり、底部内面には年輪状の同心円をなす痕跡が窺え、これについては棒状の木材のやや尖った先端に粘土を貼り付ける等といった成形方法も検討する必要があると考えられる。甕は全体を復元できる個体がなく、底部のみの観察であるが、外面にタタキをもつもの(43・47)とともたないもの(44・45・48・49・51)がある。

2) 調査区2

調査区は北東から南西方向へと短く延びる、谷状をなす地形の底部に設定した。谷底部は南西方向に段をなして標高を下げる。現状は水田及び宅地であり、3段の平坦面が認められた。遺構検出は第4層上面及び第5層上面で行い、いずれも室町時代とみられる遺構を検出した。段状をなす地形は、緩やかな傾斜を残しながらも各遺構検出面上で確認されたことから、この谷底部では室町時代以降、整地により斜面の平坦地化を試みつつ土地の利用が続けられたものと推定される。次に述べる各遺構等の説明では、調査区内の各段について北東側に位置する上位のものから、それぞれ上段、中段、下段と表現する。

第4層上面(第1遺構面)検出遺構

上段には溜池であったといわれる大規模な土坑状の攪乱があり遺構は検出されなかったが、中段では掘立柱建物1を検出した。下段は遺構密度が高く、土坑、ピット等を検出した。上段の最高所から下段上面までの標高差は約3.5mである。

中段検出遺構

建物1(図7) 中段に検出した遺構99～102、104、106、107からは、桁行2間、梁行1間の規模で、柱間が約2.1mを測る掘立柱建物が復元される。建物の方向は長辺が等高線に平行しており、段状の地形を意識して建てられたことが窺える。

遺構95(図7) 幅、深さ共に0.1～0.15mを測る。谷状地形の西側斜面に沿って検出された溝状の遺構で、敷地内の排水を目的とした溝と考えられる。遺物は出土しない。

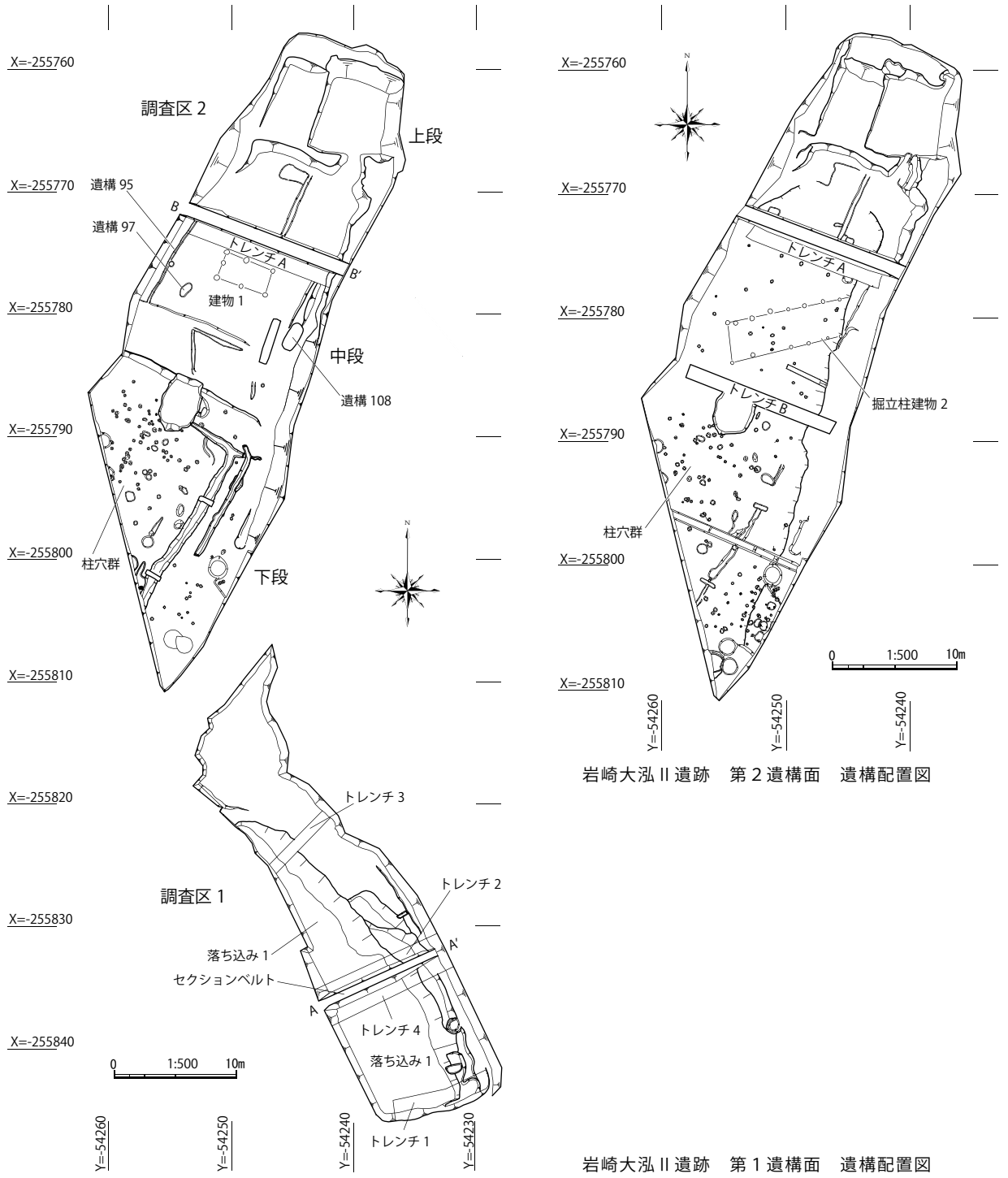


図7 岩崎大泓Ⅱ遺跡 第1遺構面 遺構配置図

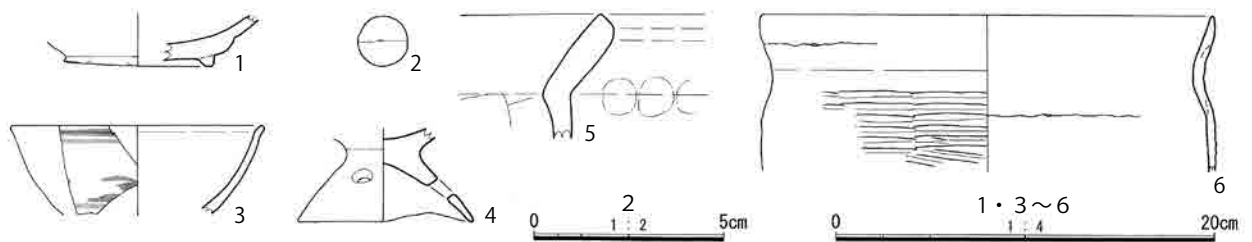


図12 岩崎大泓遺跡 遺物実測図

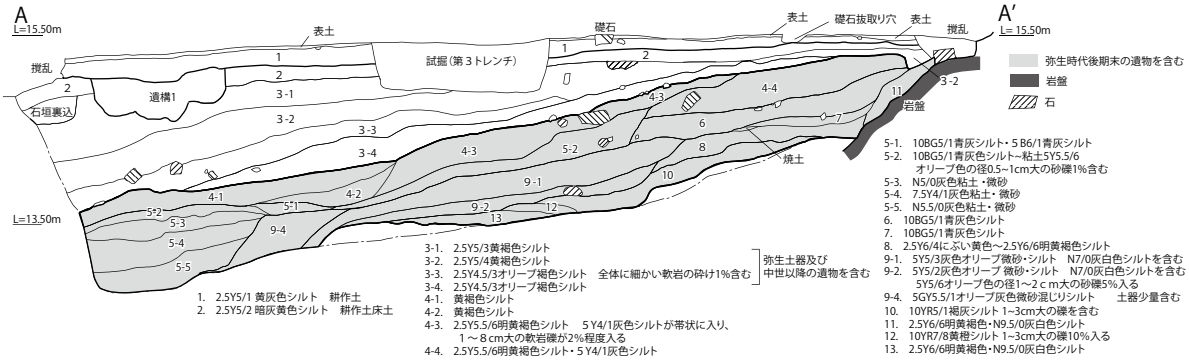


図8 岩崎大泓II遺跡 調査区1 落ち込み1セクションベルト 土層図

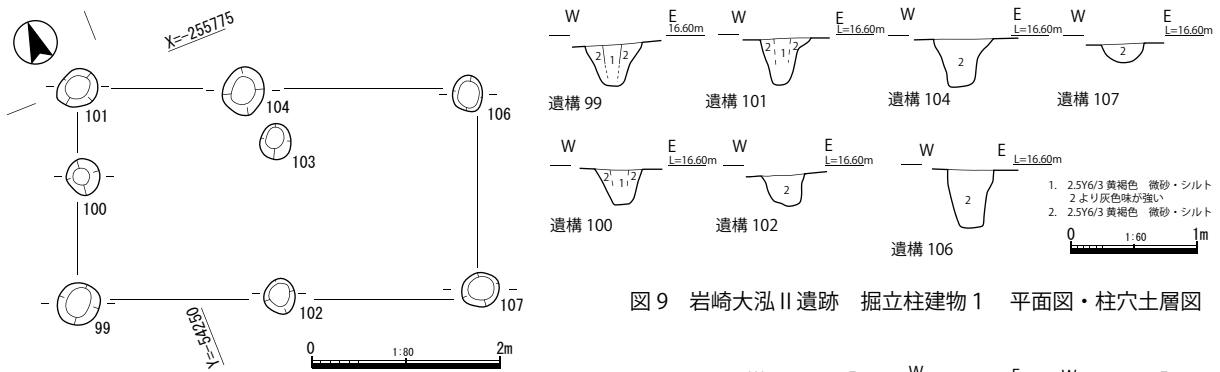


図9 岩崎大泓II遺跡 掘立柱建物1 平面図・柱穴土層図

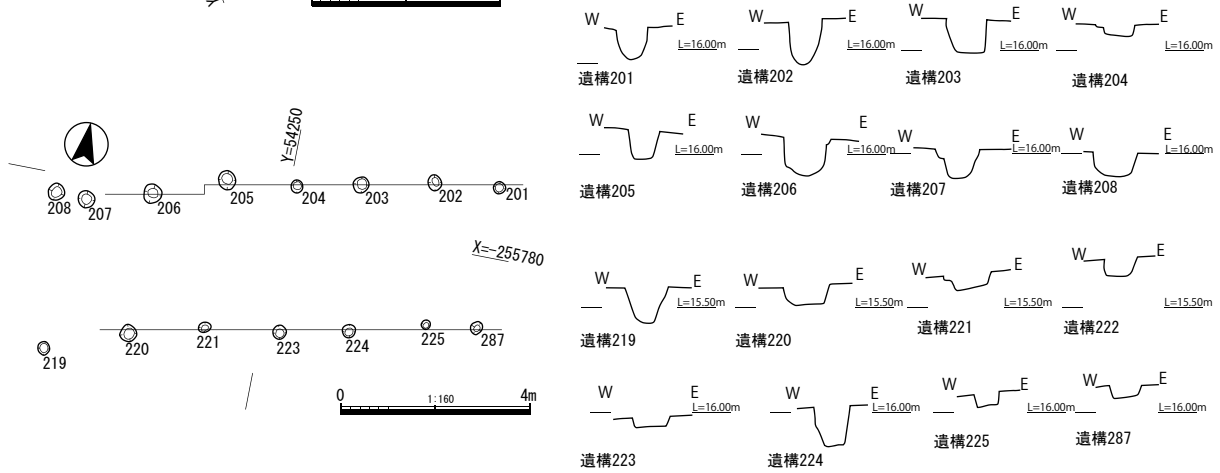


図10 岩崎大泓II遺跡 掘立柱建物2 平面図・断面図

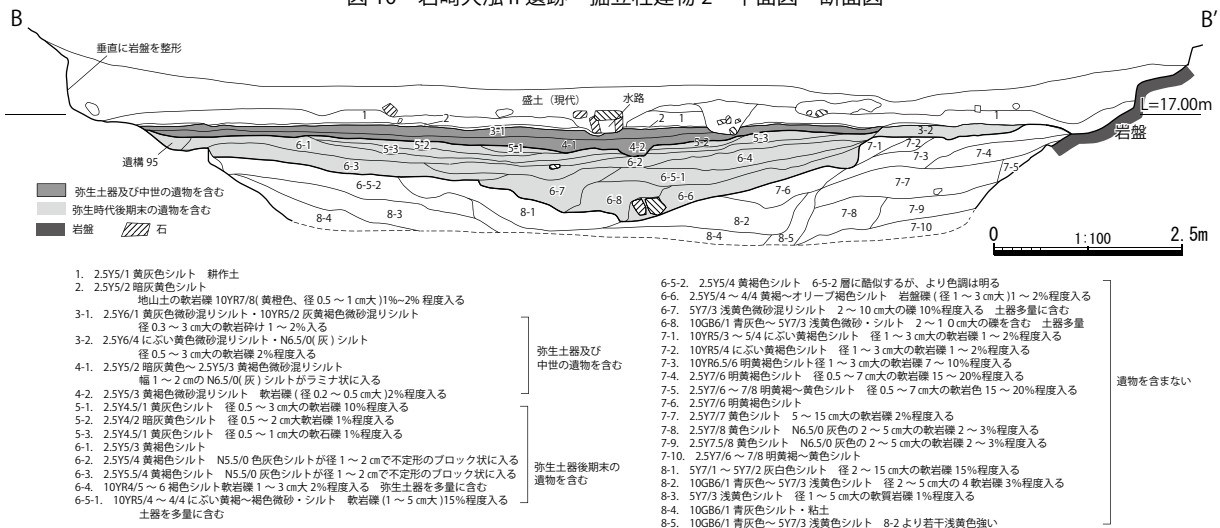


図11 岩崎大泓II遺跡 調査区2 トレンチA土層図

遺構 97 (図 7) 楕円形を呈し、0.8 × 0.4 m、深さ 15cmを測る。遺物は出土しない。

遺構 108 (図 7) 建物 1 の東南、丘陵裾部で検出した土坑である。遺物は出土しない。

下段検出遺構

柱穴群 (図 7) 掘立柱建物にともなうとみられる柱穴群である。溝 1 の西側に集中し、総数 65 基を数える。規模は概ね直径 0.15 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。溝に平行、或いは直交する方向に並ぶ傾向をみせ、谷筋を意識した配置であると考えられる。複数時期の建物が重複しているものとみられ、同一の場所において建て替えがなされたものと考えられるが、1 棟分としての組合せを明らかにできるものはない。柱穴 38 からは 15 世紀後半 ~ 16 世前半の時期とみられる青磁椀の小片が出土しており、当該柱穴群はこの時期に帰属するものと考えられる。

溝 1 (図 7) 調査区中央東よりの位置に、谷筋が延びる方向に平行して掘削された溝である。幅 0.7 ~ 0.8 m、深さは約 0.2 m を測り、北側では幅約 0.25 m となる。下段の遺構はこの溝により東西に大きく分断され、この溝から西側で、より遺構密度が高くなる。このような遺構分布から、この溝は敷地を区画するために設けられたものと考えられる。出土遺物は弥生時代後期末の器台 (73) や土師質の焙烙 (74) 等がある。

第 5 層上面 (第 2 遺構面) 検出遺構

第 5 層上面では明瞭な段差が確認されず、地形は谷筋に沿ったなだらかな傾斜となる。遺構密度は低く、検出された遺構は、東西方向にならぶ 2 列の柱穴と柱穴とみられるピット群である。

掘立柱建物 2 (図 8) 規模は 1 間 × 6 間以上で、柱間は約 1.4 ~ 1.6 m を測る。直径は概ね約 0.2 ~ 0.3m で、深さは約 0.1 ~ 0.3m である。明瞭な柱痕を持つことから掘立柱建物としたが、2 列の柵である可能性もある。谷筋の方向とは関連性が窺えないが、これについては傾斜地であるという立地条件と、細く長い建物の形状及びその規模から、建物の一辺に負荷が集中することを避け倒壊を防ぐ等、安定性を求めたことによる可能性がある。位置的にはやや東側斜面に接して建てられる印象があり、斜面への登坂施設的な性格も考慮する必要があるだろう。

掘立柱建物 3 (図 6) 規模は 2 間 × 2 間で、総柱となる。柱間は約 1.7 ~ 2.0 m で、柱痕は検出されていない。各柱穴は径約 0.25 ~ 0.3m で、深さは約 0.1 ~ 0.2m である。出土遺物はない。

柱穴群 (図 8) 調査区南端で、柱穴群を検出した。最も標高の低い位置において遺構密度が高くなる傾向は第 4 層上面と同様である。概ね径約 0.15 ~ 0.2m 前後、深さ 0.1 ~ 0.2m である。一群の柱穴は、明確な組合せを特定できないものの、掘立柱建物に伴うものと考えられる。

トレンチ A・B (図 7・8・11) 東側の丘陵裾部では流路の肩口を検出しており、谷中心部方向への堆積を確認していることから、当該時期の谷部は丘陵からの雨水等が流れ込む谷地形となっていた可能性が高い。遺構検出面より下層の堆積を確認するため、トレンチ (A ~ A') を設定した。谷筋の東西の岩盤を垂直に掘削して整形を行っている状況が窺えるが、これは敷地面積の確保を狙ったものと考えられる。

また、トレンチ B においても、トレンチ A と同様の堆積状況が確認された。堆積状況は、上層が 2.5 Y 4.5/1 ~ 2.5 Y 5.5/4 (黄褐色) シルトで軟岩礫が混入し、下層は 10 Y R 4/5 (褐色) ~ 10 Y R 5/4 (にぶい黄褐色) シルト層で同様に軟岩礫が混入する。これらの層からは弥生土器片が多量に出土した。さらに下層は 10 G B 6/1 (青灰色) シルトとなるが、出土した弥生土器は少量である。

(3) 小結

調査区 2 においては掘立柱建物のほか、低地部分においても多数のピットが存在し、当時において生活空間の一部となっていたことが窺える。また標高の高低により遺構の粗密がみられる。

第 5 項 まとめ

岩崎大泓遺跡と岩崎大泓Ⅱ遺跡は相互に関連性が高い遺跡であることから、弥生時代後期末及び鎌倉時代～室町時代の各時代毎に、両遺跡について包括的に述べる。

弥生時代後期末

岩崎大泓Ⅱ遺跡の調査区 1 に検出した落ち込み 1 からは、多量の弥生土器片が出土した。これらは概ね弥生時代後期末の時期に限られるもので、ほぼ全ての遺物が著しく摩滅しており調整の不明なものがほとんどであるものの、高坏は器種別にみて最も出土量が多く、なかには坏部と脚部で色調の違う粘土を用いるもの (10) や、透孔の径が大きいもの (29・33) がある等、有田川流域以南にみられる当該時期の土器に共通する特徴をもつ。ただ高坏は脚部の 5 箇所透孔を有するもの (32) が有る等、やや独自の要素も含む。

これらは土層観察から、遺跡の東側にある標高 30m 程度の丘陵上から流れ込んだものである可能性が高く、当該丘陵頂部には集落跡の存在が推定されるが、現況では平坦地を有するものの、遺物の散布等はこれまで確認されていない。

鎌倉時代～室町時代

岩崎大泓遺跡では水田遺構のほか、それに関連した水路とみられる溝（遺構 15・16・17）等が検出された。岩崎大泓遺跡を含む一帯は富田川沿いに南へ向かって標高を下げるが、今回検出された溝は丘陵裾から標高の低い南へと導水することが可能で、岩崎大泓Ⅱ遺跡の所在する狭い谷筋からの流水に対し排水機能を有したものとみられ、低地に営んだ水田への給水量を調整していた可能性がある。

岩崎大泓遺跡で検出された水田遺構とみられる方形の落ち込みは、全体のごく一部分であると考えられるが、これらは谷筋の中央寄りに位置し、且つ北西から南東へと連続していることは、導水を考慮し、谷筋における自然の水流をトレースするように配してされたものと考えられる。遺構 16 及び 17 はこれらの水田に水関わるものであろうと考えられる。当該谷筋における現在の水田も北西方向から段をなして南東側に低くなるよう区画されており、やはり導水を考慮されたものといえ、生産域及び生活域における導排水を重視したことが窺える。なお、この谷筋に設けられた現有水路は、今回検出されたこれらの溝と位置をほぼ同じくする。

岩崎大泓遺跡が主に生産域としての性格を帯びたものであったとみられるのに対し、岩崎大泓Ⅱ遺跡は居住域としての性格が窺え、この 2 つの遺跡は北、西、南の三方を丘陵に囲まれた盆地を以て生産域を含む生活空間となした一単位の集落跡としての見方も可能である。遺構 95 は敷地周縁にあたる斜面裾に設けられた、細く溝状をなす遺構であるが、谷筋の中では比較的標高の高い中段に位置しており、掘立柱建物 1 が建つ敷地内への浸水を防ぎ斜面下方へと排水するためのものと考えられる。このように、より高所において周到に敷地内を整備した掘立柱建物 1 は、集落内において優位を占めるといえ、居住域における階層の存在が窺える。

ところで、岩崎大泓Ⅱ遺跡調査区1で出土した多量の弥生土器が丘陵頂部に当該時期の集落の存在を想定させることは前述したとおりであるが、丘陵頂部と調査区1は比高差が大きく、且つ調査区1のほぼ西半分にあたる広い範囲に土器の出土がみられることは、丘陵頂部から意図的に谷部へ投げ込んだ可能性も指摘でき、これらの遺物が斜面を伝って自然に落ち込んだとする解釈にやや不自然さを残すといえる。

また、現在岩崎大泓Ⅱ遺跡東側の丘陵頂部付近にみられる平坦地が人為的な造成によるものであるとすれば、これらの土器はその造成時に生じた排土中に含まれるものであった可能性も指摘することができ、本来ここに存在した集落が平坦地の造成により地山ごと削平され、それに伴って多量の土器を含む排土が西側へ押し出され、時間とともに（例えば雨水とともに）少しずつ斜面下方へと転落を続けたとすれば、出土したほとんどの弥生土器がこれほど摩滅の進行した状態であることも頷ける。少なくとも、調査区2にあたる谷部分は大きく改変されており、調査区1で検出された落ち込み1の埋土は、その部分からの排土も含まれるものと推定される。当該遺構の第3・4層中に含まれる軟岩礫は、そのとき掘削された地山の一部である可能性もある。

仮に丘陵頂部等において造成がなされたものとすれば、その時期については室町時代以降との見方も可能であるが、今回の調査において明確にし得なかった。ただし、調査区2を平坦地とした時期を室町時代頃に想定することは可能であろう。岩崎大泓遺跡の両調査区では、土地を造成し敷地を得る行為のあったことを窺わせる。

また、掘立柱建物2は傾斜に対応した建て方がなされておらず、且つ壁面寄りの位置にあって、建築物としてはやや不自然な建て方をしているといえるが、これについては、当該掘立柱建物が居住を目的としたものではなく、丘陵頂部へ至ることを容易にするための構築物であるという見方が可能であり、検討の必要があると考えられる。更に、岩崎大泓Ⅱ遺跡の所在する谷地形や、その調査区1で検出された落ち込み状の遺構に対しても、例えば人為的な掘削である等といった、異なる観点からの解釈も可能となろう。近隣地点における更なる調査が望まれる。

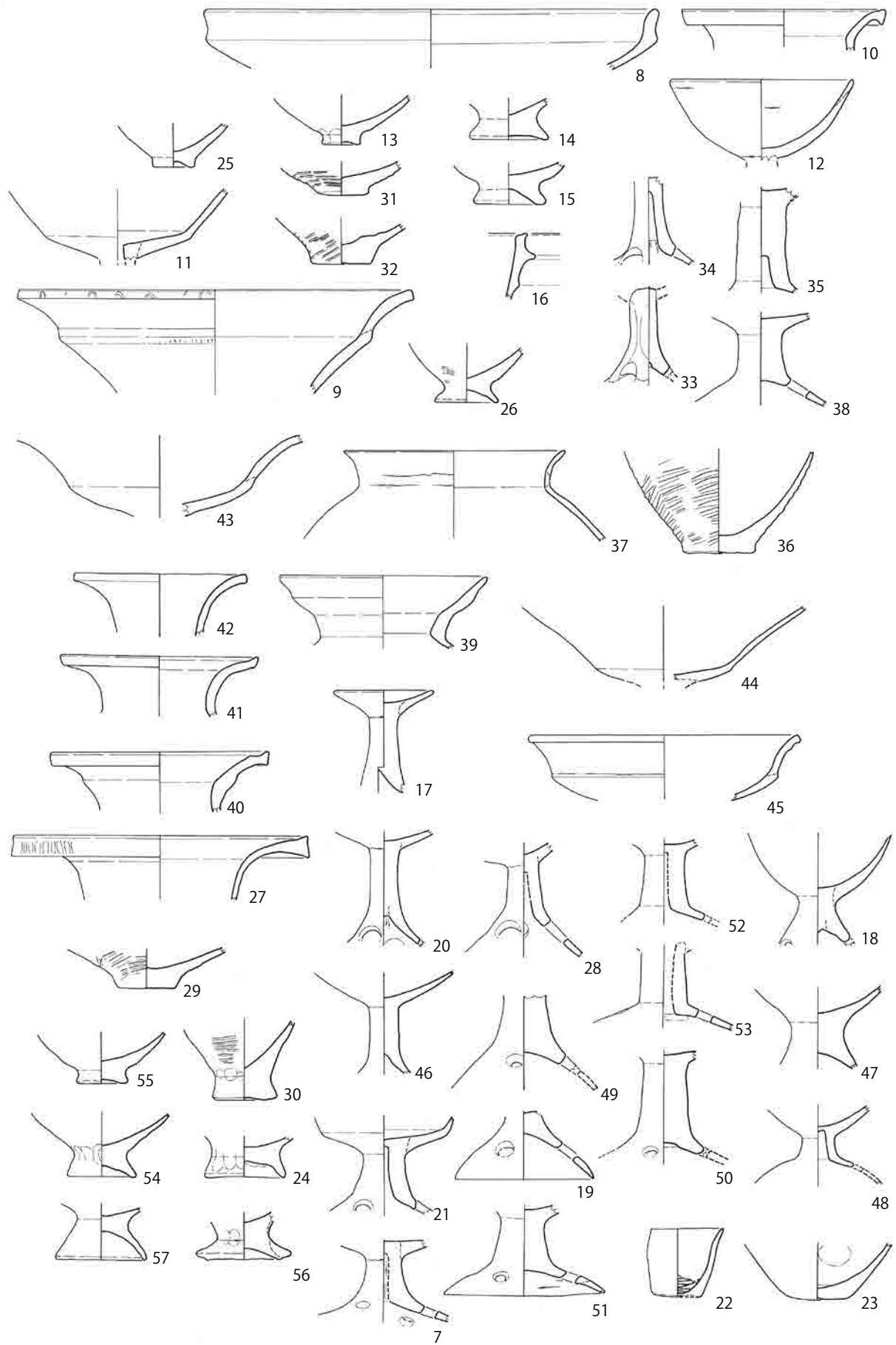


图 13 岩崎大泓Ⅱ遺跡 遺物実測図

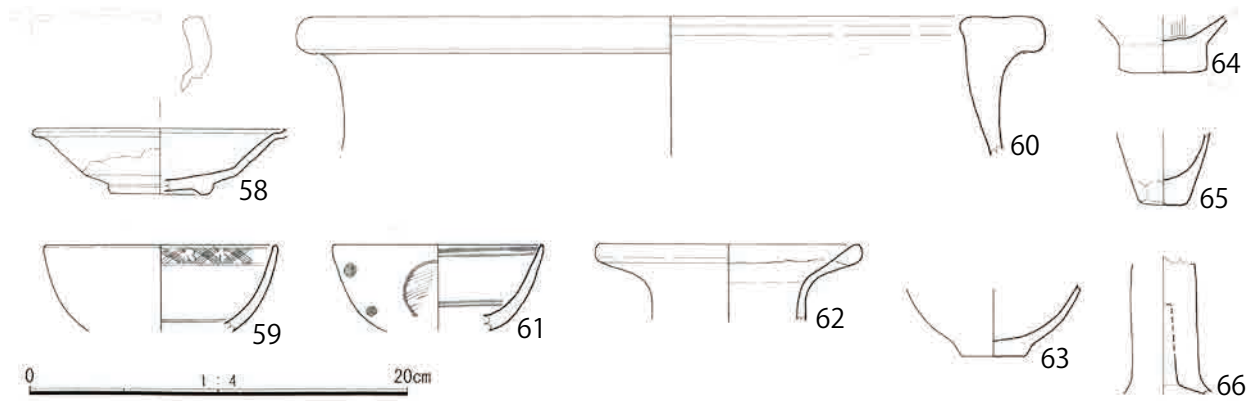


图 14 岩崎大泓II遺跡 遺物実測図

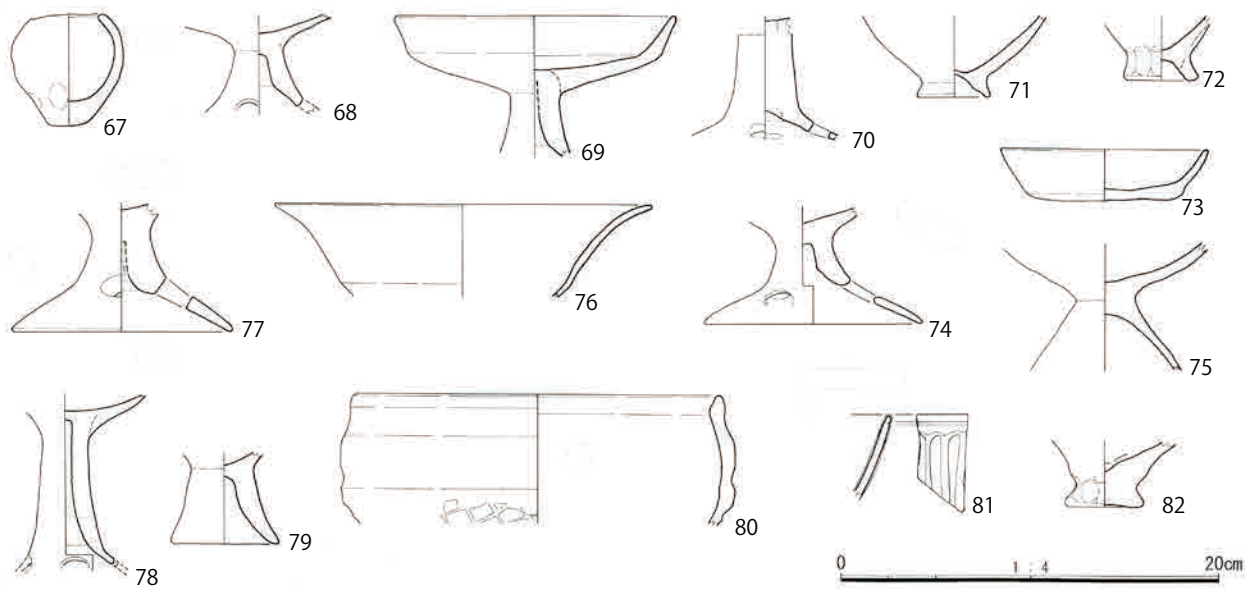


图 15 岩崎大泓II遺跡 遺物実測図

岩崎大泓遺跡 土器観察表

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調
1	図12 図版68	山茶碗	1区 C10j5	4層		残2.5	7.9	高台25%	内・断) 灰白2.5GY8/1 外) 灰白N8/
2	図12 図版68	鉛 鉄砲弾	1区 C10e9	4層精査		直径1.3		100%	全体) 灰N5/
3	図12 図版68	磁器(染付) 碗	1区 C10j5	トレ 4-2"層	(13.0)	残4.7		15%	内・外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 灰白N8/
4	図12 図版68	弥生土器 器台	1区 C10e6	6-2層		残5.0	(9.1) 10.3	脚部50%	内・外) 橙7.5YR7/6 灰白N7/ ~ 灰N6/ 断) 灰5Y5/1
5	図12 図版68	土師器 甕	1区 C9i25	機械掘削 側溝		残6.7		5%以下	内) 暗灰黄2.5Y5/2 外) 赤褐5YR4/6 黒2.5Y2/1
6	図12 図版68	弥生土器 甕	1区 C10h2	1トレ 下層	(24.0)	残8.2		5%以下	内・外) 橙7.5YR7/6~橙2.5YR6/6 断) 橙5YR6/6

岩崎大泓Ⅱ遺跡 土器観察表

1	図13 図版68	焙烙	1区 C9i6	1'層	(32.0)	残4.2		口縁20%以下	内・断) 黄橙7.5YR7/8 外) 橙5YR6/8 褐灰10YR6/1
2	図13 図版68	弥生土器 広口壺	1区	3層	(14.4)	残2.9		口縁~頸部 25%	全体) 浅黄橙10YR8/4
3	図13 図版68	弥生土器 鉢	1区 C9	トレンチ1		残3.1	(2.7)	底部100%	内) にぶい黄橙10YR7/4~6/4 外) 橙5YR7/6~6/6 断) 灰N6/
4	図13 図版68	弥生土器 鉢	1区 C9i8	3層		残3.5	(2.6)	高台100%	内・外) 橙5YR6/8 断) 橙5YR7/6~6/6
5	図13 図版69	弥生土器 壺	2-1区 C9i9	トレンチ4 3層		残2.4	3.7	底部100%	内・断) 橙7.5YR7/6 外) 浅黄橙7.5YR8/4
6	図13 図版69	弥生土器 壺?甕?	2-1区 C9i9	トレンチ4 3層		残3.4	4.2	底部100%	内) 浅黄橙10YR8/4 黄灰2.5Y5/1 外・断) 浅黄橙7.5YR8/4
7	図13 図版68	弥生土器 甕(底部)	2-1区	3層		残3.0	5.3	5%以下	全体) 橙7.5YR7/6
8	図13 図版68	弥生土器 壺(底部)	1区	3層		残3.0	4.8	5%以下	内・外) 橙5YR7/8 断) 橙5YR6/6
9	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9i7	3層	(12.9)	残5.8		30%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) 黄灰2.5Y6/1
10	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9i8	3層		残5.0		坏部口縁端部0% 坏部体部50%	内・外) にぶい橙7.5YR7/4~6/4 断) 橙7.5YR6/6
11	図13 図版68	弥生土器 壺(口縁)	1区 C9i9	トレンチ2	(28.0)	残7.4		口縁20%	内・断) 灰白10YR8/2~浅黄橙7.5YR8/3 灰白10YR7/1~褐灰10YR6/1
12	図13 図版69	弥生土器 高坏(坏部)	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残5.9		口縁端部0% 全体20%	内・外) 橙5YR6/6 断) 灰N6/
13	図13 図版70	弥生土器 高坏(脚部)	1区 C9i9	トレンチ4 3層		残6.3		脚柱100%	全体) 浅黄橙10YR8/4
14	図13 図版69	土師器 高坏(脚部)	1区 C9i9	トレンチ4		残6.4		脚柱100%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) 灰5Y6/1
15	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区 C9i9	セクション 9"層		残7.5		10%以下	全体) 浅黄橙10YR8/4~にぶい黄橙10YR7/4
16	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区 C9i9	セクション 9"層		残6.6		10%以下	内・断) 浅黄橙10YR8/4~にぶい黄橙10YR7/4 断) にぶい黄橙10YR7/4
17	図13 図版68	土師器 土鍋?	1区 C9i8	3層		残4.7		5%以下	内) 暗灰黄2.5Y4/2 外) にぶい褐7.5YR5/4 断) 暗灰黄2.5Y4/2 にぶい褐7.5YR5/4
18	図13 図版68	弥生土器 鉢	1区 C9i9	トレンチ2		残4.2	4.4	底部100%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 浅黄橙7.5YR8/4 灰白5Y7/1
19	図13 図版69	弥生土器 甕	1区 C9i9	セクション 8層	(15.8)	残6.5		口縁20%以下	全体) 浅黄橙7.5YR8/3 灰白2.5Y8/1
20	図13 図版69	弥生土器 甕	1区 C9i8	トレンチ1 5層		残7.35	(5.2)	底部100%	全体) 浅黄橙7.5R8/4~8/6
21	図13 図版69	弥生土器 広口壺	1区	落ち込み1 4層	(12.2)	残4.4		口縁25%	内) にぶい黄橙10YR7/4 外) 浅黄橙10YR8/4 断) 不明瞭
22	図13 図版69	弥生土器 壺	1区	落ち込み1 4層	(14.2)	残4.4		口縁30%	内) 橙5YR6/6 外) 橙5YR6/8 断) 褐灰7.5YR5/1
23	図13 図版69	弥生土器 広口壺	1区	落ち込み1 4層	(15.4)	残4.2		口縁端部5%以下 口縁~頸部20%	全体) 灰白2.5Y8/2
24	図13 図版68	弥生土器 広口壺	1区 C9i9	セクション 4層	(20.8)	残4.6		口縁40%	内・外) 浅黄橙7.5YR8/4~8/6 断) 灰白7.5YR8/1
25	図13 図版69	弥生土器 壺	1区 C9	落ち込み1 3・4層	(14.6)	残5.2		口縁15%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) 灰白N7/
26	図13 図版68	弥生土器 高坏(器台?)	1区 C9i9	4層	(6.8)	残7.3		40%	内・外) 浅黄橙10YR8/4 断) 灰白7.5Y7/1
27	図13 図版69	弥生土器 高坏(坏部)	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残5.4		口縁端部0% 全体30%	内・外) 橙5YR6/6 断) 灰白2.5Y7/1
28	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1	(18.0)	残4.7		口縁部25%	全体) 黄橙10YR8/6
29	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9i8	トレンチ4	脚柱径 2.0	残8.4		30%	全体) 灰N5/0 橙7.5YR7/6 断) 灰N4/0
30	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残7.6		脚柱100% 全体30%	全体) 橙7.5YR7/6
31	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9i8	トレンチ1 4層		残6.85		脚柱100%	内・外) 浅黄橙7.5YR8/6 断) 灰白2.5Y7/1
32	図13 図版68	土師器 高坏	1区 C9	1層		残6.0		40%	全体) 橙7.5YR7/6
33	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区 C9i9	セクション 4層		残8.5		脚部40%	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) 灰N4/
34	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残6.7		脚縁端部0% 脚注50%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) にぶい橙7.5YR7/4~6/4

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調
35	図13 図版68	弥生土器 器台	1区 C9i9	4層		残4.9	(9.9)	脚部30%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) にぶい橙7.5YR7/4
36	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1		残6.5	(11.5)	坏部10%以下 脚注100% 脚振80%	全体) 橙7.5YR7/6~6/6
37	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残6.1		30%	内・外) 橙7.5YR6/6 灰 N5/ 断) 灰N5/
38	図13 図版70	弥生土器 高坏	1区 C9	落ち込み1 3・4層	脚柱径 3.1	残6.0		30%	内・外) 橙5YR7/6 黄灰 2.5Y6/1 断) 黄灰2.5Y6/1
39	図13 図版69	弥生土器 高坏(脚部)	1区	落ち込み1 4層		残8.2		30%以下	内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6
40	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9i8	トレンチ4		残7.9		10%以下	内) にぶい橙7.5YR7/3 橙5YR7/6~6/6 外) にぶい橙7.5YR7/3 橙5YR6/6
41	図13 図版69	弥生土器 器台	1区	落ち込み1 4層		残6.1		30%	内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6
42	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残5.7		30%以下	全体) 橙5YR7/6~6/6
43	図13 図版68	弥生土器 壺	1区 C9	セクション 4層		残3.0	4.0	底部90%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 浅黄橙7.5YR8/6 断) 浅黄橙7.5YR8/3
44	図13 図版69	弥生土器 鉢	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残3.8	3.7	底部100%	内) 橙7.5YR7/6~6/6 外) 黄橙7.5YR7/8 断) 橙5YR6/6
45	図13 図版69	弥生土器 甕	1区	落ち込み1 4層		残4.6	4.8	底部100%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 橙7.5YR7/6 断) 不明
46	図13 図版70	弥生土器 甕	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残4.0	6.2	底部100%	内・外) 橙5YR7/6~7/8 断) 浅黄橙10YR8/3
47	図13 図版69	弥生土器 甕	1区 C9i9	セクション 4層		残5.7	4.4	底部100%	内・外) 浅黄橙7.5YR8/4 7.5YR8/6 断) 浅黄橙7.5YR8/4
48	図13 図版68	弥生土器 甕	1区 C9	4層		残2.9	5.7	底部100%	内・断) 橙7.5YR7/6 外) 橙7.5YR7/6 浅黄橙10YR8/4
49	図13 図版70	弥生土器 甕(底部)	1区 C9	落ち込み1 3・4層		残3.4	(6.5)	5%以下	全体) 浅黄橙10YR8/4~橙7.5YR7/6
50	図13 図版68	ミニチュア土器	1区	4層	5.1	4.9	3.4	口縁40% 体部90% 底部65%	内) 橙5YR6/8 外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6
51	図13 図版68	弥生土器 甕	1区 C9i9	4層		残4.1	4.0	10%	内) 橙7.5YR7/6 外) 浅黄橙7.5YR8/6 断) 明黄褐10YR6/4
52	図14 図版70	唐津 皿	1区 C9i-j11	4	(13.0)	3.5	(5.2)	25%	釉) オリーブ黄5Y6/3 露胎) にぶい橙7.5YR7/3~灰黄2.5Y7/2
53	図14 図版70	磁器(染付) 碗	1区 C9i11	5	(12.0)	残4.6		20%	内) 明オリーブ灰2.5GY7/1 外) 明オリーブ灰5GY7/1
54	図14 図版70	陶器 甕(口縁)	1区 C9i11	5	(39.6)	残7.3		15%	内・断) 橙2.5YR6/6 外) にぶい赤褐2.5YR5/4
55	図14 図版70	磁器 碗	1区 C9i11	5	(11.0)	残4.5		口縁25%	内・外) 灰白5GY8/1 断) 灰白10Y8/1
56	図14 図版70	弥生土器 広口壺	1区 C9i10	6 下層	(13.4)	残4.0		口縁25%	内・外) 橙7.5YR7/6 断) 灰白2.5Y8/1
57	図14 図版70	弥生土器 鉢?	1区 C9i10	6 6層		残3.8	(3.2)	底部65% 体部40%	内) 橙5YR7/8 外) 黄橙7.5YR8/8 灰白2.5Y7/1
58	図14 図版70	弥生土器 甕?	1区 C9i11	11		残3.0	(4.6)	底部100%	内) にぶい黄橙10YR7/4 外) 橙5YR7/6 断) 灰白10YR8/2
59	図14 図版70	ミニチュア土器 鉢	1区 C9i11	11		残3.8	2.4	底部100 全体60%	内) 橙5YR6/6 外) 橙7.5YR7/6 断) 灰白10YR7/1
60	図14 図版70	弥生土器 高坏(脚柱)	1区 C9i11	11		残7.3		脚柱100%	全体) 浅黄2.5Y8/3~8/4
61	図15 図版70	ミニチュア土器	2区 C8m23	谷 上層	3.9	5.9	2.0	90%	内・外) 橙5YR7/6~6/6 断) 橙5YR6/6
62	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8m19	3層		残5.3		30%	内・外) 浅黄橙7.5YR8/6 断) 灰N5/
63	図15 図版70	土師器 高坏	2区 C8i17~k17	4層	(14.7)	残7.5		20%	内) 淡黄2.5Y8/3 外) 浅黄橙10YR8/3 断) 淡黄2.5Y8/3
64	図15 図版70	弥生土器 高坏(脚部)	2区 C8m23	4層		残6.5		30%以下	内・外) 橙7.5YR7/6~6/6 断) 橙7.5Y6/6
65	図15 図版70	弥生土器 鉢	2区 C8m25	4層		残3.4	(3.8)	底部80%	内) 橙7.5YR7/6 外・断) 黄橙7.5YR7/8
66	図15 図版70	弥生土器 鉢	2区 C8m19~119	4層		残3.3	3.6	5%以下	内・外) にぶい黄橙10YR7/4 断) にぶい橙7.5YR7/4
67	図15 図版70	土師器 坏	2区 C8n22	4層	10.9	2.8	8.2	65%	内) 浅黄橙7.5Y8/6 外・断) 橙7.5YR7/6
68	図15 図版70	弥生土器 高坏	2区 C8m22	トレンチ2		残6.1	(11.3)	脚部50%	全体) にぶい橙7.5YR6/4
69	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8m22	トレンチ2		残6.9		30%以下	全体) にぶい褐7.5YR5/3~5/4 外・断一部) 灰N6/
70	図15 図版70	弥生土器 高坏(坏部)	2区 C8m22	トレンチ2	20.0	残4.9		口縁80%	全体) 橙7.5YR6/6
71	図15 図版70	弥生土器 高坏	2区	セクション 8-1層		残6.7	(11.5)	30%	全体) 橙7.5YR7/6~浅黄橙7.5YR8/6
72	図15 図版70	弥生土器 高坏(脚部)	2区 C8m22	トレンチ3		残9.4		脚柱100%	内・断) 橙7.5YR6/6 外) 橙5YR7/8~6/8
73	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8m25	1 2層		残4.8	5.5	底部90%	内) 橙7.5YR7/6 外) 橙5YR7/6~6/6 断) 橙7.5YR7/6~6/6
74	図15 図版70	焙烙	2区 C8n25	1	(19.0)	残6.9		口縁15%	内) 橙5YR7/6 外・断) にぶい橙5YR7/3
75	図15 図版70	青磁 碗	2区 C8n24	38		残4.5		5%以下	釉) オリーブ灰10Y5/2 露胎) にぶい橙7.5YR7/4
76	図15 図版70	弥生土器 甕(底部)	2区 C8i20	202		残3.5	4.0	底部100%	内) 浅黄橙7.5YR8/4 外) 黄橙7.5YR7/8 断) 浅黄橙7.5YR8/4 黄灰2.5Y6/1

註

*1 引用・参考文献 1

*2 本報告では、紀南を現在の西牟婁郡及び東牟婁郡、紀中を現在の有田郡及び田辺市龍神村を含む日高郡の範囲としている。

*3 引用・参考文献 2

*4 引用・参考文献 2

*5 環境省による。田辺市斎田崎と西牟婁郡白浜町番所ノ鼻を結ぶ線及び陸岸により囲まれた海域を指す。本報告書にいう「田辺湾」はこの海域をいう。

*6 引用・参考文献 4

*7 石材の加工方法、技法については文献 19 による。

*8 例えば、安宅氏の水軍力を頼みとする等があげられる。

*9 註 2

*10 引用・参考文献 9

*11 実際の身分を反映するかという点については、明確となっていない。

*12 引用・参考文献 11

*13 海岸線の例であるが、福岡県大和町には各時期の築堤上に家屋が建てられる同様の景観がみられる。

*14 引用・参考文献 20,21

*15 引用・参考文献 22

*16 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」

*17 引用・参考文献 17

*18 広久手 C3 号窯出土例に類似し、O-53 期、11 世紀以降の時期とみられる。引用・参考文献 16,18

*19 台石の上に供膳具を据えて行うといった祭祀は群馬県前橋市山王廃寺跡例が挙げられる。

*20 計測値に欠損部分を補正した数値

*21 引用・参考文献 12

*22 洛北での出土例に同様の釉が掛けられる硬質のものが知られているが、このうち平高台のものは石作、本山窯跡に例がある。引用・参考文献 13

*23 引用・参考文献 14

*24 引用・参考文献 15

引用・参考文献

1. 大垣俊一 2002「田辺湾周辺の地質、地形と海洋生物」Argonauta7 関西海洋生物談話会
2. 和歌山県史 考古資料
3. 田辺市史 第 1 巻
4. 田辺市史 第 4 巻
5. 平尾政幸 2001「平安京の石製銚具とその生産」『研究紀要 第 7 号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
6. 上富田文化財教室シリーズ
7. 上富田町史編さん委員会編『上富田町史 史料編下』上富田町 1992
8. 『銚帯をめぐる諸問題』
9. 田中 2002 「腰帯具の変遷と諸問題」『銚帯をめぐる諸問題』

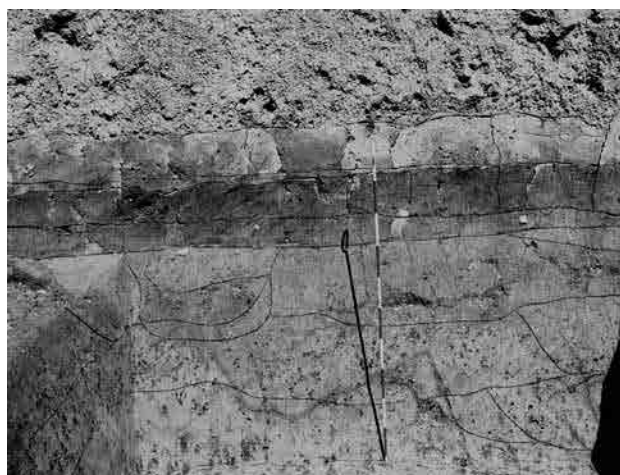
10. 中川 2002「中国出土の腰帯具」『銚帯をめぐる諸問題』、田中 1990「律令時代の身分表象（Ⅰ）」
11. 『稲成遺跡』財団法人和歌山県文化財センター 1990
12. 『平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所 1966
13. 高橋照彦 2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」[『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東：古代の土器研究会 第7回シンポジウム 平安時代の緑釉陶器：生産地の様相を中心に』]
14. 高橋 潔 1999「27 梅ヶ畑祭祀遺跡」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
15. 『田殿尾中遺跡発掘調査報告書』有田川町教育委員会 2012
16. 『愛知県古窯跡群分布調査報告』愛知県教育委員会 1983
17. 近江俊秀 1995「Ⅱ各地の土器様相 近畿 紀伊」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995
18. 尾野善裕「第三章 古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」来姓古窯跡群 豊田市埋蔵文化財調査報告書 第31集』豊田市教育委員会 2008
19. 平尾政幸 2001「平安京の石製銚具とその生産」『研究紀要 第7号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
20. 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書 一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会 1984
21. 武内雅人『古代末期紀伊国の土器様相』考古学研究第33巻第1号
22. 『岡田・西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』岩出町教育委員会 1981
23. 『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1985
24. 『北野廃寺 発掘調査報告書』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983
25. 平尾政幸 2002「安京の石銚生産」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
26. 『片山遺跡C・D地点発掘調査概報』吉備町教育委員会 1981
27. 『天満1号墳（泣沢女の古墳）』吉備町教育委員会 1994
28. 『東郷遺跡 埋蔵文化財調査報告第3集』御坊市遺跡調査会 1987
29. 森田勉・横田賢次郎 1978『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館
30. 伊藤淳史「唐古遺跡出土の縄文ある弥生土器」史林第97巻第1号史学研究会 2014
31. 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』京都大学考古学研究会 1977
32. 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1962
33. 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所 1976
34. 『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ 兵部省地区の調査』奈良国立文化財研究所 2005
35. 『田能遺跡発掘調査報告』尼崎市教育委員会 1972
36. 『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1983
37. 『摂津加茂 関西大学文学部考古学研究紀要』関西大学 1968
38. 森本 晋 1983「喜志遺跡 80-3区の石器」『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅵ』
39. 『伊丹市史 第4巻』伊丹市 伊丹市史編纂専門委員会 1968
40. 『朝日遺跡 土器編・総論編』愛知県埋蔵文化財センター 1991
41. 『紀州古城館情報』2011年4月号



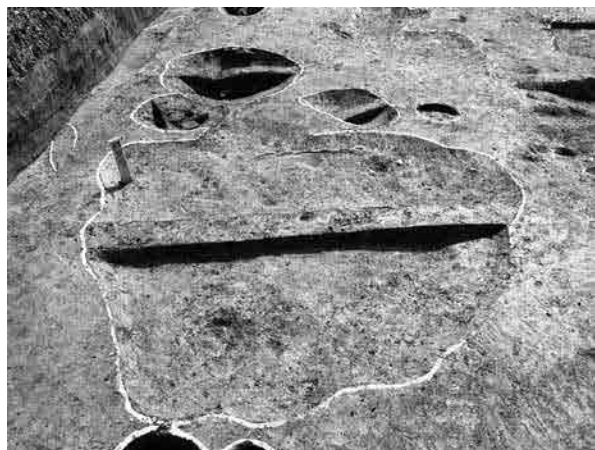
1.
第1次調査区及び
第2・3次調査地
(西から)



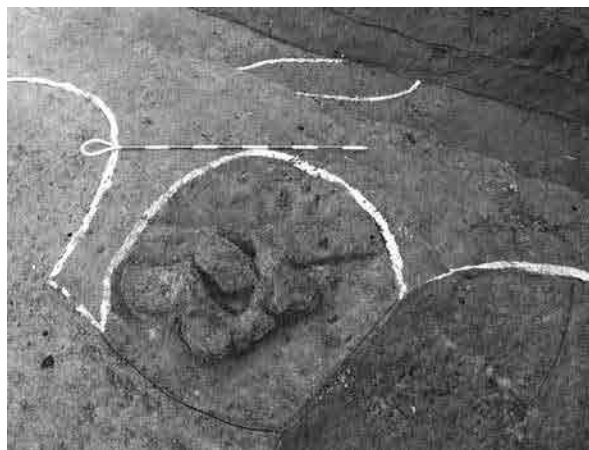
2.
第1次調査区完掘状況
(北から)



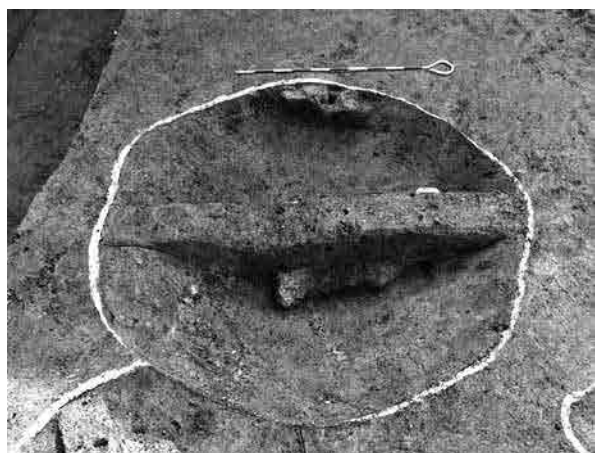
3.
調査区北東壁断割断面土層
(南南西から)



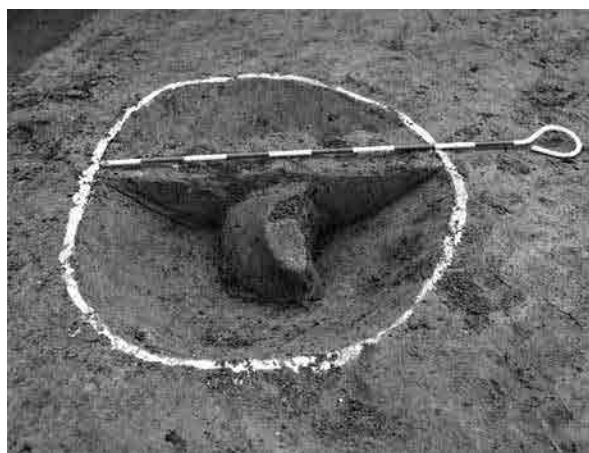
1. 1002 土坑 掘削状況 (西から)



2. 1003 土坑 掘削状況 (南南東から)



3. 1004 土坑 掘削状況 (西から)



4. 1006 土坑 掘削状況 (西から)

5. 遺構掘削状況 (西北西から)





1. 調査区 2-2、2-3 全景
(上空から・上が東)



2. 調査区 2-1 遺構 2001 (東から)



3. 調査区 2-1 調査区西端 第 4 層検出状況
(東から)



4. 調査区 2-1 遺物 (1) 出土状況
(東から)



1



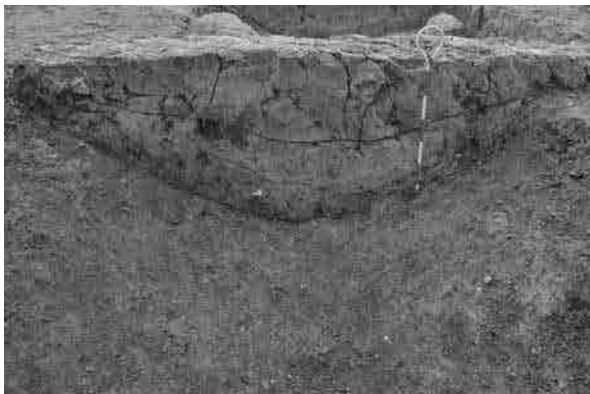
2



3



4



5

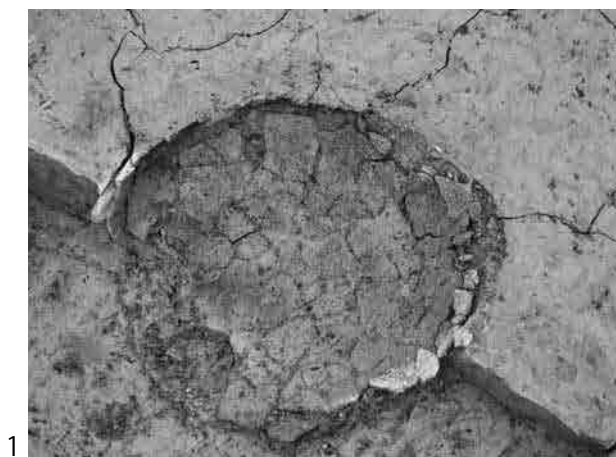


6

1. 調査区 2-1 遺構 2001 土層
(北から)
2. 調査区 2-1 遺構 2001 完掘状況
(北から)
3. 調査区 2-1 調査区東壁土層
(北西から)
4. 調査区 2-1 遺構 2002
掘削状況及び土層 (北西から)
5. 調査区 2-1 遺構 2002 a-a' 土層
(東から)
6. 調査区 2-1 遺構 2002 b-b' 土層
(西から)



7. 調査区 2-2 遺構 2254 検出状況 (南西から)



1



2



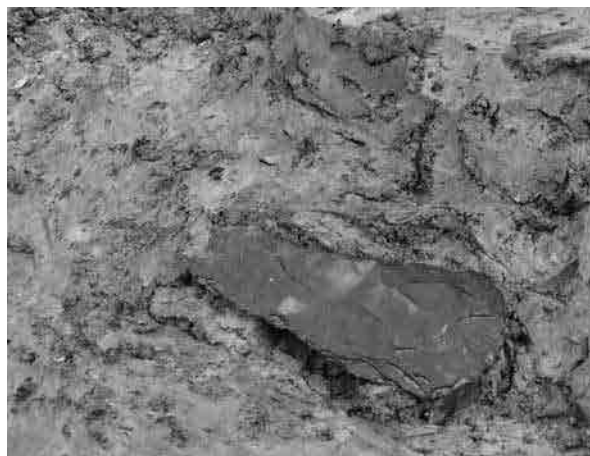
3



4



5



6

1. 調査区 2-2 遺構 2254
土器内埋土除去後の状況 (南西から)
2. 調査区 2-2 遺構 2254 完掘状況 (南西から)
3. 調査区 2-2 遺構 2258 土層 (東から)
4. 調査区 2-2 遺構 2289 完掘状況 (北から)
5. 調査区 2-2 遺構 2191 検出状況 (東から)
6. 調査区 2-2 遺物 (28) 出土状況 (東から)
7. 調査区 2-2 調査区中央部分遺構半裁状況
(南から)





1. 調査区 2-2・2-3 全景 (南から)



2. 調査区 2-3 調査区西壁土層 (北東から)



3. 調査区 2-3 遺構完掘状況 (東から)

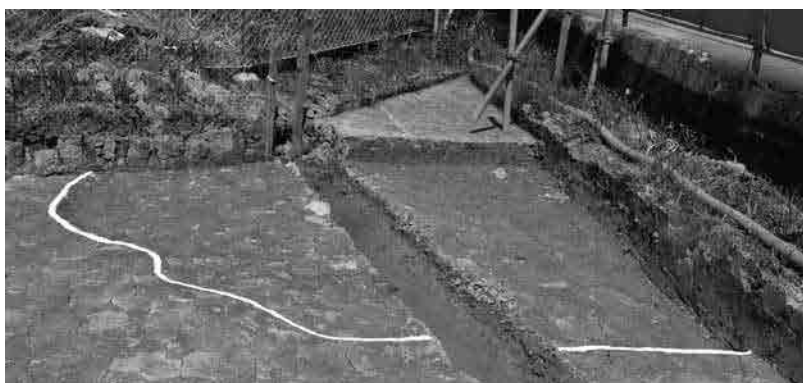


4. 調査区 2-2・2-3 航空写真 (西から)

1. 調査区 3-1 全景
(南から)



2. 調査区 3-1
調査区北壁土層
(南から)



4

3. 調査区 3-1 遺構 3001
完掘状況 (南から)



4. 調査区 3-1 遺構 3001
遺物 (37) 出土状況
(西から)

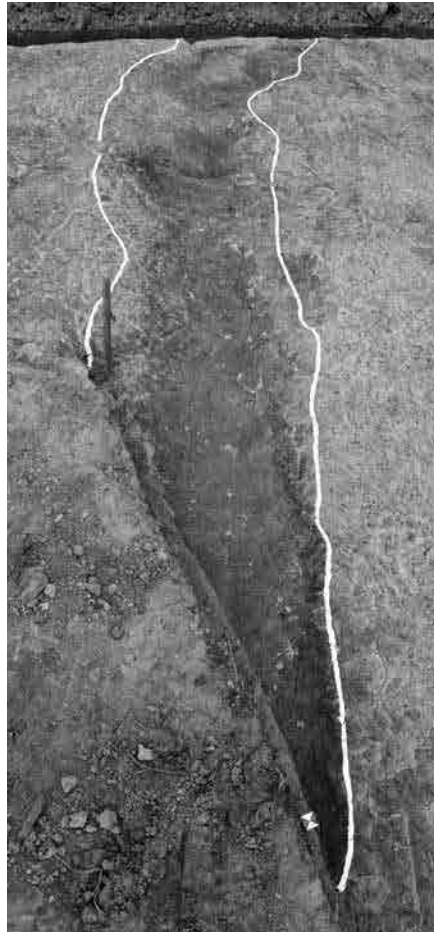


5. 調査区 3-1 遺構 3002
遺物出土状況 (北から)

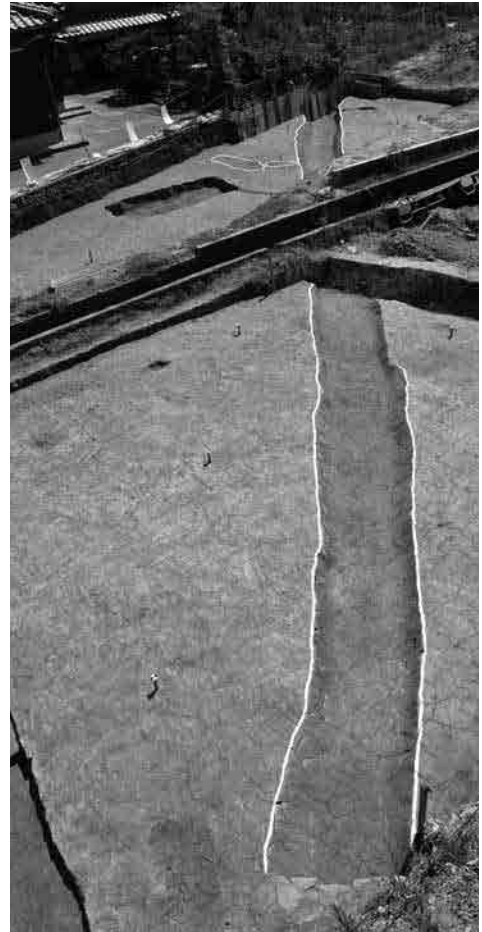


6. 調査区 3-1 遺構 3002
土層 a-a' (南から)

1. 調査区 3-1
遺構 3002 完掘状況
(南から)



2. 調査区 3-2,3
遺構 3008 完掘状況
(南から)



3. 調査区 3-2 遺構 3008 土層 a-a' (南西から)



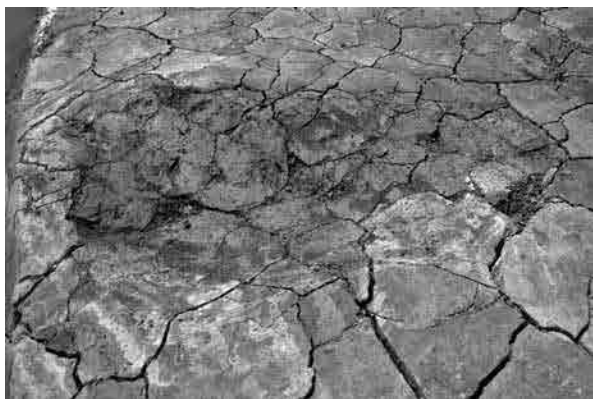
4. 調査区 3-3 遺構 3008 土層 b-b' (北東から)



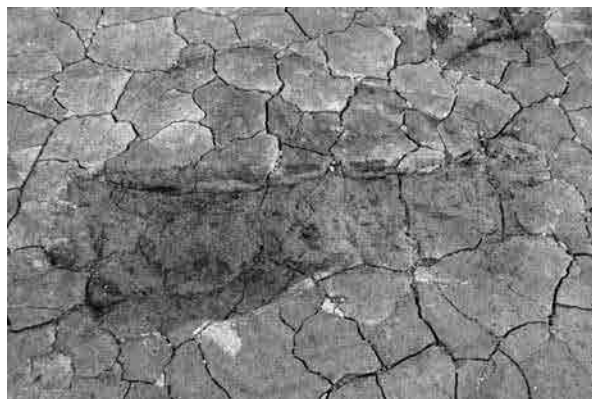
5. 調査区 3-2 遺構 3079 土層 (東から)



6. 調査区 3-2 遺構 3079・3080 検出状況
(西から)



1. 調査区 3-2 遺構 3079 完掘状況 (東から)



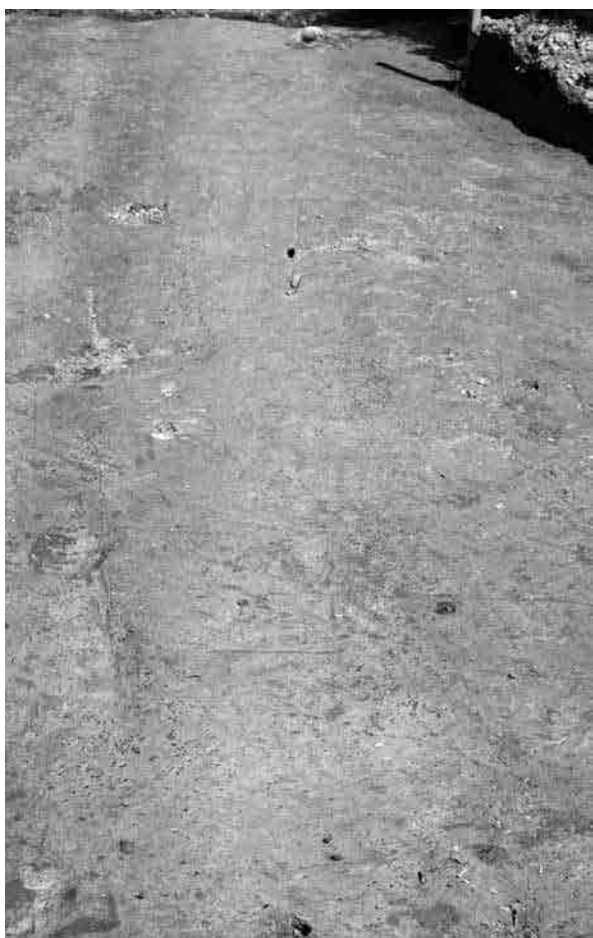
2. 調査区 3-2 遺構 3080 土層 (西から)



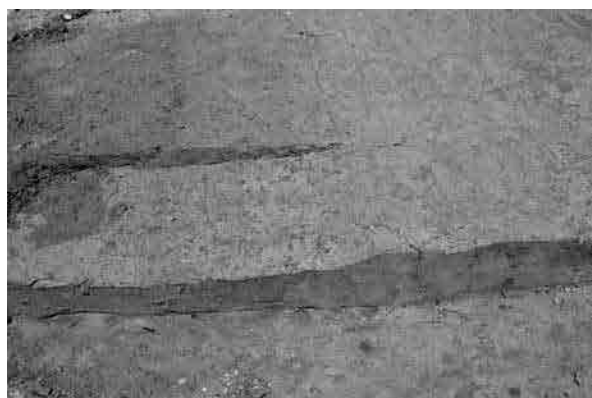
3. 調査区 3-2 遺構 3080 完掘状況 (西から)



4. 調査区 3-2 調査区北壁土層 (西から)

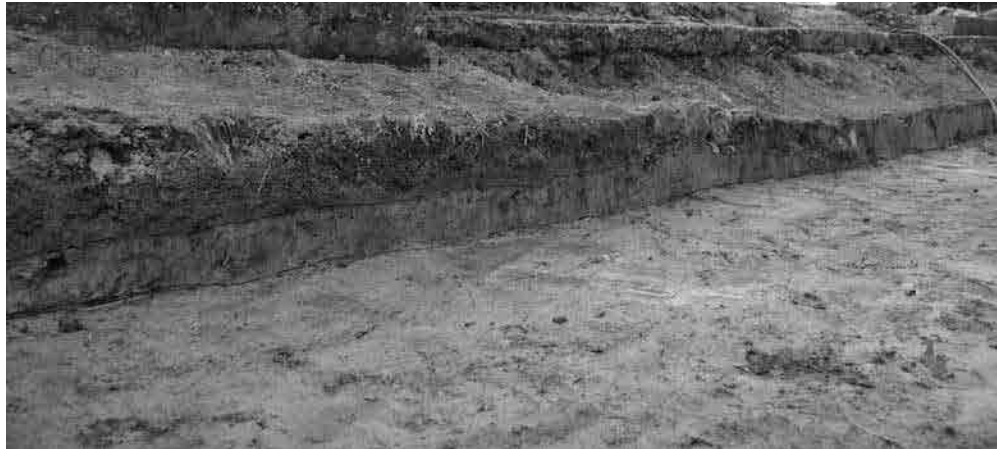


5. 調査区 3-2 畦畔状遺構検出状況 (南東から)

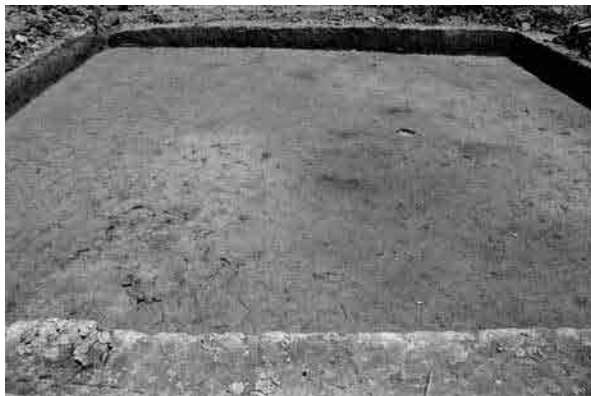


6. 調査区 3-2 畦畔状遺構断割及び土層 (南東から)

1.
調査区 3-3
調査区北壁土層
(南から)



2.
調査区 3-4
調査区西壁土層
(北東から)



3. 調査区 3-4 遺構検出状況 (南から)



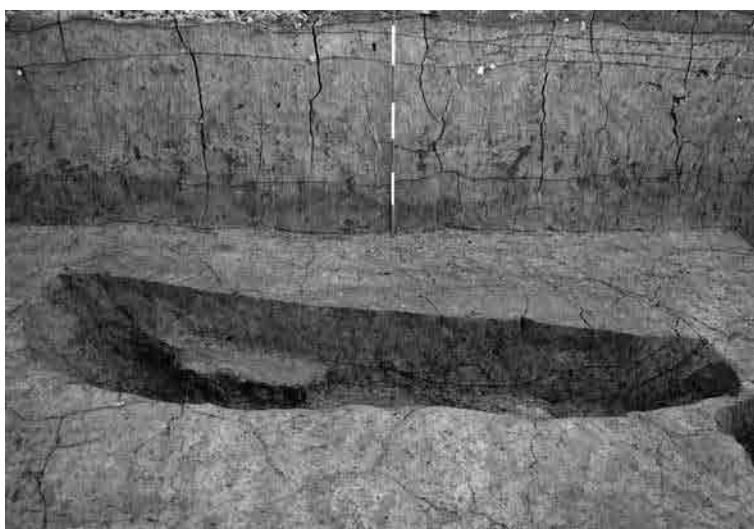
4. 調査区 3-5-2 調査区南壁土層 (北から)



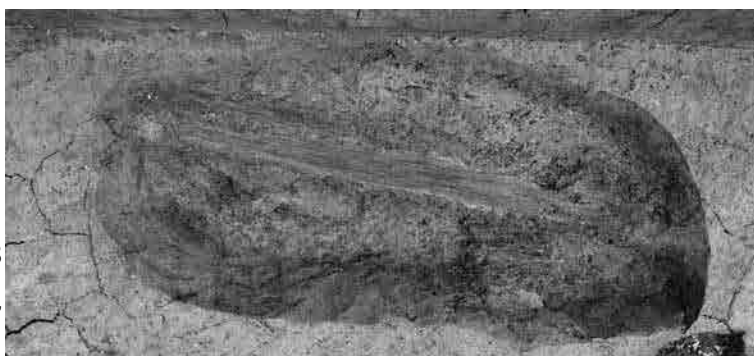
5. 調査区 3-5-2 畦畔状遺構土層 (北から)



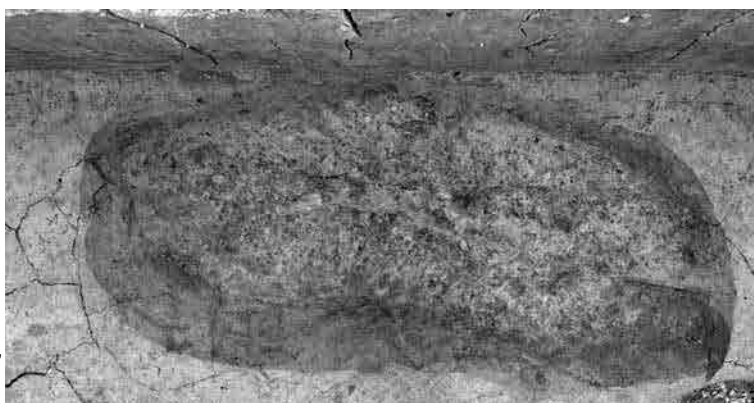
3.
調査区 3-5-2 調査区東壁土層
(南西から)



2.
調査区 3-5-2 遺構 3068 土層
(西から)



3.
調査区 3-5-2 遺構 3068
樹皮検出状況
(西から)



4.
調査区 3-5-2 遺構 3068 完掘状況
(西から)



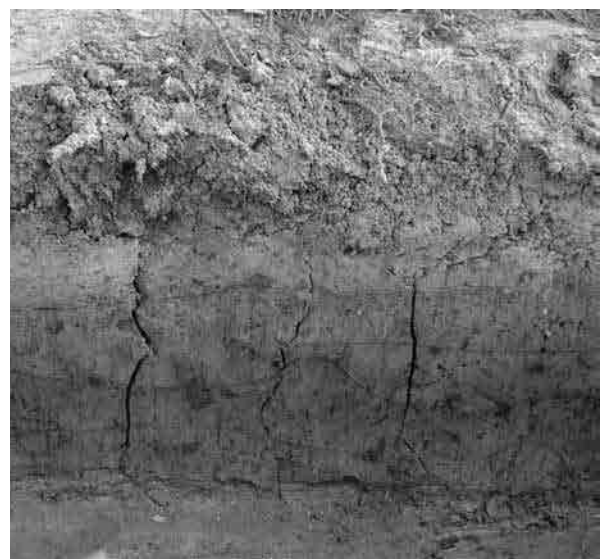
1. 調査区 3-7-1
調査区南壁土層
(北西から)

2. 調査区 3-5-1
調査区東壁土層
(南西から)



3.
調査区 3-5-1 遺構検出状況
(南から)

4.
調査区 3-7-4 遺構検出状況
(東から)



5. 調査区 3-7-3 遺構検出状況 (東から)

6. 調査区 3-7-4 第3a層堆積状況 (北から)

2

4

1. 調査地航空写真
(北から)



2. 調査地遠景
(北から)



3. 堀切遠景
(北西から)





1.
堀切完掘状況及び
セクションベルト1
(北から)



2.
堀切完掘状況及び
セクションベルト2
(北から)



3.
表土堆積状況及び地山



1.
調査区（尾根北側）
完掘状況（北から）



2.
調査範囲北側平坦部
完掘状況（南東から）



3.
調査範囲北側平坦部
完掘状況（西から）

1.
調査区南側
及び丘陵尾根
(西から)



2.
調査区全景 (西から)



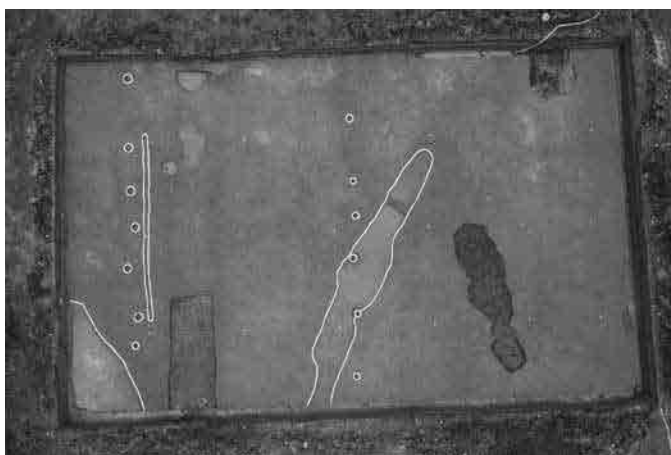
3.
調査区全景 (北から)



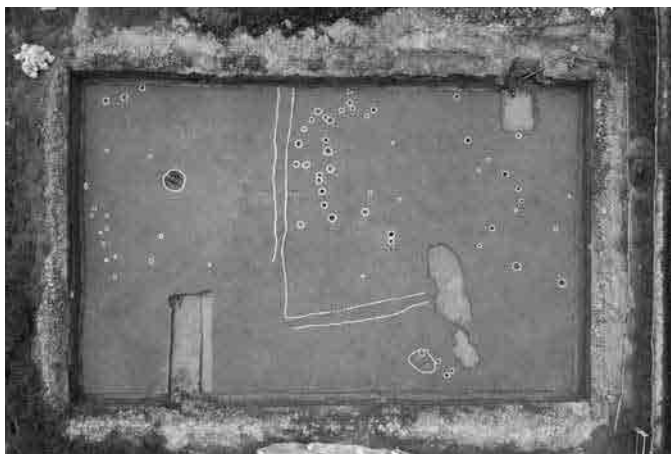
1. 調査地及び調査区1全景
(南西から)



2. 調査区1第1遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)



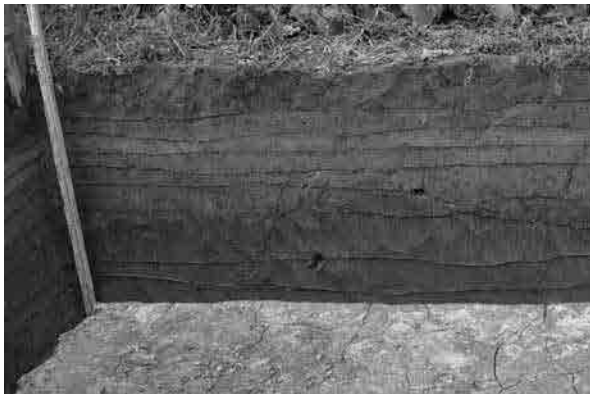
3. 調査区1第2遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)



4. 調査区2第1遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)



1.
調査区 2 第 2 遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)



2. 調査区 1 調査区南壁土層 (北から)



3. 調査区 1 畦畔状遺構土層 (西から)



4. 調査区 2 調査区西壁土層 (東から)



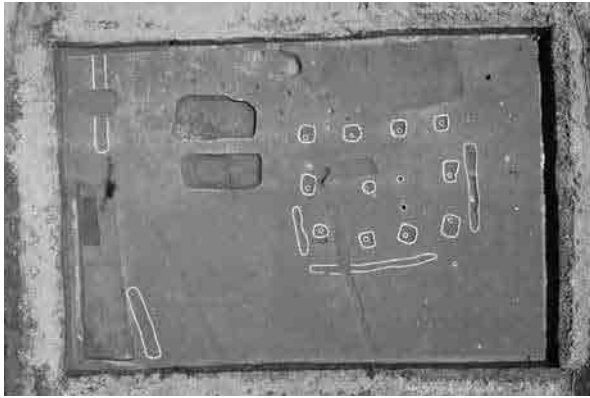
5. 調査区 2001 遺構 1 土層 (北から)



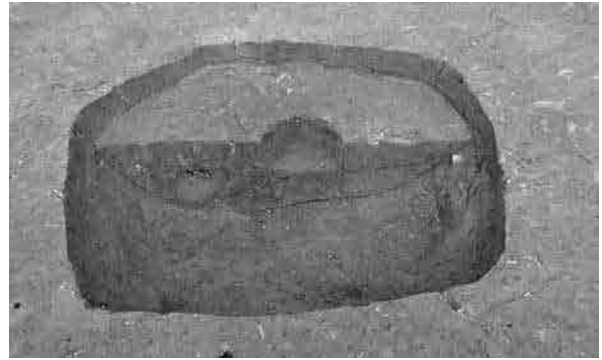
6. 調査区 2 調査区北壁土層 (南から)



7. 調査区 2 調査区北壁土層 (南から)



1. 調査区 4 第 1 遺構面遺構検出状況
(上空から・上が東)



4



2. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 1 (北から)



5

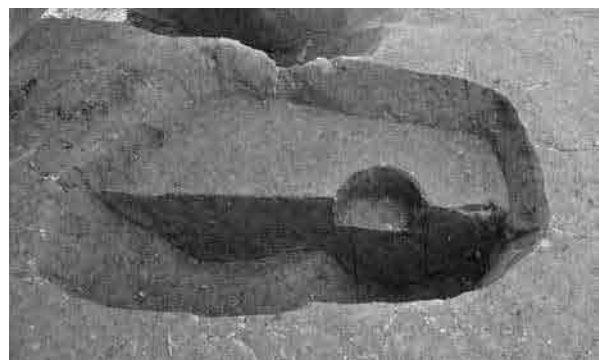


3. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 2 (東から)



6

4. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 3 (東から)



7

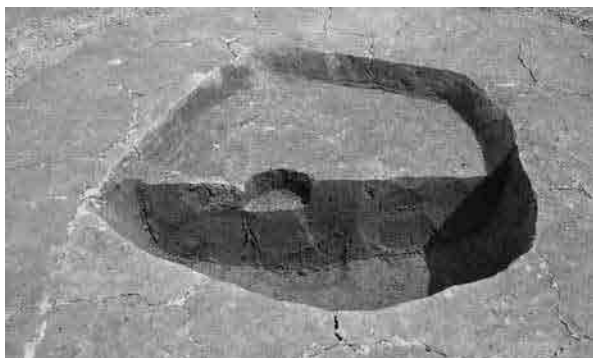
5. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 4 (東から)

6. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 5 (北から)

7. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 6 (南から)



8. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 7 (西から)



1. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 8 (西から)



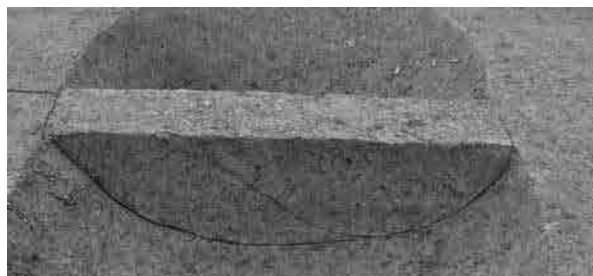
2. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 9 (西から)



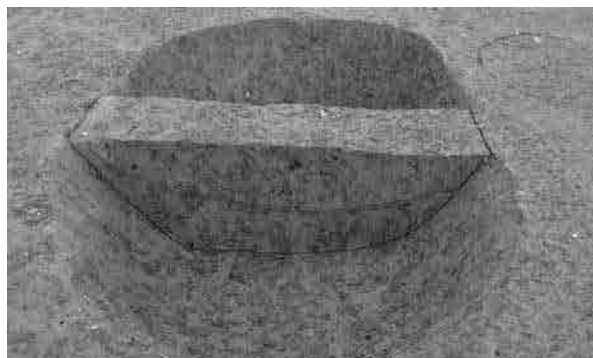
3. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 10 (西から)



4. 調査区 4 掘立柱建物 1 柱穴 11 (東から)



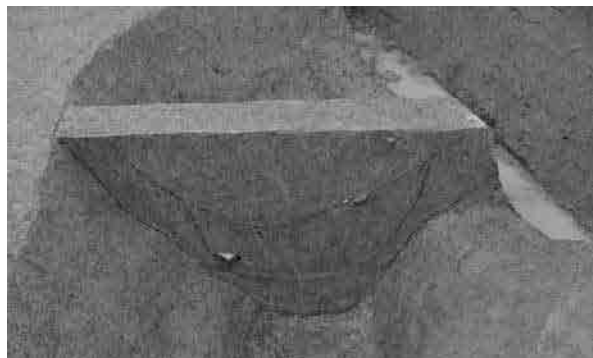
5. 調査区 4 遺構 4020 土層 (西から)



6. 調査区 4 遺構 4022 (南から)



7. 調査区 4 遺構 4026 (西から)



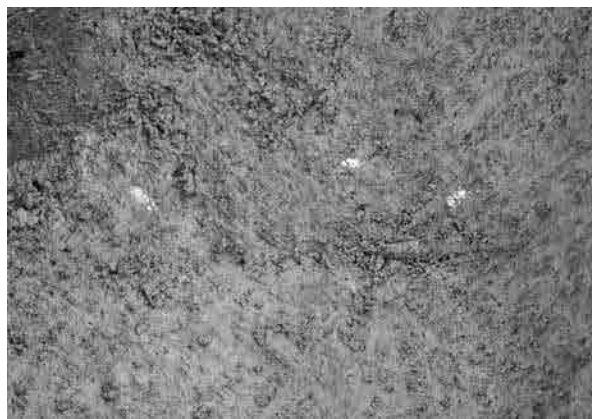
8. 調査区 4 遺構 4029 (南から)



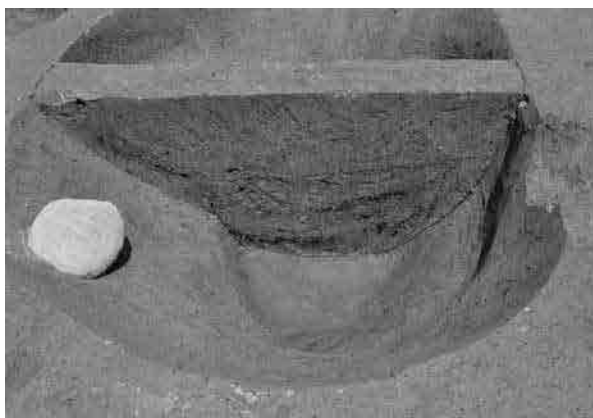
9. 調査区 4 遺構 4030 (南西から)



1. 調査区 4 遺構 4031 土層 (東から)



5. 調査区 4 遺構 4032 骨片出土状況



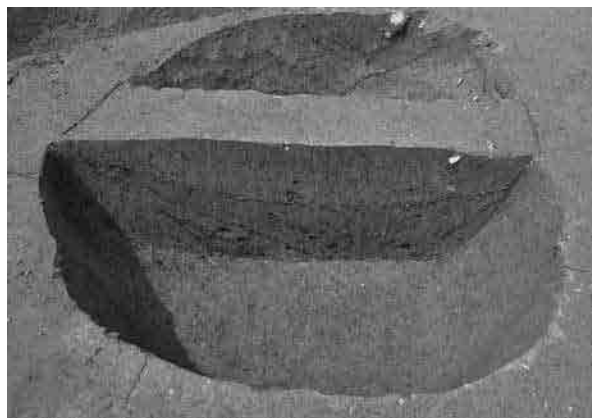
2. 調査区 4 遺構 4032 土層 (南から)



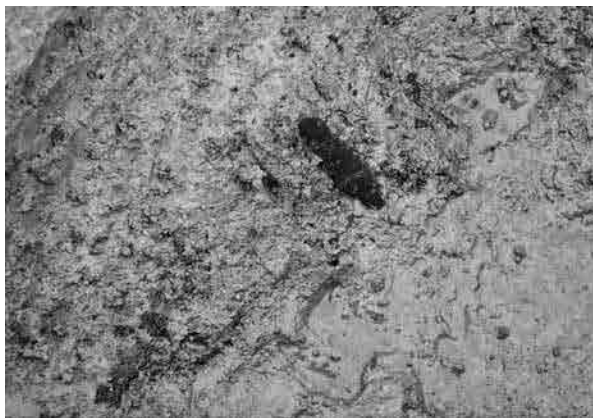
6. 調査区 4 遺構 4047 土層 (北から)



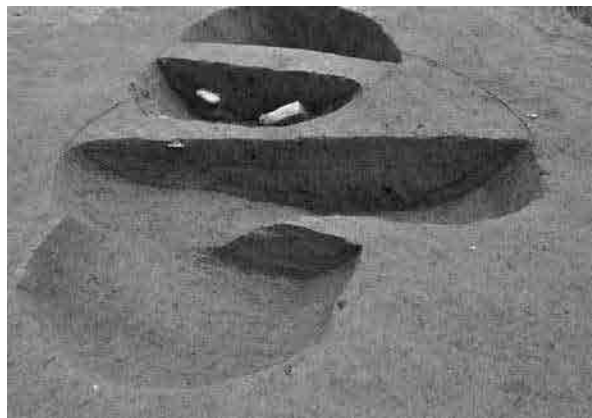
3. 調査区 4 遺構 4032 完掘状況 (東から)



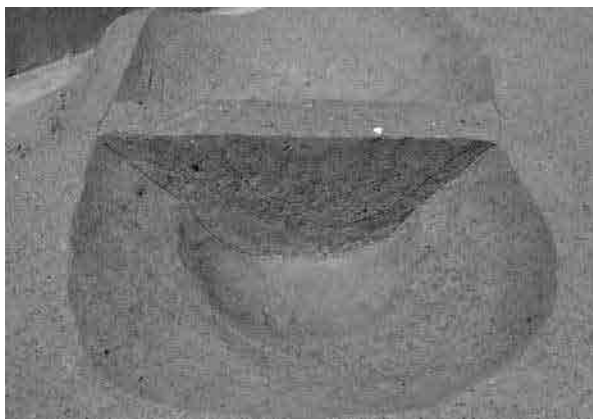
7. 調査区 4 遺構 4049 土層 (西から)



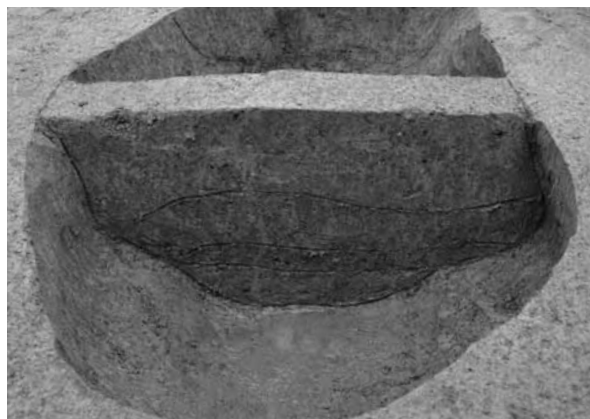
4. 調査区 4 遺構 4032 遺物 (116)



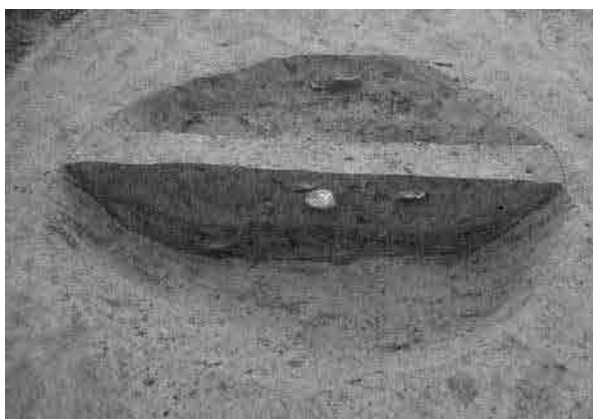
8. 調査区 4 遺構 4050 土層 (南から)



1. 調査区 4 遺構 4053 土層 (東から)



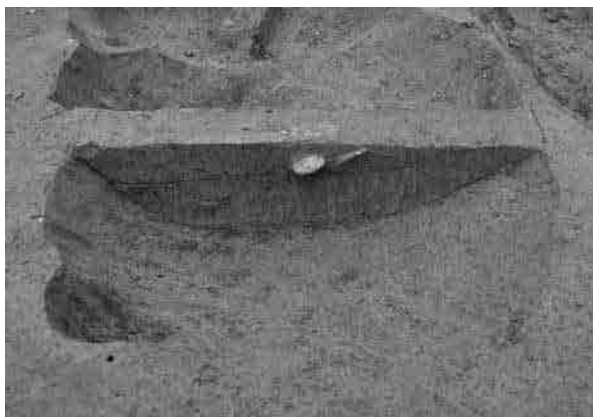
2. 調査区 4 遺構 4058 土層 (東から)



3. 調査区 4 遺構 4059 土層 (西から)



4. 調査区 4 遺構 4060 土層 (南から)



5. 調査区 4 遺構 4062 土層 (東から)



6. 調査区 4 遺構 4063 土層 (西から)



7. 調査区 4 遺構 4070



8. 調査区 4 遺構 4073 検出状況 (北から)



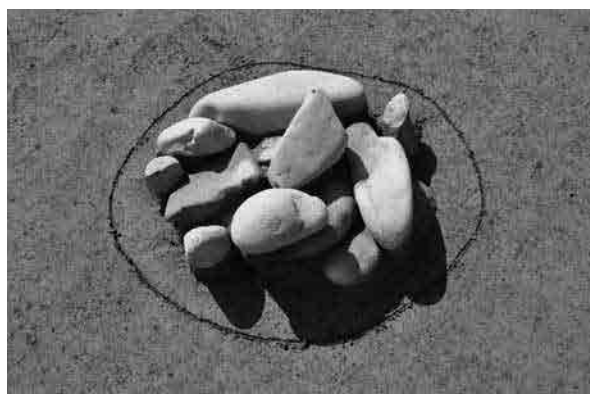
1. 調査区4 遺構4074土層(南から)



2. 調査区4 遺構4077土層(北東から)



3. 調査区4 遺構4077礫出土状況(北西から)



4. 調査区4 遺構4090検出状況(北から)

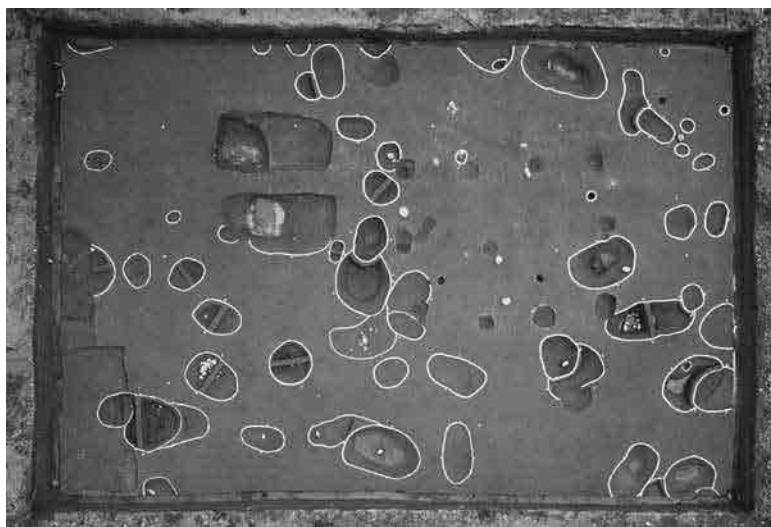


5. 調査区4 遺構4091(西から)



6. 調査区4 遺構4093検出状況(南東から)

7. 調査区4 第2遺構面
(上空から・上が北)





1. 調査区5 井戸 5001 (北西から)



2. 調査区5 井戸 5001 断割 (北から)



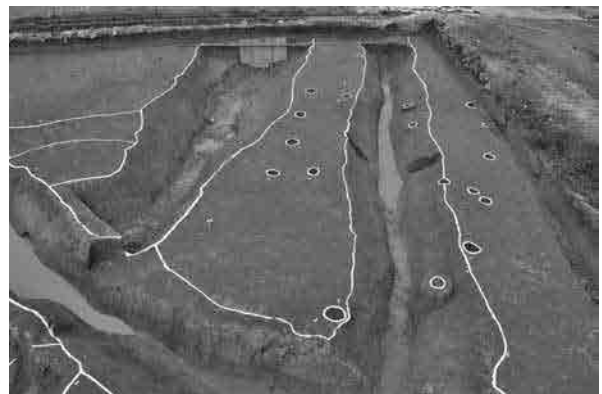
3.
第2次調査
調査地全景
(西から)



4. 調査区3 第1遺構面 (西から)



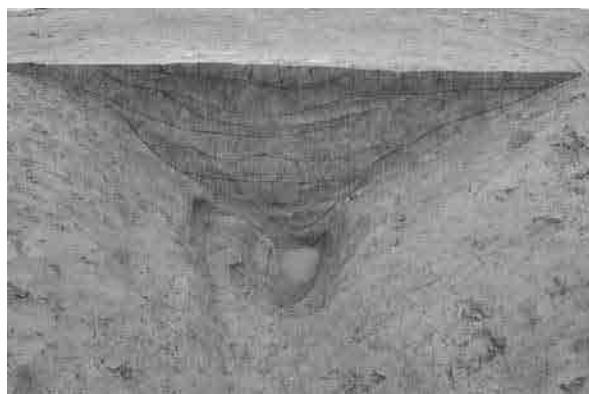
5. 調査区3 全景 (南東から)



6. 調査区3 (南から)



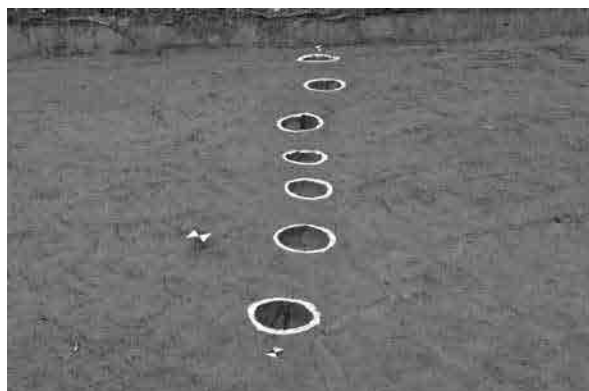
1. 調査区 3 遺構 3001 土層 (南東から)



2. 調査区 3 遺構 3002 土層 (南から)



3. 調査区 3 遺構 3003 土層 (東から)



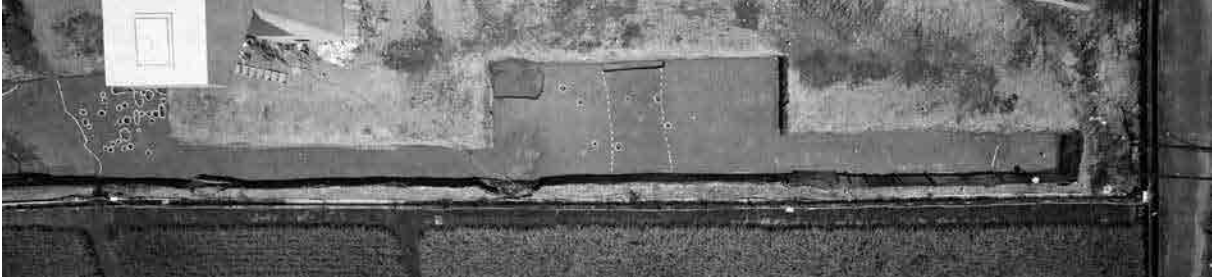
4. 調査区 3 (南西から)

5. 調査区 3 遺構 3006 セクション 3 土層 (南から)



6. 調査区 3・6 全景 (上空から・上が北)





1. 調査区6 第2遺構面 (南から)



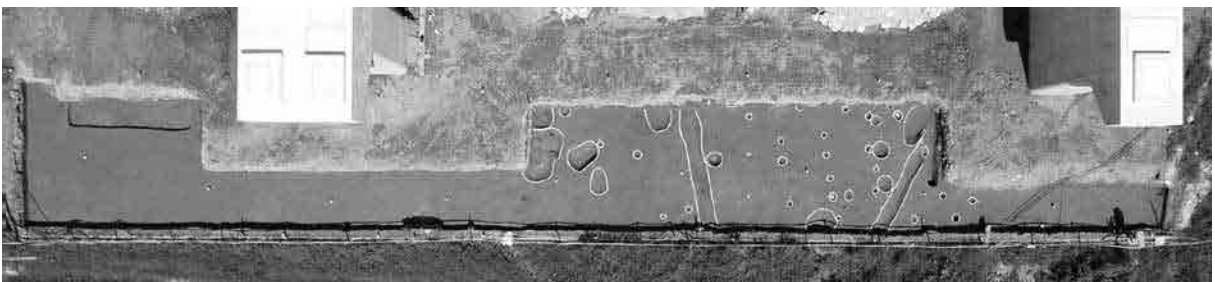
2. 調査区6 第2遺構面 (北から)



3. 調査区6 第2遺構面 (西から)



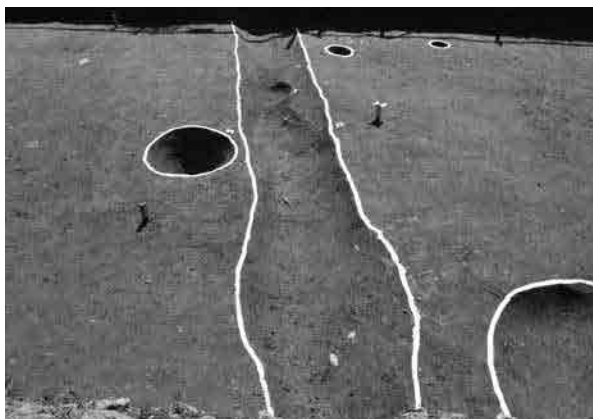
4. 調査区8 全景
(上空から・上が北)



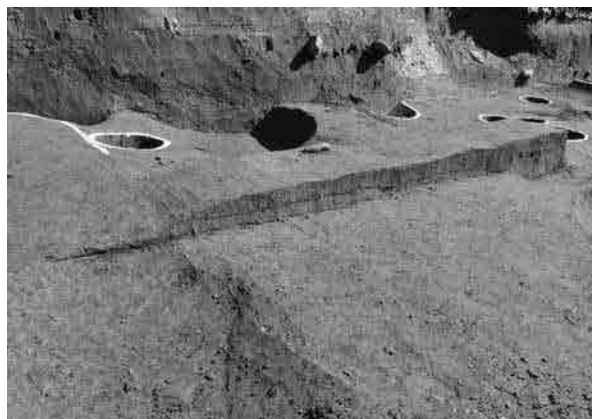
5. 調査区7 第1遺構面検出遺構 (上空から・上が北)



6. 調査区7 第2遺構面検出遺構 (上空から・上が北)



1. 調査区7 遺構 7013 完掘状況 (北から)



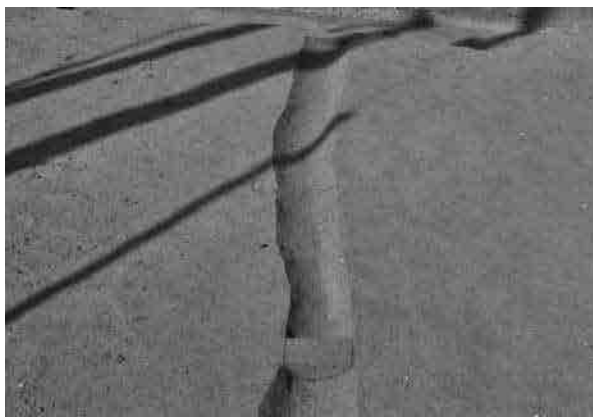
5. 調査区7 遺構 7102 土層 (南から)



2. 調査区7 遺構 7004i 遺物出土状況 (北から)



6. 調査区7 (北から)



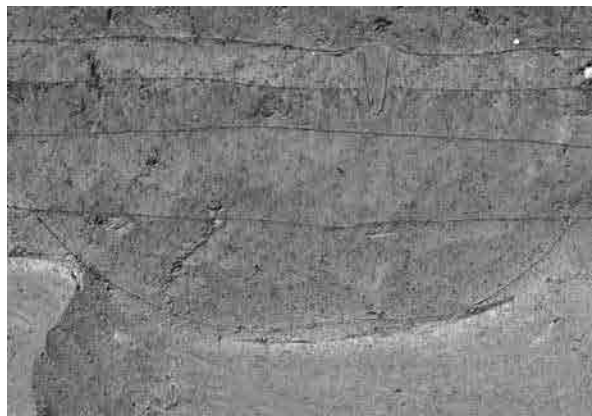
3. 調査区7 遺構 7059 完掘状況 (南から)



7. 調査区7 遺構 7005 遺物出土状況 (南から)



4. 調査区7 遺構 7102 完掘状況 (北から)



8. 調査区7 遺構 3001 土層 (南東から)



1. 調査地航空写真（東から）



2. 調査区1全景（上空から・上が西）



3. 調査区2及び3全景（上空から・上が西）



1. 調査区 1 全景 (北西から)



2. 調査区 1
調査区西壁及び丘陵頂部現況
(東から)



3. 調査区 1
調査区東壁土層 C-C'
(南から)



1. 調査区 1 調査区東壁土層北半 (西から)



2. 調査区 1 調査区東壁土層南半 (西から)



3. 調査区 1
セクションベルト 1 A-A'
南端北壁 (北西から)



4. 調査区 3
セクションベルト 1 A-A'
北壁 (北西から)

5. 調査区 2
セクションベルト F-F'
(北から)



6. 調査区 2
土層断割部分 E-E'
(南から)





1. 調査区 2
セクションベルト 2
D-D' 南面 (南から)



3. 調査区 2
調査区東壁北半土層
(西から)



2. 調査区 2
第 3 層・遺構検出状況
(南から)

1. 調査区 2
竪穴建物 1 検出状況
(西から)



2. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド検出状況
(北東から)



3. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド内土層
(北東から)



4. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド内土層
(南東から)



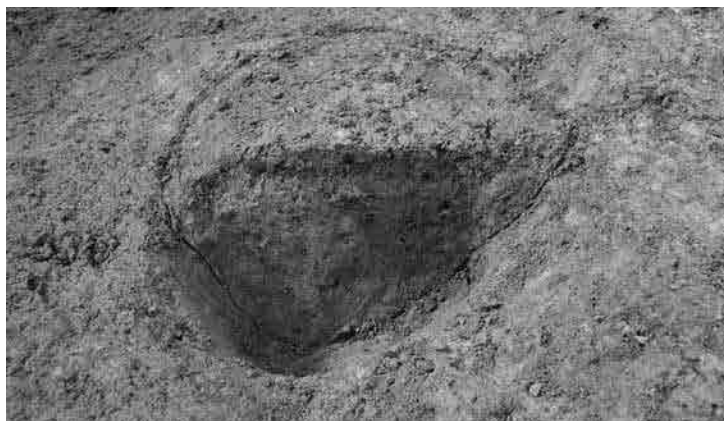
1. 調査区 2
竪穴建物 1 カマドセクションベルト土層
(南東から)



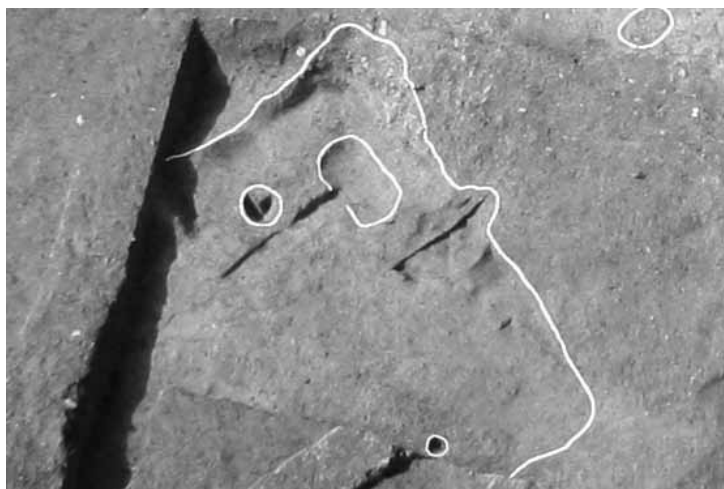
2. 調査区 2
竪穴建物 1
(南西から)



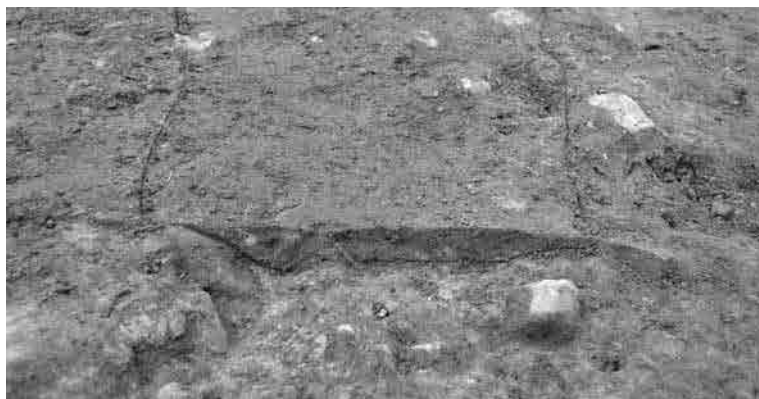
3. 調査区 2
竪穴建物 1 P 1 土層
(南東から)



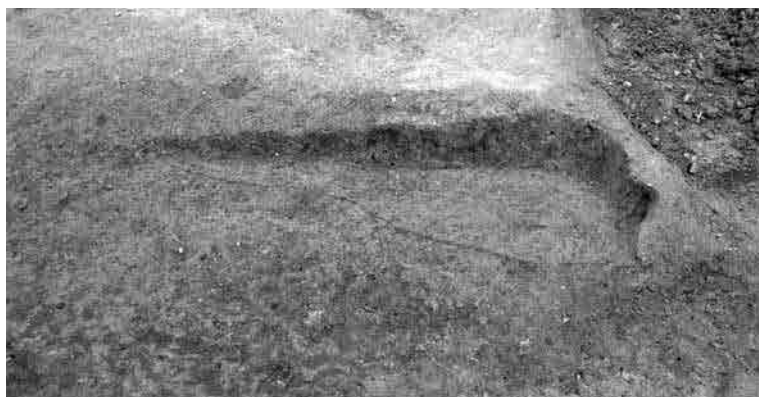
4. 調査区 2
竪穴建物 1 完掘状況
(北東から)



1. 調査区 2
溝状遺構 1 土層
(南から)



2. 調査区 2
竪穴建物 2 完掘状況
(南東から)



3. 調査区 2
竪穴建物 2 セクションベルト土層
(北東から)



4. 調査区 2
竪穴建物 2
P 1 土層
(南から)



5. 調査区 2
竪穴建物 2
P 2 完掘状況
(南から)





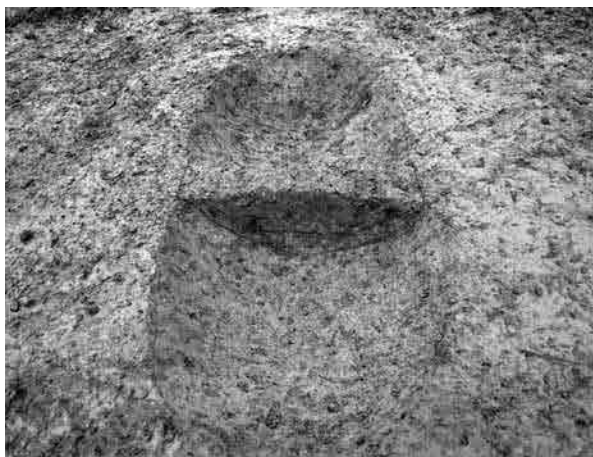
1. 調査区 3 掘立柱建物 1
(北東から)



2. 調査区 3
掘立柱建物 1
P1 土層及び遺物出土状況
(北西から)



3. 調査区 3
掘立柱建物 1
P4 土層
(北西から)



1. 調査区3 遺構18 土層
(北西から)



2. 調査区3 遺構18 完掘状況
(南東から)



3. 調査区3 遺構7 遺物出土状況
(北から)



4. 調査区3 完掘状況
(南から)



5. 調査区3 完掘状況
(北から)



6. 調査区3 地山地層露出箇所
(北から)



1. 調査区1・2 第1遺構面遺構検出状況（上空から・上が北）



2. 調査区1 第1遺構面 遺構検出状況（北から）



3. 調査区2 第1遺構面 遺構検出状況（西から）



1. 調査区1・2 第2遺構面遺構検出状況（南から）



2. 調査区1 第2遺構面 遺構検出状況（北から）



3. 調査区2 第2遺構面 遺構検出状況（北から）



1. 調査区1
北壁土層
(南から)



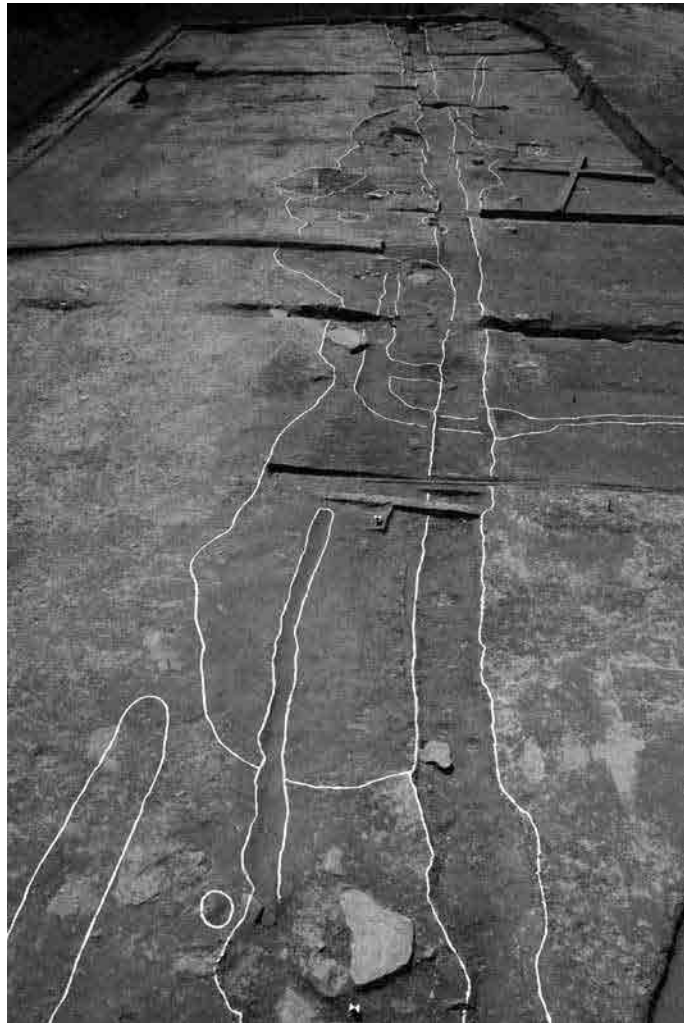
2. 調査区1
自然流路土層
(北から)



3. 調査区2
南壁土層
(北から)



1. 調査区1 航空写真（上空から・上が東）



2. 調査区1
遺構 101・104・111・116
（北から）

1.
調査区 1
セクションベルト A-A' 土層 (南西から)



2.
調査区 1
セクションベルト A-A' 土層 (南から)



3.
調査区 1
遺構 101 土層 (北から)



4.
調査区 1
遺構 104 壁面 第 3a,3b 層断面 (西から)



1.
調査区 1
遺構 101 遺物 (25) 出土状況 (南西から)



2.
調査区 1
遺構 101 遺物 (25) 出土状況 (北西から)



3.
調査区 1
遺構 108 土層 (北から)



4.
調査区 1
遺構 108 土層 (西から)





1. 調査区1 遺構109 遺物出土状況 (西から)



2



3



4



5

2. 調査区1 遺構109 遺物出土状況 (東から)

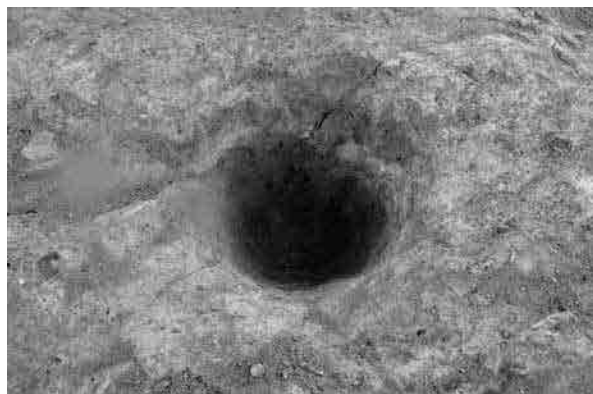
3. 調査区1 遺構109 遺物(58) 出土状況
(西から)

4. 調査区1 遺構109 遺物(79) 出土状況
(西から)

5. 調査区1 遺構109 遺物出土状況 (西から)

6. 調査区1 遺構109 遺物出土状況 (西から)





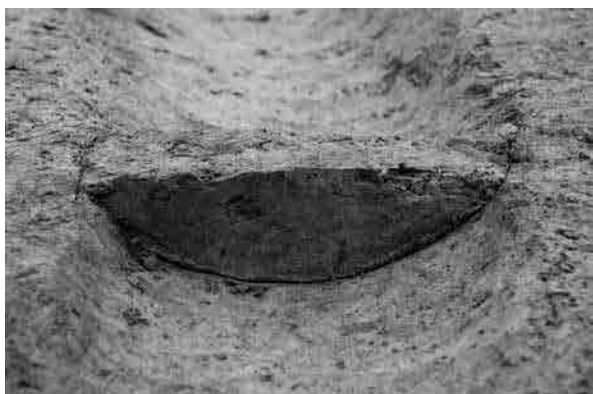
2

1. 調査区 1
遺構 137 完掘状況
(西から)

2. 調査区 1
遺構 139 完掘状況
(西から)



3. 調査区 1
遺構 109 完掘状況
(東から)



4. 調査区 1 遺構 111 土層 a-a' (北から)



5. 調査区 1 遺構 111 完掘状況 (南から)



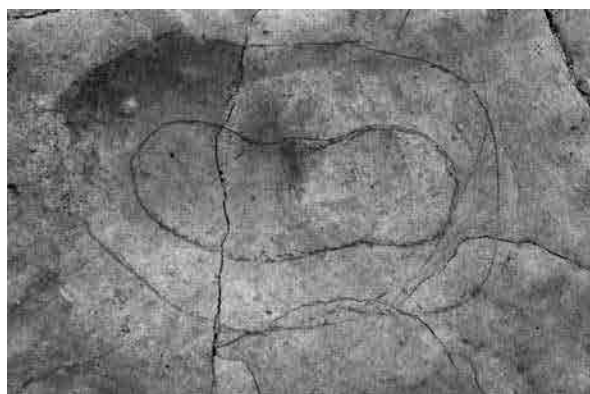
1. 調査区1 遺構 112 完掘状況 (西から)



2. 調査区1 遺構 111 土層 b-b' (南から)



3. 調査区1 遺構 117 完掘状況 (南東から)



4. 調査区1 遺構 119 完掘状況 (西から)



5. 調査区2 石垣 1 南端検出状況 (北西から)



6. 調査区2 遺構 228 完掘状況 (西から)



7. 調査区2 土層 B-B' (北から)



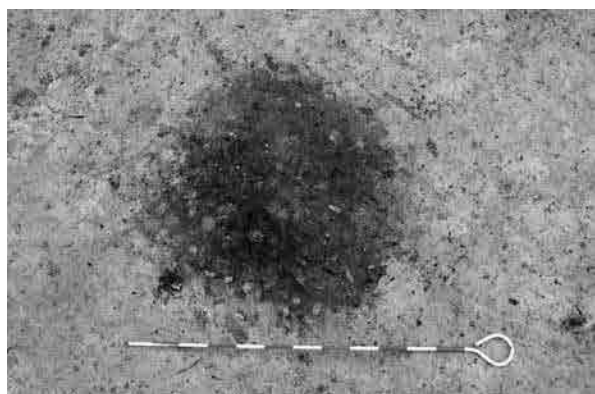
1.
調査区3 遠景
(西から)



2



3



4



5

2. 調査区3 遺構301 完掘状況 (西から)

3. 調査区3 遺構301 土層 (南西から)

4. 調査区3 遺構302 土層 (北から)

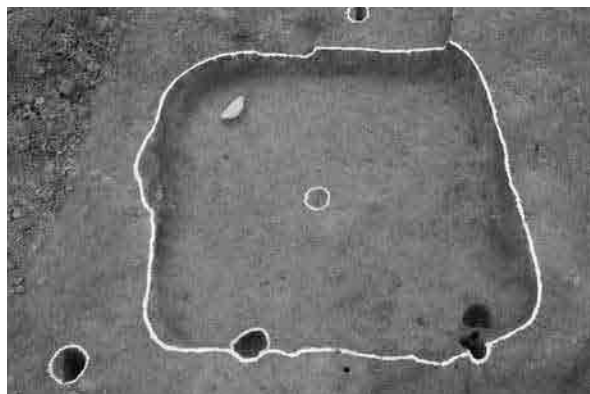
5. 調査区3 遺構303 土層 (北から)



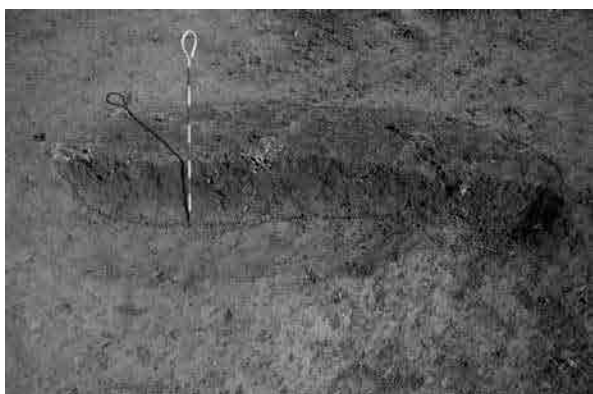
6. 調査区3 遺構381 土層 (南から)



1. 調査区3 土層 (西から)



2. 調査区3 遺構327 完掘状況 (西から)



3. 調査区3 遺構352 完掘状況 (西から)



4. 調査区3 遺構348 土層 (北から)



5. 調査区3 遺構366 検出状況 (南から)



6. 調査区3 遺構366 土層 (南から)



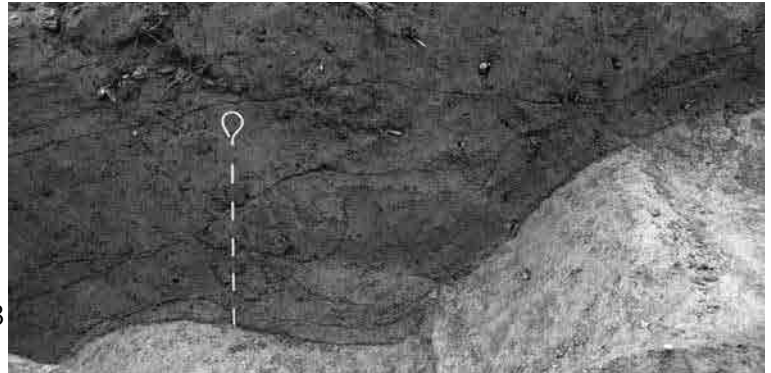
7. 調査区3
遺構366 遺物(154) 出土状況
(南から)



2

1. 調査区 3
遺構 358 検出状況 (西から)

2. 調査区 3
遺構 358 遺物 (152) 出土状況
(西から)



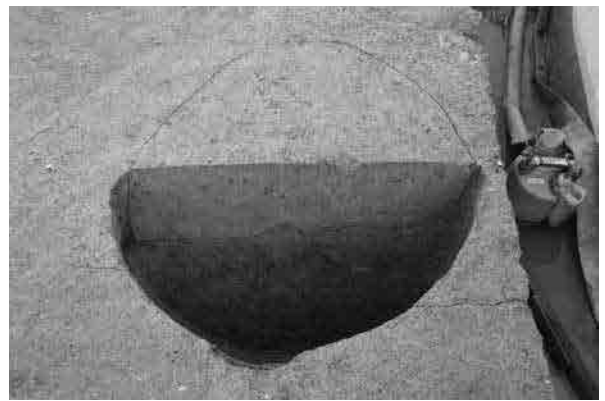
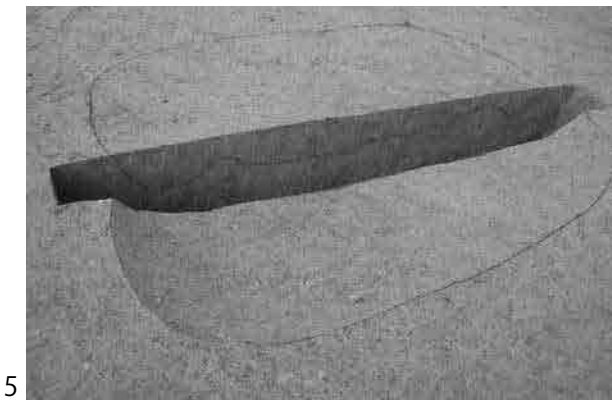
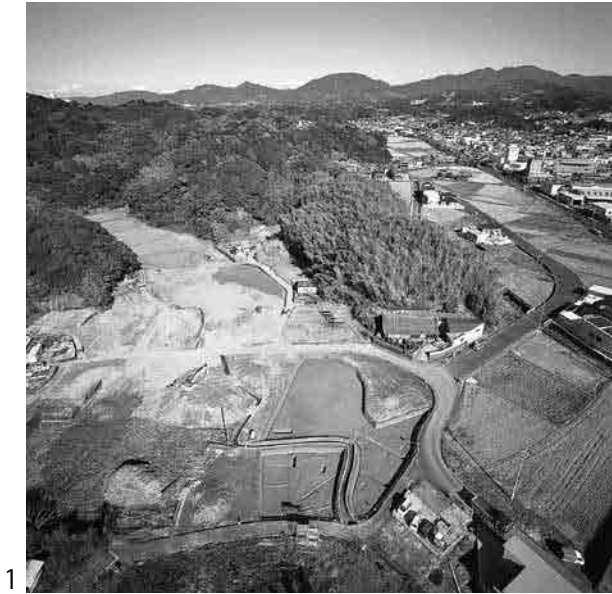
3. 調査区 3
土層 F-F' 南端部分 (東から)



4. 調査区 3
土層 E-E' (北から)

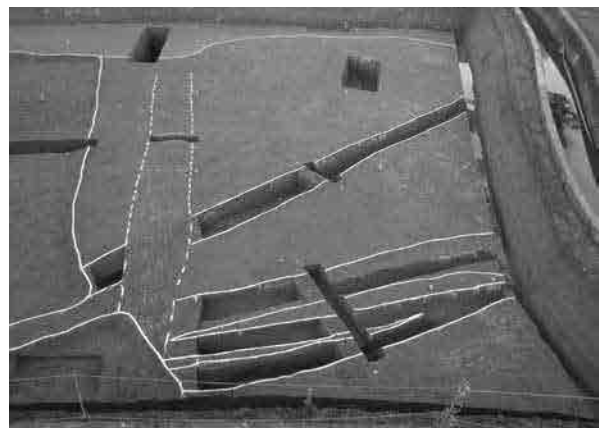


5. 調査区 3
調査区全景
(上空から・上が西)



- 1. 岩崎大泓遺跡 全景（南西から）
- 2. 岩崎大泓遺跡 全景（南西から）
- 3. 岩崎大泓遺跡 遺構 3 土層（南から）
- 4. 岩崎大泓遺跡 遺構 4 土層（南から）
- 5. 岩崎大泓遺跡 遺構 7 土層（南から）
- 6. 岩崎大泓遺跡 遺構 13 土層（西から）

- 7. 岩崎大泓遺跡 遺構 15、16、17（南から）





1. 岩崎大泓遺跡 遺構 15 土層 (北東から)



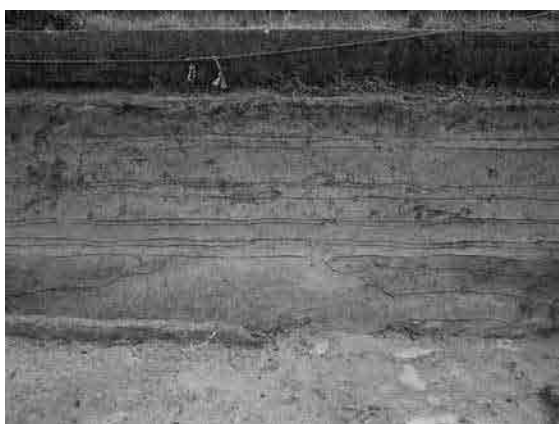
5. 岩崎大泓遺跡 西壁土層 (北東から)



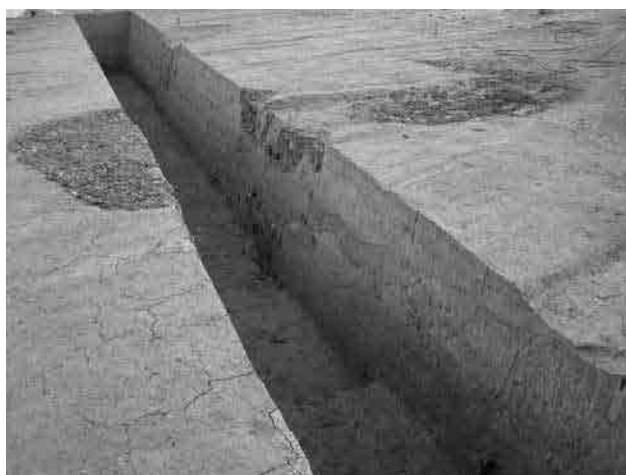
2. 岩崎大泓遺跡 遺構 15 (北東から)



6. 岩崎大泓遺跡 遺構 18 土層 (南東から)



3. 岩崎大泓遺跡 南壁土層 (北から)



7. 岩崎大泓遺跡 C トレンチ断割 (北から)



4. 岩崎大泓遺跡 西壁土層 (北東から)



1. 岩崎大泓Ⅱ遺跡 第1遺構面全景
(南西から)



2. 岩崎大泓Ⅱ遺跡 第2遺構面全景
(南西から)



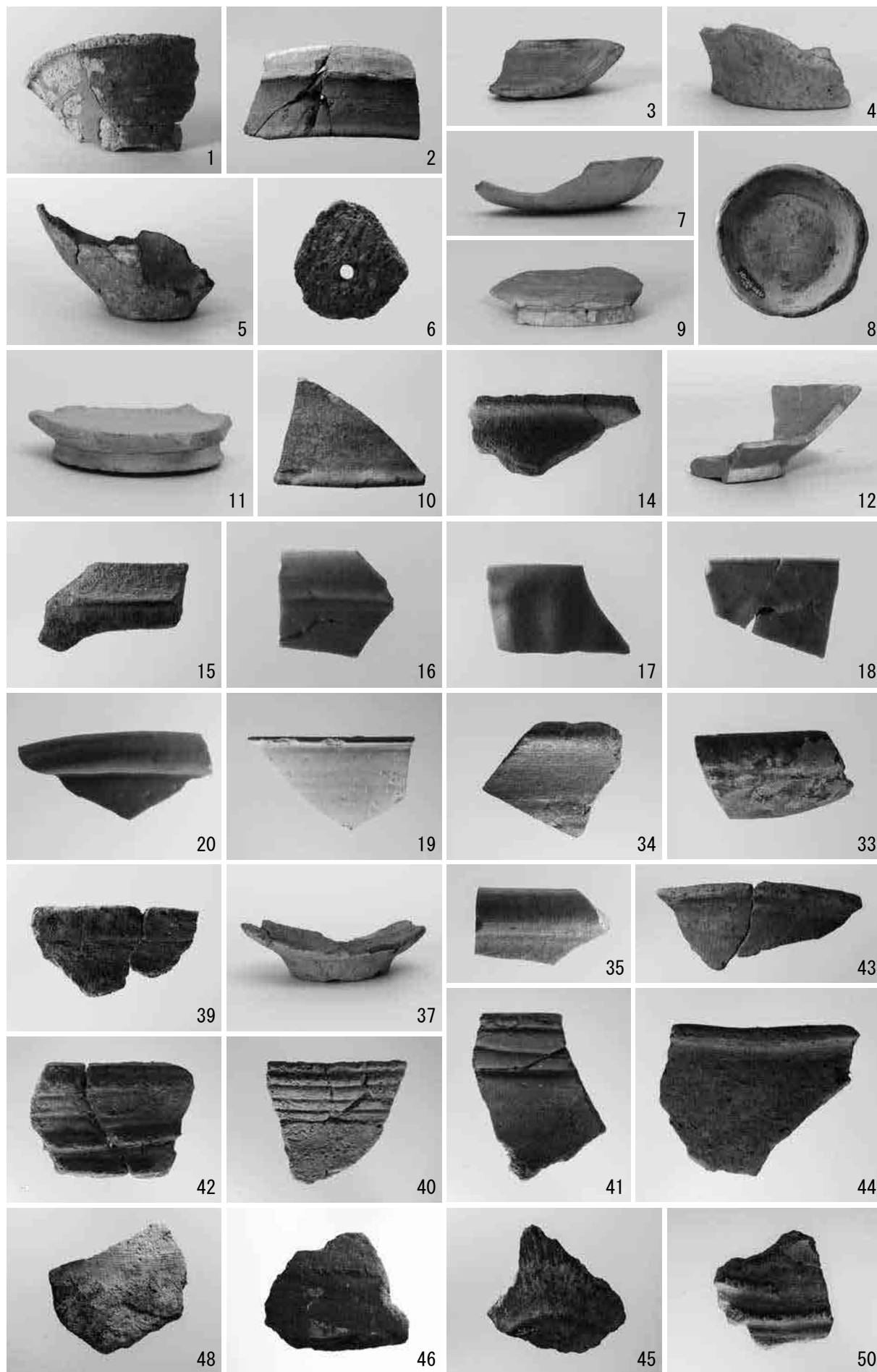
3. 岩崎大泓Ⅱ遺跡 落ち込み土層
(南西から)

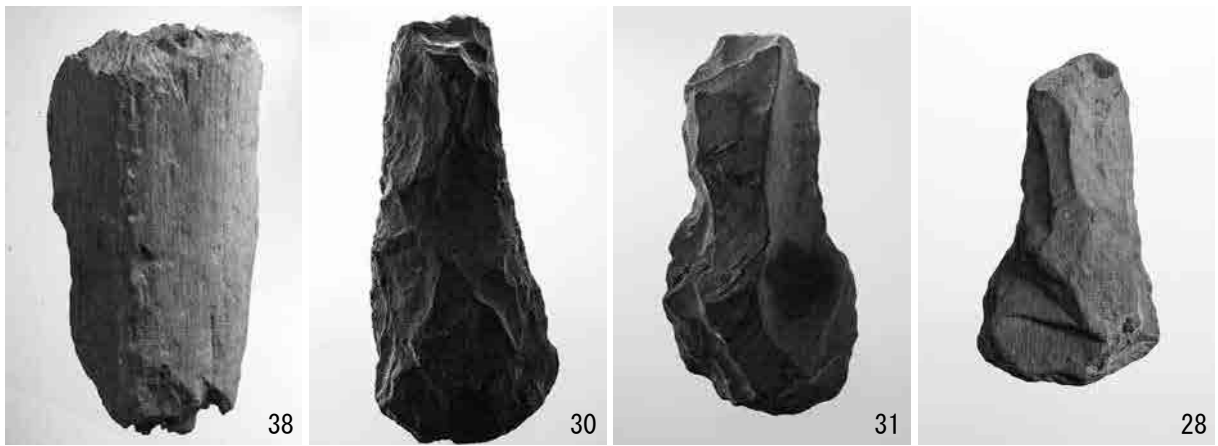
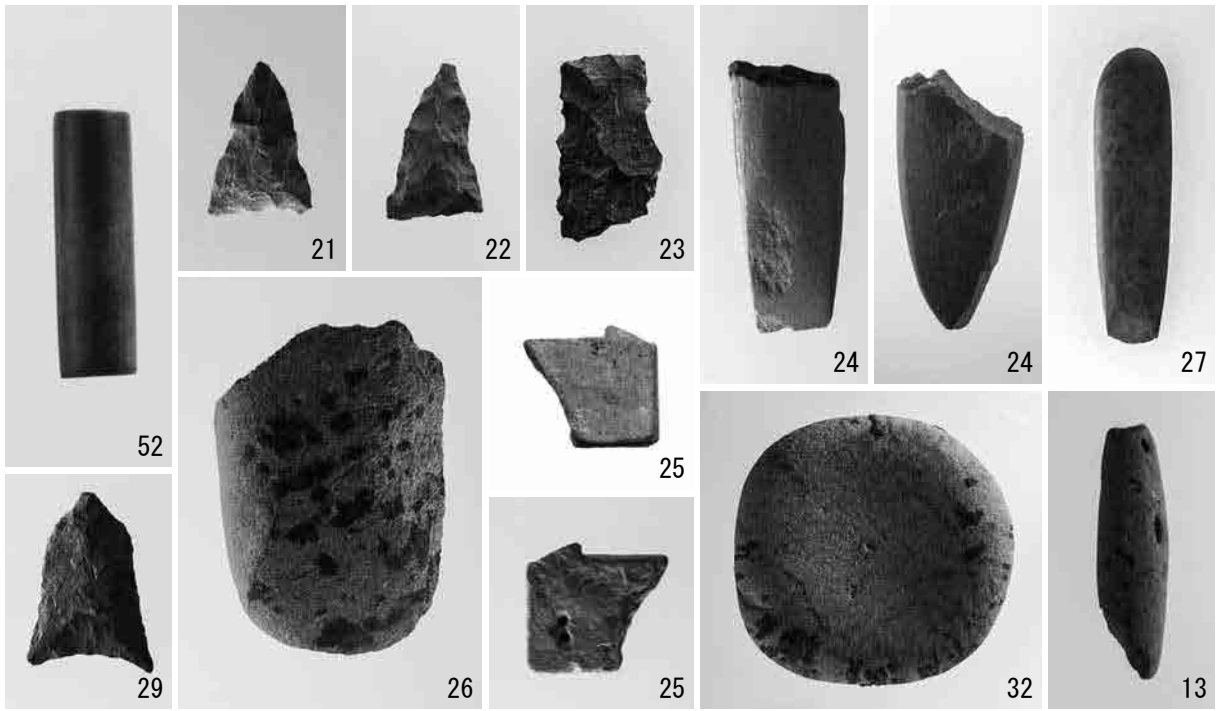


4. 岩崎大泓Ⅱ遺跡 調査区1遺構1
(北から)

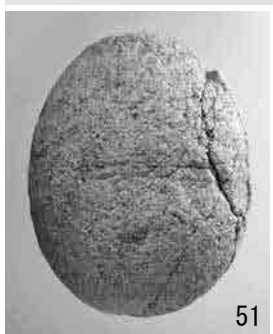


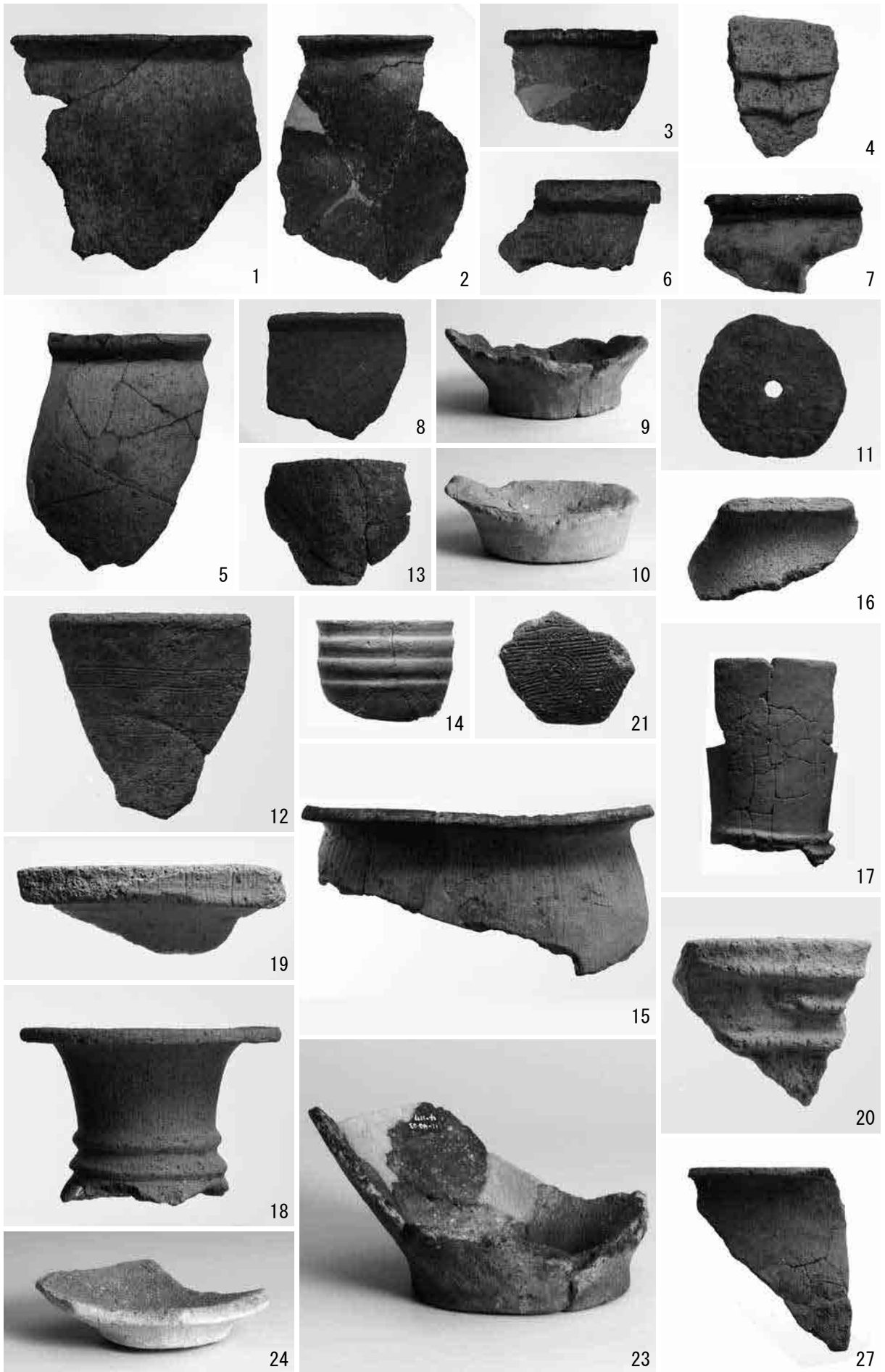
5. 岩崎大泓Ⅱ遺跡 調査区2
(北から)

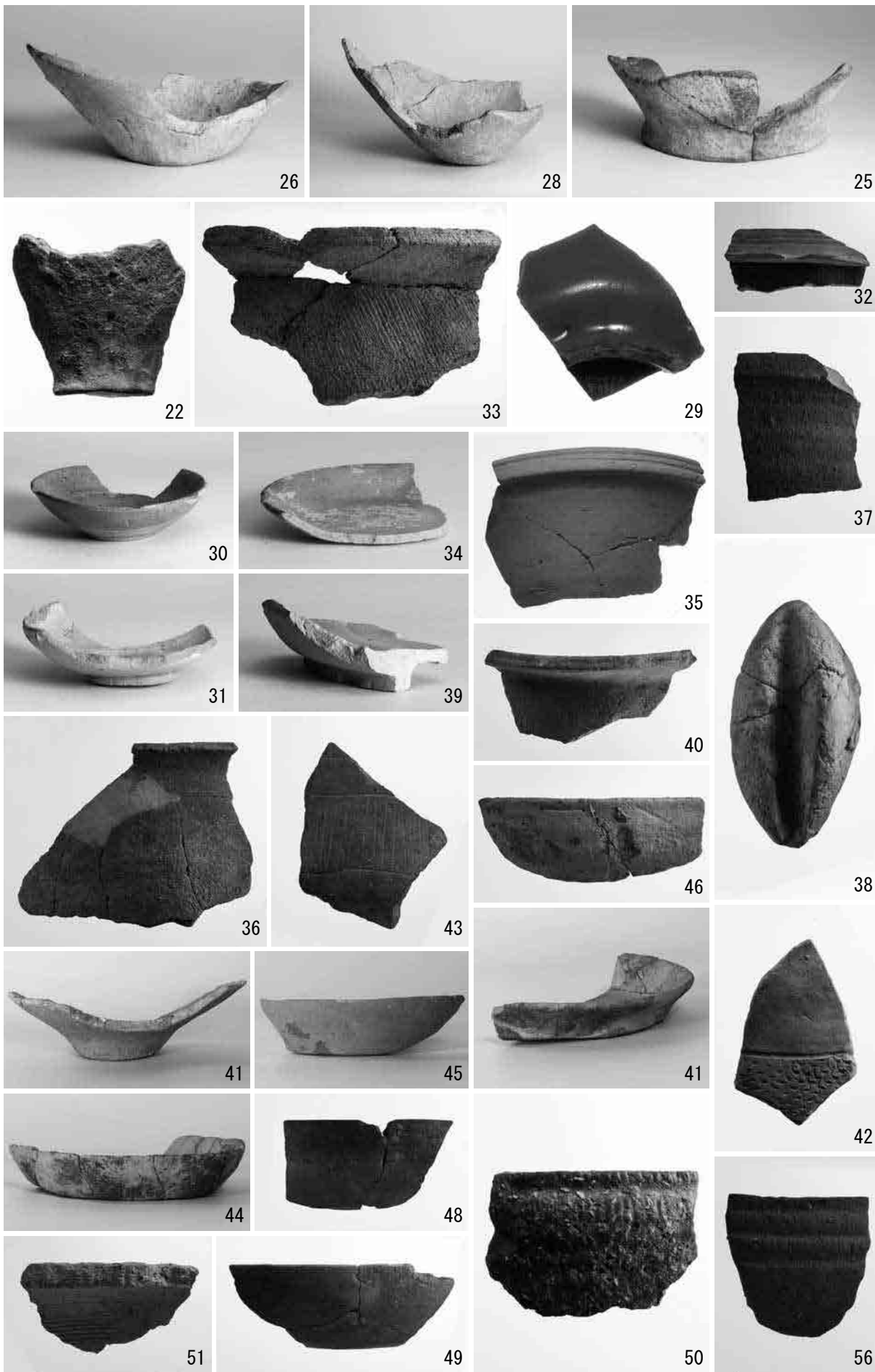


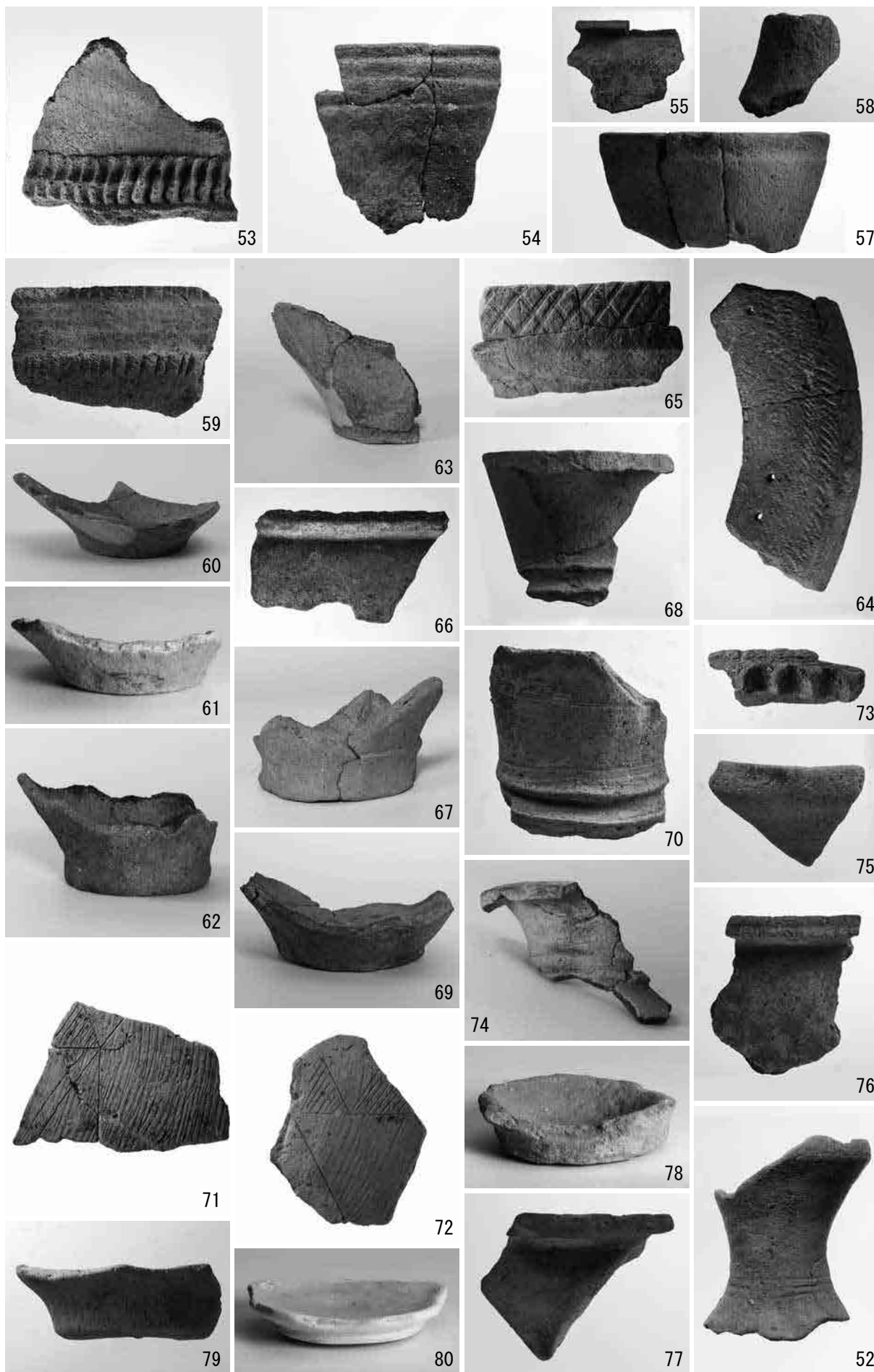


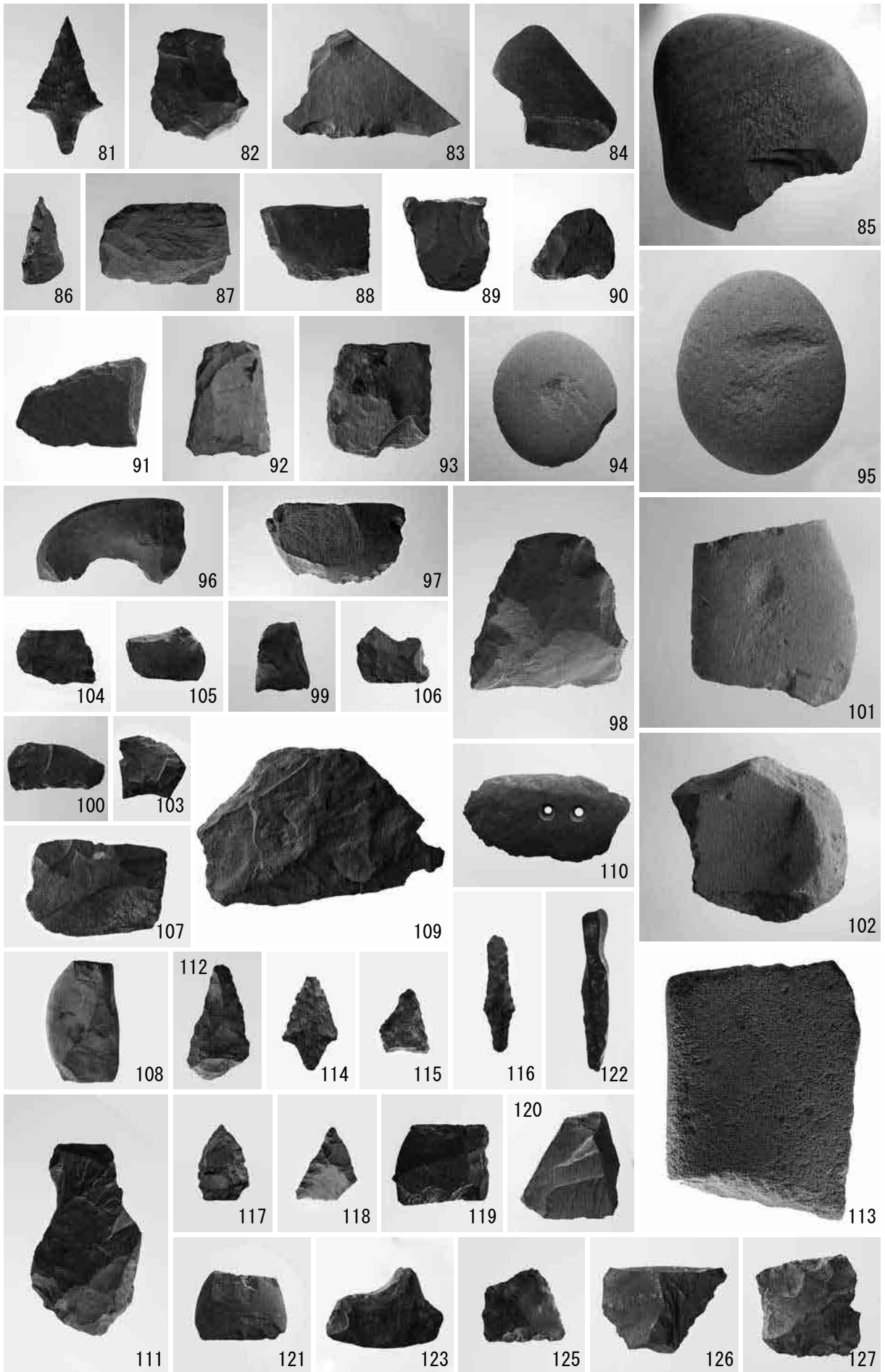
塗屋城跡

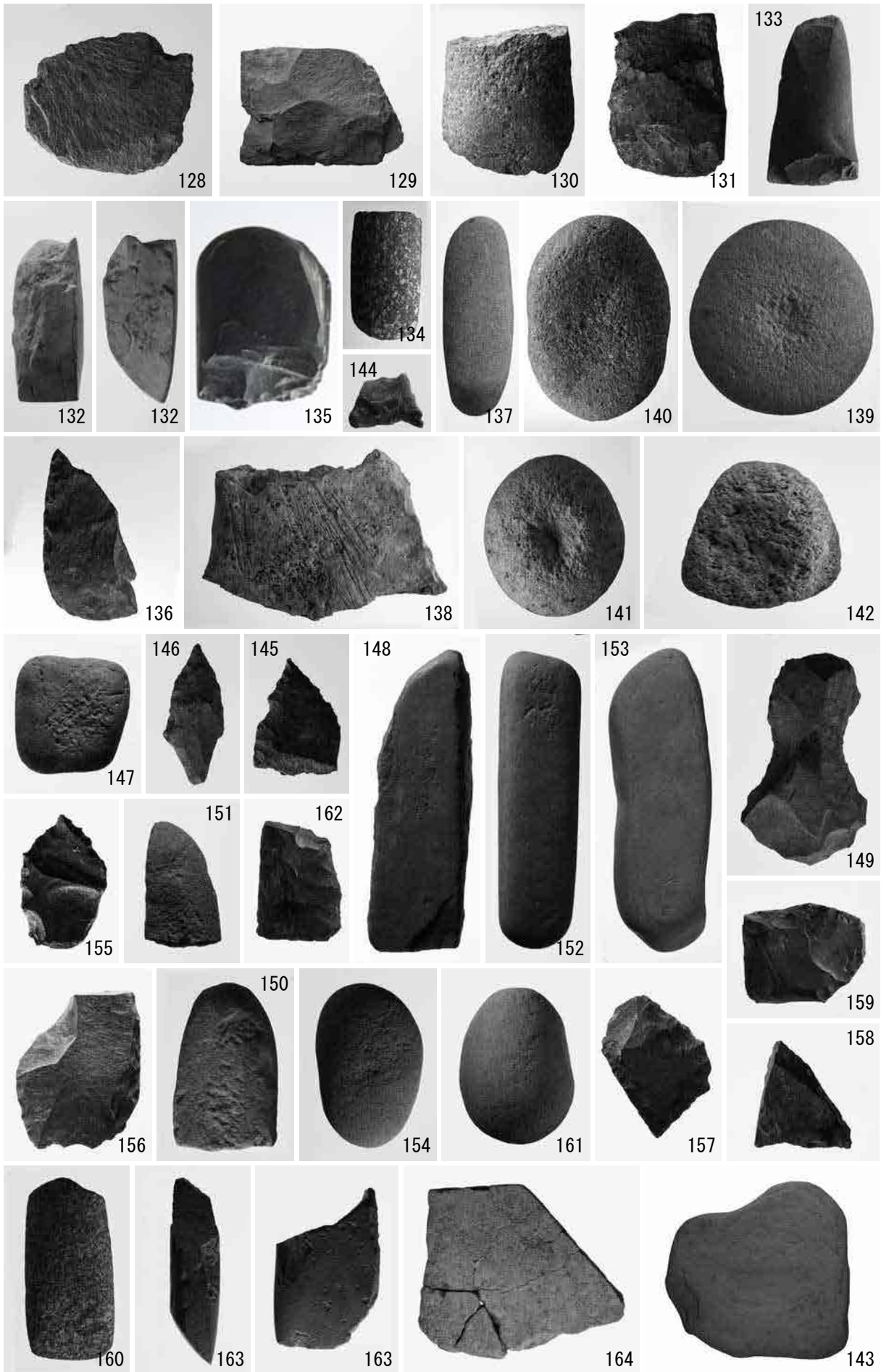


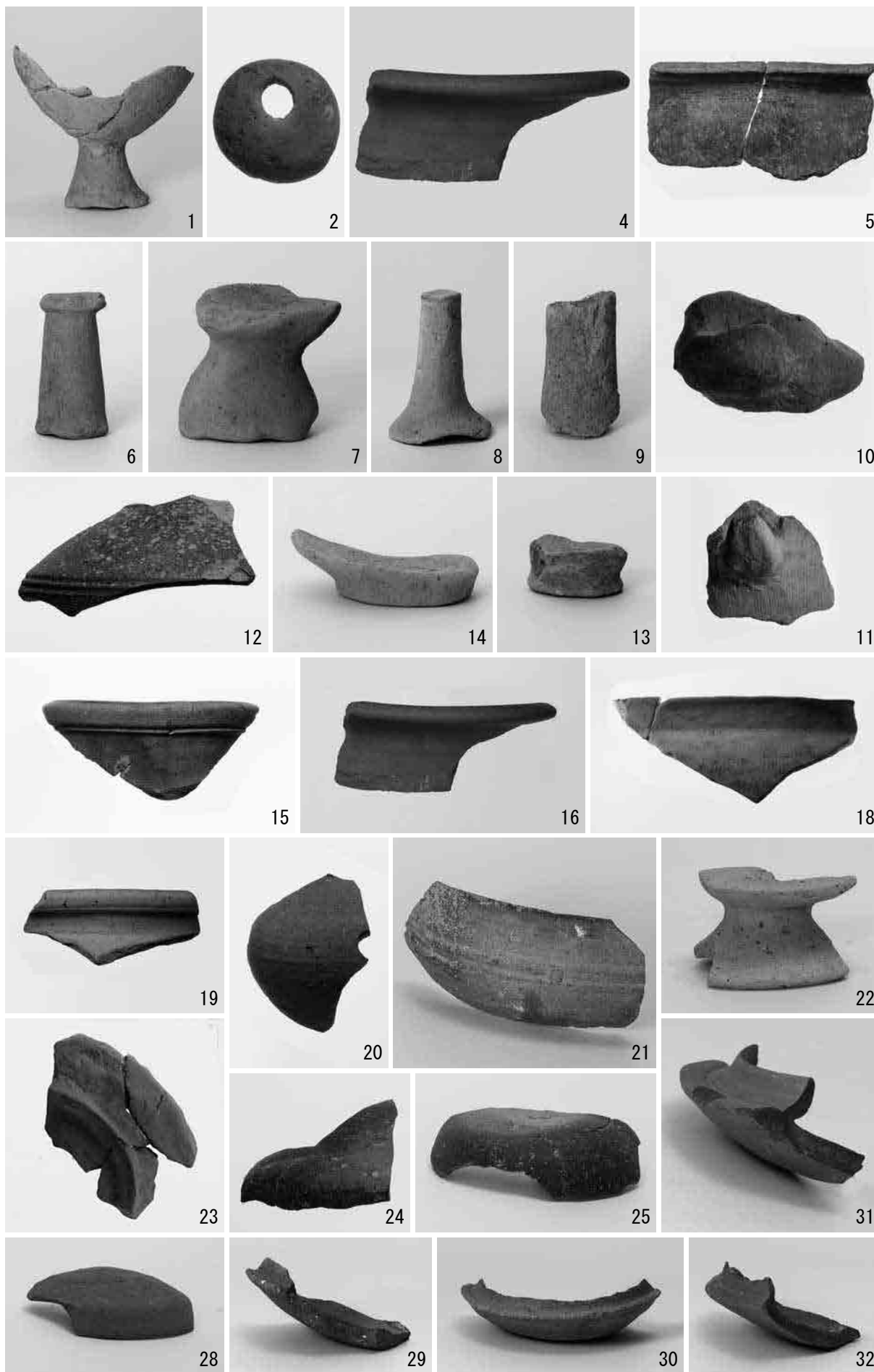


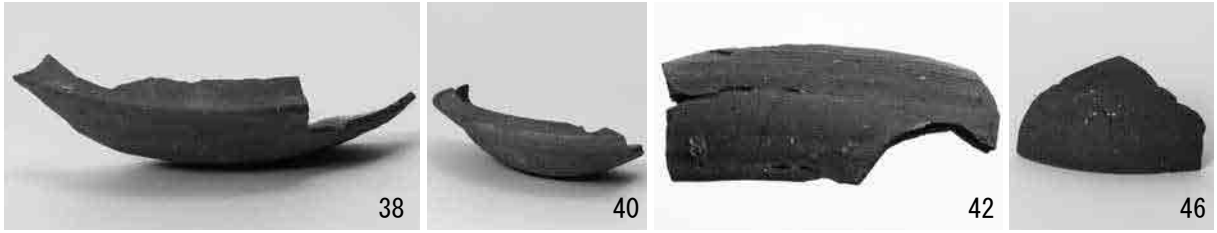
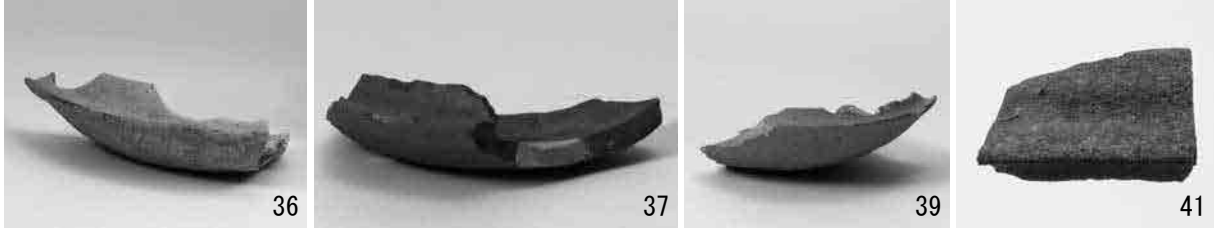




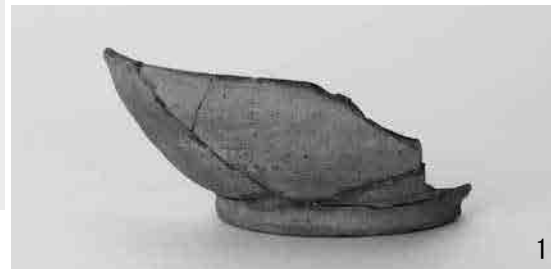








安宅本城跡







22



23



24



28



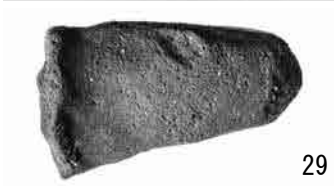
25



26



27



29



30



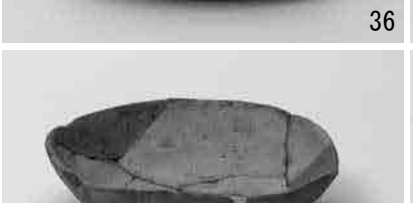
36



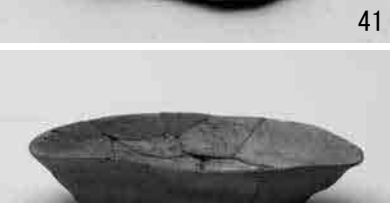
41



31



37



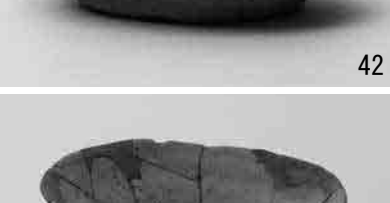
42



32



38



43



33



39



44



34



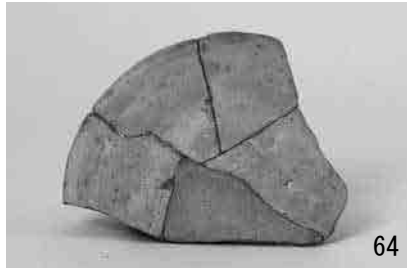
40

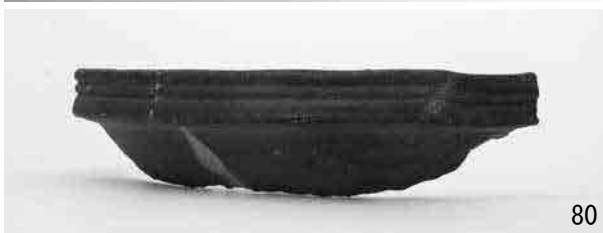
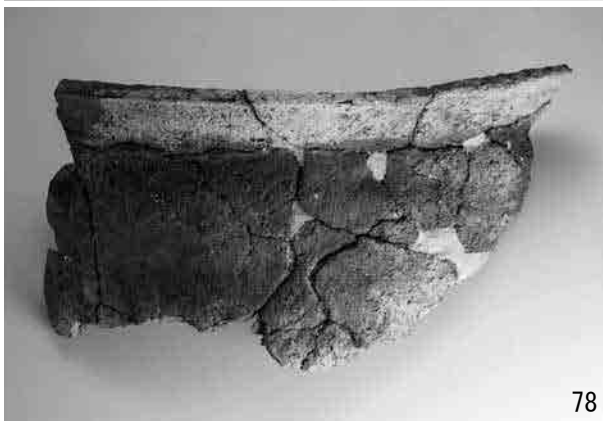
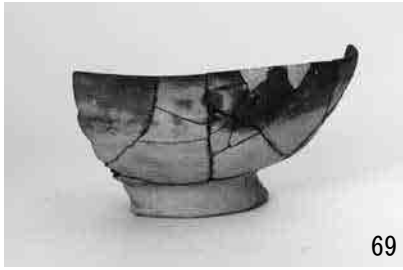


45

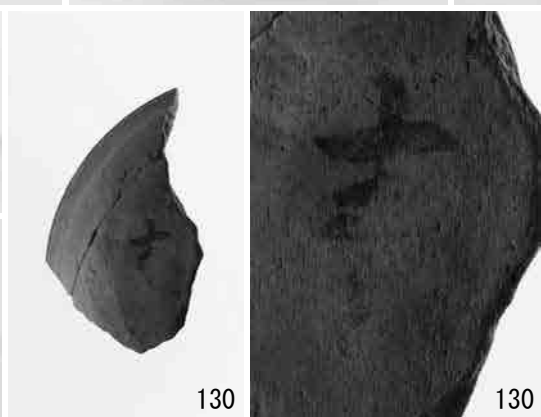
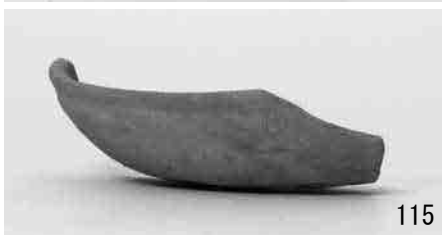
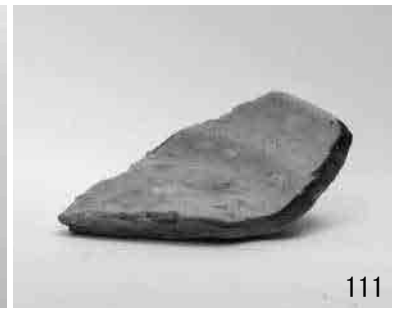
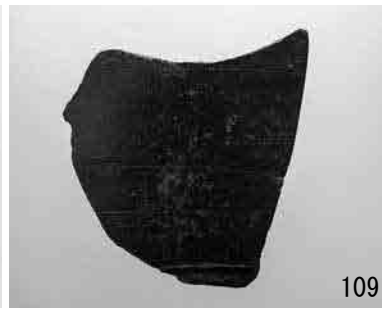


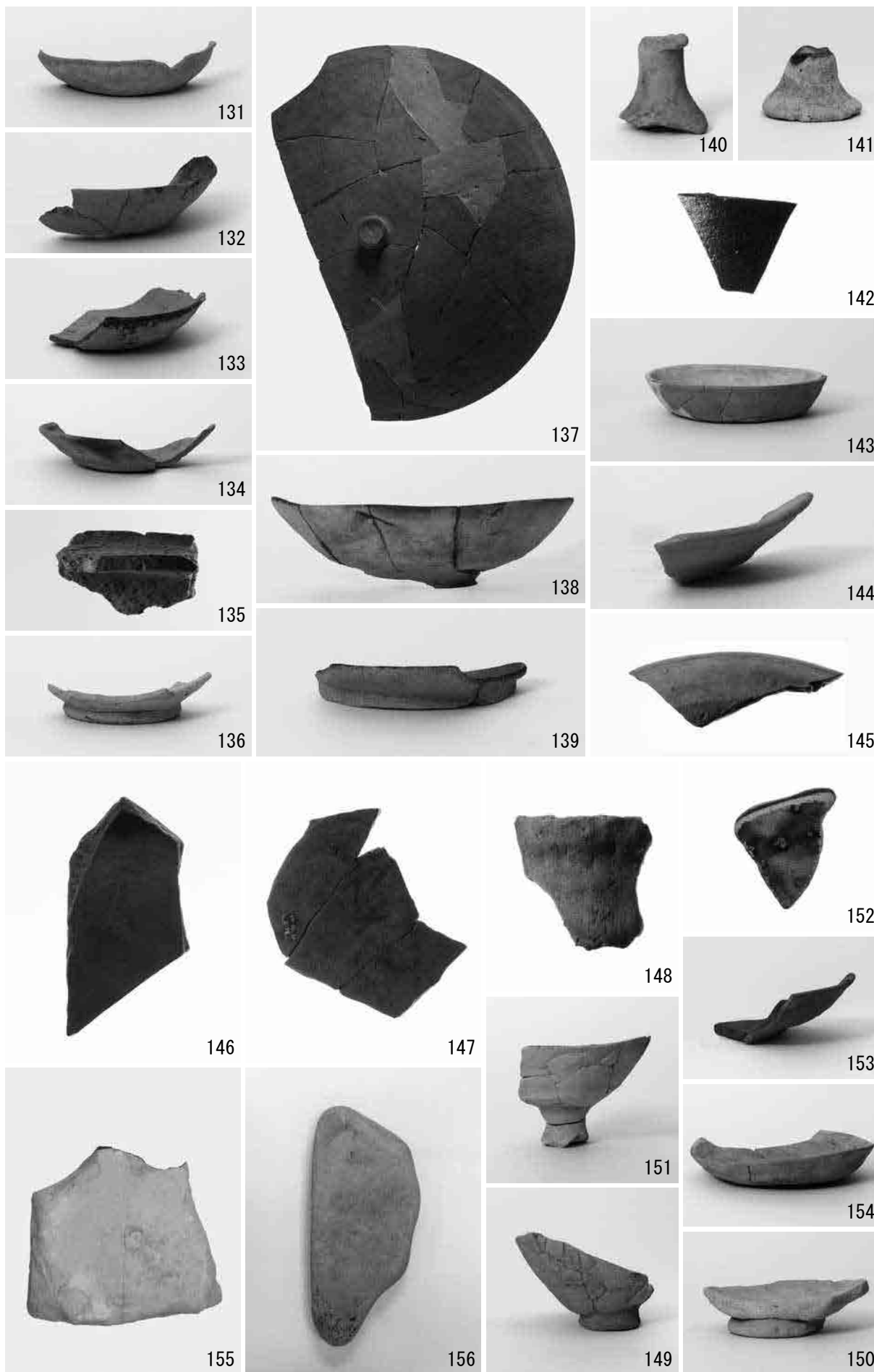
35



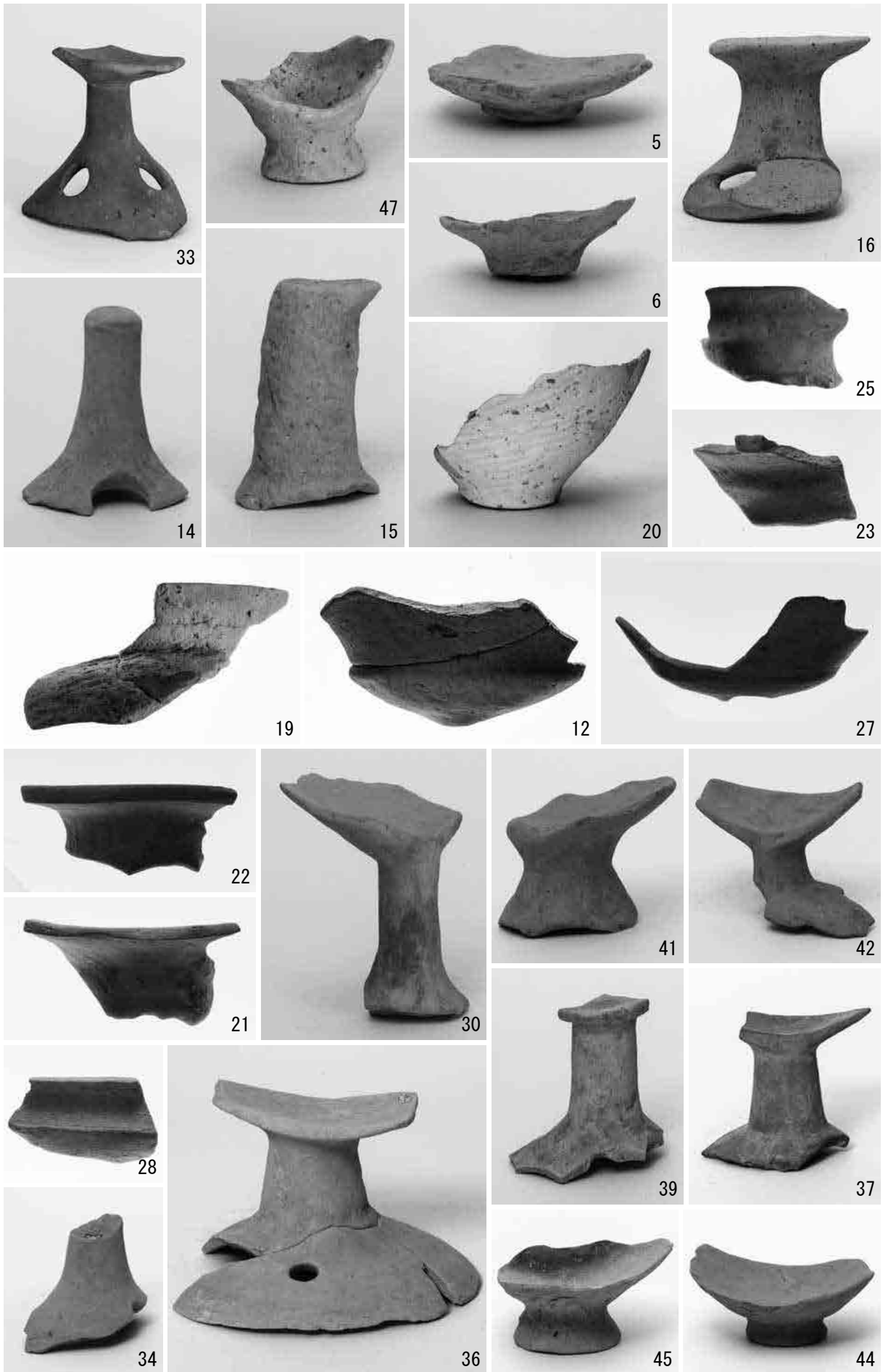














報告書抄録

ふりがな	めざいせき、はっちょうたんぼいせき、ぬりやじょうあと、おおふるにいせき、いなりいちいせき、あたぎほんじょうあと、たのくちいせき、いわさきおおふけいせき、いわさきおおふけにいせき							
書名	目座遺跡、八丁田圃遺跡、塗屋城跡、大古Ⅱ遺跡、稲成Ⅰ遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡							
副書名	近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	寺西朗平							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8404 和歌山市岩橋1263番地の1							
発行年月日	西暦2015年1月9日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	m ²		
めざいせき 目座遺跡	和歌山県 田辺市秋津 町	30206	63	33° 44' 50"	135° 23' 50"	1次 2010.06.22~12.06 2次 2010.06.22~12.07	296 48	近畿自動車道 紀勢線の建設
はっちょうたんぼ 八丁田圃 遺跡	和歌山県 田辺市秋津 町	30206	064	33° 44' 51"	135° 23' 47"	1次 2010.06.22~12.06 2次 2011.06.22~12.06 3次 2011.06.22~08.17	142 873 831	
ぬりやじょうあと 塗屋城跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町 朝来	30404	003	33° 41' 42"	135° 24' 54"	2010.01.07~2011.03.18	1151	
おおふるにいせき 大吉Ⅱ遺跡	和歌山県 西牟婁郡白浜 町	30401	008	33° 34' 36"	135° 27' 30"	1次 2012.10~2013.02 2次 2012.10~2013.02	247 1134	
いなりいちいせき 稲成Ⅰ遺跡	和歌山県 田辺市稲成 町	30206	160	33° 44' 45"	135° 22' 39"	3次 2011.08.17~12.07	869	
あたぎほんじょう 安宅本城 跡	和歌山県 西牟婁郡白浜 町	30401	061	33° 34' 32"	135° 27' 50"	2012.10~2013.02	4117	
たのくちいせき 田ノ口遺跡	和歌山県 西牟婁郡白浜町 十九洲	30401	160	33° 33' 32"	135° 24' 35"	2012.05.08~11.15	1074	
いわさきおおふけ 岩崎大泓 遺跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町 岩崎	30404	035	33° 41' 28"	135° 24' 53"	2010.09~2011.03.25	2759	
いわさきおおふけ 岩崎大泓Ⅱ 遺跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町 岩崎	30404	044	33° 41' 33"	135° 24' 52"	2012.10~2013.02	1315	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
目座遺跡	集落 生産	弥生時代	土坑		弥生土器			
八丁田圃 遺跡	集落 生産	弥生時代 平安~鎌倉時代	溝、土坑、ピット 畦畔状遺構		弥生土器、石器、管玉 土師器、須恵器、青磁、白磁、石鍋、石帯 巡方			
稲成Ⅰ遺跡	集落 生産	古墳時代 平安時代	土坑、ピット、竪穴建物跡、掘立柱 建物跡		土師器、須恵器、 黒色土器、石帯巡方			
田ノ口遺跡	集落 生産	弥生時代	土坑、ピット、竪穴建物跡		弥生土器、石器（石鏃、台石）			
大吉Ⅱ遺跡	集落 生産	弥生時代	溝、土坑、ピット		土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、白 磁、権状石製品			
	集落 生産	室町時代	井戸					
安宅本城跡	城郭	中世			黒色土器			
塗屋城跡	城郭	古墳時代			土師器			
		中世	堀切					
		近世			磁器			
岩崎大泓 遺跡	集落 生産	弥生時代			土器（庄内併行期）			
	集落 生産	中世	ピット、土坑、落ち込み状遺構					
岩崎大泓Ⅱ 遺跡	集落 生産	弥生時代			土器（庄内併行期）			
	集落 生産	中世	掘立柱建物、ピット、土坑					
要約	近畿自動車道紀勢線事業に伴い、9箇所の遺跡を調査した。八丁田圃遺跡では弥生時代前期及び中期の遺構面を検出し、また包含層中から石帯巡方片が出土した。塗屋城跡では堀切とみられる遺構について、規模等を明らかにすることができた大吉Ⅱ遺跡では弥生時代中期の遺構から、建物を描いた可能性の指摘される絵画土器が出土したほか、緑釉陶器片が出土し、古代とみられる掘立柱建物を検出した。稲成Ⅰ遺跡で丘陵中腹において竪穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟分を検出し、古墳時代における集落の展開が確認されたほか、石帯巡方が出土した。田ノ口遺跡では祭祀に伴う可能性のある遺構を検出しており、権状石製品が出土した。							

目座遺跡、八丁田圃遺跡、塗屋城跡、大古Ⅱ遺跡、稲成Ⅰ遺跡、
安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡

－近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書－

発行年月日 : 2015年1月9日

編集・発行 : 公益財団法人 和歌山県文化財センター
和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本 : 白光印刷株式会社
和歌山市雑賀崎 2021 番地の 3